諏訪市埋蔵文化財調査報告第16集

一時坂

――長野県諏訪市一時坂遺跡第一次発掘調査報告書――

1988. 3

諏訪市教育委員会

諏訪市埋蔵文化財調査報告第16集

一　時　坂

――長野県諏訪市一時坂遺跡第一次発掘調査報告書――

1988. 3

諏　訪　市　教　育　委　員　会

ITTOKIZAKA

AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF

ANCIENT SETTLEMENT AND

BURIAL MOUNDS AT ITTOKIZAKA

NAGANO-PRFFECTURE, JAPAN

1988. 3

SUWA CITY EDUCATION COMMITTEE

一時坂遺跡全景航空写真

調査中の一時坂遺跡。台地先端が一時坂古墳、上方の校舎・体育館は諏訪中学校。体育館より右方下部に大ダッショ遺跡がある。

一時坂古墳土器集中出土状態

手前から第５集中・第６集中。右上は墳丘の葺石。

一時坂古墳玉類出土状態

墳丘上の埋葬主体部からの出土状態。

序

一時坂遺跡は、諏訪盆地平坦部の東縁を形成する山麓の末端、福沢川右岸の小舌状台地に立地する。遺跡は諏訪市元町に所在する市立諏訪中学校の敷地に隣接するためかつては諏訪中学校上遺跡とも称されており、今回の調査も校舎の増築に先立つ緊急発掘調査である。本遺跡については、市内遺跡分布調査に際し遺物分布が認められたこと、過去における校舎建築時に土器などが出土したという情報等によって、その存在は知られていたほのの、具体的にその内容を知りうるような本格的な調査は実施されたことがなかった。

調査は事業予定地のほぼ全面を対象として行われ、予想をはるかに上回る数多くの遺構・遺物が発見されたが、なかでも注目を集めたのは「一時坂古墳」の新発見であった。台地最先端に築造された本古墳は小規模ながら良好な遺存状態にあり、豊富な副葬品をはじめ周溝内からは多くの土器類が埋葬時に置かれたままの配列状態で発見された。こうした土器配列の確認された古墳は近隣には例がなく、当地方における古墳築造やこれに伴う葬送儀礼の在り方を探る上で極めて重要な新知見を与えることとなった。

本報告書は極力、発掘調査結果の事実記載につとめたものであるが、紙数等の制約から必ずしも意を尽くしきれなかった部分もあるのでご了承いただきたい。また、本遺跡調査の提起する諸問題については、本書をひとつのベースとして活用され、多くの方々によって研究が深められることを期待したい。

最後に、調査に際して全面的にご協力いただいた諏訪中学校の先生・生徒の皆さん、元町の区民の皆さん、あらゆる面で援助を惜しまれなかった事業及び調査の関係者の方々に心より御礼申し上げたい。また、限られた日数のもと献身的に調査に携わられた調査団の各位のご努力に対し、深く感謝申し上げる次第である。

昭和63年３月31日

諏訪市教育委員会

教育長　両角久英

例　　言

1．本書は長野県諏訪市大字上諏訪に所在する「一時坂遺跡」および「一時坂古墳」（諏訪市遺跡番号　36および37）の第1次発掘調査報告書である。

2．本調査は、諏訪市立諏訪中学校体育館建設工事に先立つ緊急発掘調査で、諏訪市教育委員会が調査主体者となり、諏訪市教育委員会の編成する一時坂遺跡調査団が調査および報告書作成を担当した。

3．現場における発掘調査は、範囲等確認のための試掘調査を昭和57年5月14から15日まで、本調査を同7月1日から8月20日まで実施した。整理作業については、基礎的作業については昭和57年9月から昭和59年3月まで、実測作業を主として昭和59年4月から昭和62年3月まで、報告書作成作業を昭和62年4月から昭和63年3月まで、諏訪市考古資料館において行った。

4．本調査におけるレベル原点はA地区（一時坂古墳）が標高798.578m（原点A－2）、B地区が標高802.905m（原点B－1）である。セクション図等の規準線には原点からの比高を（±cm）で表示した。

5．現場における記録と整理作業の分担は次のとおりである。
遺構等実測……宮坂光昭・高見俊樹・岩崎孝治・河西活水・河西克造・青木真理子・矢崎つな子・関喜子・原敏江、土器集中スケッチ……小林美典、遺構写真……宮坂・高見、図面写真整理……河西(活)・五味裕史・青木潤子・小松敏子・谷本久子、遺構トレース……高見・五味・河西(活)・唐沢直子・青木(潤)・青木滋子・矢島里美・谷本共子、縄文土器実測トレース……五味、弥生土器実測トレース……五味・橋本裕行、石器玉類実測トレース……高見・小口喜久・河原喜重子、土師器実測トレース……小林深志・亀割均・五味・橋本、福田敏一・比田井克仁・高見、須恵器実測トレース……新納泉・西山克巳・黒沢浩・橋本・亀割、鉄製品実測トレース……臼杵勲・杉山秀広・五味、水洗・注記・復元・拓本……矢崎・関・原・両角南子・小松とよみ、遺物写真……宮坂直木・五味・小口

6．本書の執筆分担は次のとおりである。なお、編集には高見・五味が当たった。
宮坂光昭　〔Ⅳ－3－(1)のうち鉄製品、Ⅴ－3・4・5・6・7・8・9、Ⅵ〕
藤森徳雄　〔Ⅴ－1〕
亀割　均　〔Ⅳ－3－(1)のうち土器〕
高見俊樹　〔Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－3、Ⅳ－1のうち遺構・石器、Ⅳ－2のうち遺構・石器
Ⅳ－3のうち遺構・玉類、Ⅳ－4のうち遺構、Ⅴ－2〕
五味裕史　〔Ⅲ－1・2、Ⅳ－1のうち土器、Ⅳ－2のうち土器
Ⅳ－3－(1)のうち鉄鏃分類設定、Ⅳ－3－(2)のうち土器、Ⅳ－4のうち土器〕

7．土器実測図中で、暗文状ヘラミガキがあるものについてはヨコヘラミガキを省略するなど必ずしもすべての調整が図化されていないので、個々の遺物については観察表を参照されたい。また、本書における土器断面図および実測図中のスクリーントーンは次のとおりである。

▒▒……須恵器　　▒▒……黒色処理

8．発掘調査および整理に際し、調査および整理参加者のほかに、下記の方々のご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）
岩崎卓也・戸沢充則・小林三郎・武藤雄六・岡田正彦・小林公明・樋口誠司・平出一治・五味一郎・守矢昌文・鵜飼幸雄・笹沢浩・樋口昇一・小林孚・芦部公一・百瀬長秀・黒沢浩・浅川清栄・秋山浩三・会田進・高林重水・矢島宏雄・佐藤信之・青木一男・長崎元廣・三上徹也・青木秀雄・横沢宏・宮坂由香利・小松とよみ・平林とし美・東福寺すみ子・平林さき子・高木美香里・宮坂浩樹・谷本久子・谷本共子・河西ちとせ・宮下健司・大橋信弥・福田敏一・比田井克仁・山中章・岩井宏美・金井武・藤森与一・長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター・㈳長野県史刊行会・㈱中部測地研究所・㈱中央航業・㈱マルジョー上田印刷・諏訪市立諏訪中学校

9．本調査における出土品、諸記録は諏訪市教育委員会が保管している。

目　　次

カラーグラビア
序
例言
目次
図版目次

Ⅰ　調査に至る経過……1
　1　保護協議の経過……1
　2　調査組織……2

Ⅱ　調査状況……3
　1　調査の方法と概要……3
　2　調査日誌……4

Ⅲ　位置と環境……5
　1　遺跡の位置と地理的環境……5
　2　歴史的環境と周辺遺跡……5
　3　発掘区の位置と基本層序……8

Ⅳ　遺構と遺物……11
　1　縄文時代の遺構・遺物……11
　　(1)　住居跡……11
　　(2)　小竪穴……19
　　(3)　その他の出土遺物……45
　2　弥生時代の遺構・遺物……54
　　(1)　住居跡……54
　　(2)　その他の出土遺物……67
　3　古墳時代の遺構・遺物……68
　　(1)　一時坂古墳……68
　　(2)　その他の墳墓……169
　4　平安時代の遺構・遺物……192

Ⅴ　調査のまとめ……194
　1　4号住居跡検出の逆断層について……194
　2　一時坂遺跡における遺構分布について……199
　3　一時坂古墳出土土器について……201
　4　一時坂古墳の墳丘および古墳祭式……204
　5　一時坂古墳における木棺・槨の復元の試み……205
　6　周溝墓と出現期古墳……208
　7　一時坂古墳と周溝墓に伴う土坑について……215
　8　鉄製武器について……217
　9　古墳出現期の地域相……220

Ⅵ　結語……221

主要引用参考文献……222

写真図版

図版目次

－カラーグラビア－
1　一時坂遺跡全景航空写真
2　一時坂古墳土器集中出土状態
3　一時坂古墳玉類出土状態
－挿図－
第１図　一時坂遺跡の位置……6
第２図　一時坂遺跡周辺地形図……7
第３図　一時坂遺跡と周辺遺跡群……9
第４図　１号住居跡・６号小竪穴セクション図……11
第５図　１号・11号住居跡及び周辺平面図……12
第６図　１号・11号住居跡出土遺物……14
第７図　12号・13号住居跡平面図……15
第８図　14号住居跡平面図・炉セクション図……16
第９図　14号住居跡出土遺物(1)……17
第10図　14号住居跡出土遺物(2)……18
第11図　小竪穴平面図・セクション図(1)……19
第12図　小竪穴平面図・セクション図(2)……20
第13図　小竪穴平面図・セクション図(3)……21
第14図　小竪穴平面図・セクション図(4)……22
第15図　小竪穴平面図・セクション図(5)……23
第16図　小竪穴平面図・セクション図(6)……24
第17図　小竪穴平面図・セクション図(7)……25
第18図　小竪穴平面図・セクション図(8)……26
第19図　小竪穴平面図・セクション図(9)……27
第20図　小竪穴平面図・セクション図(10)……28
第21図　小竪穴平面図・セクション図(11)……29
第22図　小竪穴平面図・セクション図(12)……30
第23図　小竪穴平面図・セクション図(13)……31
第24図　小竪穴平面図・セクション図(14)……32
第25図　小竪穴平面図・セクション図(15)……33
第26図　小竪穴出土土器(1)……41
第27図　小竪穴出土土器(2)……42
第28図　小竪穴出土石器……43
第29図　凹石・磨石類の平面形態……45
第30図　遺構外出土石器(1)……46
第31図　遺構外出土石器(2)……47
第32図　遺構外出土石器(3)……48
第33図　遺構外出土石器(4)……49
第34図　遺構外出土石器(5)……50
第35図　遺構外出土石器(6)……51
第36図　遺構外出土石器(7)……52
第37図　遺構外出土石器(8)……53
第38図　２号住居跡平面図……54
第39図　２号住居跡出土遺物……55
第40図　４号・15号住居跡出土遺物……58
第41図　４号住居跡セクション図……59
第42図　４号・15号住居跡出土遺物……60
第43図　７号・８号住居跡平面図……63
第44図　７号・８号住居跡出土遺物……64
第45図　10号住居跡平面図……65
第46図　10号住居跡出土遺物……66
第47図　16号住居跡平面図……66

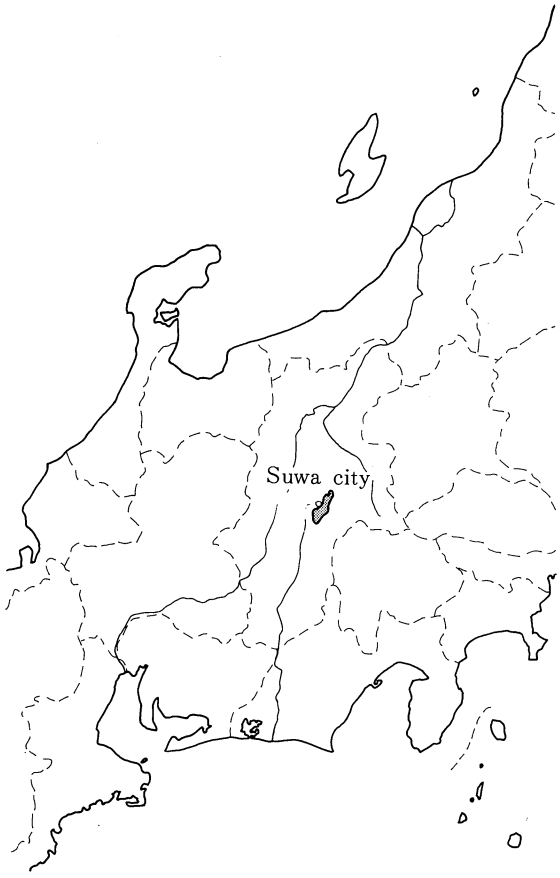
第 48図　16号住居跡出土遺物…… 66
第 49図　遺構外出土の弥生土器…… 67
第 50図　一時坂古墳平面図……73・74
第 51図　一時坂古墳墳丘の遺物分布全体図…… 75
第 52図　一時坂古墳墳丘の遺物分布(1)…… 76
第 53図　一時坂古墳墳丘の遺物分布(2)…… 77
第 54図　一時坂古墳墳丘の遺物分布(3)…… 78
第 55図　一時坂古墳葺石と周溝底の土器集中……79・80
第 56図　一時坂古墳土器第６集中平面図…… 82
第 57図　一時坂古墳土器第４集中平面図…… 83
第 58図　一時坂古墳土器第４集中スケッチ図…… 83
第 59図　一時坂古墳土器第５集中平面図…… 84
第 60図　一時坂古墳土器第５集中スケッチ図…… 84
第 61図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(1)…… 87
第 63図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(2)……89・90
第 63図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(3)……91・92
第 64図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(4)…… 95
第 65図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(5)…… 96
第 66図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(6)…… 97
第 67図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(7)…… 98
第 68図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(8)…… 99
第 69図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(9)……100
第 70図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(10)……101
第 71図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(11)……102
第 72図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(12)……103
第 73図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(13)……104
第 74図　一時坂古墳墳丘出土玉類(1)……116
第 75図　一時坂古墳墳丘出土玉類(2)……117
第 76図　一時坂古墳墳丘出土土器……125
第 77図　一時坂古墳周溝出土土器形態分類図(1)……127
第 78図　一時坂古墳周溝出土土器形態分類図(2)……128
第 79図　一時坂古墳周溝出土土器形態分類図(3)……130
第 80図　一時坂古墳土器第２集中出土土器……132
第 81図　一時坂古墳土器第４集中出土土器(1)……133
第 82図　一時坂古墳土器第４集中出土土器(2)……134
第 83図　一時坂古墳土器第４集中出土土器(3)……135
第 84図　一時坂古墳土器第５集中出土土器(1)……137
第 85図　一時坂古墳土器第５集中出土土器(2)……138
第 86図　一時坂古墳土器第５集中出土土器(3)……139
第 87図　一時坂古墳土器第６集中出土土器(1)……140
第 88図　一時坂古墳土器第６集中出土土器(2)……141
第 89図　一時坂古墳土器第６集中出土土器(3)……142
第 90図　一時坂古墳周溝内土器包含層出土土器(1)……143
第 91図　一時坂古墳周溝内土器包含層出土土器(2)……144
第 92図　一時坂古墳周溝内土器包含層出土土器(3)……145
第 93図　一時坂古墳周溝内土器包含層出土土器(4)……146
第 94図　一時坂古墳土器第４集中土器出土状況……147
第 95図　一時坂古墳土器第５集中土器出土状況……148
第 96図　一時坂古墳土器第６集中土器出土状況……149
第 97図　一時坂古墳土器第４集中出土土器組み合わせ関係想定図(1)……150
第 98図　一時坂古墳土器第４集中出土土器組み合わせ関係想定図(2)……151
第 99図　一時坂古墳土器第５集中出土土器組み合わせ関係図(1)……152
第100図　一時坂古墳土器第５集中出土土器組み合わせ関係図(2)……153
第101図　一時坂古墳土器第６集中出土土器組み合わせ関係図(1)……154

第102図　一時坂古墳土器第６集中出土土器組み合わせ関係図(2)……155
第103図　１号周溝墓平面図……170
第104図　Ｂ地区遺構分布図……171・172
第105図　１号周溝墓セクション図……173
第106図　１号周溝墓出土土器……174
第107図　２号周溝墓・土壙墓平面図……176
第108図　２号周溝墓セクション図……176
第109図　土壙墓平面図・セクション図……177
第110図　土壙墓出土玉類……178
第111図　土壙墓土器集中出土土器(1)……181
第112図　土壙墓土器集中出土土器(2)……182
第113図　土壙墓土器集中土器出土状況……183
第114図　土壙墓土器集中土器組み合わせ関係図……184
第115図　３号周溝墓平面図……187
第116図　３号周溝墓セクション図……187
第117図　３号周溝墓覆土中の配石……188
第118図　３号周溝墓出土遺物(1)……188
第119図　３号周溝墓出土遺物(2)……188
第120図　石室状遺構平面図・セクション図……189
第121図　石室状遺構出土遺物……190
第122図　９号住居跡平面図……191
第123図　９号住居跡出土遺物……192
第124図　αトラック測線配置ならびにC¹⁴年代測点地点位置図 ……193
第125図　諏訪盆地の断層系……194
第126図　断層群および遺跡分布図……195
第127図　C¹⁴法による湖南沖積原の年代測定図（Ａ－Ａ′ 測線）……197
第128図　一時古墳土器第５集中出土須恵器ヘラ描き沈線(5-1) ……298
第129図　一時古墳土器第５集中出土須恵器ヘラ描き沈線(5-2) ……203
第130図　一時坂古墳埋葬主体部木棺想定図……203
第131図　１号周溝墓平面プラン想定図……206
第132図　竪穴系古墳主体部方位（中南信・佐久）……211
第133図　方形・円形周溝墓主体部方位（中南信・佐久）……213
附図　　一時坂遺跡の発掘区と遺構分布
－表－
第１表　遺構一覧表……３
第２表　周辺遺跡一覧表……10
第３表　小竪穴一覧表……34～40
第４表　小竪穴出土石斧類観察表……44
第５表　小竪穴出土小形石器観察表……44
第６表　一時坂古墳墳丘出土直刀・鉄剣観察表…… 105
第７表　一時坂古墳墳丘出土鉄鏃観察表……105～110
第８表　一時坂古墳墳丘出土刀子観察表…… 111
第９表　一時坂古墳墳丘出土玉類観察表……118～124
第10表　一時坂古墳周湟内出土土器観察表……156～167
第11表　一時坂古墳周湟内出土土器器形別数量表…… 168
第12表　土曠墓出土玉類観察表…… 178
第13・14表　αＴＲＡＣＫNo.１・No.２測定表…… 196
第15表　一時坂古墳鉄剣・直刀出土レベル比較表…… 207
第16表　本城遺跡周溝墓および古墳一覧表…… 209
第17表　石子原遺跡周溝墓および古墳一覧表…… 209
第18表　竪穴式系古墳主体部方位一覧表（中南信・佐久）…… 214
第19表　方形・円形周溝墓主体部方位一覧表（中南信・佐久）…… 214
第20表　一時坂遺跡周溝（湟）内検出土坑一覧表…… 216
第21表　各古墳出土直刀属性一覧表…… 218

写真図版目次

1　一時坂遺跡全景（Ａ地区）
2　一時坂遺跡全景（Ｂ地区）
3　Ａ地区発掘状況
4　Ｂ地区発掘状況
5　小竪穴群
6　１号住居跡
7　11号住居跡土偶出土状態
8　14号住居跡(左半の溝は１号周溝墓)
9　２号住居跡
10　４号住居跡と床面上の断層線
11　７号住居跡(左)・８号住居跡(右)
12　10号住居跡(右は14号住居跡)
13　13号住居跡
14　一時坂古墳の全景
15　一時坂古墳（東側より）
16　一時坂古墳葺石と周溝内の土器集中
17　一時坂古墳土器第２集中(セクションベルト)
18　一時坂古墳土器第４集中
19　一時坂古墳土器第４集中(南半)
20　一時坂古墳土器第５・第６集中
21　一時坂古墳土器第５集中
22　一時坂古墳土器第６集中
23　一時坂古墳墳丘上の遺物分布
24　一時坂古墳主体部（？）
25　一時坂古墳直刀・鉄鏃出土状態
26　一時坂古墳直刀・鉄鏃出土状態
27　１号・２号・３号周溝墓
28　１号周溝墓全景
29　１号周溝墓東側溝
30　１号周溝墓西側溝(手前は３号周溝墓)
31　２号周溝墓・土壙墓・土器配列
32　土壙墓壙外の土器配列
33　３号周溝墓(手前の陸橋部は１号周溝墓)
34　３号周溝墓覆土中の配石
35　石室状遺構（検出時）
36　石室状遺構
37　石室状遺構遺物出土状態
38　９号住居跡

39　一時坂遺跡各住居跡出土遺物
40　一時坂古墳墳丘出土鉄製品
41　一時坂古墳墳丘出土鉄製品
42　一時坂古墳墳丘出土鉄製品
43　一時坂古墳墳丘出土鉄製品
44　一時坂古墳墳丘出土鉄製品
45　１号周溝墓周溝内出土鉄製品
46　一時坂古墳墳丘および土器第２集中出土土器
47　一時坂古墳土器第４集中出土土器
48　一時坂古墳土器第４集中出土土器
49　一時坂古墳土器第４集中出土土器
51　一時坂古墳土器第５集中出土土器
51　一時坂古墳土器第５集中出土土器
52　一時坂古墳土器第５集中・第６集中出土土器
53　一時坂古墳土器第６集中出土土器
54　一時坂古墳土器第６集中出土土器
55　一時坂古墳土器第６集中・周湟内土器包含層出土土器
56　一時坂古墳周湟内土器包含層出土土器
57　一時坂古墳周湟内土器包含層出土土器
58　１号周溝墓周溝出土土器
59　土壙墓土器集中出土土器
60　土壙墓土器集中出土土器
61　土壙墓土器集中出土土器
62　３号周溝墓周溝出土土器
63　石室状遺構出土土器


Suwa city

I　調査に至る経過

1．保護協議の経過

一時坂遺跡は、諏訪市立諏訪中学校の校舎敷地に隣接する遺跡である。遺跡の存在については、諏訪市が実施した市内遺跡分布調査に際して、遺物の散布が確認されていたため、周知の埋蔵文化財包蔵地として「諏訪市遺跡地図」に記載のある遺跡である。また、かつて中学校を当該地に新築する際に完形の土器（弥生土器か）が出土したとの情報もあった。遺跡範囲については未確認であったが、遺物散布状況や地形などから、本来的には福沢川右岸の末端近くに張り出す小規模の舌状台地の全体が遺跡範囲であろうと推察されていた。しかし、古くに中学校建設に伴いその南半は造成工事によって失われ、調査当時には現校舎と小道一本で隔てられた残る台地北半のみが畑地として保存されていたものである。なお、遺跡の名称は「諏訪中学校上遺跡」とも称されていたが、本調査を機会に、小字名から「一時坂遺跡」と正式に登録し直したものである。

昭和57年５月、諏訪市教育委員会の内部検討で、この年度において諏訪中学校が予定している新体育館の建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「一時坂遺跡」に相当することが諏訪市遺跡地図によって確認された。ただちに、関係各課および関係者によって遺跡の保護に関する協議が行われ、現地確認のうえ、方策を検討することとなった。同月中に関係者による現地確認が行われ、改めて工事予定地が遺跡範囲内にあること、現地には遺物散布が現状でも認められることなどが判明した。しかし、本遺跡については過去における調査記録がなく、遺跡の範囲・内容に関する情報が著しく不足していた。このため、予め市教育委員会による試掘を伴う範囲確認調査を行う必要があると判断されるに至った。

協議結果に基づき、５月14日・15日の両日にわたり、試掘調査が実施された。この調査は遺跡の性格の概略を知ることが目的で、主として、遺物分布範囲・出土遺物の所属時期などについて取り急ぎ調査された。この結果、遺物分布は台地の緩斜面部分全体にわたること、住居跡等の遺構の比較的濃密な分布が予想されること、遺物の所属時期は縄文時代前期･中期および弥生時代･古墳時代・平安時代の長きにわたることなどが確認された。

こうした試掘調査結果をふまえ、再度、専門家をまじえた保護協議が実施され、事業実施前に工事予定地全体を対象とした緊急発掘調査を諏訪市教育委員会が行い、記録保存を計るのが望ましいとの結論に達した。発掘調査は、体育館建設事業の予定地との関連から、同年７月に行うということで、それぞれ準備を進めることとなった。

2．調査組織

◎　一時坂遺跡調査団（昭和57年度・62年度）

団　　長	篠原菊彌（諏訪市教育委員会　教育長）	—調査時—
	両角久英（諏訪市教育委員会　教育長）	—報告時—
副 団 長	野口利夫（諏訪市教育委員会　教育次長）	—報告時—
調査主幹	宮坂光昭（日本考古学協会会員　諏訪市文化財専門審議会委員長）	
調　査　員	高見俊樹（諏訪市教育委員会　学芸員）	
	岩崎孝治（長野県考古学会会員）	
調査補助員	河西活水・河西克造・青木真理子	—調査時—
	五味裕史（長野県考古学会会員）	—報告時—
調査団員	矢崎つな子・関喜子・原敏江・金子久目子・両角南子・藤森一郎・増沢洋	
	金井保之・宮沢恵津雄・唐沢まき江・田中文六・岩崎治朗・藤森みつ子	
	原きみ子・守屋かの・五味とき・小林花子・笠原さわ江・岩波けさ江	
	藤沢一三・北原あやめ・矢島恵美子・野沢博子・小林美典	
整理参加	小林深志・亀割均・西山克巳・橋本裕行・臼杵勲・新納泉・杉山秀広・藤森徳雄	
	小口喜久・唐沢直子・小松敏子・青木潤子・青木滋子・矢島里美・河原喜重子	
事務主幹	牛山和雄（諏訪市教育委員会　社会教育課長）	—調査時—
	宮阪誠文（諏訪市教育委員会　社会教育課長）	—報告時—
事務局長	三橋収（諏訪市教育委員会　社会教育係長）	—調査時—
	宮坂直木（諏訪市教育委員会　社会教育係長）	—報告時—
事務局員	高見俊樹・赤羽美知子・五味睦和（同社会教育係）	—調査時—
	高見俊樹・久保田由起子・上原修（同社会教育係）	—報告時—

II　調査状況

1．調査の方法と概要

調査は、事業対象地約2,000m²のほぼ全面に対して行った。一時坂古墳の発見された台地先端部の一角をA地区、これより山側の東半をB地区として、それぞれにグリッドを設定し順次全面を発掘調査した。試掘調査等により表土が厚いことが確認された部分については重機を導入し、表土剥ぎを行った。発見された遺構の概要については下記のとおりである。

第1表　　遺構一覧表

遺構名	時代	遺構の特徴	出土遺物等
第1号住居跡	縄文	方形石囲炉	深鉢2
第2号住居跡	弥生	石囲炉	大型磨製石斧
第3号住居跡	平安？		土師器片・須恵器片
第4号住居跡	弥生	長軸約8m・石囲炉2	土器等
第7号住居跡	弥生	埋甕炉	甕
第8号住居跡	弥生	7号と重複	甕
第9号住居跡	平安	かまど・配石	土師器・灰釉陶器
第10号住居跡	弥生	埋甕炉	土器片
第11号住居跡	縄文		土偶
第12号住居跡	縄文	地床炉	土器片
第13号住居跡	縄文	12号と重複	
第14号住居跡	縄文	石囲炉	
第15号住居跡	弥生	4号と重複	
第16号住居跡	弥生		S字口縁台付土器
一時坂古墳	古墳	木棺直葬？・葺石 周溝内土器配列	直刀・鉄剣・鉄鏃・玉類 土師器・須恵器多数
第1号周溝墓	古墳	前方後方形	甕・壺
第2号周溝墓	古墳	円形？	
第3号周溝墓	古墳	円形？	
石室状遺構	古墳	小形方形	土師器・鉄鏃
土壙墓	古墳	長方形	管玉・壙外より土器配列
小竪穴群	縄文	159基	土器片等

2．調査日誌（抄）

（昭和57年）

5月14・15日	範囲確認のための試掘調査
7月1日	本調査開始・器材搬入
3日～4日	A地区の表土剝ぎ開始・縄文の小竪穴を検出
5日	A地区全面発掘・表土下わずかで直刀および鉄鏃出土・古墳葺石を一部確認
6日	古墳主体部付近より鉄鏃多数が出土・B地区の表土剝ぎ開始
8日	古墳山側に深い周溝を検出・周溝および葺石部分の発掘作業
	B地区発掘・小竪穴多数を検出
9日	A地区古墳周辺部発掘・B地区土層調査
10日	古墳周溝および葺石部分の発掘清掃・墳頂より土師器出土
12日	古墳周溝覆土より多数の土師器とその破片が出土
13日	古墳周溝覆土および底面付近から多数の土器類検出・第4集中では配列状態が認められ、高坏の上に他の器種の土器がのせられている状況を確認
14日	古墳遺物集中の精査・測量・写真撮影
15日	古墳の清掃と写真撮影・B地区において各時代の住居跡4軒などを検出
16日	B地区1・2号住居跡発掘・規模の大きい縦横の溝を数基確認
20日	古墳周溝底近くより完全状態の土器配列（第5集中）を発見
	B地区1～3号住居跡・小竪穴・溝の調査
21日	B地区より小型の一種の石室状遺構を発見・溝の重複状態確認
22日	石室状遺構内より土師器と鉄鏃出土・大型の4号住居跡発掘
23日	古墳主体部付近から玉類多数が出土
24日	古墳墳頂より玉類と直刀出土・複数の主体部の存在を確認
27日	古墳墳頂よりさらに多くの直刀や鉄鏃が出土・B地点の溝を周溝墓と確認
28日	古墳墳頂より直刀や鉄鏃が出土・周溝墓発掘
29日～31日	古墳周溝底より完全状態の土器配列（第6集中）発見・7～10号住居跡調査
8月2日～6日	古墳・周溝墓の精査と測量・写真撮影
7日～8日	古墳の墳頂と主体部付近精査
9日	2号周溝墓覆土中より土壙墓とこの壙外の土器配列を検出
10日～11日	4号住居跡床面に活断層の痕跡を発見・古墳実測
12日～20日	各遺構の完掘・清掃・実測・写真撮影を行ない作業終了

III　位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境

海抜標高759mの諏訪湖を中心として北西―南東方向に広がる諏訪盆地は、本州のほぼ中央部に位置し、いわゆるフォッサマグナの西縁を形成する糸魚川―静岡構造線に沿って形成された、構造盆地である。この狭小な盆地は、その北部から東部にかけては塩嶺峠・高ボッチ山・鉢伏山・二ツ山、さらには三ツ嶺山・霧ヶ峰・八ヶ岳等の火山群へと続く山塊により、また、西南部は南アルプス末端を形成する入笠山・守屋山等の山塊に周囲を囲まれている。

この諏訪盆地の北方、霧ヶ峰の山塊西縁部に源を発し湖盆に流れ込む、角間川の下流付近に一時坂遺跡は立地している。諏訪湖東岸地区の山麓部には、一般に断層活動の結果による地形と考えられる階段状の台地が何段にも形成されている。また、角間川左岸に連なる山地の随所には、角間川の支流によって形成された支谷と扇状地が存在するが、その中でも主要な支流である福沢川により形成された谷の両側の山地端部は、先述の階段状地形と相重なることにより角間川扇状地に向けてやや張りだしたテラス状の地形を呈する。

この台地は東南方向の背後には急峻な山塊をもち、北西方向は諏訪湖盆地平端部に向かって大きく開いている。背後の山地や、福沢川によって形成された深い谷は、現在でも恵まれた自然環境を保っており、古代の人々にとっても、活発な生産活動の場を提供していたと考えられる。一時坂遺跡から平面距離にして約1,5Kmに位置する諏訪湖の現在の水面標高は759mであるが、過去の長い期間にわたってはこれよりわずかに標高が高く、湖は諏訪湖の平坦部全体にひろがっていたことが地質調査によって明らかにされている。従って本遺跡において生活の営まれた古代の各時期においては、台地のすぐ下に諏訪湖の波打際が存在し、山の幸同様、湖の幸にも豊かなものがあったと推測される。

2．歴史的環境と周辺遺跡（第3図）

一時坂遺跡（36・37）が位置する盆地東部の山麓は、西山地区と呼ばれる盆地南西部の山麓とならんで各時代の遺跡が集中する地域である。一時坂遺跡から角間川を挟んだ対岸の台地上には茶臼山・踊場・上ノ平遺跡（28・16B・17）をはじめとする旧石器時代の各遺跡が存在するほか、おそらく市内でも有数の規模をもつと思われる縄文時代の集落遺跡、穴場・百姓地遺跡（26・27）

第 1 図　一時坂遺跡の位置（1/50,000）

第 2 図　一時坂遺跡周辺地形図

が、角間川のやや上流に位置しているなど、当地区がかなり古くから人々の主要な生活の場としての位置を占めていたことが考えられる。

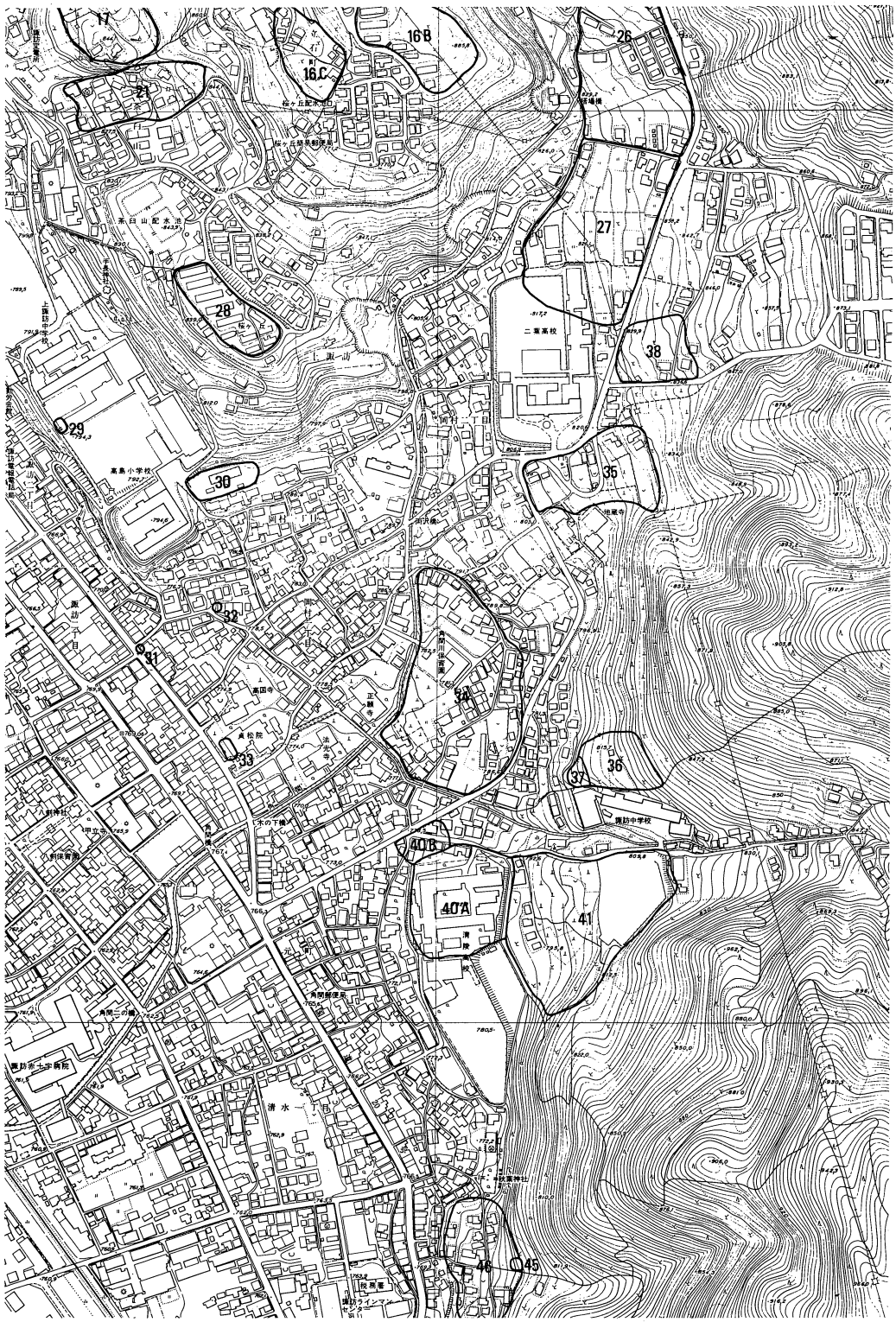
福沢川を間にして隣接する大ダッショ遺跡（41）は1984年に諏訪清陵高校の校舎新築に伴う発掘調査が行われ、縄文時代中期・弥生時代及び古墳時代以降の住居跡と弥生時代の小竪穴群、さらには古墳時代以降に属する、環状集石を含む集石群が検出されており、一時坂遺跡との関係が注目される。

また角間川沿いの谷筋は霧ヶ峰・和田峠を経て上田方面へと通じる交通路として古代から重要な位置を占めていたと思われる。元来遺跡所在地の小字名である「一時坂」とは、遺跡南側の斜面を登る道（坂）の呼称だが、この路は福沢山を経て北大塩峠へと通じており、角間川沿いの本道に伴う支道的な役割を有していたとも考えられる。従って周辺の古代集落などの立地については、これらの古道の存在とも何らかの関係が想定され得るかも知れない。大ダッショ遺跡の西に隣接する御幣平A・B遺跡（40A・B）では峠に関する祭祀を思わせるような、円盤形石製品を伴う集石や石製模造品が検出されており、注目に値する。

今回の調査では新たに古墳が検出されたが、本地区では過去において手長丘古墳・茶臼山古墳をはじめとする十数基の古墳の存在が確認されている。そのほとんどが未調査もしくは現存しないが、記録などによると多くは横穴式の石室を有するらしい。一時坂古墳がこれら古墳群との間に何らかの関係を有する可能性もあると同時に、現在諏訪地方で最古とされているフネ古墳をはじめとする西山山麓の古墳群との関係も興味のもたれるところであろう。

3．発掘区の位置と基本層序

今回の調査においては、前述のように試掘調査時に確認することのできた遺跡範囲の全面発掘を行った。遺跡は畑として利用されており、約30～100cmの耕作土下にローム層が確認された。調査範囲の一部ではローム層上部に褐色土層が確認されており、古墳時代及び平安時代以降の遺構の一部はこの褐色土層上面で確認することができた。他の遺構はすべてローム層上面で確認されている。



第 3 図　一時坂遺跡と周辺遺跡群

第２表　周辺遺跡一覧表

番号 遺跡	遺跡名	所在地	立地	旧石器	中石器	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生 中	弥生 後	古墳 住	古墳 墳	奈良	平安	中世	近世
16B	踊場	上諏訪・立石町	丘陵	●			●	●										
16C	踊場下	上諏訪・立石町	丘陵	●				●										
17	上ノ平	上諏訪・茶臼山	丘陵	●														●
21	二本松	上諏訪・茶臼山	丘陵													●		
26	穴場	上諏訪・双葉ヶ丘	扇状地					●	●							●		●
27	百姓地	上諏訪・双葉ヶ丘	扇状地					●	●							●		
28	茶臼山	上諏訪・桜ヶ丘	丘陵	●										●			●	
29	手長丘	上諏訪・諏訪２	丘陵											●				
30	綿の芝	上諏訪・岡村１	山麓					●						●				
31	小川屋前	上諏訪・諏訪２	扇状地					●										
32	不動尊前	上諏訪・岡村１	扇状地					●										
33	貞松院入口	上諏訪・諏訪２	扇状地					●										
34	南沢	上諏訪・岡村２	扇状地					●							●	●		
35	若宮	上諏訪・岡村２	山麓				●	●								●		
36	一時坂	上諏訪・元町	台地		●	●	●	●			●	●		●		●		
37	一時坂古墳	上諏訪・元町	台地											●				
38	カジバ畑	上諏訪・岡村２	山麓													●	●	
40A	御幣平A	上諏訪・清水１	山麓					●										
40B	御幣平B	上諏訪・清水１	山麓											●				
41	大ダッショ	上諏訪・元町	山麓					●				●	●					
45	大石古墳	上諏訪・清水２	山麓											●				
46	清水窪	上諏訪・清水２	山麓					●			●	●		●				

IV　遺構と遺物

1．縄文時代の遺構・遺物

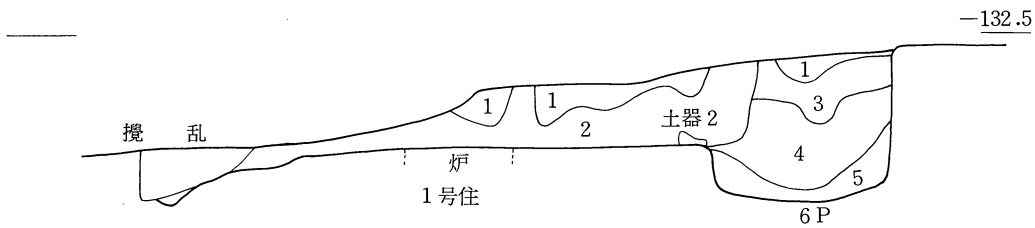
(1)　住居跡

1号住居跡（第4～6図）

B地区西端、A地点との境界付近に検出された竪穴住居跡である。この一帯は遺構の重複が著しく、他に11号住居跡、6～8・31・46号小竪穴と重複している。1号住居跡はこれらの内では最も新しく構築されたものであるが、表土付近および西半部分にかなりの攪乱を受けているため、住居全体の形状は保存されていない。

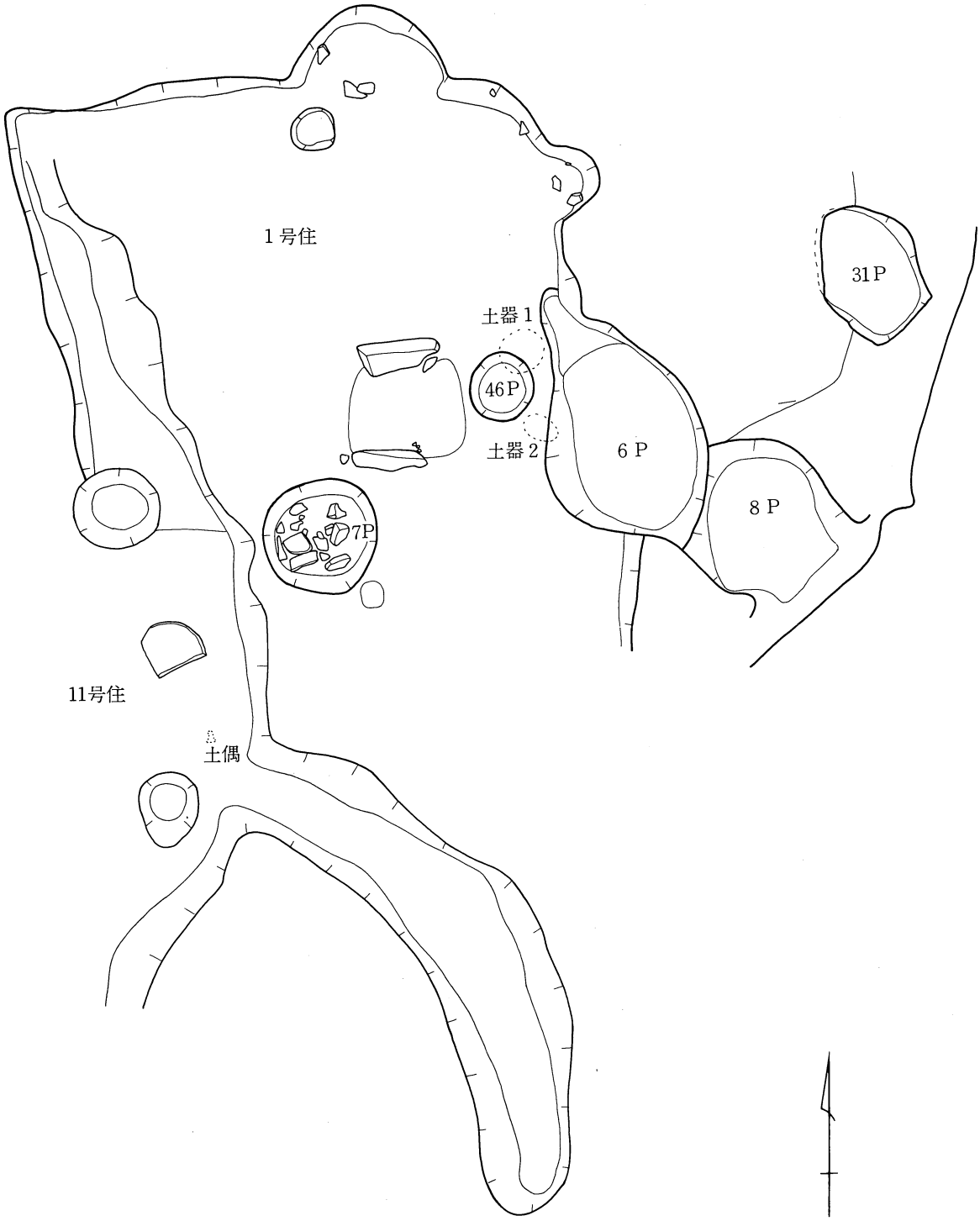
遺構確認面が浅く、残存する覆土も薄いものである。山側では壁高約40cmを計る。床面はローム層に達し堅い。中央東よりに方形の石囲炉が残されているが、一部を抜かれたものか炉石は2個のみが確認される。明確に本住居に属すると考えられる柱穴は北より1基のみで、住居構造は明らかでない。また、覆土が薄いこともあって、出土遺物は多くない。土器としては石囲炉と東壁との間の床面に密着して2個体が検出された（第6図1・2）。2個体とも口縁部側1/3程を残す大破片で、いずれも口縁を床面に密着するように据えられたような状態で、特徴的である。

1・2は共に深鉢の上半部で、口縁部はほぼ全周が残っている。1は口縁部に無文帯を残し粘土紐の隆帯で蛇行する懸垂文と細長い8字状の懸垂文を施した後、口縁部下に横位の区画を加える。地文は綾杉文で、最後に加えられている。口縁部内面には断面三角形の隆帯が一条張り付けられる。内面は横方向の丁寧な調整が施されるが、外面は口縁から2段目の輪積み痕を意識的に残す。2は口縁部下が締まり胴部がわずかに膨らむ器形の深鉢で、粘土紐の張り付けと指などによる強いナゾリによって文様を描出する。口唇内側は肥大している。口縁部外面に1本の横位区



1……表土、黒色土層。粒状あらく軟弱。
2……1号住居跡覆土。暗褐色土層。粒状こまかく、ローム粒を少量含有する。
3……6号小竪穴覆土上層。暗褐色土層。ロームブロックを大量に含有する。
4……6号小竪穴覆土中層。暗褐色土層。ローム粒・炭化物粒を含有する。
5……6号小竪穴覆土下層。暗褐色土層。粘性に富み、ローム粒・炭化物粒を含有する。

第4図　1号住居跡・6号小竪穴セクション図（1/40）



第 5 図　1号・11号住居跡及び周辺平面図（1/40）

画を加え、区画下には渦巻きなどで8単位の横位に連続する文様を施す。胴部には3本一組の沈線で5単位の懸垂文を加えるが、胴部にも渦巻き文が付くらしい。半截竹管による縦方向の条線が地文となっている。1は胎土に砂粒・白色粒子を含み焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。2は胎土に白色粒子を多く含み焼成は良好、茶褐色を呈する。1は曽利II式期、2は曽利III式期に属する。1・2共に床面直上の出土のうえ、いずれも逆位に据えられたような状態で検出されており、同時に遺棄されたものである可能性が高いが、製作時においてはある程度の時間差が存在していることが想定されよう。

他には土器片および黒耀石剝片類と打製石斧破片2点凹石1点・石鏃1点などが覆土中より出土している。

11号住居跡（第5・6図）

11号住居跡は1号住居跡に重複し、さらに西側に連続している。壁の一部は1号住居跡の床面下に検出されている。残存する壁のプランから推定する限り、比較的大形の住居のように思われるが、これより西側は後世の耕作等によって完全に失われており、現在も段差があって覆土すら残されていない。出土遺物もごく少ない。

東壁際に柱穴2基が確認されている。この2基のほぼ中央の床面上に平板状の石が置かれている。その他の柱穴・炉などは失われている。残存する東壁から東南方向に湾曲するような形で、幅約70cmの浅い溝状遺構が検出されている。出土遺物もなく、この溝が本住居に所属するものであるかどうかは不明であるが、床面のレベルと差がないため、ここでは一応一種の付属的施設と考えておきたい。

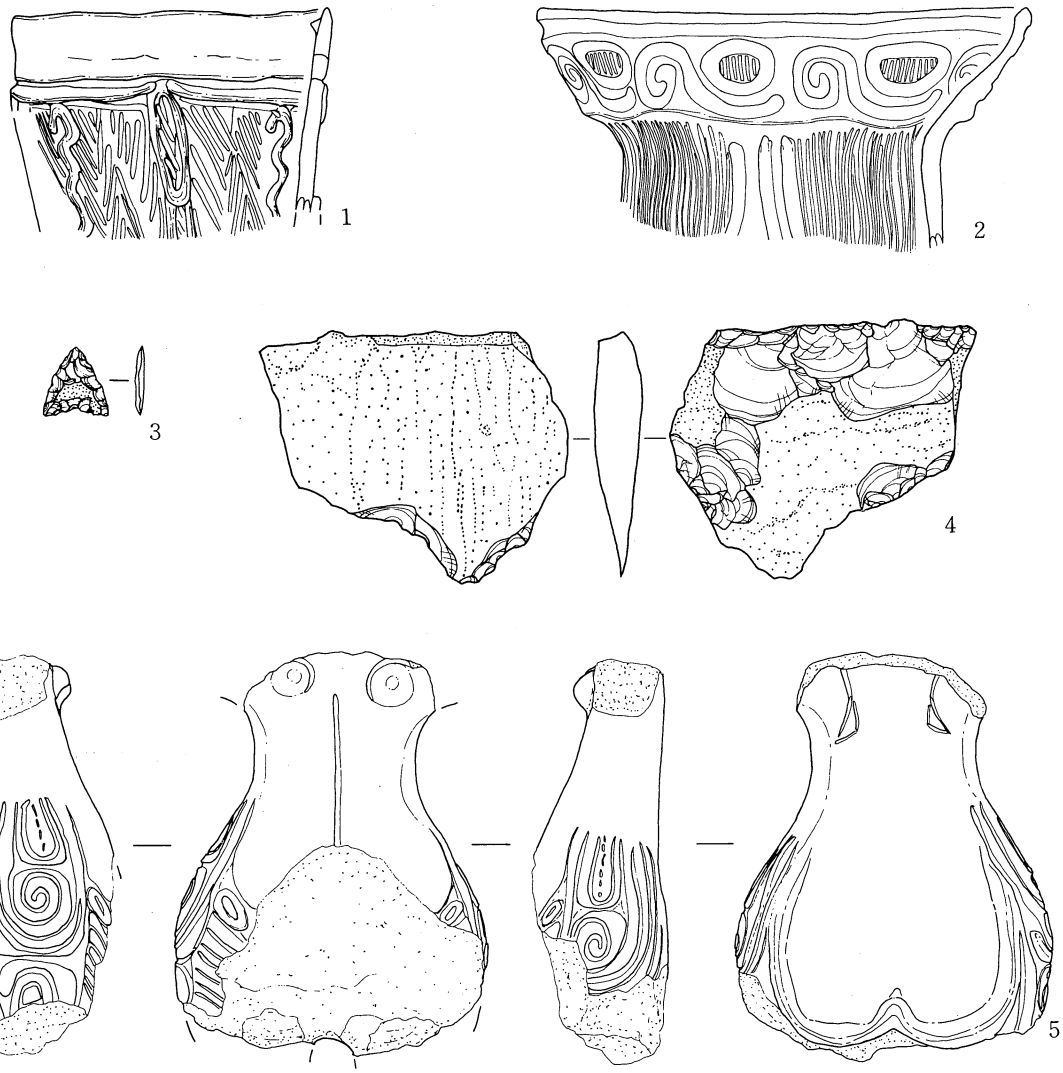
出土遺物はごく少ない。床面上からは、土偶1点が溝状遺構の付け根の付近から検出されたのみである。

3は黒耀石製の石鏃である。長さ1.4cm・幅1.3cm・厚さ0.2cmを計る比較的小形の石鏃で、表面一部に自然面を残すものの加工は細かく、形態的にも整っている。

4は黒耀石製のいわゆる不定形の石器である。薄い平板状の原石を素材とし、両面に広く自然面を残している。表面の一部に平坦剝離の二次加工を連続的に施している。しかし、いずれの剝離も成形や刃部作出を目的としたものとは思われない。しかし、剝離の深度が浅いことからみて、あるいは石器製作の第1段階として、この素材をさらに薄くすることを意図した二次加工であるかもしれない。他に石鏃1点がある。

5の土偶は胴部のみが残存している。一般的に土偶は破損状態で検出される例が多いが、本例が故意に破壊されたものであるかどうかは明らかでない。胎土に金雲母片を多く含んでおり、焼成は良好で明茶褐色を呈し、ところどころに黒斑を有する。胸部の断面中央に1か所と腰部の断面の脚部との接合部2か所には直径2～3mmの小穴があり、細い棒状の芯と複数の粘土塊の接合により成形された土偶であると思われる。平面形は、胴部は丸みをもってややくびれ、腰が大

きく膨らんでいる。小突起状の乳房が張り付けられるが、臀部は平面的で逆ハート形の隆帯の縁取りによって表現されており、他は沈線によって施文される。腰部側面から前面にかけては渦巻き・列点・集合沈線により割と細かに施文されている。着衣あるいは刺青を表現したものであろうか。背部の肩甲骨に相当するあたりにも三角形の表現がある。腹部は破損しているが、ある程度突出するらしい。乳房の表現・曲線的な腰部などから女性を表したものであろうが、膨らんだ腹部・正中線と考えられる沈線の描出など、他のほとんどの土偶と同様に妊娠状態を示すものであると思われる。中期中葉～後半に属するものであろう。



第 6 図　1号・11号住居跡出土遺物（1・2…1/4、3・4…2/3、5…1/2）

12号住居跡（第７図）

Ｂ地区北端、遺跡の立地する舌状台地の北側境界付近に位置する。直径約４ｍの円形プランを有する竪穴住居跡である。東側は13号住居跡と重複し、これより新しい。住居の西側には直線状の段差があって、プランの西半は破壊されている。これは最近の攪乱のようではないが、後世の削平等によるものと理解される。

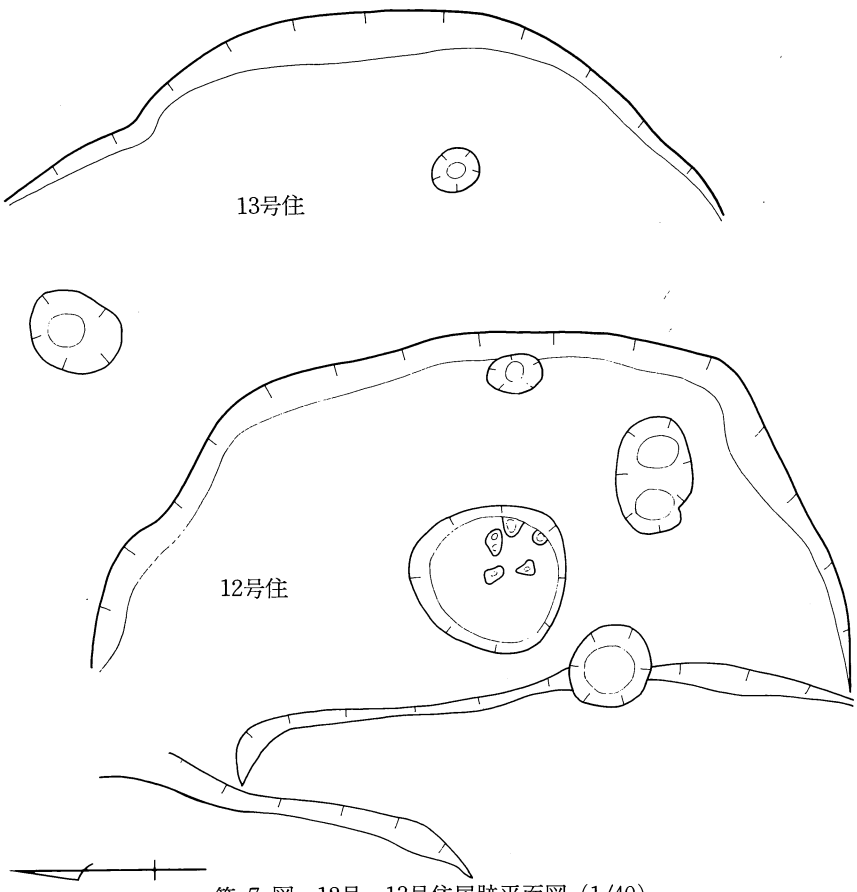
確認面からの壁高は約20cmを計る。柱穴状ピットは壁内に４基があるが、本住居に確実に伴うものであるかどうか確認できない。中央部付近には深さ約20cmの浅いピットが検出されているが、周辺部に若干の焼土分布が認められることから、炉穴と考えられる。

覆土の残存がわずかであることもあって、出土遺物はほとんどない。土器片には各時期のものが含まれるが、中期初頭のものが比較的多く出土している。

13号住居跡（第７図）

12号住居跡の東に重複し、西半を12号によって破壊されている。残存部の状況から直径約４ｍの円形竪穴住居とみられる。壁高は約20cmを計る。柱穴状ピット２基が壁近くに検出された。

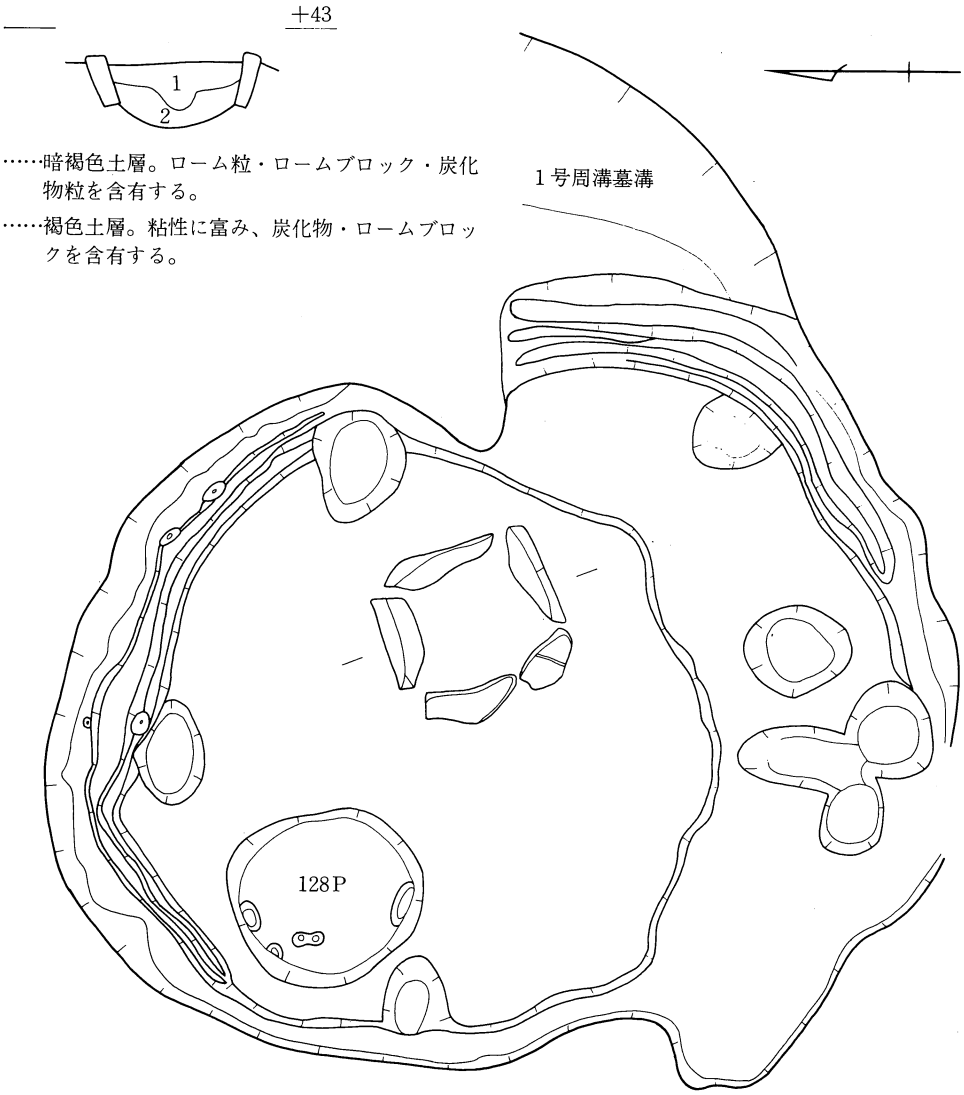
出土遺物はごく少ないが土器片などから、時期的には12号住居と近接するものであろう。



第７図　12号・13号住居跡平面図（1/40）

14号住居跡（第８～10図）

調査対象地区の最東端に位置する。下部に128号小竪穴、上部に弥生時代の10号住居跡、東と南には１号周溝墓の溝部分コーナーがそれぞれ重複し、これらによって破壊を受けている。特に１号周溝墓の溝は深く、床面がえぐり取られる形となっている。しかし、住居の柱穴・周溝の一部は痕跡的に１号周溝墓の溝底に残存しており、規模や形態は概ね推定可能である。なお、本住居跡の北西部に隣接する弥生時代の４号住居跡の床面上から検出された活断層の痕跡は本住居内の西壁付近を横切っている。しかし、その在り方はきわめて不明確で、４号住居跡のような床面の明瞭なずれは観察されなかった。本住居付近は遺構の重複が著しく、必ずしも同じ条件ではないが、この違いは活断層によるずれの生じた年代を反映するものである可能性も否定できない。



第８図　14号住居跡平面図・炉セクション図（1/40）

プランは長径約5m・短径約3.6mの南北に長い楕円形となる竪穴住居である。壁高は最大で約30cmをはかる。壁際の全周にわたって幅約10cmの周溝を有する。床面はローム層に達し、平坦で堅い。中央やや東寄りに一辺約80cmの大形方形の石囲炉があって、焚き口以外の三方の炉石は切り炬燵状に埋め込まれている。炉内や周辺部からは明瞭な焼土は検出されなかった。柱穴は床面残存部に3基があり、それぞれ周溝に密着している。南側の破壊を受けた部分にも柱穴の痕跡的なピットが検出されたが、すべてが本住居に確実に伴うものであるとは言い切れない。周溝に密着する2基を柱穴とすると、本住居の主柱穴は合計5基となる。

遺物は床面残存部を中心に検出されているが、残存覆土が少なく量的には多くない。

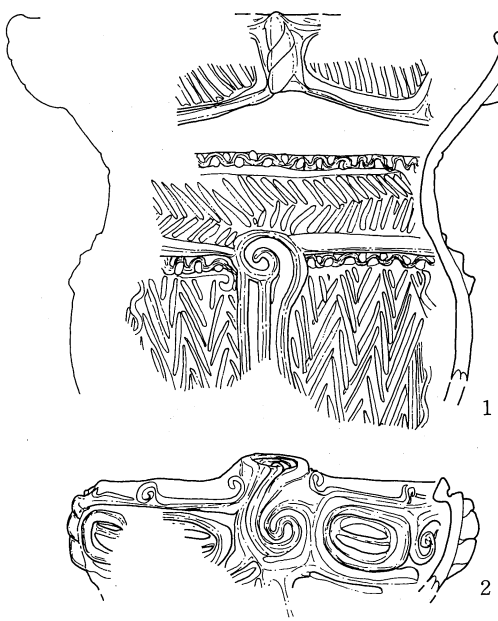
1は胴部がくびれる深鉢の破片である。口縁部はおそらく4単位の小突起と弧状の隆帯により区画され、無文部をおいて交互刺突による波状文下に矢羽根状沈線が施される。胴部は隆帯と波状文の横位区画と、やはり4単位のいわゆる肋骨文による縦位区画中が綾杉状の沈線で埋められる。胎土に砂粒と白色粒子を含み、焼成は良好で暗褐色を呈する。2も深鉢の口縁部で、4/5周程が残存している。1単位あるいは2単位の渦巻状突起を有し、立体的な楕円形の区画文と渦巻文が加えられる。胎土に砂粒と石英粒を含み、焼成は良好で暗茶褐色を呈する。1・2共に曽利II式期に属するものである。

3～6は黒耀石製の小型石器である、3は石鏃で、片脚を欠損する。長さ2.5cm、厚さ0.4cmを計る。加工状態は両面とも細かく、両縁が鋸歯状に成形されている。4は石錐で、平坦で基部と断面正方形状に加工された尖端部を有する。尖端部側は両面とも連続的剝離によって整緻に加工されている。長さ3.5cm、幅1.6cm、尖端部の厚さ0.5cmを計る。5・6は「ピエスエスキーユ」で、両極打法によって製作使用された石器である。上下からの剝離面が残されている。

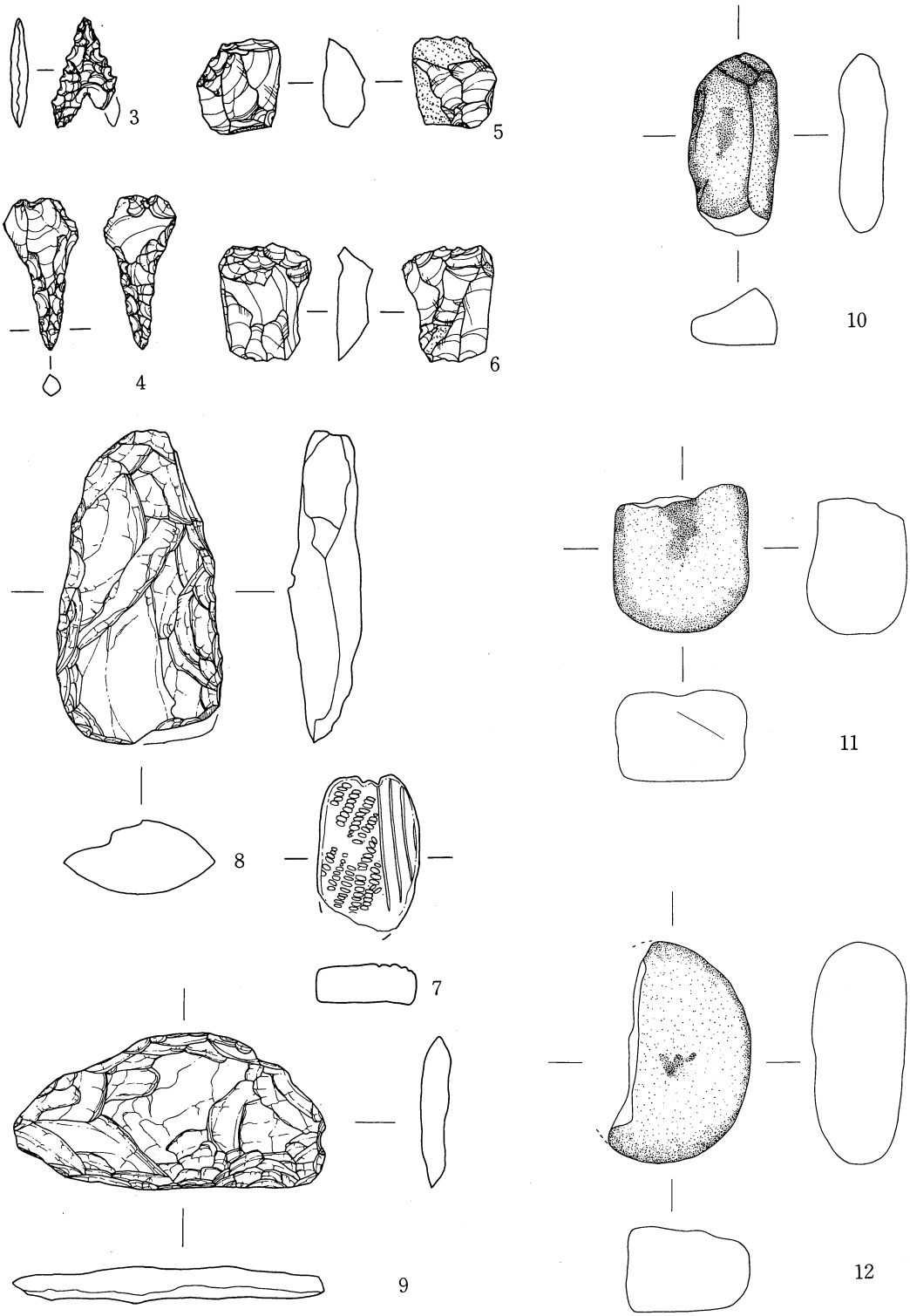
7は土器片錘で一部を欠損する。切り込みには2条のケズリ痕を残しており、現状で約19.5gを計る。

8は緑色片岩製の打製石斧で、刃部をわずかに欠損する。剝離は両面におよび定形的な形態となっている。長さ9.4cm、幅5cm、厚さ2.2cmを計る。9は緑色片岩製のいわゆる横刃型石器である。半月型を呈し刃部は直線的に作り出されている。長さ9.3cm、幅4.7cm、厚さ1.1cmを計る。

10～12は安山岩製の凹石である。いずれも破損品である。10は断面三角形の棒状、11は方形、12は定形的な楕円形を呈する。



第9図　14号住居跡出土土器（1/4）

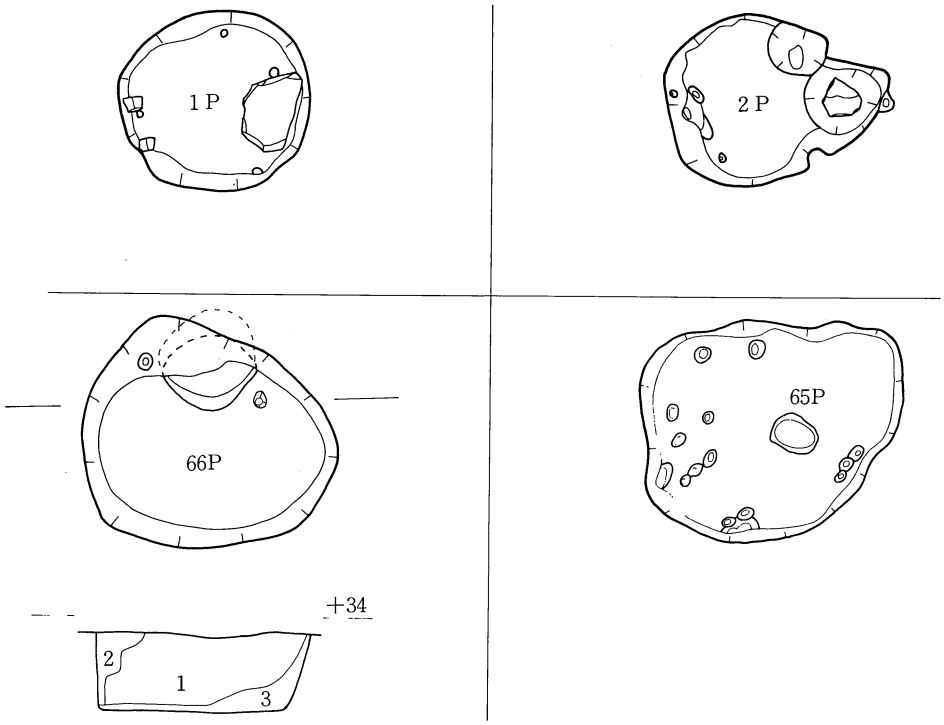


第10図　14号住居跡出土遺物(2)（3～6…2/3、7～9…1/2、10～12…1/3）

(2) 小竪穴

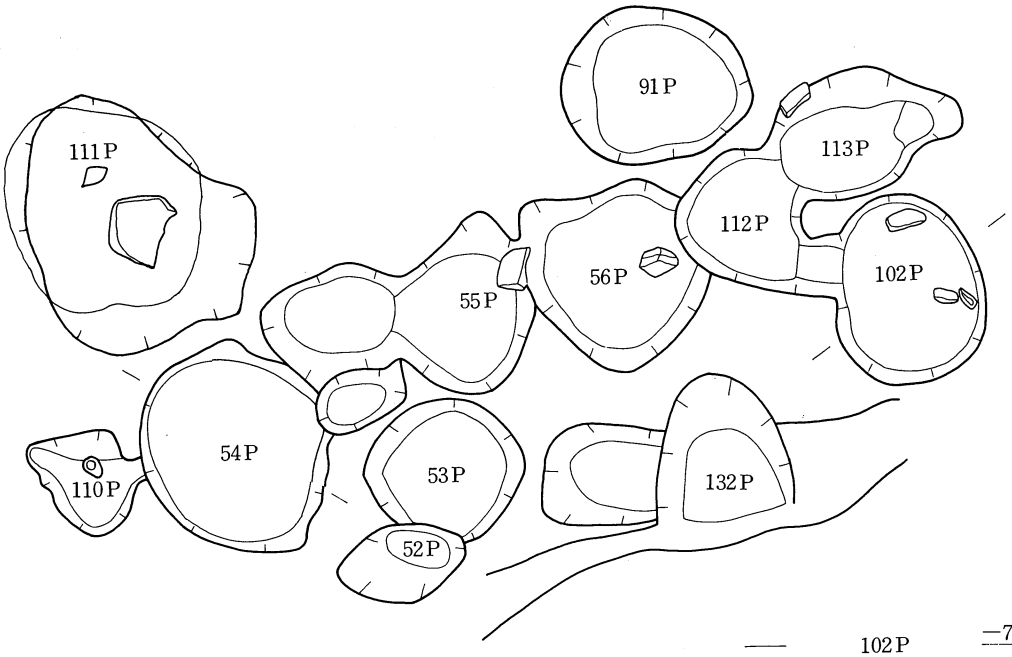
遺構

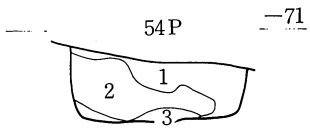
小竪穴はＢ地区の全域とＡ地区の一部から発見された。総数159基にのぼり、形態・大きさは様々であるが、Ｂ地区の比較的平坦な台地緩斜面に集中的に残されている点が立地上の特徴である。Ｂ地区には他に縄文・弥生の住居跡や周溝墓など大規模遺構多数があって、小竪穴群と重複している。特に、周溝墓の溝は深く、小竪穴を完全に破壊しているため、その痕跡すら失われているものと考えられる。このため、小竪穴の本来的な分布状況は既に不明であるが、残された遺構の集中や分布からある程度の推定は可能である。すなわち、小竪穴は特に台地北半、１号周溝墓西半から３号周溝墓東半付近に濃密に分布し群を形成する。この部分においては小竪穴どうしの重複が著しい。この集中区の周囲には点々と分布するが重複などは見られない。出土遺物は少なくすべての時期特定はできないが、土器片をみる限り、縄文前期から中期初頭に属するとみられるものが最も多く、他に縄文早期末や弥生時代のものが含まれると考えられる。なお、小竪穴の平面図・セクション図は第11図～第25図に、また各小竪穴の属性表は第３表にまとめた。

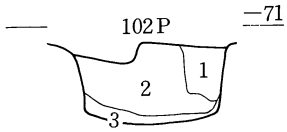


1……黒色土層。かたくしまり、ローム粒・炭化物粒含有。
2……褐色土層。粒状こまかく粘性に富む。
3……明褐色土層。ローム粒・小ロームブロック含有。

第11図　小竪穴平面図、セクション図(1) (1/40)

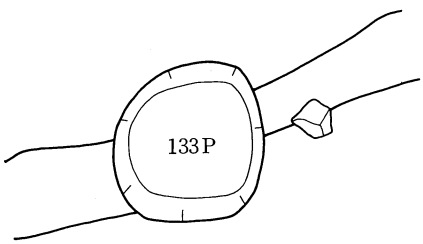




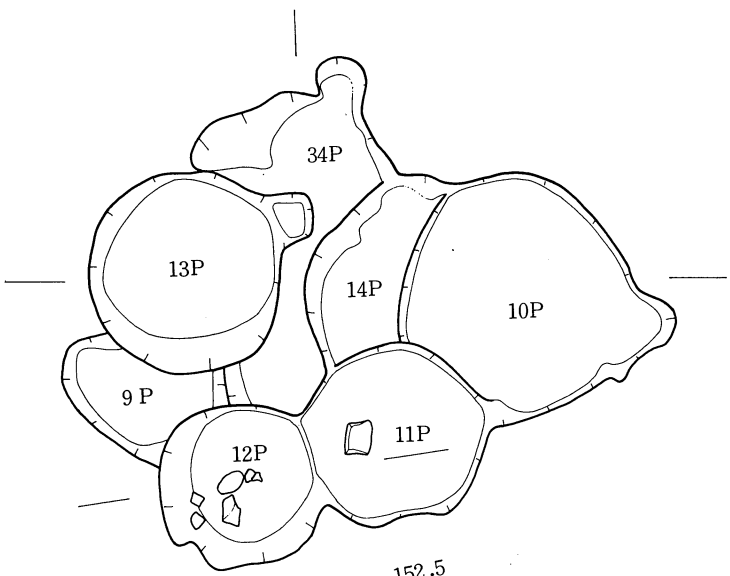


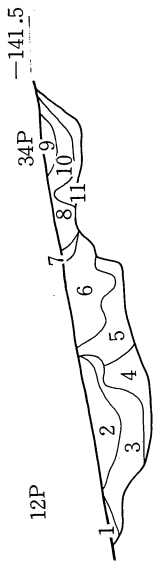
1……暗褐色土層。
2……暗褐色土層。粘性に富む。
3……暗褐色土層。ローム粒含有。

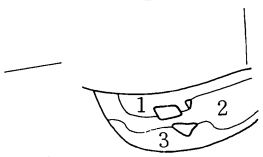
1……褐色土層。粒状こまかく、かたくしまる。ローム粒・小ロームブロック炭化物粒も多量に含有する。大ロームブロックも若干ある。
2……黒色土層。粒状こまかく、かたい。1よりは少ないが、ローム粒・小ロームブロック・炭化物粒を多めに含有する。
3……黒色土層。かたくしまる。多くの炭化物粒と若干のローム粒含む。



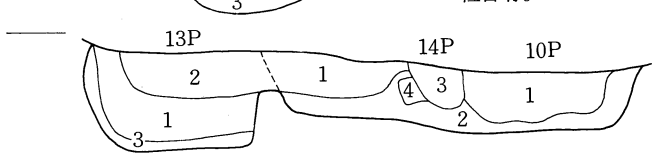
第12図　小竪穴平面図、セクション図(2) (1/40)



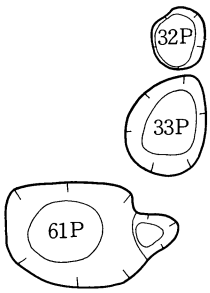




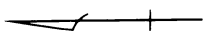
1……黒色土層。粒状あらく軟弱。
2……黒褐色土層。ローム粒を含有。
3……褐色土層。粘性があり、ローム粒含有。



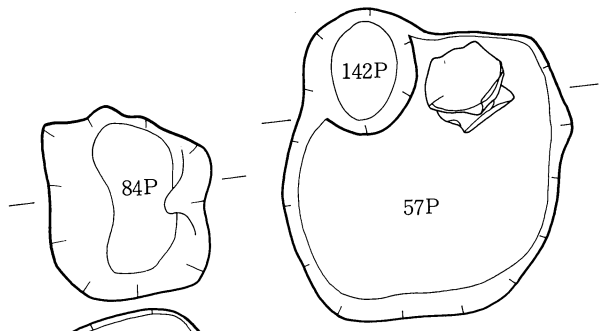
1……黒色土層。粒状あらい。
2……暗褐色土層。かたく、ロームブロックを含有する。
3……暗褐色土層。粘性に富む。
4……褐色土層。粘質で、ロームブロックを含有する。

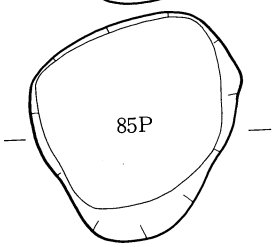


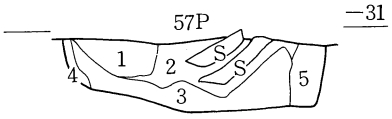
1……黄褐色土層。ロームブロックを多量に含有する。
2……黒色土層。粒状あらく、粘りがない。
3……暗褐色土層。ローム粒を含有し、2層と比べややかたい。
4……褐色土層。ロームを多量に含有する。
5……暗褐色土層。4層と色質ともに同じだがロームが多い。
6……暗褐色土層。3層に類似する。
7……褐色土層。ロームを含有し、粒状あらい。
8……黄褐色土層。1層に類似する。
9……黒色土層。2層に類似する。
10……暗褐色土層。3層に類似する。
11……褐色土層。4層に類似する。



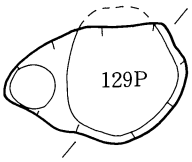
第13図　小竪穴平面図・セクション図(3)（1/40）

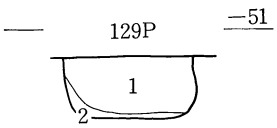




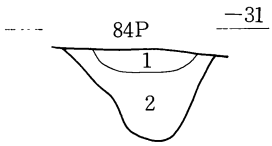


1……褐色土層。粒状こまかく、よくしまる。ロームブロック、ローム粒炭化物粒含有。
2……黒色土層。粒状あらく軟弱。小ロームブロック・炭化物塊を含有。平板状のあつい石2枚がおちている。
3……黒色土層。粒状あらいがよくしまる。ローム粒・小ロームブロック炭化物粒を含有。
4……黒褐色土層。粒状こまかく、よくしまる。ロームブロックを含有。
5……黄褐色土層。ロームブロック。

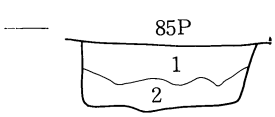




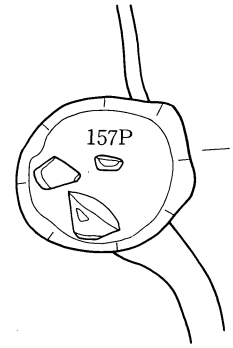
1……暗褐色土層。粒状こまかい。
2……暗褐色土層。粘質に富む。

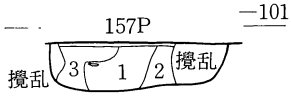


1…暗褐色土層。粒状ややあらく粘性に乏しい。
2…褐色土層。ロームブロック多少含有。粒状こまかく、しまりあり、粘質。

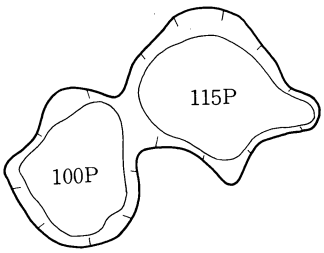


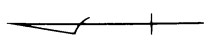
1……褐色土層。粒状こまかく、軟弱。ローム粒多く含み粘質。
2……褐色土層。粒状こまかく、よくしまる。
ローム粒・小ロームブロック含有。炭化物粒をわずかに含有。



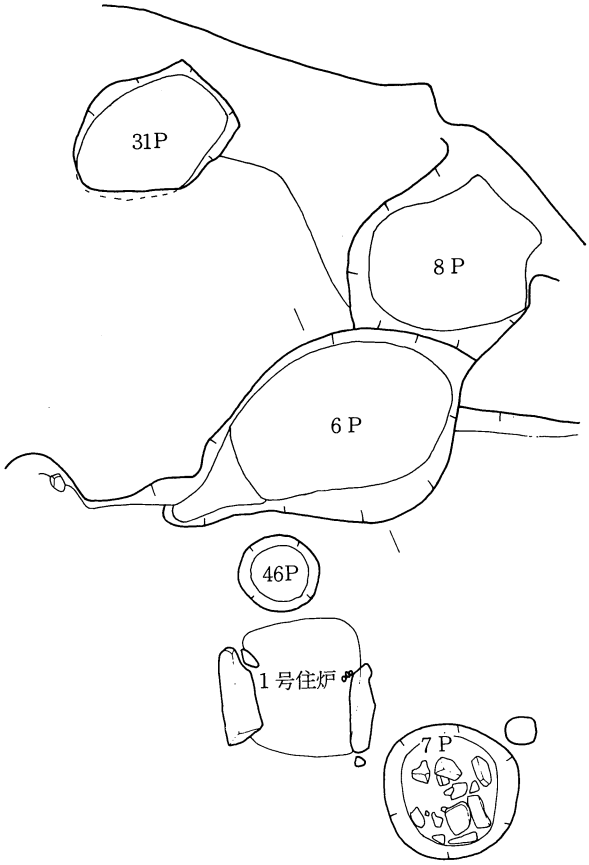


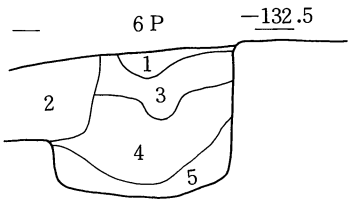
1……暗褐色土層。ローム微粒子含み、粘質。
2……暗褐色土層。炭化物粒・ローム微粒子含有。
3……褐色土層。ローム粗粒子多含有。
(注) 貼り床あり (約2㎝厚)



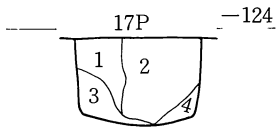


第14図　小竪穴平面図、セクション図(4) (1/40)

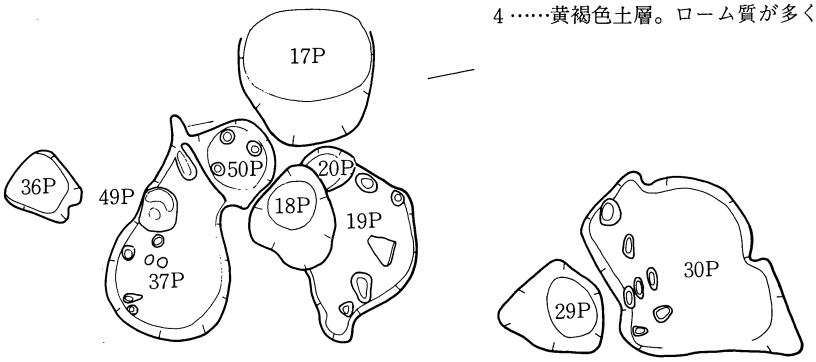




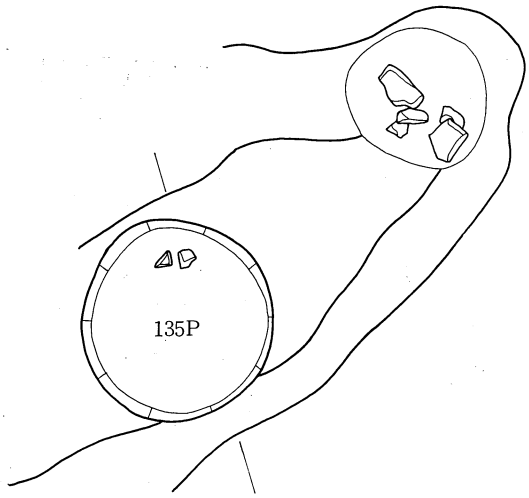
1……黒褐色土層。粒状あらく軟弱。
2……1号住居跡覆土。暗褐色土層。ローム粒含有。
3……暗褐色土層。ロームブロックを多量に含有。
4……暗褐色土層。ローム粒・炭化物粒を含有。
5……暗褐色土層。ローム粒・炭化物粒を含有し、粘質。

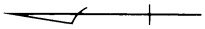


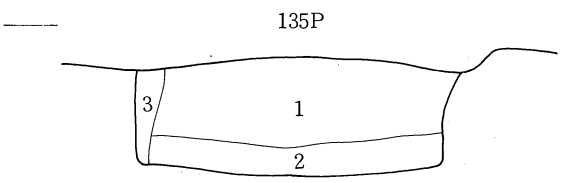
1……褐色土層。やや軟弱。
2……褐色土層。粒状あらく軟弱。ローム粒含有。
3……黄褐色土層。粘質でかたい。ローム粒含有。
4……黄褐色土層。ローム質が多く、粘質。



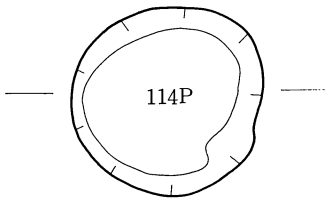
第15図　小竪穴平面図・セクション図(5)（1/40）

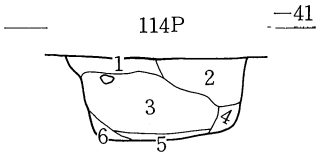






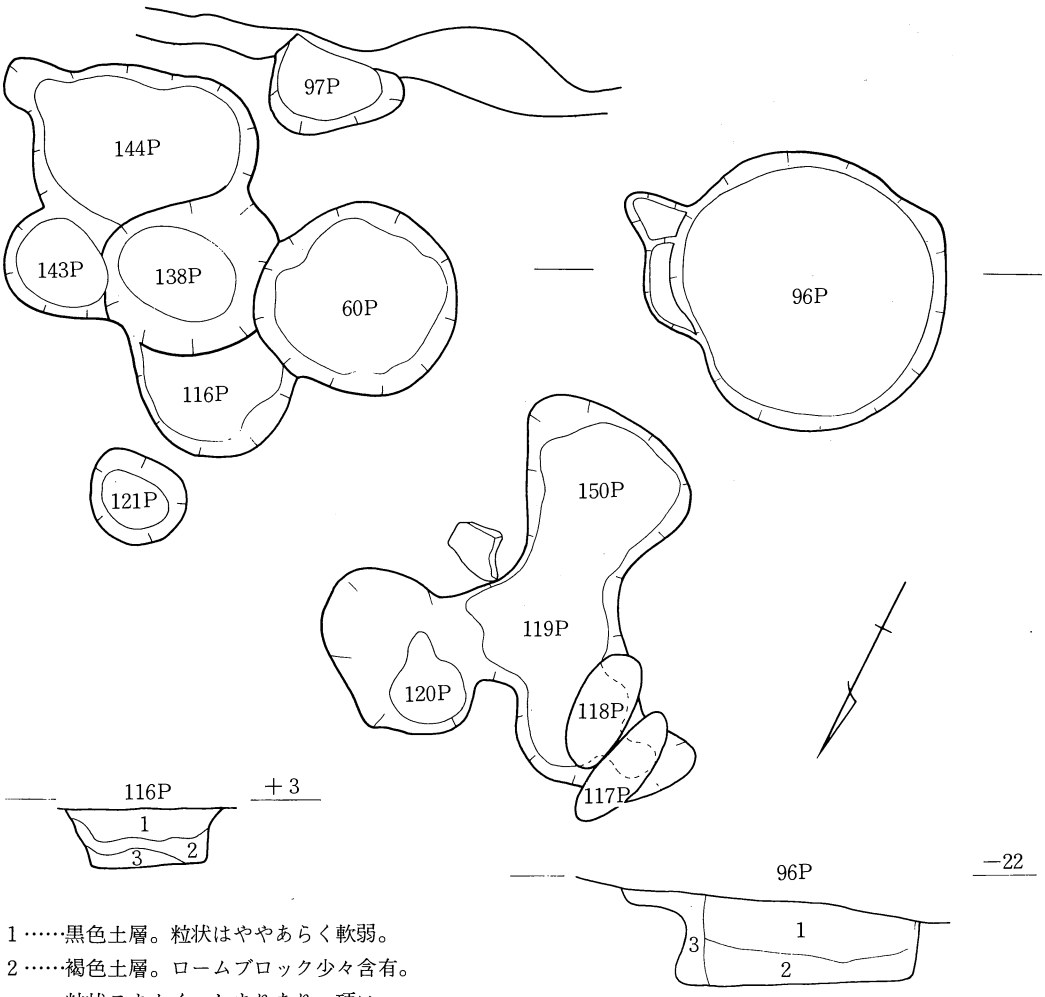
1……黒色土層。粒状比較的あらく、よくしまる。ローム粒、小ロームブロック炭化物粒を若干含有。
2……黒色土層。粒状こまかく、よくしまり、粘性に富む。ローム粒、小ロームブロックを若干含有。
3……黄褐色土層。ローム質土の崩落。軟弱。





1……暗褐色土層。ローム粒を含有。
2……褐色土層。ローム粒を含有。
3……暗褐色土層。炭化物粒・ローム粒を含有。
4……黄褐色土層。粘性に富む。
5……暗褐色土層。粘性に富む。
6……褐色土層。粘性に富む。

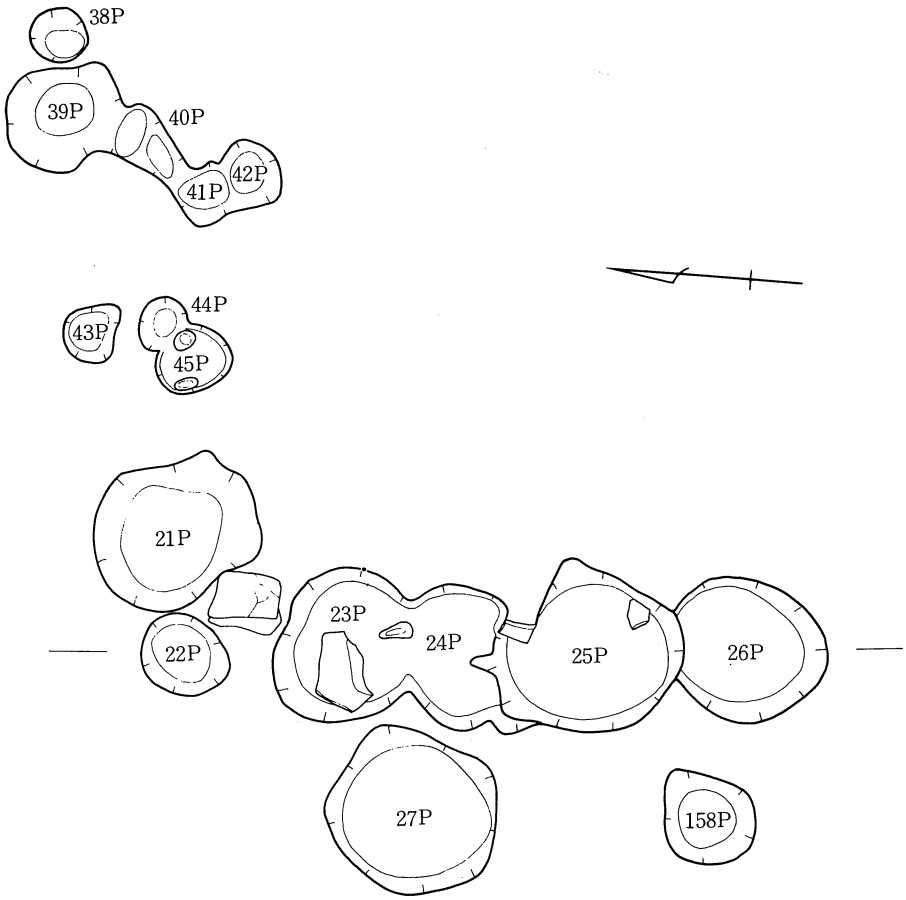
第16図　小竪穴平面図・セクション図(6) (1/40)

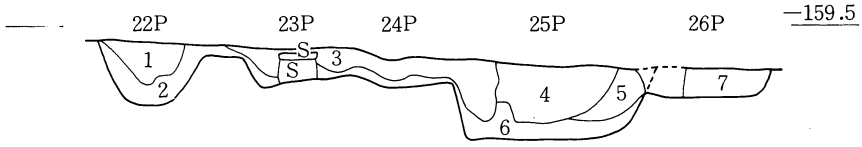


1……黒色土層。粒状はややあらく軟弱。
2……褐色土層。ロームブロック少々含有。
　　粒状こまかく、しまりあり、硬い。
3……褐色土層。ロームブロック少々含有。
　　粒状こまかく、しまりあり、粘質。

1……暗褐色土層。ローム粒を含有。
2……暗褐色土層。粘質でローム粒を含有。
3……褐色土層。粒状あらく、ローム粒を
　　多量に含有。

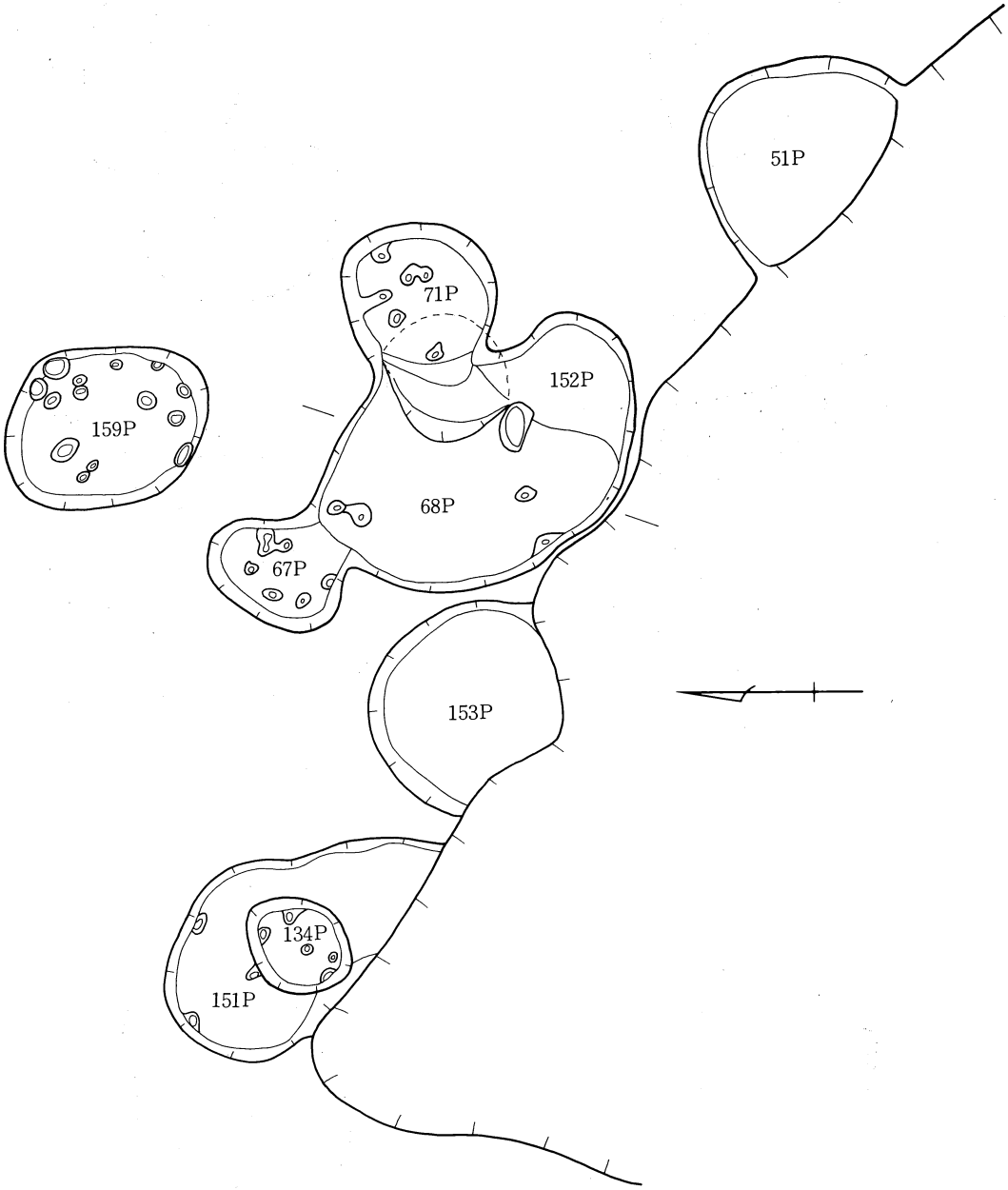
第17図　小竪穴平面図・セクション図(7) (1/40)

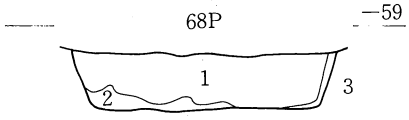




1…暗褐色土層。ロームブロックをわずかに含有。粒状あらく、しまりない。
2…褐色土層。1層よりはロームブロックを多く含有。粒状こまかく、しまり有り、粘質。
3…黒褐色土層。ロームブロックの含有はほとんど無い。
4…黒褐色土層。ロームブロックの含有は無い。粒状あらく、しまりない、くずれやすい。
5…暗褐色土層。ロームブロックの含有ややある。こまかく、粘質。
6…褐色土層。ロームブロックを少し含有。こまかく、かたい。
7…褐色土層。2、6層と類似する。ローム質土を多く含有。きめこまかく、かたく、しまり有る。

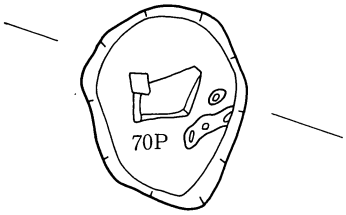
第18図　小竪穴平面図・セクション図(8) (1/40)

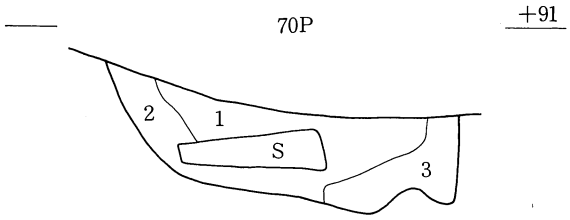




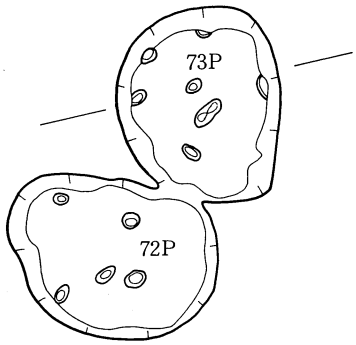
1……暗褐色土層。粒状あらく、やや軟弱。
ロームブロック・炭化物粒を多少含有。
2……黄褐色土層。粒状こまかく粘性に富む。
ロームブロックを多量に含有。
3……黄褐色土層。粒状こまかく、よくしまる。
ロームブロックを含有する。

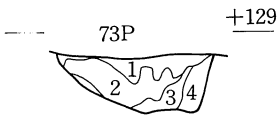
第19図　小竪穴平面図・セクション図(9)（1/40）



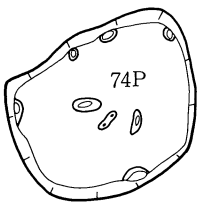


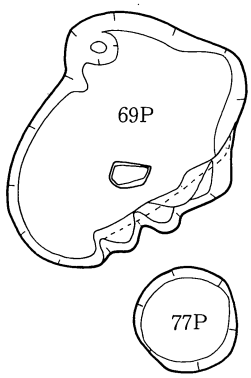
1……黒色土層。粒状あらいがしまりあり、炭化物粒含有。
2……暗褐色土層。ロームブロック少々含有、粒状3層よりあらいが、しまりあり、炭化物粒を含有。
3……褐色土層。ロームブロック多量含有、粒状こまかく、粘質に富む。



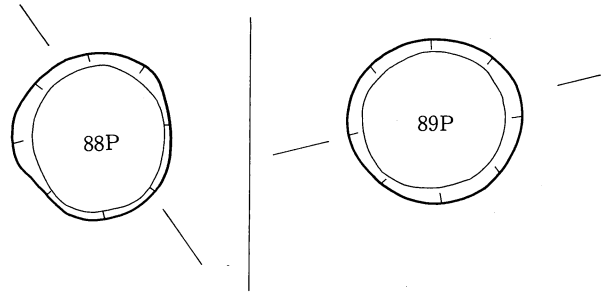


1……黒色土層。粒状こまかく、かたくしまる。小ロームブロック・ローム粒を若干含有。
2……黄褐色土層。ローム質で粘性強い。褐色土部分を含む。
3……明黄褐色土層。ロームブロックを主体とし、かたい。
4……黄褐色土層。粒状こまかく均質でかたい。

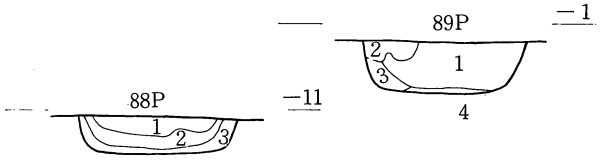




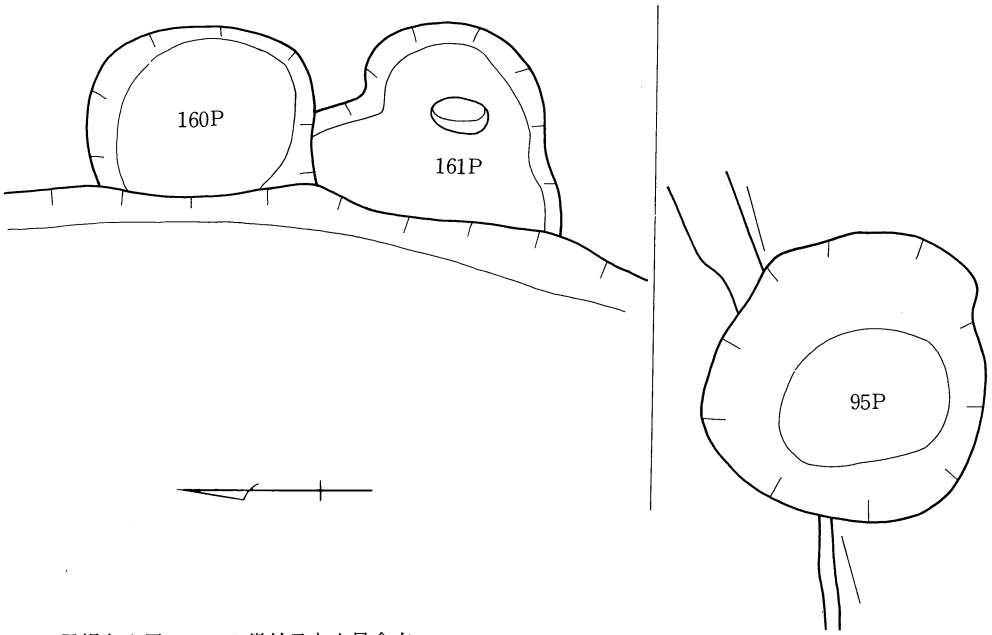
第20図　小竪穴平面図・セクション図(10) (1/40)



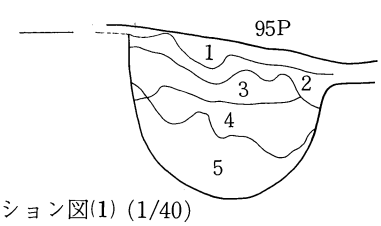
1……黒褐色土層。粒状こまかく、よくしまる。
2……暗褐土層。ローム粒・炭化物粒含有。
3……暗褐土層。ローム粒含有し、粘性に富む。
(注) 貼り床あり (約0.5㎜厚)



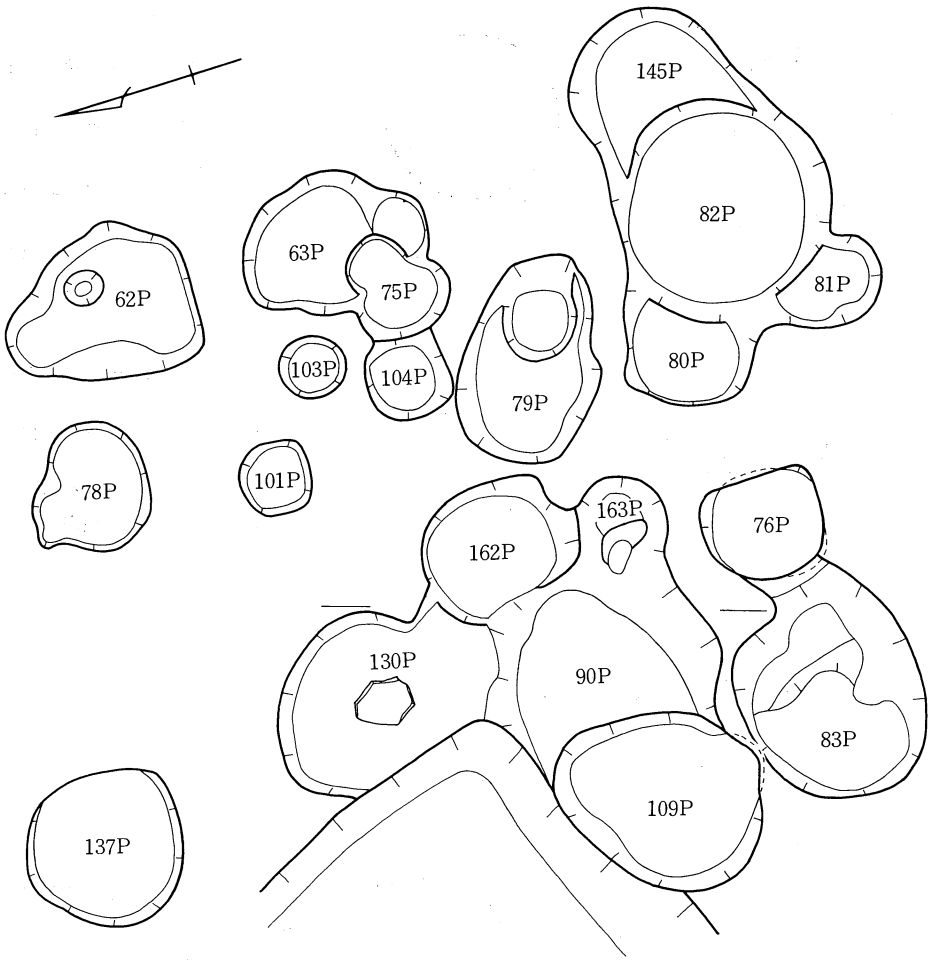
1……暗褐色土層。ローム粒・炭化物粒含有。
2……褐色土層。ローム粒を多く含有する。
3……暗褐色土層。粘性に富む。
4……褐色土層。粘性に富み、ロームブロック含有。

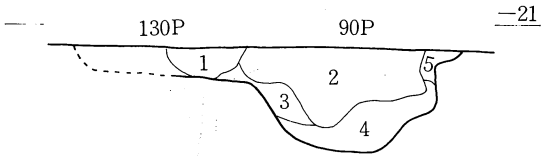


1……黒褐色土層。ローム微粒子を少量含有。
2……暗褐色土層。ローム微粒子を少量含有。
3……褐色土層。粘性に富み、ロームブロックを含有。
4……褐色土層。粘性に富み、ロームブロックを多量に含有。
5……褐色土層。粘性に富む。



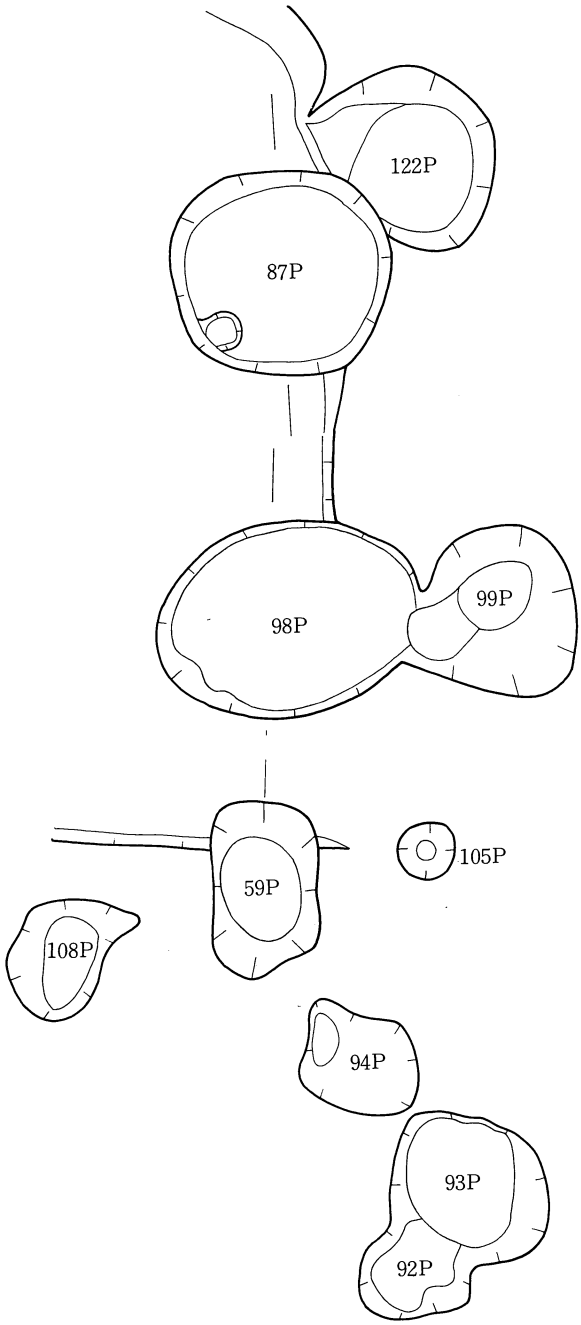
第21図　小竪穴平面図・セクション図(1) (1/40)

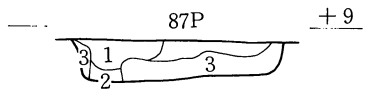




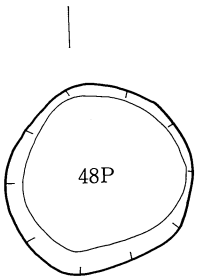
1 ……暗褐色土層。ローム粒・炭化物粒含有。
2 ……褐色土層。ローム粒・炭化物粒含有。
3 ……褐色土層。粒状あらく、ロームブロック含有。
4 ……褐色土層。ロームブロック多数と炭化物粒を若干含有。
5 ……黄褐色土層。ローム質土。

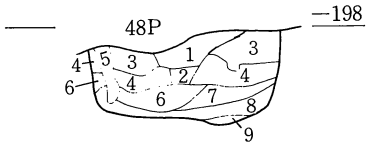
第 22 図　小竪穴平面図・セクション図(12) (1/40)





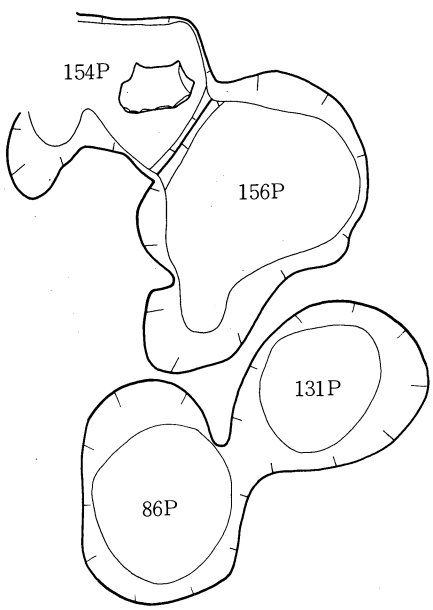
1……暗褐色土層。ローム粒・炭化物粒含有。
2……暗褐色土層。ローム粒・炭化物粒含有。粘性に富む。
3……褐色土層。ローム粒・炭化物粒・ロームブロック含有。
(注) 貼り床あり (約0.5㎜厚)

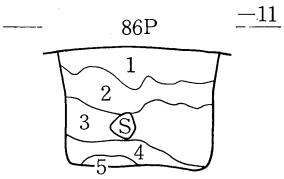


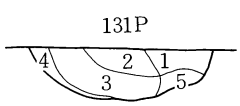


1……褐色土層。軟弱で、ローム粒・ロームブロック含有。
2……褐色土層。粘性に富みよくしまる。ローム粒含有。
3……褐色土層。粒状こまかく、小ロームブロック含有。
4……黄褐色土層。ロームブロックを主体とする。
5……黒色土層。軟弱な攪乱土層。
6……褐色土層。粘性に富み、ローム粒・ロームブロックを多量に含有。
7……褐色土層。小ロームブロック多数と炭化物粒を若干含有。
8……暗褐色土層。粘性に富み、小ロームブロックを含有。
9……褐色土層。粒状こまかく、かたい。ローム粒をわずかに含有。

第23図　小竪穴平面図・セクション図(13) (1/40)



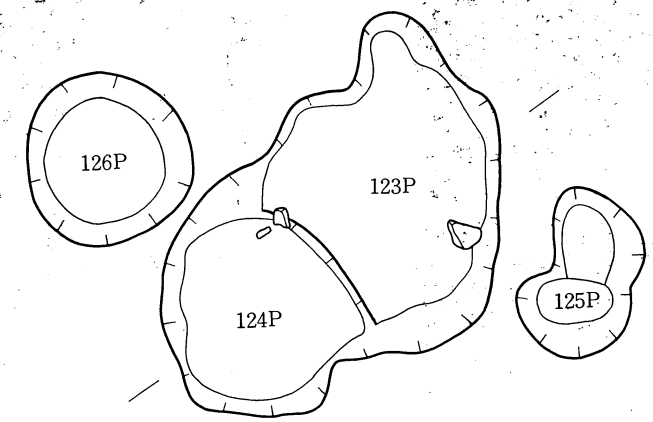


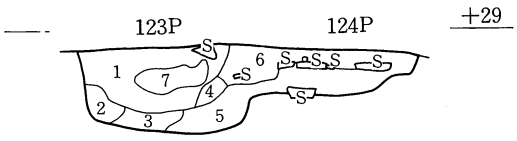


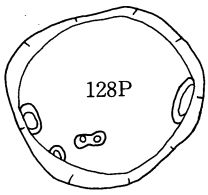
1…黒色土層。粒状あらく、しまる。粘性に乏しいがかたい。
2…暗褐色土層。ロームブロック少々含有よくしまる。
3…暗褐色土層。ロームブロック少々含有2層より、やや黒みがかかっている。
4…暗褐色土層。ロームブロック少々含有粒状こまかく、しまりあり、粘質。
5…暗褐色土層。ロームブロック少々含有粒状こまかく、しまりあり、粘質。

1……黒褐色土層。粒状こまかく、よくしまる。ローム粒、小ロームブロックを若干含有。
2……黒色土層。粒状こまかく、しまる。ローム粒・小ロームブロックを少し含有。
3……褐色土層。粒状こまかく、かたい。ブロック・ローム粒を含む。
4……黄褐色土層。粒状こまかく粘質でロームブロックを主体とする。
5……ロームブロック。

第24図　小竪穴平面図・セクション図(14) (1/40)







1……褐色土層。粒状こまかいが硬く、よくしまる。
2……黒色土層。粒状あらいが、よくしまる。
3……黒褐色土層。粒状あらく、しまりなく、ぼろぼろとなる。
4……黒褐色土層。粒状こまかく、しまりややあり。
5……暗褐色土層。粒状こまかい。しまりあり、粘性が強い。
ロームブロックを少々含有。
6……暗褐色土層。粒状こまかく、しまりなし。
7……黄褐色土層。ロームブロック多量含有。粘質でかたくしまりあり。

第25図　小竪穴平面図・セクション図(15)（1/40）

第３表　小竪穴一覧表

番号	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	図版	出土遺物	時期	備考
1	円形	——	102× 95	——	—	11	凹石・土器片21	不明	底部に礫あり
2	不整隋円形	——	119× 90	——	—	11	土器片（前期後葉他）2	〃	底部に礫・小穴あり
3	——	——	——	——	—	—		〃	
4	——	——	——	——	—	—		〃	
5	——	——	——	——	—	—		〃	
6	不整隋円形	バケツ状	183×120	161× 77	76	15	土器片（前期後葉他）10	〃	
7	円形	不明	75× 72	59× 52	—	15	土器片（中期初他）15	前期末～中期初	
8	不整円形	不明	120× 99	93× 70	39	15	石鏃３・土器片２	中期初？	底部に礫あり
9	不明	——	85×	71×	—	13	石鏃・土器片(諸磯ｃ他)10	前期後葉	
10	不整円形	タライ状	145×126	130×121	30	13	不定形石器・土器片(諸磯ｃ他)44	〃	
11	円形	不明	90×(100)	86× 84	13	13	土器片(中期初～前葉他)５	中期初～前葉	
12	円形	皿状	90× 90	69× 63	34	13	土器片(前期後葉他)１	不明	覆土中に礫あり
13	円形	タライ状	108×105	92× 83	53	13	土器片（諸磯ｃ他）61	前期後葉	
14	不整隋円形	不明	95× 52	85× 40	34	13	石鏃・土器片（前期後葉他）14	〃	
15	——	——	——	——	—	—	土器片２	不明	
16	——	——	——	——	—	—	磨製石斧	〃	
17	円形	タライ状	72× 72	68× 49	47	15	土器片7	〃	
18	不整円形	——	56× 45	27× 25	—	15	土器片２	〃	
19	不整円形	——	95×	90×	—	15	土器片２	〃	
20	隋円形	——	24×	17×	—	15		〃	
21	不整円形	——	90× 90	55× 52	—	18	ピエスエスキーユ・弥生土器片４	弥生時代	
22	円形	バケツ状	48× 44	34× 32	34	18	土器片３	不明	
23	不整円形	タライ状	84×(70)	67×(55)	21	18	土器片（中期初他）15	中期初	底部に礫あり
24	不整円形	不明	78×	64×	16	18	土器片（中期前～中葉）11	中期前～中葉	
25	円形	タライ状	(98)× 94	84× 72	42	18	土器片（中期初他）33	中期初	
26	円形	タライ状	(83)× 78	68× 62	11	18	土器片１	不明	

番号	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	図版	出土遺物	時期	備考
27	円形	——	95× 90	78× 62	—	18	土器片（前期後半他）12	不明	
28	——	——	——	——	—	—	土器片3	〃	
29	隅形丸形	——	56× 46	33× 25	—	15		〃	
30	不整隋円形	——	133× 95	108× 87	—	15		〃	
31	隋円形	——	88× 66	81× 57	—	15		〃	
32	円形	——	32× 27	27× 22	—	13		〃	
33	隅丸方形	——	56× 46	36× 26	—	13	土器片3	〃	
34	隅丸方形	皿状	58× 50	31× 29	22	13	土器片11	〃	
35	——	——	——	——	—	—		〃	
36	隅丸方形	——	40× 30	33× 26	—	15		〃	
37	不整隋円形	——	87× 65	81× 57	—	15	土器片4	〃	
38	円形	——	30× 27	19× 15	—	18		〃	
39	隅丸方形	——	66×(55)	30× 27	—	18	土器片1	〃	
40	不整隋円形	——	(45)× 35	26× 13	—	18	凹石	〃	
41	円形	——	36×(32)	26× 20	—	18		〃	
42	円形	——	37×(33)	22× 18	—	18		〃	
43	隅丸方形	——	34× 30	23× 20	—	18		〃	
44	円形	——	30×(24)	16× 11	—	18		〃	
45	円形	——	42×(32)	35× 32	—	18		〃	
46	円形	——	44× 41	31× 30	—	15	土器片2	〃	
47	——	——	——	——	—	—		〃	
48	円形	バケツ状	101× 98	85× 75	49	23	土器片（前期末他）3	前期末	
49	隅丸方形	——	23× 18	15× 6	—	15		不明	
50	隅丸方形	——	49× 37	34× 31	—	15		〃	
51	不整円形	——	130× 95	115× 89	—	19	土器片5	〃	
52	隋円形	——	59× 43	34× 18	—	12		〃	

番号	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	図版	出土遺物	時期	備考
53	隅丸方形	——	76× 76	60× 58	—	12	土器片3	不明	
54	不整円形	タライ状	116× 98	101× 88	37	12	土製円盤・土器片6	〃	
55	不整円形	——	96× 76	67× 63	—	12		〃	
56	不整円形	——	106×101	80× 77	—	12	土器片（前期～中期他）20	〃	底部に礫あり
57	隅丸方形	タライ状	177×144	162×126	39	14	土器片（中期前半他）9	〃	覆土中に礫あり
58	——	——	——	——	—	—	打製石斧	〃	
59	隅丸方形	バケツ状	94× 55	56× 42	60	23	土器片5	〃	
60	円形	——	103× 99	78× 75	—	17		〃	
61	隅丸方形	——	91× 55	39× 33	—	13	土器片（諸磯b他）3	〃	
62	不整隋円形	——	103× 82	86× 50	—	22	石匙	〃	底部に小穴あり
63	不整円形	——	101× 76	66× 61	—	22		〃	
64	——	皿状	——	——	31	—	打製石斧・土器片10	〃	
65	不整円形	——	152×113	142× 98	—	11	土器片1	〃	底部に小穴あり
66	隋円形	タライ状	134×116	118× 80	41	11	土器片8	〃	
67	隋円形	——	80×(63)	65× 54	—	19		〃	
68	不整隋円形	タライ状	163×(105)	150×(80)	29	19	打製石斧・土器片16	〃	
69	隅丸方形	——	119×100	100× 83	—	20	土器片（前期）1	〃	
70	隋円形	タライ状	107× 87	93× 73	51	20	石鏃・不定形石器・土器片(諸磯c他)13	前期末？	覆土中に礫あり
71	円形	——	81×(90)	75× 65	—	19	土器片1	不明	
72	隅丸方形	——	114× 84	99× 73	—	20	磨石2・横刃型石器・弥生土器片他5	弥生？	
73	隅丸方形	タライ状	102× 82	87× 71	31	20	土器片1	不明	
74	隅丸方形	——	113×102	100× 92	—	20		〃	
75	不整円形	——	68× 48	48× 27	—	22	土器片1	〃	
76	円形	——	68× 55	60× 60	—	22	土器片11	〃	
77	円形	——	56× 55	46× 44	—	20		〃	
78	円形	——	70× 60	66× 43	—	22	土器片（中期）1	〃	

番号	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	図版	出土遺物	時期	備考
79	隋円形	——	111× 71	(95)× 54	—	22		不明	
80	隅丸方形	——	67× 46	55× 44	—	22	土器片7	〃	
81	不整隋円形	——	(60)× 47	48× 36	—	22		〃	
82	円形	——	114×(99)	99× 95	—	22	凹石・打製石斧・土器片21	〃	
83	不整円形	——	85×(117)	98× 52	—	22	土器片1	〃	
84	隅丸方形	バケツ状	114× 96	79× 32	48	14		〃	
85	不整円形	タライ状	126×104	111× 97	36	14	土器片（中期初他）9	中期初？	
86	隋円形	タライ状	118× 88	83× 73	63	24	石鏃2・土器片5	不明	
87	円形	タライ状	116×106	100× 84	23	23	土器片（前期後葉他）5	〃	底部隅に小穴あり
88	円形	タライ状	88× 84	76× 69	21	21	土器片3	〃	
89	円形	タライ状	92× 87	74.5× 71	27	21	土器片（中期初他）17	〃	
90	不整隋円形	バケツ状	(130)×	87×	56	22	打製石斧・土器片(前・中期他) 5	〃	
91	円形	——	100× 82	73× 63	—	12	土器片5	〃	
92	隅丸方形	——	60×(60)	44.5× 36	—	23		〃	
93	隅丸方形	——	94×(70)	73× 63	—	23		〃	
94	隅丸方形	——	74× 60	27× 14	—	23	土器片4	〃	
95	不整円形	バケツ状	158×148	90× 70	82	21	土器片(前期後半・土師器他) 7	〃	
96	不整円形	タライ状	180×139	134×128	49	17	土器片6	〃	
97	不整隋円形	——	72× 51	55× 46	—	17	石鏃	〃	
98	円形	タライ状	143×103	128× 93	26	23	不定形石器・土器片(中期中葉他)18	中期	
99	不整隋円形	バケツ状	71×(45)	55× 36	34	23	土器片(前期後半他) 3	不明	
100	不整円形	——	84×(69)	71.5× 54	—	14		〃	
101	円形	——	40× 39	31× 31	—	22		〃	
102	隋円形	バケツ状	100× 76	93× 67	43	12	凹石・土器片2	〃	底部に礫あり
103	円形	——	36× 33	26× 25	—	22		〃	
104	隅丸方形	——	44× 43	35× 32	—	22	土器片（前期末他）11	〃	

番号	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	図版	出土遺物	時期	備考
105	円形	——	31× 31	10× 10	—	—		不明	
106	——	——	——	——	—	—		〃	
107	——	——	——	——	—	—		〃	
108	不整隋円形	——	75× 46	49× 25	—	23	土器片2	〃	
109	不整円形	——	114× 93	98× 80	—	22	土器片6	〃	
110	不整円形	——	63× 57	54× 35	—	12	土器片（諸磯c）4	前期後葉	
111	不整円形	——	143×108	117×100	—	12	土器片5	不明	底部に礫あり
112	不整円形	——	73× 67	61× 54	—	12	土器片（前期～中期他）18	〃	
113	不整隋円形	——	104× 67	82× 43	—	12	土器片5	〃	
114	円形	タライ状	100×100	84× 76	43	16		〃	
115	不整隋円形	——	94×100	93× 66	—	14	土器片（中期前半）1	〃	
116	不整円形	バケツ状	83× 57	72× 47	32	17	土器片2	〃	
117	隋円形	——	70× 24	な し	—	17		〃	
118	隋円形	——	64× 31	な し	—	17	土器片2	〃	
119	不整隋円形	——	(110)× 64	100× 46	—	17		〃	
120	隋円形	——	98×(65)	49× 38	—	17		〃	
121	円形	——	55× 46	37× 27	—	17	弥生土器片他3	〃	
122	不整円形	——	106× 83	93× 66	—	23	土器片5	〃	
123	不整円形	バケツ状	179×130	144×104	47	25	土器片15	〃	
124	不整円形	タライ状	120×(105)	86× 93	24	25	土器片3	〃	
125	不整隋円形	——	90× 43	60× 20	—	25		〃	
126	円形	——	92× 87	65× 62	—	25		〃	
127	——	——	——	——	—	—	土器片（前期後葉他）3	〃	
128	円形	——	104× 91	92× 81	—	25		〃	
129	不整隋円形	袋状	97× 63	67× 57	33	14	土器片（中期中葉他）5	中期中葉	
130	不整隋円形	皿状	128×(95)	123×(85)	15	22	土器片1	不明	

番号	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	図版	出土遺物	時期	備考
131	隋円形	皿状	101× 84	73× 60	28	24		不明	
132	不整隋円形	バケツ状	90× 72	47× 56	48	12		〃	
133	隅丸方形	——	93× 80	65× 59	—	12		〃	
134	隅丸方形	——	65× 53	50× 51	—	19	土器片3	〃	
135	円形	タライ状	106×104	97× 92	63	16	土器片3	〃	
136	不整円形	——	100×(100)	76× 70	—	—	土器片（中期初他）5	〃	
137	円形	——	87× 84	79× 74	—	22	打製石斧・土器片（前～中期）6	〃	
138	隋円形	——	95× 80	62× 44	—	17	土器片7	〃	
139	——	——	——	——	—	—		〃	
140	——	——	——	——	—	—	土器片2	〃	
141	——	——	——	——	—	—	土器片1	〃	
142	円形	——	66× 52	61× 34	—	14		〃	
143	円形	——	61×(55)	51× 42	—	17		〃	
144	不整隋円形	——	139×(90)	111× 76	—	17	土器片2	〃	
145	不整隋円形	——	84× 56	70× 47	—	22	土器片（前期末他）13	〃	
146	——	——	——	——	—	—		〃	
147	——	——	——	——	—	—		〃	
148	——	——	——	——	—	—	土器片(中期末・中期前葉他）19	〃	
149	——	——	——	——	—	—		〃	
150	不整円形	——	97×(70)	71×(60)	—	17	打製石斧・土器片7	〃	
151	隋円形	——	176×103	165× 92	—	19		〃	
152	不整円形	——	88×(70)	95× 58	—	19		〃	
153	不整円形	——	120×(112)	106× 95	—	19	土器片（前期末）1	〃	
154	不明	——	126× 69	× 45	—	24	土器片3	〃	底部に礫あり
155	不明	——	——	——	—	—	土器片24	〃	
156	不整隋円形	——	170×105	130× 90	—	24	土器片5	〃	

番号	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	図版	出土遺物	時期	備考
157	円形	タライ状	92× 82	76× 68	—	14		不明	底部に礫あり
158	不整隋円形	——	56× 50	31× 28	—	18		〃	
159	隅丸方形	——	115× 86	99× 76	—	19		〃	
160	不明	不明	120×	90×	—	21		〃	
161	——	——	——	——	—	21		〃	底部に小穴あり
162	隋円形	不明	78×	69×	—	22		〃	
163	——	——	——	——	—	22		〃	

注1……法量は（最大径)×(最小径）を示した。

注2……出土土器は、弥生土器等と特定したもの以外は全て縄文土器である。

注3……小竪穴の断面形分類基準模式図は次の通り。

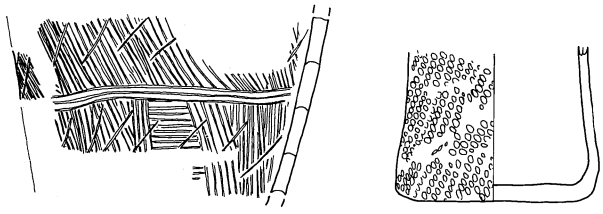
出土遺物（第26～28図・第４～５表）

小竪穴からの出土土器はほとんどが小破片で、また土器片が検出されなかったものも多いため、個々の小竪穴の時期を確定させることのできるものが少ない。しかし、全般的には前期後葉から中期初頭の破片が多いようである。主なものを第26・27図に示した。

３は深鉢口縁部の破片であり、口縁下に３条の粘土紐の張り付けを有する。口唇はほぼ平らで、内面にかけて丁寧に磨かれている。粘土紐上には縦方向の半截竹管による刻みが加えられ、口縁部下はやはり半截竹管による斜めの条線が施されている。胎土には砂粒・白色粒子を含んでおり、焼成は良好で暗褐色を呈する。何単位かの波状口縁となるらしい。前期初頭に属するものであろう。４は底部近くの破片で、半截竹管によるあらい条線が施される。破片の内面上半部には炭化物の付着が認められる。胎土に砂粒・白色粒子を含み焼成は良好、明茶褐色を呈する。前期後半の土器であろうか。５は半截竹管による条線が施されるが口縁部下には半截竹管による押し引きが加えられた粘土紐張り付けによる隆帯を有隆帯の区画下には斜めの格子目状文が施されている。胎土には砂粒・金雲母片を含み焼成はよく、内面が明褐色、外面が暗褐色を呈する。中期初頭に属する土器であろう。７は胎土に金雲母片を顕著に含み、暗茶褐色を呈する。口縁には突起と波状の装飾を持ち、刻み目の沈線が加えられる。口縁から下は隆帯で区画され、縄文が施された上から沈線による文様が加えられる。中期初頭に属する。２・６は共に57号小竪穴からの出土で、２は斜縄文が施される深鉢の底部、６は口縁下に斜めの格子目文が施される口縁部破片である。所属時期は確定できないが、中期前葉から中葉に属するものであろう。

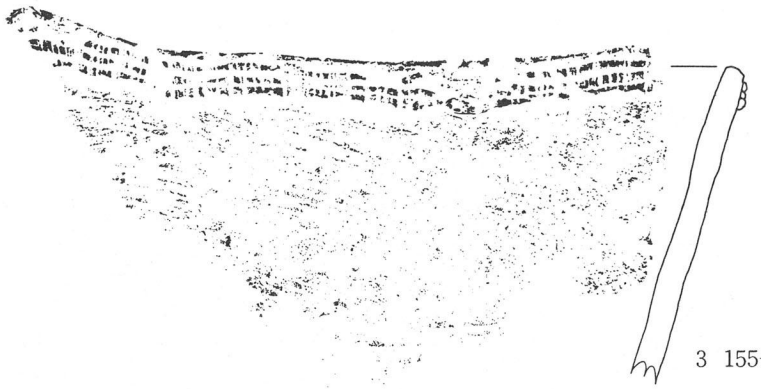
小竪穴出土の石器類のうち、剥片等を除く定形的な石器は、第28図に示す、凹石・磨石類および第４表・第５表に示す小形石器と石斧類である。いずれも少量の出土で、とくに注意すべき出土状態も観察されなかったため、意図的な配置等については把握されなかった。

凹石・磨石の類はいずれも安山岩製である。最も一般的な楕円形の形態のものがなく、比較的細長い平面形と板状の断面形を示すものが多いのが特徴である。成形加工は一応全面におよんであるが特に顕著でないものが多く、凹は各面の１ないし２個が認められる。小形石器の類としては石鏃が９点でもっとも多い。いずれも黒耀石製である。８号小竪穴からは３点が同時に出土しており注目される。６号小竪穴からはチャート製の石匙が出土している。石斧の類のなかでは打製石斧が最も多く、７点検出されたが破損品が多い。いずれも堆積岩や変成岩を素材としている。他に乳棒状磨製石斧破片１点と、半月形のいわゆる横刃型石器１点が出土している。乳棒状磨石斧は刃部側を欠損するが、破損面に著しい敲打痕が認められ、何らかの再使用が考えられる。



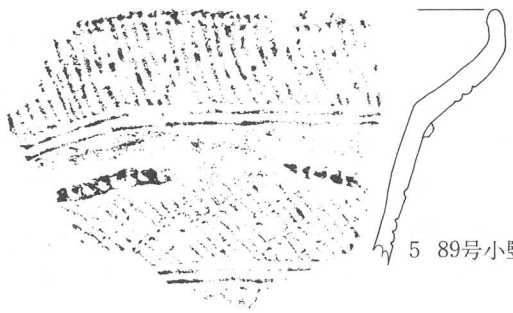
1．114号小竪穴　　2．57号小竪穴

第26図　小竪穴出土土器(1)（1/4）

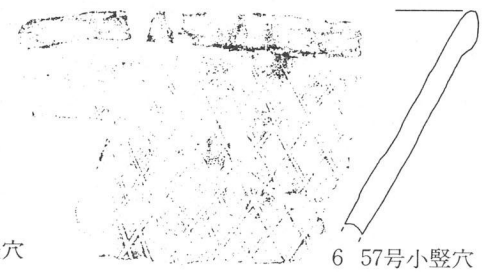


3　155号小竪穴

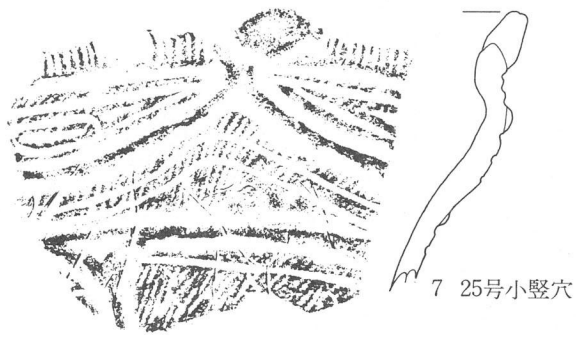
4　153号小竪穴



5　89号小竪穴

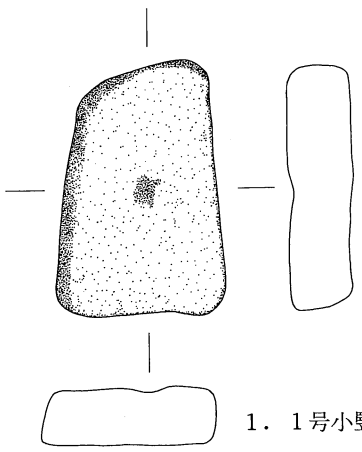


6　57号小竪穴

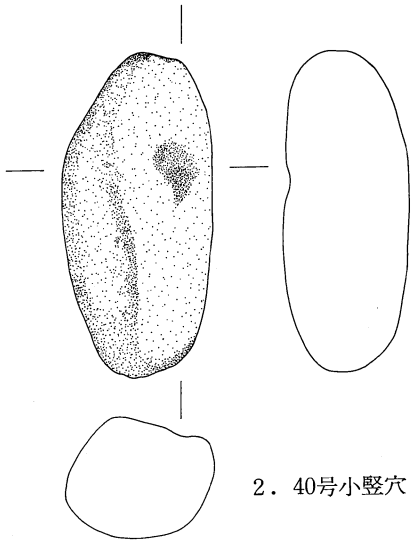


7　25号小竪穴

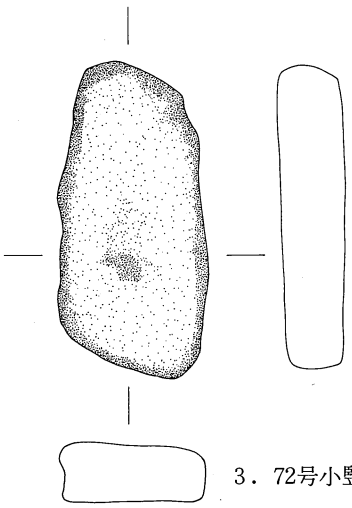
第 27 図　小竪穴出土土器(2) (1/3)



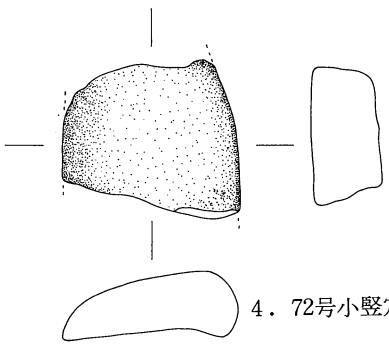
1．1号小竪穴



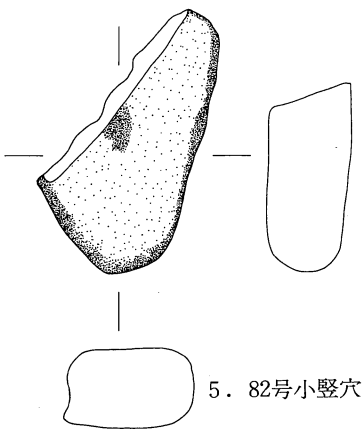
2．40号小竪穴



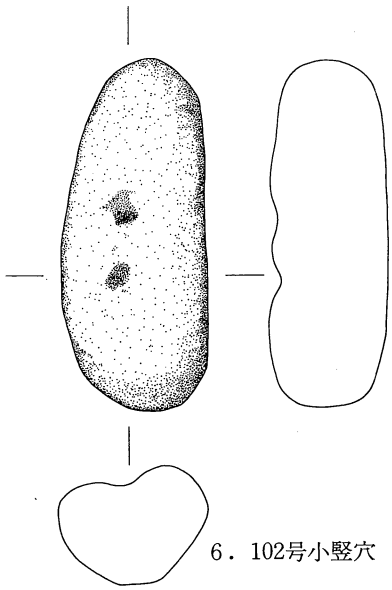
3．72号小竪穴



4．72号小竪穴



5．82号小竪穴



6．102号小竪穴

第28図　小竪穴出土石器

第４表　小竪穴出土小形石器観察表

番号	記　号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重(g)	石　材	欠損部位	備　考
1	86号小竪穴	石　鏃	2.6	2.3	0.4	1.5	黒曜石		
2	97号小竪穴	石　鏃	2.5	(1.9)	0.4	(2.0)	黒曜石	片　脚	
3	14号小竪穴	石　鏃	(2.4)	(2.1)	(0.4)	(2.0)	黒曜石	脚　部	鋸歯状縁
4	70号小竪穴	石　鏃	(2.2)	(1.4)	(0.5)	(1.2)	黒曜石	先端・片脚	
5	9号小竪穴	石　鏃	2.2	(1.4)	0.4	(1.1)	黒曜石	片　脚	
6	86号小竪穴	石　鏃	2.1	(1.3)	0.3	(1.0)	黒曜石	片　脚	
7	8号小竪穴	石　鏃	1.2	1.1	0.2	(0.8)	黒曜石	片　脚	
8	8号小竪穴	石　鏃	1.8	(1.5)	0.4	(1.0)	黒曜石	片　脚	
9	8号小竪穴	石　鏃	1.7	(1.4)	0.3	(0.9)	黒曜石	片　脚	
10	62号小竪穴	石　匙	5.5	3.9	1.0	15.3	チャート		横形・直線刃
11	21号小竪穴	ピエス エスキーユ	2.2	1.2	0.7	2.0	赤色光択石		
12	10号小竪穴	不定形	3.3	3.9	0.8	8.0	黒曜石		二側辺に加工
13	98号小竪穴	不定形	(2.9)	(2.4)	(1.0)	(6.2)	黒曜石	半　欠	片面加工
14	70号小竪穴	不定形	(3.4)	1.5	0.7	(3.0)	黒曜石	一部欠	微細剝離痕

第５表　小竪穴出土石斧類観察表

番号	記　号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重(g)	石　材	欠損部位	備　考
1	16号小竪穴	磨製石斧	(11.1)	4.6	3.3	(330)	輝緑岩	刃部側	破損面に敲打痕
2	90号小竪穴	打製石斧	10.5	5.4	1.5	115	緑色片岩		短冊型
3	137号小竪穴	打製石斧	11.1	(4.4)	2.3	(139)	千枚岩	片　縁	短冊型
4	150号小竪穴	打製石斧	(8.2)	(6.0)	(1.5)	(81)	硬砂岩	刃部側	
5	68号小竪穴	打製石斧	(6.7)	4.6	1.3	(45)	粘板岩	基部側	撥型
6	82号小竪穴	打製石斧	(5.5)	(4.3)	(1.3)	(40)	黒色片岩	刃部側	
7	64号小竪穴	打製石斧	(6.8)	(5.3)	(1.7)	(64)	硬砂岩	刃部側	
8	58号小竪穴	打製石斧	(6.4)	(4.3)	(1.1)	(33)	緑色片岩	基部・刃部	
9	72号小竪穴	横刃型石器	9.8	4.1	1.2	69	緑色片岩		直線刃

(3) その他の出土遺物（大29～37図）

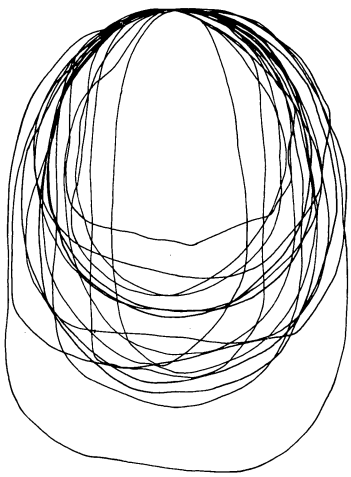
遺構外出土の縄文土器は周溝の覆土中出土のものなども含めて整理箱数個分がある。多くが小片・細片であり、器形の全体を窺い知ることのできるものはない。所属時期は、楕円押型文が施された土器片2点のほかに、早期末葉から後・晩期にいたる各時期の土器片が出土しているが、量的にはそれらのうちほとんどを前期後葉から中期中葉の土器片が占めている。小竪穴群・住居跡の所属時期と重なるようである。

石器類は、遺構外から多数が出土している。これは、遺構の重複が著しく縄文時代の遺構多数が何らかの破壊を受けた結果を反映しているものと考えられる。

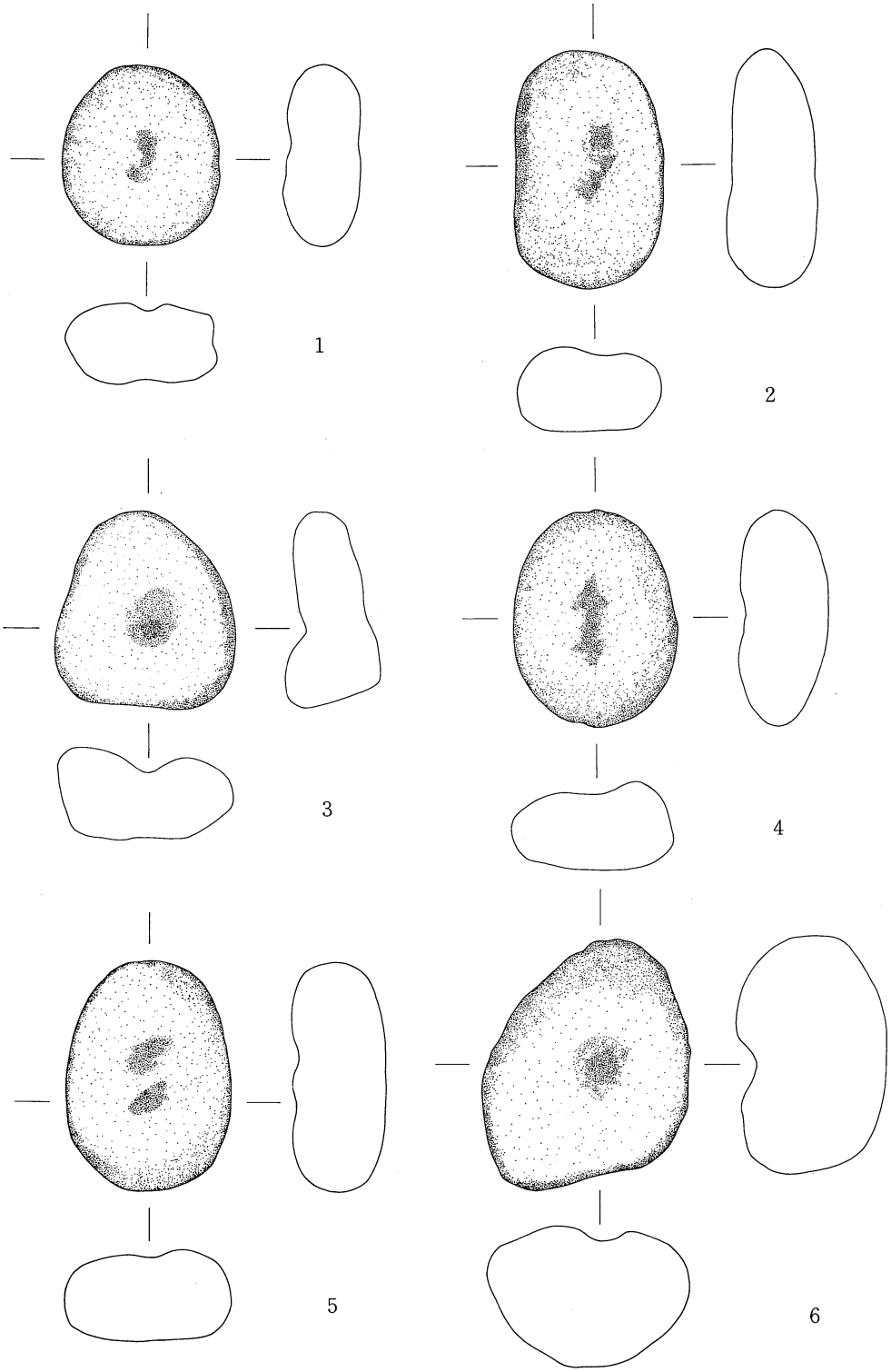
凹石・磨石の類は第30図～第37図に図示した。総数は49点である。いずれも安山岩製で、形態的には様々なものがある。この種の石器は製作痕跡と使用痕跡の分別が困難なため、一般に有意の分類による形式的把握は難しいと考えられる。第29図はひとつの試みとして平面形態を比較するため、全点のプロポーションを重ねたものである。これを見ると本遺跡の凹石・磨石類は大きさのばらつきが少なくある程度一定の法量内におさまる傾向が認められる。さらに、大きさにはおおよそ2つのピークがあって、中間的なものや例外的なものはあるものの一応2分類が可能である。形の面でもそれぞれ異なる楕円形形態を示す。しかし、この類型は今の所単なる目安で、他の属性（凹み・加工状態等）を加えたとき、必ずしもこれが有意の集合としては認識できない場合も当然予想される。安山岩製の石器としては他に石皿4点がある。小形石器としては次の各石器が出土した。石鏃は56点で、すべて黒耀石製である。石錐は10点、内黒耀石製が9点、赤色光沢石（あるいは琥珀か）製が1点である。石匙は6点で、黒耀石製2・チャート製2・玻璃質安山岩製1・頁岩製1である。装飾石器としては粘板岩製の板状製品1・チャート製の有孔垂飾品1がある。二次加工痕の顕著ないわゆる不定形石器は黒耀石製で18点が検出された。ピエスエスキーユは多数が出土している。その他黒耀石の原石・石核・剥片などは非常に多く出土している。石斧の類は次のとおりである。磨製石斧は定角式1点・乳棒状が5点で、前者は形態と石質からみて弥生時代のものと思われる。打製石斧は36点が出土し、いずれも堆積岩・変成岩系の石質で形態・大きさとも様々である。いわゆる横刃型石器は6点検出された。また、両者の区分が不可能なもの・破片・未成品等の類が29点ある。

土製品では土器片利用の円盤3点がある。

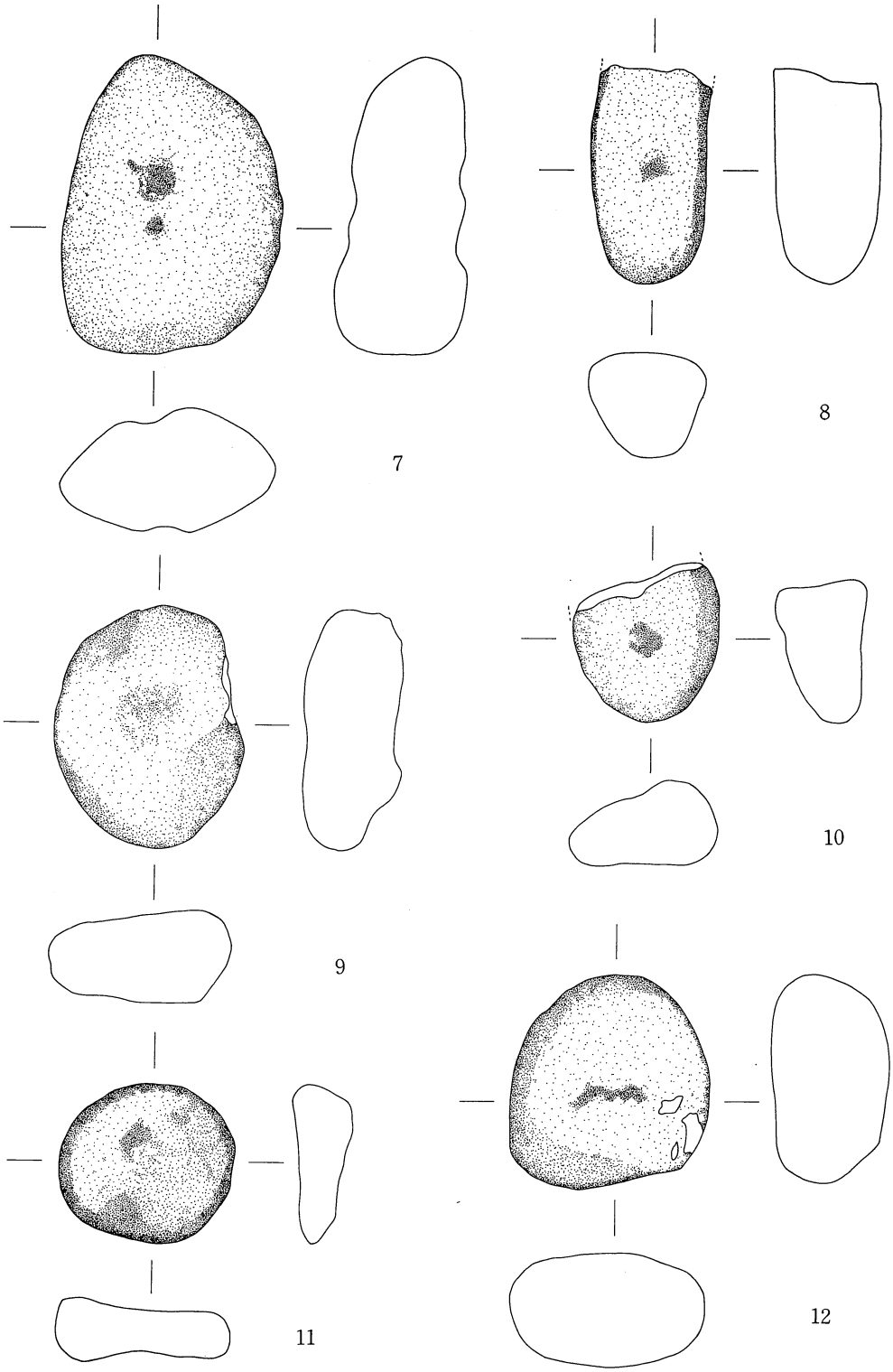
なお、紙数等の制約から遺構外出土遺物については詳細に報告することができなかったことを付記しておきたい。



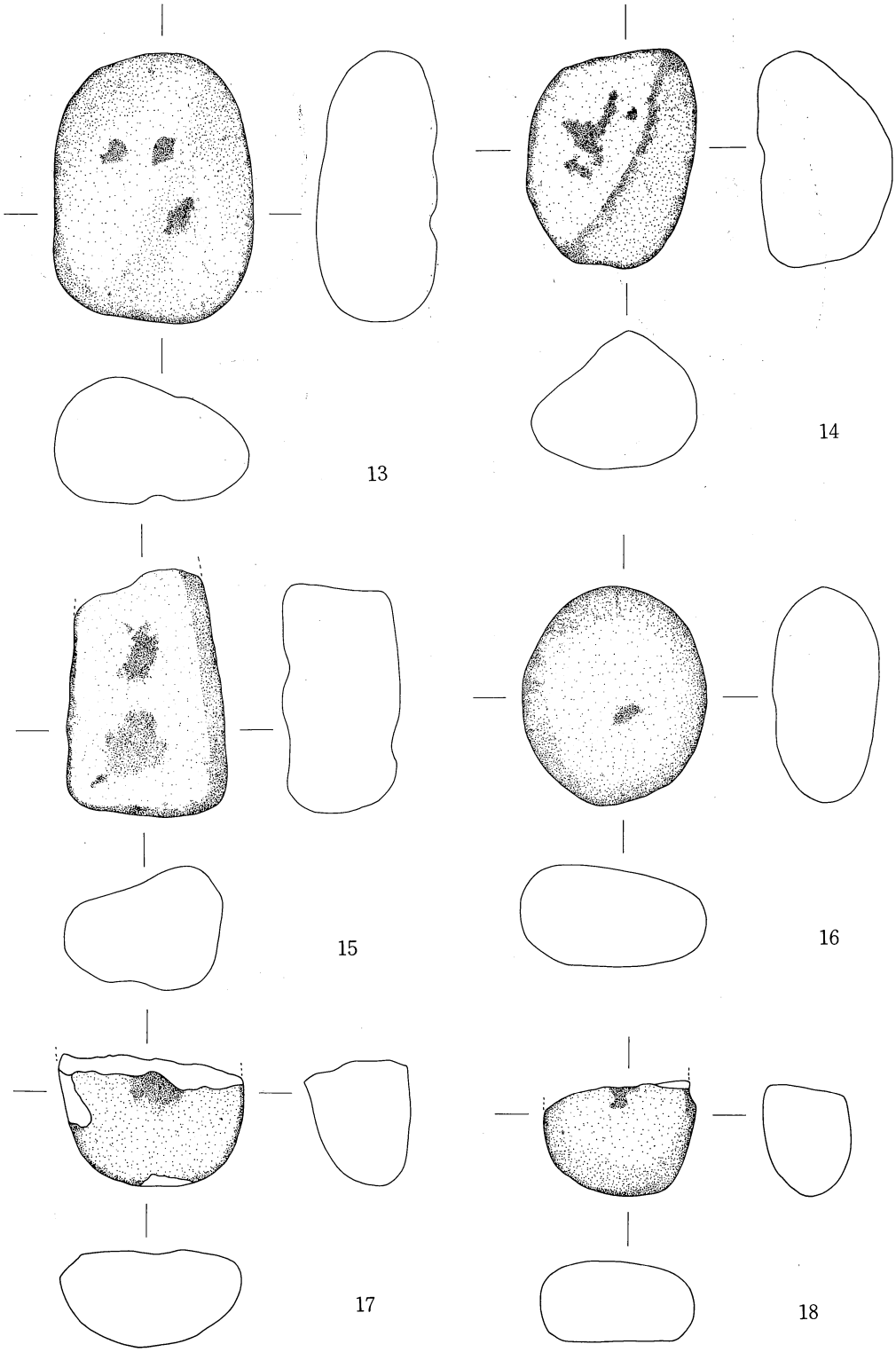
第29図　凹石・磨石類の平面形態（1/2）



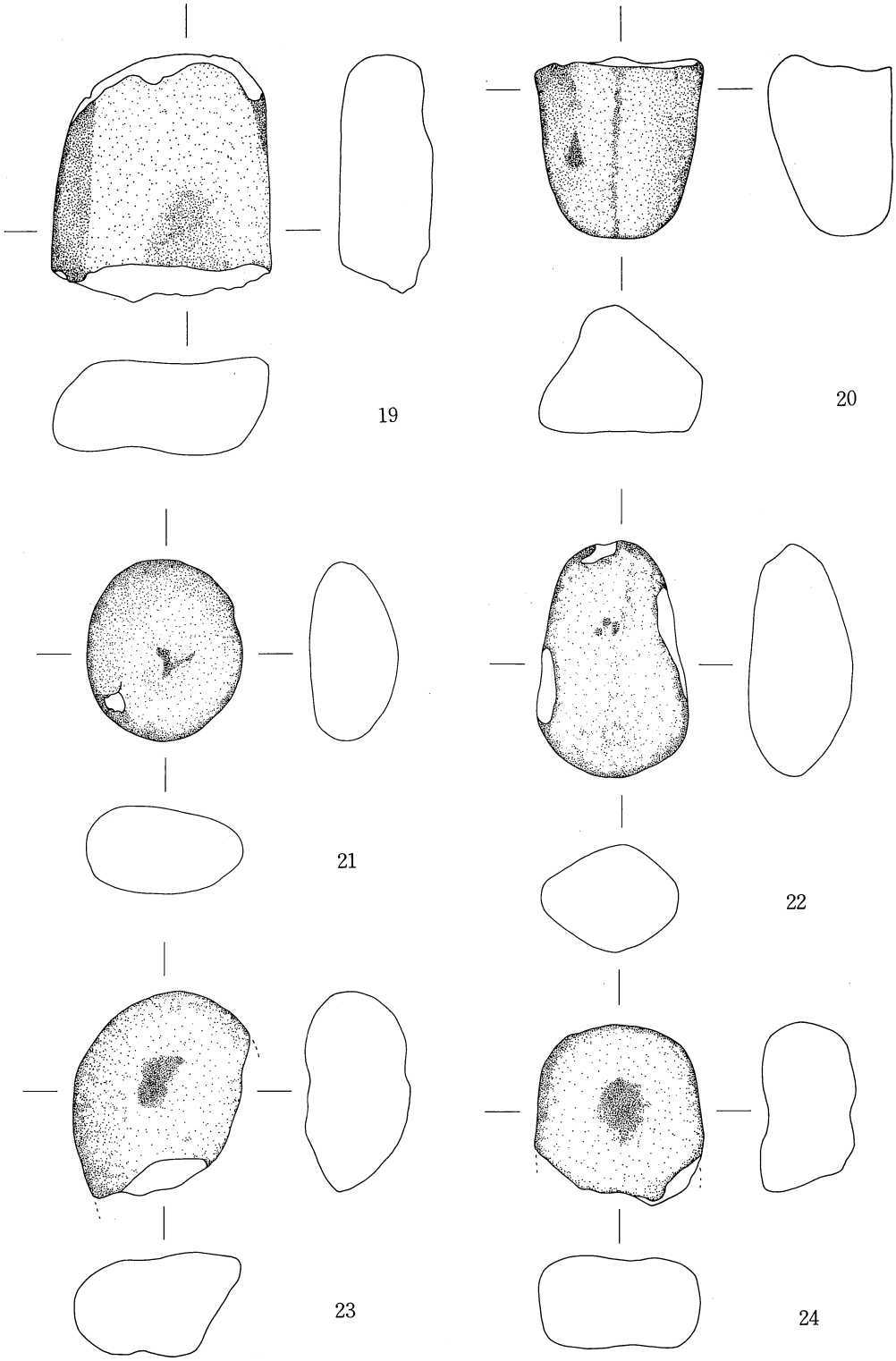
第30図　遺構外出土石器(1)（1/3）



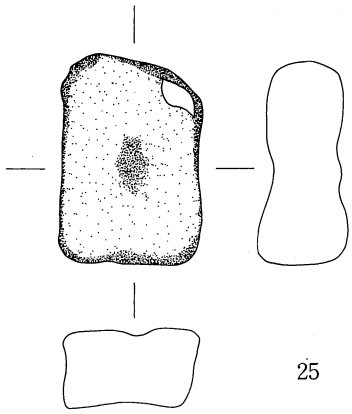
第 31 図　遺構外出土石器(2) (1/3)

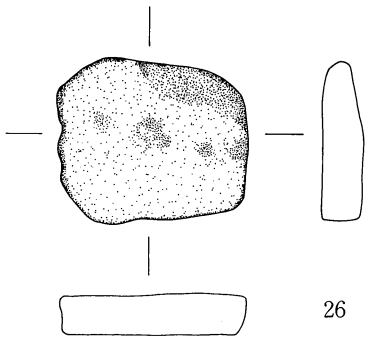


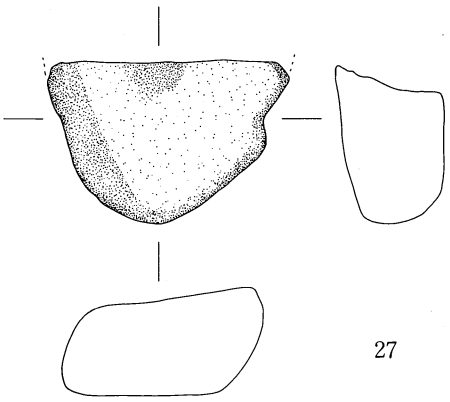
第 32 図　遺構外出土石器(3) (1/3)

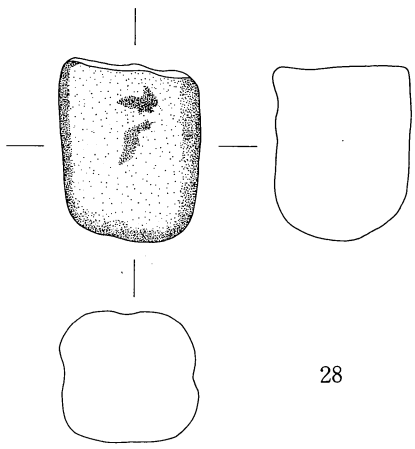


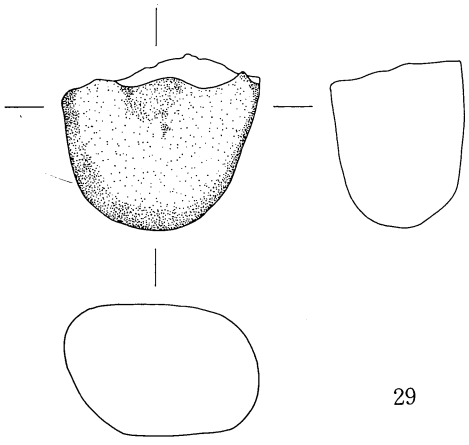
第 33 図　遺構外出土石器(4) (1/3)

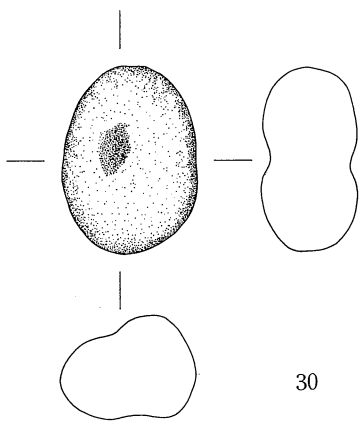




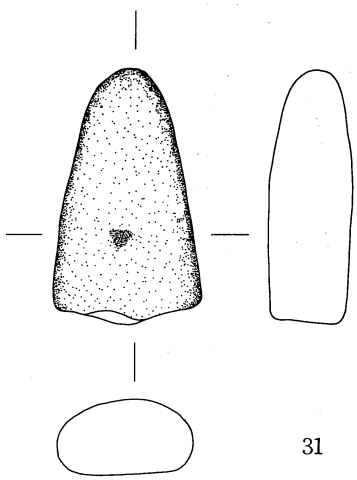


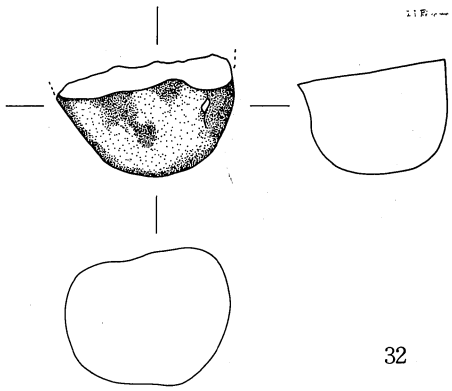


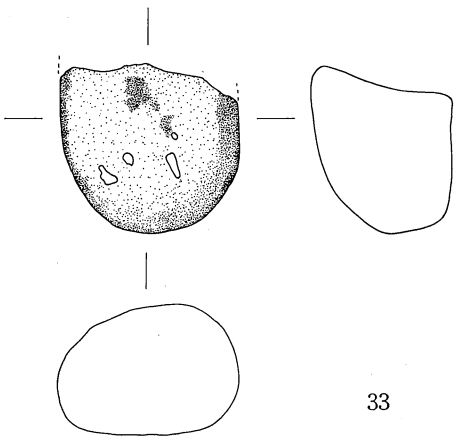


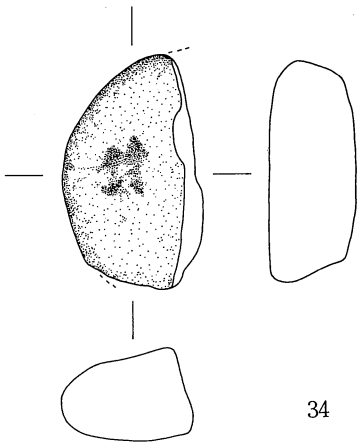


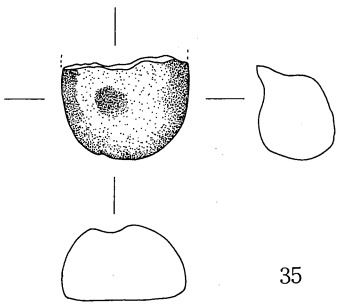
第 34 図　遺構外出土石器(5) (1/3)

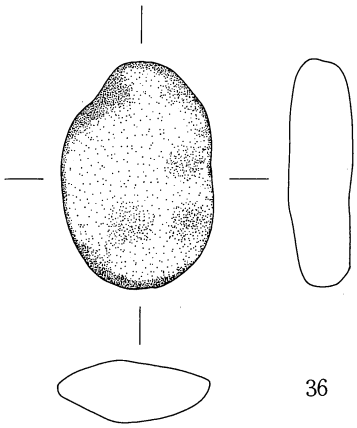




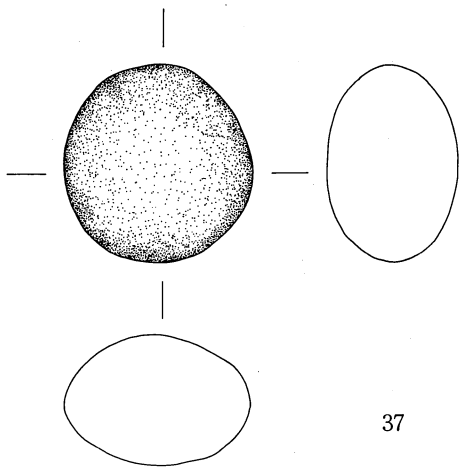


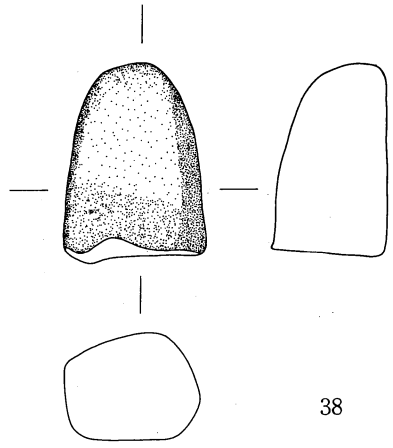


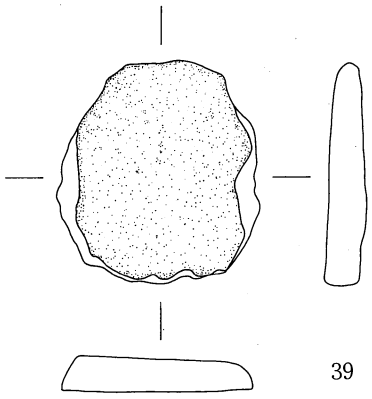


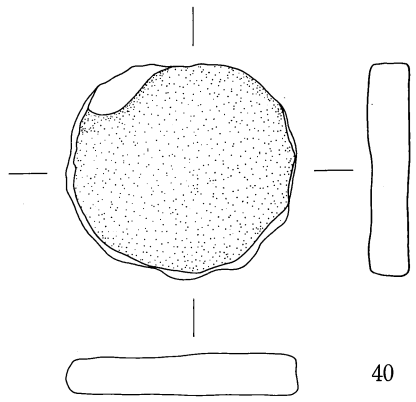


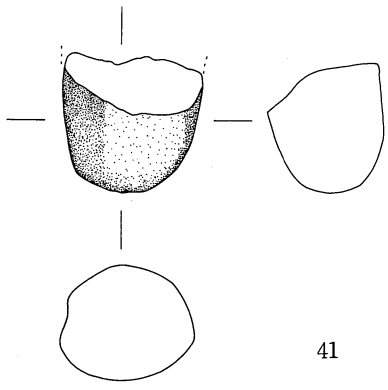
第 35 図　遺構外出土石器(6) (1/3)

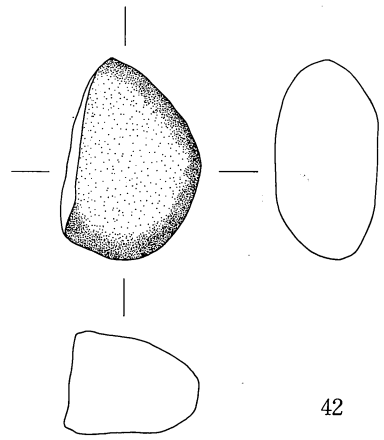




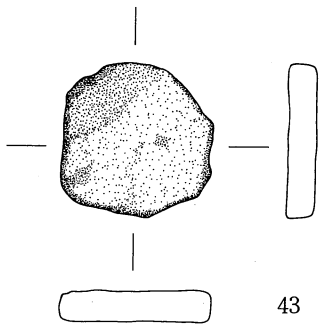


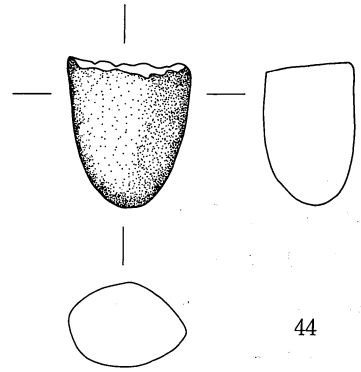


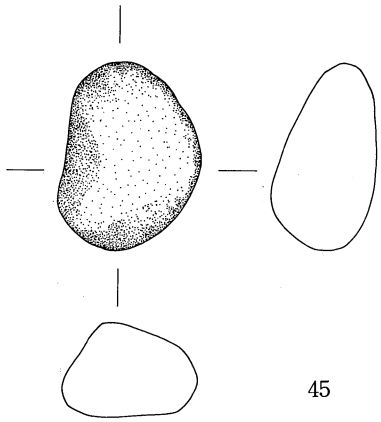


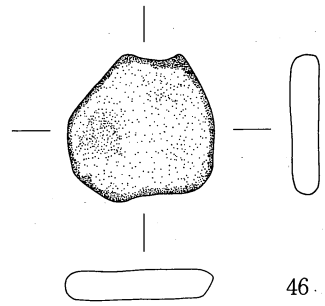


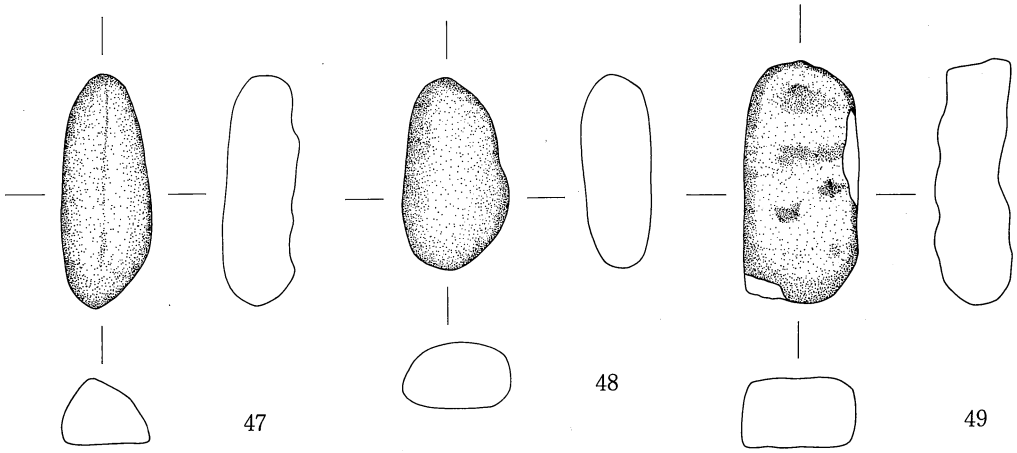
第 36 図　遺構外出土石器(7) (1/3)











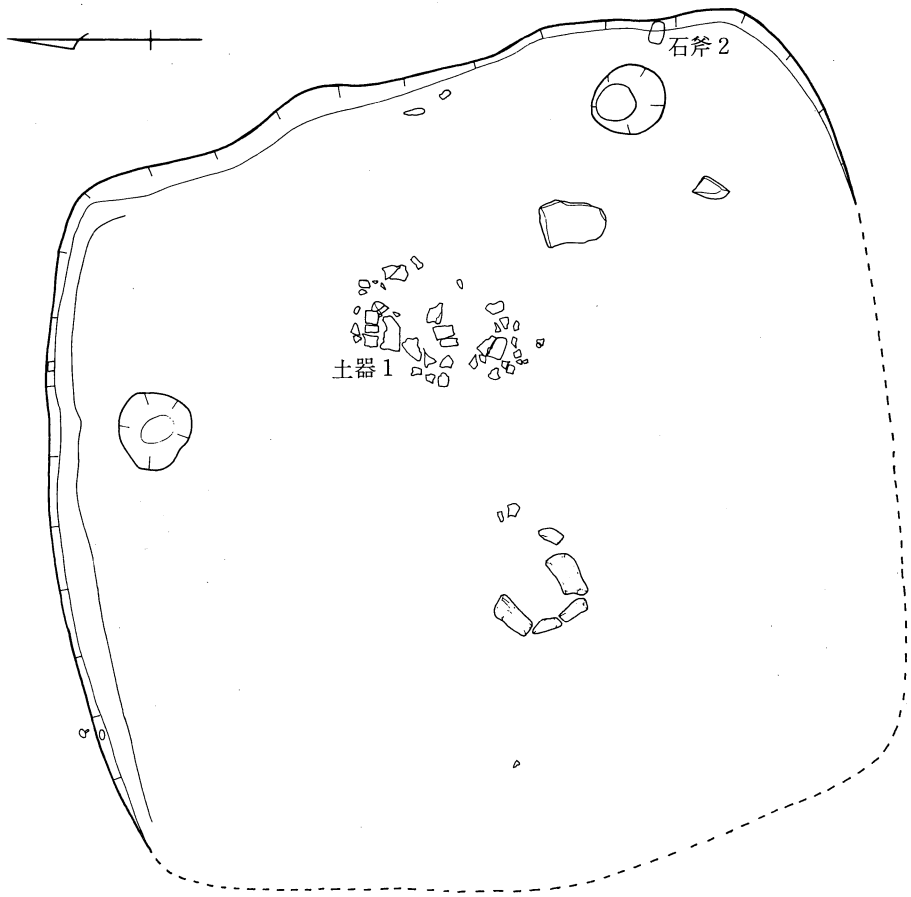
第 37 図　遺構外出土石器(8) (1/3)

2．弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

2号住居跡（第38図・39図）

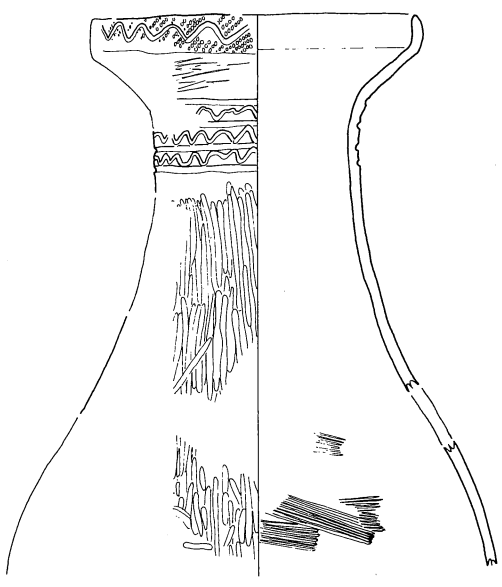
B地点東半の、比較的遺構分布密度の低い位置に検出された弥生時代の竪穴住居跡である。遺構は褐色土層上面において確認され、床面も同層中にある。プランは一辺約4m方形と考えられるが、確認面が浅いことであって、竪は北・東の二辺においてのみ残存している。竪高は約20cmを計る。柱穴は2基のみ検出された。中央やや西寄りと見られる床面上にコの字形を呈する小形の石囲炉を有する。方形だが北東側に開口し、4号住居跡の2基の炉と類似する形態である。覆土中には土器片がわずかに出土した。床面上からは、1の壷型土器が炉の東側から、2の磨製石斧が東壁際から立て掛けるような状態で出土したのみである。



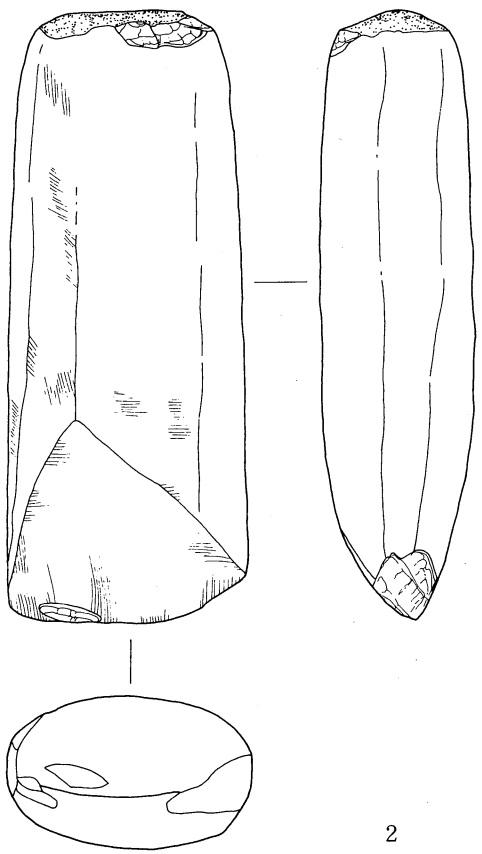
第38図　2号住居跡平面図（1/40）

土器は１の他は縄文前期から中期中葉の土器片10数点と、時期特定が困難な無文あるいは櫛描波状文が施される弥生土器の小片・細片が40数点出土している。１は壷型土器の胴部上半であり口縁部には縄文と波状沈線が施される。頸部は４条の横位の沈線間に波状沈線が加えられる。頸部の文様帯下から胴部にかけては密で丁寧な縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が施されており胴部の内面には部分的にハケ状工具痕と思われる調整痕が残る。

２は完形の磨製斧である。輝緑岩製で深い緑色を呈し、長さ16cm、幅6.3cm、重量827ｇを計る大型品である。基部に敲打痕がのこるほかは全面にわたって入念に研磨され、形態的にはよく整っている。刃部はほぼ直接的であるが片面がより深く研き込まれているため刃部側からみると湾曲する。これは、この面の刃部に研磨より古い剝離面が残存することから考えて、使用による破損後の刃部再生加工によるものである可能性が高い。また、もう一方の面には再生後の使用の結果とみられる破損面が観察される。また、基部端より約４cm下の片側辺および表面上に若干の傷が認められる。後世の損傷も考えられるが、着柄痕の可能性もある。



1



2

第39図　２号住居跡出土遺物（１…1/4、２…1/2）

4号住居跡（第40～42図）

4号住居跡はB地区台地東よりにおいて発見された弥生時代の大型の長方形竪穴住居跡である。住居プランの長軸はほぼ南北方向である。長軸約8m、短軸約4mを計る。確認面はほぼローム層上面で、壁・床ともにローム土で形成されている。

次頁にも述べるとおり、本住居跡床面上には、長方形の対角線となる北西－南東方向に断層線が走っており、ローム土からなる床面に約10cmの段差を生じている。当初はこの段差が断層活動によるものであることが確認できずに、複数の住居の重複を予想して調査を進めたが、全プランの把握とセクション観察から断層による変異であることを概ね予察し、最終的には調査終了時に床面下を掘り下げて確認したものである。この断層は断層面に沿って相対的に山側が落ち谷側が上がり、Z字状の変異面の生じた、いわゆる逆断層である。断層は住居外の両方向に直接的に延び、ローム層上面や他の遺構上にも痕跡を残しているが、本住居の床面にみられるほど顕著なものではなく、これだけではその存在の確認する困難と思われる状況であった。また、本住居覆土を形成する褐色土中にも変異は認められなかった。このことは本住居の床面が極めて平坦にかつ堅く叩きしめられていたため、断層活動の痕跡が残りやすかったことも考えられるが、変異の生じた時期を示唆するものである可能性もある。なお、変異した床面のうち、相対的に「落ちた」山側（東半）は平坦かつほぼ水平を保っている。これに対し、相対的に「上がった」谷側（西半）につていは、わずかではあるが谷側に向かって傾斜しているように認められる。本例のような微小な断層活動によって土層上面にわずかな傾斜が生じていることも理論的には予測できるが、ここでは今後の検討材料として指摘しておきたい。

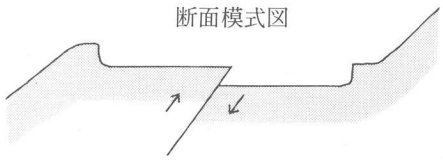
壁の内、西・南の二辺は直線的、他の二辺はやや張り出しぎみである。緩い西向き傾斜に構築されているため、壁高は、山側では約50cmを計るが、谷側では約10cmのみが残存している。前途のとおり、床面はかなり平坦でよく叩きしめられている。床面下に縄文時代の小竪穴がいくつかあって、ロームの床面の確保の困難な所については、ローム質土を薄く張り付ける「張り床」によって補っている。柱穴状の小ピットは南壁に沿って2基、北壁に沿って1基、北西コーナーに近く2基、南西コーナーに近く2基が検出されている。この内、コーナーの2基ずつについては位置・規模と柱穴的であるが、他についてはやや小さく明瞭でない。また、図示してはないが、東壁際に3基のごく浅い径20cmほどの皿状の小ピットが検出されている。本住居の炉は石囲炉で南北に1基ずつ設けられている。それぞれ方形で壁側に開口部を有する。この石囲炉の基本的形態は本遺蹟2号住居跡の在り方と共通するものである。南壁に近い石囲炉1は位置辺約30cmで、3個の平板状の炉石が三方にたてられている。炉外北側の床面上に若干の炭化物分布が見られる。北壁に近い石囲炉2は位置辺約20cmでごく小型である。3個の平板状の炉石が三方にたてられる作りは石囲炉1と同様である。大型住居とはいえ、このように位置的に離れた複数の炉を有する例は少なく注意される。確認面が比較的浅く、残存覆土も少ないことから出土品は多くない。復元可能土器と破片資料の主なものについて第42図に示した。

☆　4号住居跡より検出された断層について

本遺跡の立地する台地は、数段の階段状緩斜面から形成されている。このうちB地区としたのは中段に相当し、最も広く緩やかな傾斜を持つ部分である。4号住居跡で確認された断層は、この段の東よりにあって、北西－南東方向に台地を横切っているものである。断層地形としては微細な部類に属するものである。諏訪盆地はいわゆるフォッサマグナの西縁を形成する糸魚川－静岡構造線に沿って形成された構造盆地である。盆地そのものが断層地形であるため、その東西縁の山麓部にはこれに伴う多くの小断層が存在することは既に知られており、活断層を原因とする崖崩れや小規模地震も確認されている。本遺跡の立地するような階段状台地も断層活動によるものと考えられ、この台地上に微細な断層が存在することはむしろ当然であるとも言えよう。しかし、このような明確な痕跡が遺跡調査の際に検出されることは極めて稀である。また、前頁にも述べたように「ずれ」の生じた年代を少なくとも弥生時代以降と特定できること、場合によってそれ以上に細かく時期をしぼりこめる可能性のある資料として重要である。近隣における過去の調査例としては、盆地西縁山麓の荒神山遺跡で複数の縄文時代住居跡に本遺跡類似の段差が検出されたことがある。

断層の形状は断面模式図に示すとおり逆断層である。断層面は下部ほど明確で、床面下約80cm以下では隙間が存在する。

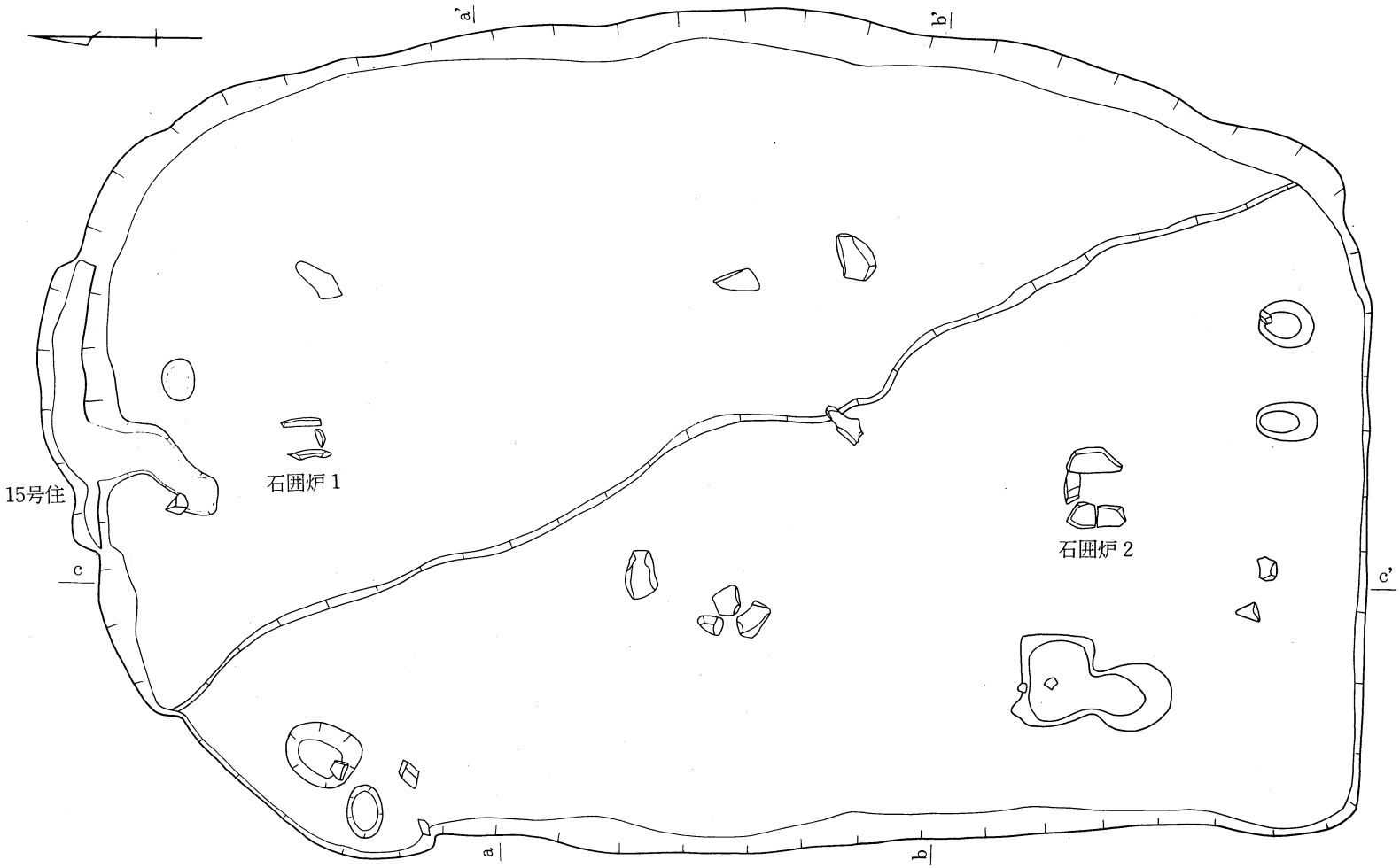
断面模式図



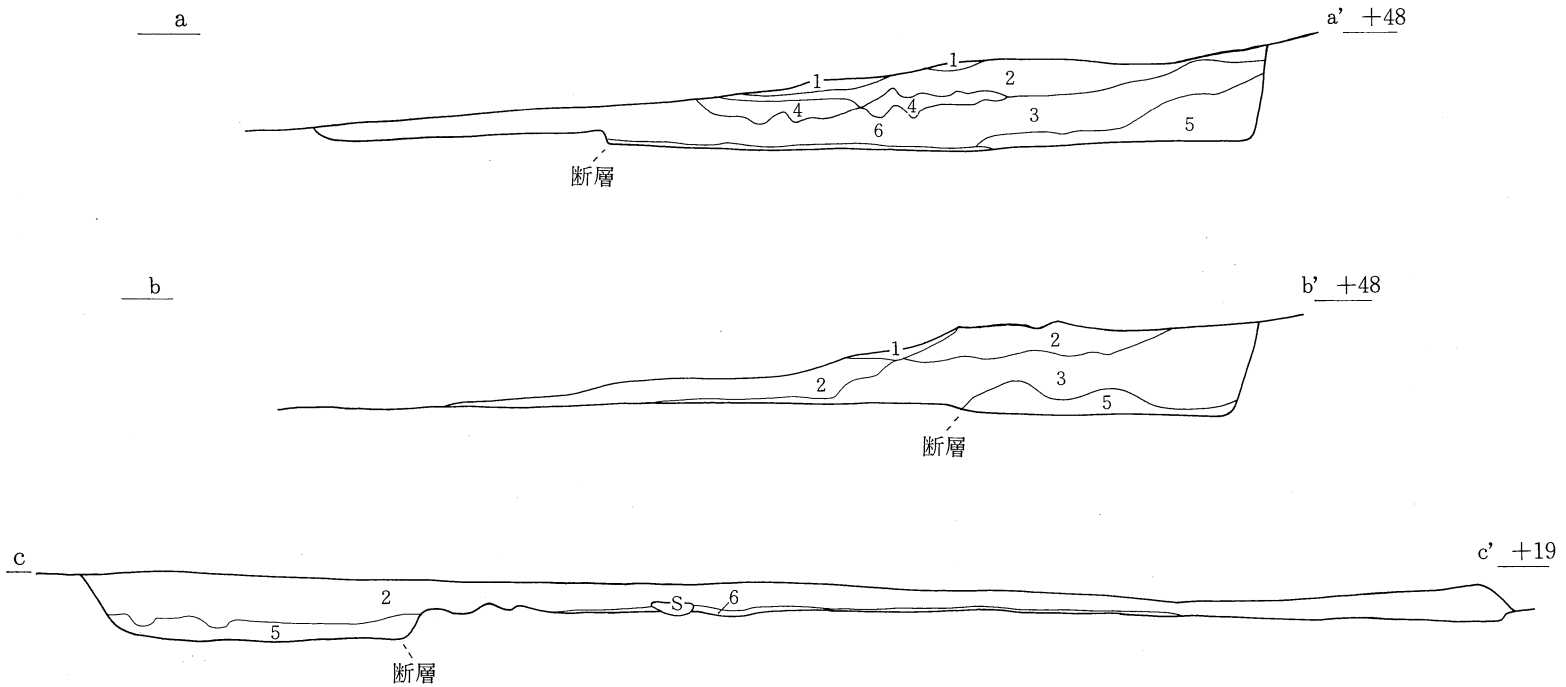
◀4号住居跡を北西－南東方向に横切る断層を南側から見る。断層線は住居外も白線方向に続いているが、4号住居跡床面以外は不明確。

◣床面の段差として確認される断層線。いわゆる逆断層で、相対的に山側（写真右方）が落ち、谷側が上がっている。

▼断層線のセクション。断層面には褐色土が流れ込んでおり、面が帯状に認められる。これより下部では断層面には隙間（空間）が存在した。



第 40 図　4 号・15号住居跡平面図（1/40）



1……黒褐色土層。粒状あらく比較的軟弱。
2……暗褐色土層。粒状こまかく、よくしまっている。
3……暗褐色土層。ローム粒・小ロームブロック・焼土塊を少量含有。
4……褐色土層。粒状こまかい。部分的土層。
5……暗褐色土層。粒状こまかく、粘性に富む。ローム粒を含有。
6……褐色土層。床面直上の薄い土層。粒状こまかく、かたくしまる。小ロームブロックを多量に含有。

第41図　4号住居跡セクション図（1/40）

第 42 図　4 号・15号住居跡出土遺物（1 ～ 3 …1/4、4 ～10…1/3）

出土遺物は縄文土器を含む土器片100数十点が出土したが、そのほとんどが細片である。1は端部が張り出す土器の底部で、篦状工具による矢羽根状沈線と粘土粒の張り付けが加えられている。おそらく縄文前期後葉に属するものであろう。4も粘土の張り付けと半截竹管による集合沈線をもつが、1とほぼ同時期のものであろう。2は底部で、外面はタテヘラミガキ、内面は刷毛目調整が加えられる。3は甕の口縁部から胴部で、頸部に簾状文を施し、胴部から上は櫛描波状文でうめられる。胴部下半は縦方向のヘラミガキが施される。内面は、全体的に密で丁寧なヨコヘラミガキが施されている。推定口径23.5cm、現存器高10.9cmを測り、口径よりも胴部最大径のほうがやや大きいようである。胎土に砂粒を含み焼成は良好、内面は茶褐色、外面は淡茶褐色を呈するが外面の胴上半部にはススの付着が認められる。5から9は8を除きいずれも甕形土器の破片であると思われる。5は口縁部下から矢羽根状の櫛描斜状文が施される。6は胴部の破片で、綾杉状の櫛描斜状文が施されており、外面にはススと炭化物が顕著に付着する。7・8は櫛描波状文が加えられるものであるが、8は器種が不明である。5・7・8の口唇部には縄文が施されている。5・7・8は中期末、3・9は後期に属するものであると思われる。

15号住居跡（40・42図）

4号住居跡北壁上に、壁・床の一部がわずかに検出されたのみの住居である。床面レベルは4号住居跡より高い。円形プランの竪穴住居跡と考えられるが、その大部分を4号住居跡によって破壊されている。所属時期は明確でないが、床面付近から弥生土器が出土している。

出土遺跡は、土器片が数点検出されている。10は壷形土器の頸部で、櫛状工具による地文上に沈線で文様が描かれる。破片上半にU字状に残る沈線区画中は摩消縄文が施されている。中期に属するものであろう。

7号住居跡（43・44図）

発掘区南端において検出された弥生時代の竪穴住居跡である。表土下比較的浅く確認されたものであるが、本住居より南西側は遺跡全体が攪乱されており、すべての遺構が失われている。本住居もほぼ南半を破壊されているものと考えられる。遺物は多くないが、覆土中より土器片が、床面上からは埋甕炉に使用されていた土器が出土している。また、8号住居跡と重複し、これを破壊している。

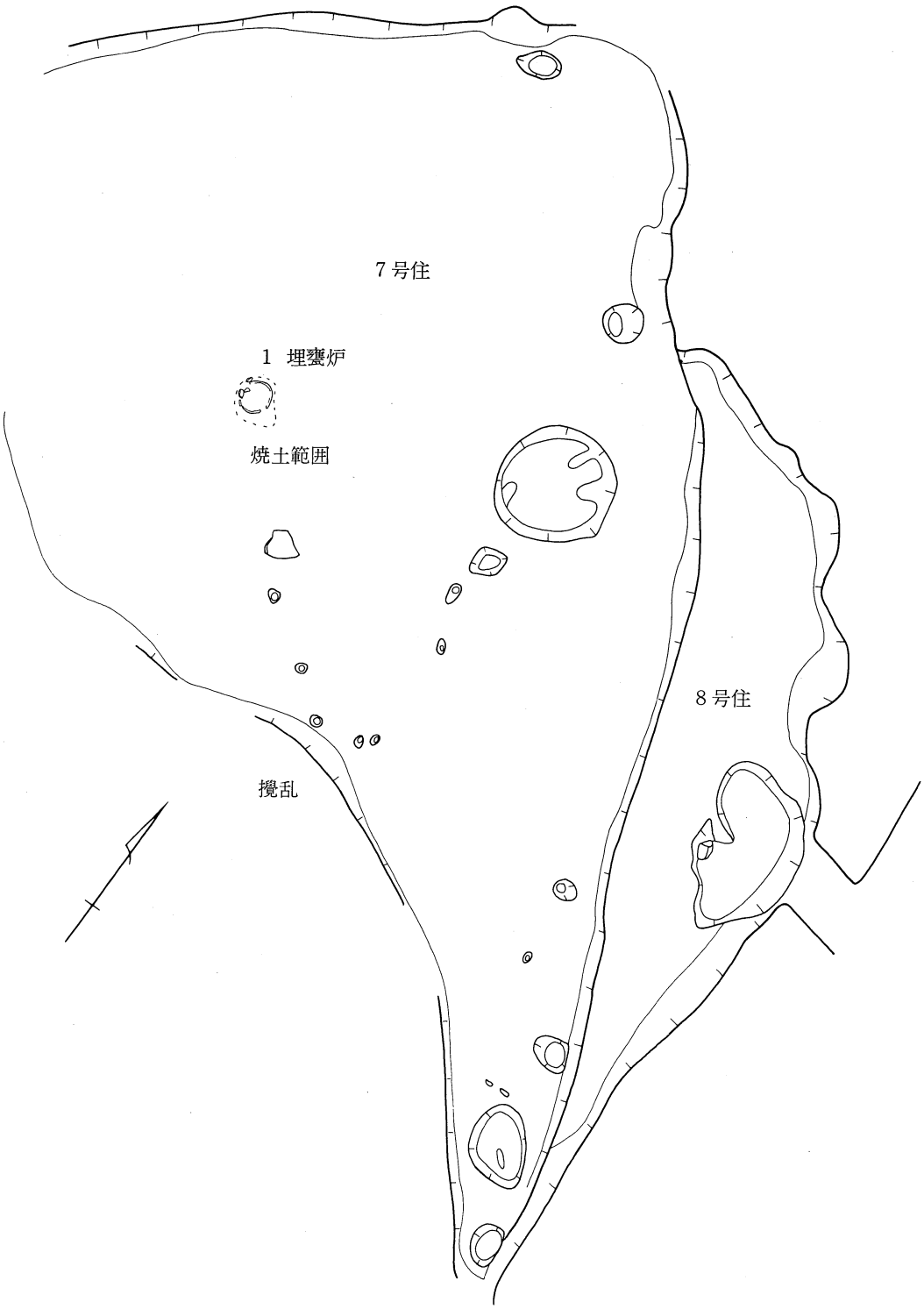
プランは方形である。長軸は北西－南東方向で、北コーナーのみが残存する。長辺が長く、比較的大型の住居跡と考えられる。壁高は北コーナーで約20cmを計る。床面はローム層に達し、平坦である。柱穴と考えられるピットは南北に2基が看取されるが、いずれも深さは15cm程度しかない。この他に、壁際に深さ10～20cmの小穴5個が並んでいる。補助柱的なものであろうか。炉は埋甕炉で、中央から北西よりの床面上に検出された。実測図1の土器であるが、口縁部を下に逆位に埋められていた。土器は口縁部付近のみを帯状態に残すのみであるが、後世の攪乱で一部が失われた可能性もある。土器の周囲には焼土分布が見られた。

出土遺物は縄文土器片10数点を含む土器片100点ちかくが検出されている。4は縄文時代後期中葉の土器であり、口縁部内面に隆帯の張り付けを有し、内・外面とも丁寧に研磨されている。1は埋甕炉使用されていた土器で、逆位で検出されている。外面は口縁下からタテヘラミガキが施され、内面はヨコヘラミガキが加えられる。輪状に1周残存しており、口計10.5cmを測る。2は底部で、内・外面とも丁寧に研磨されている。底面には9に示すように木葉痕を残すが、2つの木葉痕が約90度ずれた状態で重複している。3は無文の甕で、内・外面にヨコヘラミガキ痕を残す。約1／2周が残存しており、推定口径21.8cmを測る。5から8はいずれも甕の破片であり、櫛描の簾状文・波状文などが施されている。後期の土器であろう。8は内面が著しく剝落している。

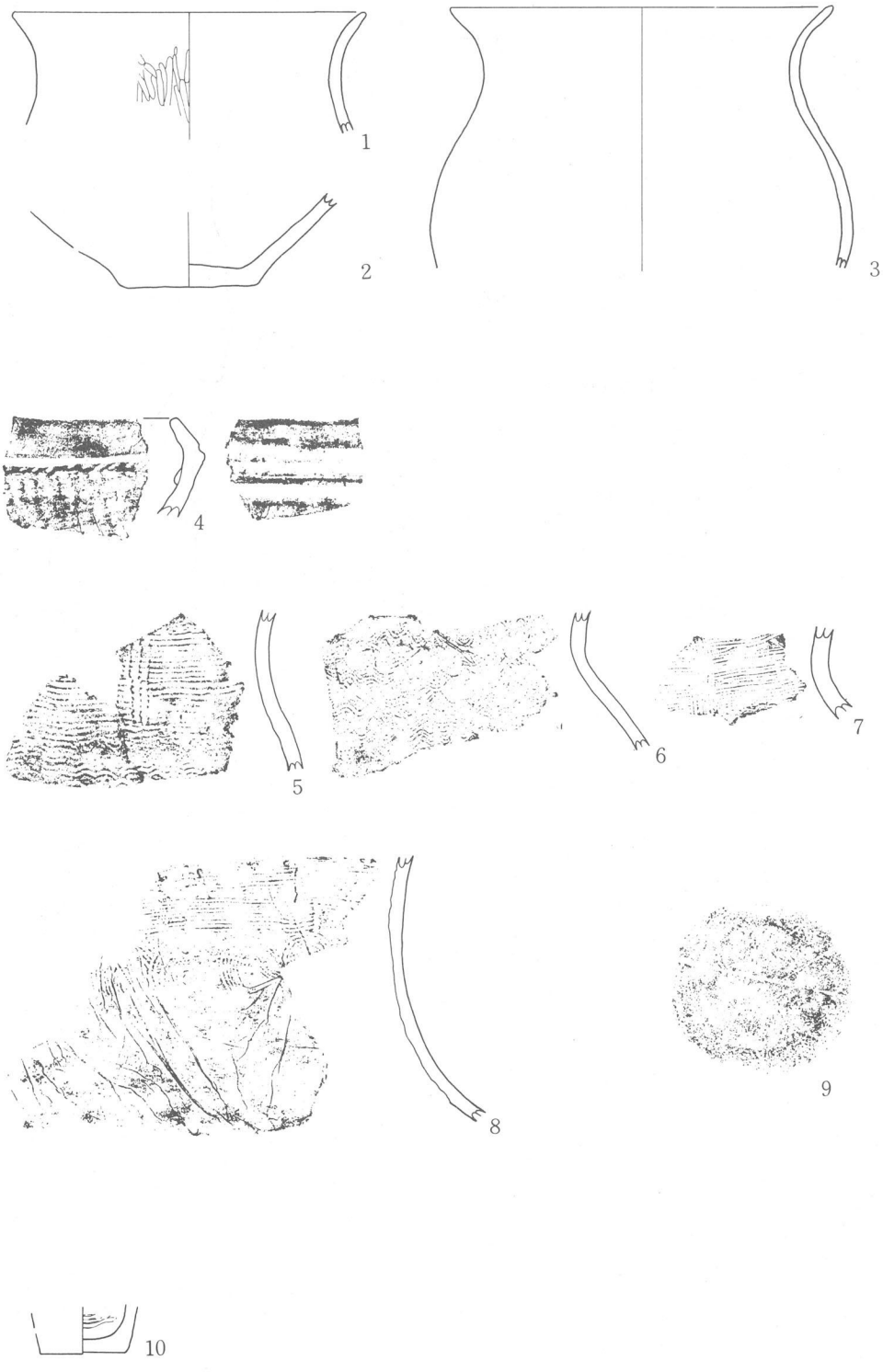
8号住居跡（第43・44図）

7号住居跡の東に重複し、一部が残存する竪穴住居跡である。弥生時代に属するが、7号住居跡によって大部分を破壊されている。プランは円形にも見えるが不明である。壁高は約20cmを計る。床面はローム層に達し平坦で、レベルは7号住居跡より高い。壁際に不定形のピット1基が認められるが柱穴であるかどうかは判然としない。わずかな残存覆土中より土器片が少量出土しいる。

土器は無文の土器片が20数点検出されたが、器形全体を窺えるものはない。10は小型土器の底部と思われるが、内面には箆状工具によると思われる調整痕が残る。淡褐色を呈し、外面はやや摩滅している。



第43図　7号・8号住居跡平面図（1/40）

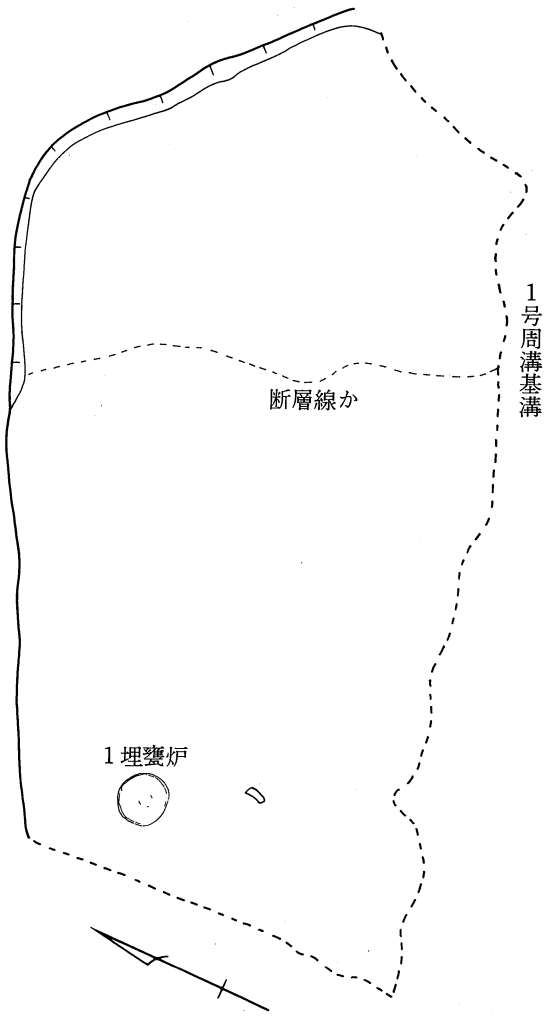


第 44 図　7 号・8 号住居跡出土遺物（1 ～ 3 ·10…1/4、4 ～ 9 …1/3）

10号住居跡（第44・45図）

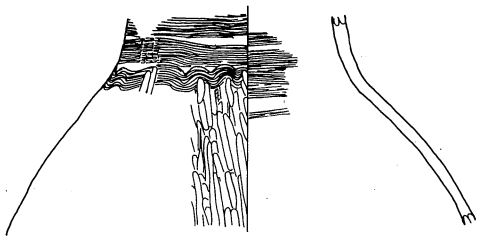
発掘区東端付近に立地する弥生時代の竪穴住居跡である。本住居は、縄文時代の10号住居跡・128号小竪穴・1号周溝墓などと重複している。10号住居跡はこれらの中で1号周溝墓にのみ破壊を受け、住居の南半を失っている。しかし、確認面は表土に比較的近く薄いため、上部に後世の攪乱を受けている。このため、残存する本住居跡の覆土は少なく、床面検出時には下部の縄文時代の14号の住居跡に所属する遺物が現われていた。

確認面・壁・床面ともに褐色土である。山側の壁残存部では壁高約15cmを計るが、西半部については攪乱の影響もあって、壁の残存すら確認できない状態であった。さらに、残る床面のほぼ中央に北西－南東方向の段差があって、これを境に西側の壁などが不明瞭となっている。この段差は2cmほどのごくわずかなもので、遺構の重複も考えられるが、あるいは4号住居跡において検出された「断層」に類するものであるかもしれない。走行方向も同じでほぼ平行することになる。しかし、他に明確な痕跡がなく、不明である。住居プランも、唯一残る北コーナーの角度が鈍角で、明らかでない。柱穴も全く検出できないかった。炉は一種の埋甕炉である。残存床面の西部分に実測図1に示した壷型土器の頸部から胴部までの破片を逆位に埋めたものである。本遺跡では7号住居跡に類例がある。



第44図　10号住居跡平面図（1/40）

出土遺物は1以外に本住居跡に確実に伴うと判断可能なものはなかった。1は壷型土器の胴部上半である。縦方向の刷毛目調整の後、頸部には櫛描の簾状文、その下位に波状文が施されている。櫛描文は回転台を用いて施文されており、その後に肩部以下に密なタテヘラミガキが加えられる。内面は、肩部が横位の刷毛目調整、それより下部にはヨコヘラミガキが施されている。土台に砂粒・石英粒を含み焼成は良好、内・外面ともにやや淡い褐色を呈する。



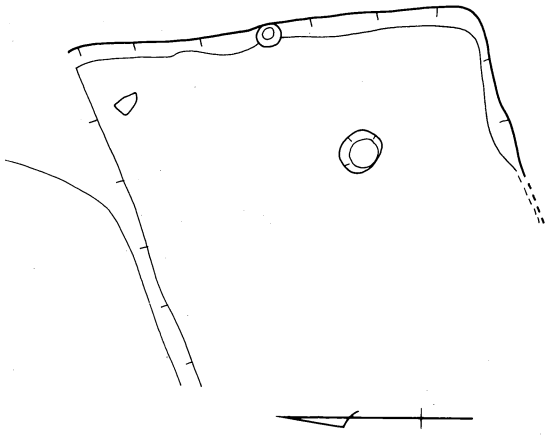
第46図　10号住居跡出土遺物（1/4）

16号住居跡（第47・48図）

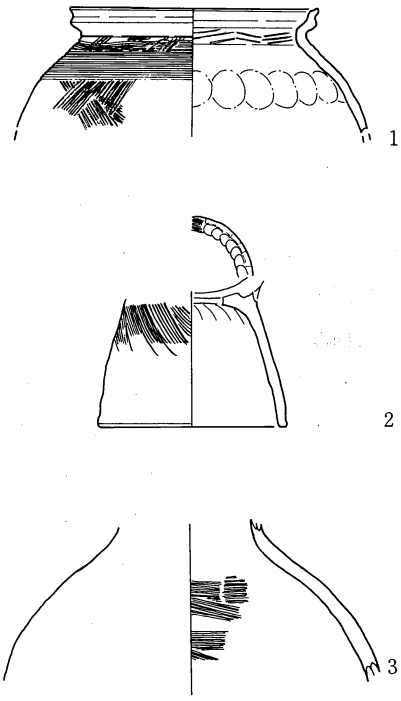
B地区中央やや西よりに立地する。これより南側は遺跡の中でも著しい撹乱があって、遺構が失われている箇所であり、本住居も壁・床面の一部が検出されたにすぎない。一コーナーが確認されており、方形プランを有する弥生時代末期の竪穴住居と考えられるが、規模等は不明である。コーナーに近く、深さ44cmの柱穴1基がある。

遺物は少ないが、床面上より台付甕破片2個分などが出土している。覆土中より櫛描波状文の土器片等も出土しているが、その他にも明らかに時代の異なる土器片が混入しており、共伴関係は不明確である。

1は1／4周が残存し、S字状口縁を呈する。台付甕の口縁部であろう。外面は頸部下に右下がり・左下がりの刷毛目を加えた後、肩部に横位の刷毛目調整を加える。内面は頸部内側に横位の刷毛目調整痕を有し、口縁部以下の輪積みの接合部には指頭圧痕が残る。2は台付甕の脚台部で、外面の上半に斜方向の刷毛目が残る。端部内面には折り返しが見られず、ヨコナデが施される。接合部には篦状工具による刺突が加えられ、その上に刷毛目が施されているらしい。3は壷の胴部上半であると思われる。



第47図　16号住居跡平面図（1/40）



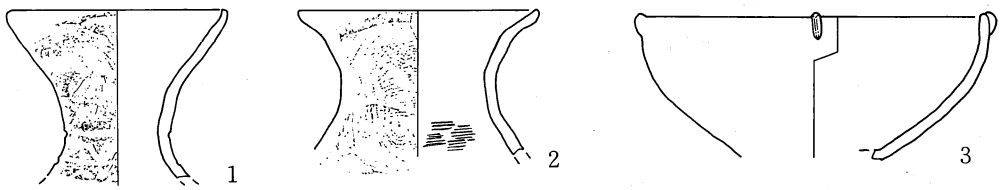
第48図　16号住居跡出土遺物（1/4）

(2) その他の出土遺物

遺構に伴わない出土土器は小片・細片を中心として整理箱に数個分がある。器形全体を窺えるものはないが、主なものを第29図に示した。

1・2は壷型土器の頸部から口縁部にかけての破片である。1は口唇部に縄文が施されている。また外面頸部にも縄文が施されており、頸部には沈線による横位区画と波状文が何段が施文されるようである。口縁部にも波状文が加えられるが、かなり粗く描かれている。2は櫛描文が加えられる。1・2ともに胎土に砂粒を含み焼成は良好で、やや淡い茶褐色を呈する。3は器種が明らかではないが、鉢であると思われる。口縁は内彎し、粘土の張り付けによる小突起が付けられるが、口縁部の破損が著しいため何単位の突起が加えられるのかは明らかでない。内面・外面ともに赤彩が施されている。器面全体に細かな剝落が認められるが、口縁部内面に特に著しい。約2／5周ほどが残存している。

石器は、弥生時代に属するものであると判断が可能なものは縄文時代の項で述べた磨製石斧1点のみである。



第49図　遺構外出土の弥生土器（1/4）

3．古墳時代の遺構・遺物

(1)　一時坂古墳

①　調査の経過

一時坂古墳は、本遺跡の立地する台地の最西端、盆地平坦部側に突出する小舌状台地上にある。本古墳は墳丘を含めて完全に埋没しており、今回の調査で初めて検出された新発見の古墳である。試掘調査の段階において、任意に設定したグリッドの一つが周湟の最深部にあたり、なんらかの大規模遺構の存在が予想されたため、さらに複数のグリッドを先端部側に設定して精査した。その結果、地表下わずかにおいて直刀１本が検出されたこと、葺石とみられる集石がみつかったこと等により、新たな古墳の存在が確認されたものである。

古墳は自然地形を利用して小丘陵の先端部につくられている。すなわち、山側に深い溝を掘ることによって丘陵を切断し、これに若干の土盛りを施して墳丘としたものである。地下埋没状態で発見されたため、後世の破壊をほとんど受けていない。特に葺石とこれより東側の遺構（周湟およびその底部の遺物集中など）は損傷なく保存されていた。しかし、墳頂部については、直刀等の副葬品が地表下ごくわずかにおいて検出されたことなどから見て、後世の削平によって土盛りの一部が失われていると考えられる。

墳丘上の調査については、試掘調査時に既に直刀が出土していることから、主体部がごく浅く埋没しているものと予想し、慎重に進めた。現状が畑であったため、表土としては薄く黒色土(腐食土）が認められたが、これより下位は古墳築造時の盛り土層で、本地区の地山を形成するローム土のブロックを大量に含有する黄褐色土が主であった。山側の周湟の掘削によって生じた排土をそのまま墳丘盛り土として利用したものと解釈される。表土黒色土を排除して、盛り土層を掘り下げはじめた所、試掘時に出土した直刀とほぼ同じレベルにおいて、鉄製品や玉類など数多くの副葬品が次々と出土した。これらの平面分布状態から、複数の主体部が存在することは確認された。出土レベルから考えて、これらの主体部上半部は削平によって失われている可能性が高いと判断された。主体部形状を示すような痕跡を求めて精査したが、明確な遺構は検出できなかった。しかし、最も東側の主体部と見られる部分においてのみ、土層に含まれるロームブロックの差から、不明確ながら掘り込みの痕跡をわずかに検出した。これを見る限りにおいては、主体部形状としては木棺直葬が考えられる。主体部の数としては、副葬品分布から少なくとも４～５箇所が想定される。副葬品は、非常に豊富で、直刀・鉄剣10本のほか、鉄鏃類多数、玉類多数などがあり、一部に朱の分布も認められた。鏡は発見されなかった。また、土器類も明確に主体部に伴うと確認されたものはなく、土師器坏１個体のほかは、土師器高坏破片・須恵器小破片などがやや集中して検出されたにすぎない（土器第１集中)。

墳丘東側の葺石および周溝については、中央にセクションベルトを残しながら、層位に従って順次掘り下げて調査した。古墳の形としては当初、地形から円墳を予想していた。しかし、調査が進むに従って、周溝がかなり直線的に丘尾を切断していること、葺石も残存部南半においては周溝に平行し直線的であること等が解って、あるいは隅丸の方墳ではないかとも観測された。墳形については古墳西側が失われていることもあって結論を持ち越している。葺石は、一定の幅で精緻に施されている。使用されている礫は、人頭大程度の大きさを主体とする自然石で、いずれも当地方に普通に見られる安山岩類や集塊岩などであった。最上部の石は若干崩れ落ちたものとみられ、周溝底付近においてのみ覆土中に浮いた石がいくつか検出された。周溝はローム層に深く掘り込まれ、葺石に相対する山側の壁はかなり急傾斜であった。なお、この壁に近い覆土中に方形の小竪穴2基が検出されている。埋没後まもなく掘り込まれた関連遺構と見られる。

周溝内の覆土は均質な黒色土で、比較的短期間に埋没したように観察された。覆土中の遺物は、覆土上半においては中央セクションベルト内のみに検出された。これは、土師器・須恵器の完形品が一箇所に集中しているもので(土器第2集中)、ある時期に周溝外から転がり込んだような状態と考えられた。覆土中位から下位にかけては、周溝中央付近の一画に、帯状に土師器の破片多数が認められた。当初この土器片分布を、他の「土器集中」と同規模のものと判断し、「土器第3集中」と仮称したが、分布範囲が広く層位も一定でないなど、必ずしも同時的な遺物分布とは考えられなくなったため、「包含層出土遺物」として一括することとし、「第3集中」は欠番とした。覆土下位から周溝底の出土遺物としては、完全セットが確認できる完形土器群が3箇所検出された（土器第4・5・6集中)。これらはいずれも、極めて精緻に並べられたままの状態で埋没したもので、特に第5・第6集中はほとんど損傷がなく、並べ方までも完全に解る状態にあった。特徴的なのは、これら3集中の器種構成がほとんど同じであること、土器を2列に配し全体としてほぼ長方形に置かれていること、土師器の高坏を一種の器台として使用しこれらの上に他器種の土器を載せていること等である。この三つの土器集中については古墳築造後わずかな期間内に行われた、ある種の祭祀的行為の痕跡と理解される。また、本遺跡B地区において発見された、第3号周溝墓の溝の覆土中にも同様の土器配列が検出されている点も注目に値する。

次に、墳丘西半の古墳を巡る裾の部分については、現状では畑の土手となっており、かなりの急傾斜の法面である。この傾斜は東半の葺石部の傾斜をはるかに上回るものであって、地形の全体形状から見ても、当初の墳形は既になく、後世削り取られた結果であるとの見方が最も妥当であろう。特に、この内の南側部分については明らかに切り通し状に削られ、現在は道として使用されている。しかしながら、古墳自体が崖上の台地状にあること、法面は工事で破壊されないことが明らかであることなどから、災害防止の観点からこの部分の発掘調査は行わなかったため、詳細については未解明であるが、ボーリングステッキによる調査を行ったところ、葺石に相当するような石の集中は認められなかった。また、この面より下の畑でも、石や遺物の分布は確認されなかった。

② 遺構

一時坂古墳は、小台地の先端部を利用し、丘尾切断によって墳丘を造り出している。墳丘の内、西側および南側は、後世の道路開さくや耕地拡大によって、若干失われている可能性が高い。このため、墳形については必ずしも明らかではない。完全な形態で残存する東側部分には、周湟および葺石が認められるが、両者とも平面形態は比較的直線的であり、これを見る限りにおいては、墳形は方墳のように観察される。しかし、一方では葺石の北隅は丸みを帯びてコーナーを形成するとも見られ、また周湟についても、丘尾切断という工法のためたまたま直線的に掘られたものであるとも考えられているため、円墳であるとの可能性も完全には否定できない。なお、諏訪地方におけるほぼ同時期の類例としては、円墳で諏訪市大熊の片山古墳(葺石を有し直径22m)、方墳と考えられるものとしては、諏訪市中洲神宮寺フネ古墳等がある。大きさとしては、残存部では墳丘の最大径で20mを計り、当地方においては一般的な規模と考えられる。

周湟は、墳域を画し、丘尾切断によって墳丘を造り出すために、山側（東側）にのみ掘られたものである。前述のとおり、比較的直線的に掘られている。葺石と直線的に平行する部分においては幅約4m、北寄りの葺石コーナーに近い部分では幅約9mを計る。深さは山側の落ち際から計って約2.4mあり、かなり深いものである。周湟の内、南半については、底面付近に一段と深く掘られた部分がある。特に墳丘側は、葺石の下部切れ目から急激に角度を変えて落ち込んでいる。なお、地形的状況からみて西半部には周湟は存在し得ないと考えられる。周湟が半周しか存在しないと考えられるような在り方は、諏訪市大熊の片山古墳でも観察されている。周湟の山側壁の中間には、長径約1mの長方形竪穴の痕跡が2箇所検出されている。出土遺物はないが、古墳埋没後まもなくに設けられた、一種の付属的施設であろう。同様の遺構はB地区の周溝墓の溝中にもみられる。

周湟内からは大量の土器類の出土を見たが、特に底部に近く、墓前祭祀を反映するとみられる完全セットの土器配列が3群発見されている。これら3群は、前述の周湟南半の特に深く掘り込まれた部分に残されていた。こうした遺物出土状態は特異であり、本古墳においては周湟が特別の意味を持っていたと考えられる。

葺石は、周湟のある東側にのみ、これに対応する形で確認されている。周湟とともに、比較的直線的に施され、北隅では隅丸形にコーナーを形成するように観察される。幅約2m、長さ約14mを計り、葺石面の斜度はおよそ22°である。使用されている石は人頭大程度の山石で、本地域に一般的に認められる安山岩などである。一部、最上部の葺石の転落とみられるものもあったが、概ね精緻に施されている。西半については葺石は全く確認されていない。危険防止もあって墳丘西斜面は発掘されなかったが、地表面観察調査やボーリング調査によっても、葺石を形成したであろうような石は認められなかった。葺石は全周に施されるのが普通であり、本古墳の西半は流失したものである可能性が高いため、西半にも本来的には葺石が存在したと考えられるのが一般的であろう。しかし、原地形においても西側はかなりの急斜面であったと見られ、果たして葺石

を張り付けるような緩やかな斜度が確保できたか、山側にのみ周湟を有するという同じ形態の古墳である片山古墳でも、本古墳と全く同様に、半周分の葺石が痕跡すら認められなかった点など、若干の疑問点が残るが、今後の課題としたい。

墳丘は、後世の耕作等によって削平され、現状はきわめて平坦である。築造当時の高さや墳形は明らかでないが、副葬品の出土レベルが、現地表面からわずか下方であったことなどから、墳頂で現在より1m以上は高いものと推察される。残存する墳丘土盛りは、地表付近の現在の耕作土層を加えて約1mあって、それより以下については、築造当時における自然堆積土層である。盛り土は、ローム質土層と黒色土層が主体である。このうち大部分を成すローム質土層は、ロームブロックを多量に含有する黄褐色土層で、山側の周湟を掘った際の排土を利用して盛り上げたものであろう。これらの土層は断面観察によると、比較的薄い層を一単位とし、土質はかなり堅い。土盛りに際して、少量の土を叩き締めながら、繰り返し盛り上げていったものと理解される。

埋葬主体については、明確な遺構としては検出することができなかった。しかし、唯一11Gグリッドにおいて、鉄剣・玉類などの副葬品の一群を囲むように、東側においてのみ長方形の竪穴状の落ち込みの一部を確認している。これは、ローム層の盛り土層のなかに設けられた竪穴とみられ、掘り込まれた土層と覆土の間の土質的差異は少ない。含有するロームブロックの大きさなど若干の違いによって一部が認識されたものである。この竪穴状遺構は、規模・形態・副葬品との関係等からみて、埋葬主体を形成する遺構である可能性が高い。これが主体部であるとすると、特に明確な槨の構造が認められず、木棺直葬の埋葬主体が考えられる。

墳丘上では上記の竪穴状遺構以外には主体部の遺構と考えられるものは検出されなかった。しかし、副葬品と考えられる遺物は、多数が墳丘上の広い範囲に分布している。これらは、一定の斉一性をもって配置されている。特に、10本を数える鉄剣・直刀の類については、複数本がそれぞれ群を形成するとともに、切先方向に規則的なものがある。すなわち、10本中の5本がほぼ北を向いていること、1本が逆にほぼ南をむいていること、他の2本が北方向を向く1本の直刀と重なり合って出土していること、他の2本については鉄鏃の束2群とともにグループを形成し、いずれも概ね東北東方向を向いて平行していること、等が上げられる。また、他の遺物についてもこれらの鉄剣・直刀と群を形成したり、出土位置にも関連性が認められる。こうした規則性からみて、古墳墳丘上より検出されたほとんどの遺物が、副葬品として何らかの埋葬主体に収められたものであること、また概ね埋葬時の原位置を反映していることは明らかであろう。主体部の数については、各遺物の出土レベルに大きな差異がないこともあって、必ずしも明らかでないが、少なくとも4箇所以上はあると予想される。

③　墳丘の遺物分布

墳丘上の遺物分布については、第51図に示した。出土遺物は、副葬品と考えられる遺物群および若干の土器片である。この内の土器片については、数量は僅かであるが11Jグリッド付近に集中しており、「土器第1集中」とした。しかし、破片のみであって、周湟内に検出された他の土器

集中とは性格が異なる。器種としては土師器の高坏その他、須恵器の甕などがある。これらは、比較的地表面近くで出土しており、後世の攪乱の影響を受けている可能性が高い。鉄製品など他の墳丘上出土遺物とは状況が異なり、副葬品とは考えにくい。これらが、原位置に近いと見るとして、あるいは一種の祭祀行為を反映する遺物分布とも考えられるが、前述のとおり破片のみの出土であって判然としない。この「土器第1集中」以外の土器としては、12Gグリッドから土師器の坏1点が完形で出土している(墳丘－4)。これについては、鉄製品など他の出土遺物との関連が不明確で、副葬品であるかどうか確定できない。

鉄製品・玉類については、それぞれ群を形成して出土した。槨に当たるような遺構がほとんど確認されなかったこともあって、これらの明確なグループ分けは困難であるが、実際にはそれぞれの群が、複数の埋葬主体に相当するものであろう。ここでは、各グループの認識については保留とし、見かけ上の遺物群について分布状況を中心に記述することとしたい。

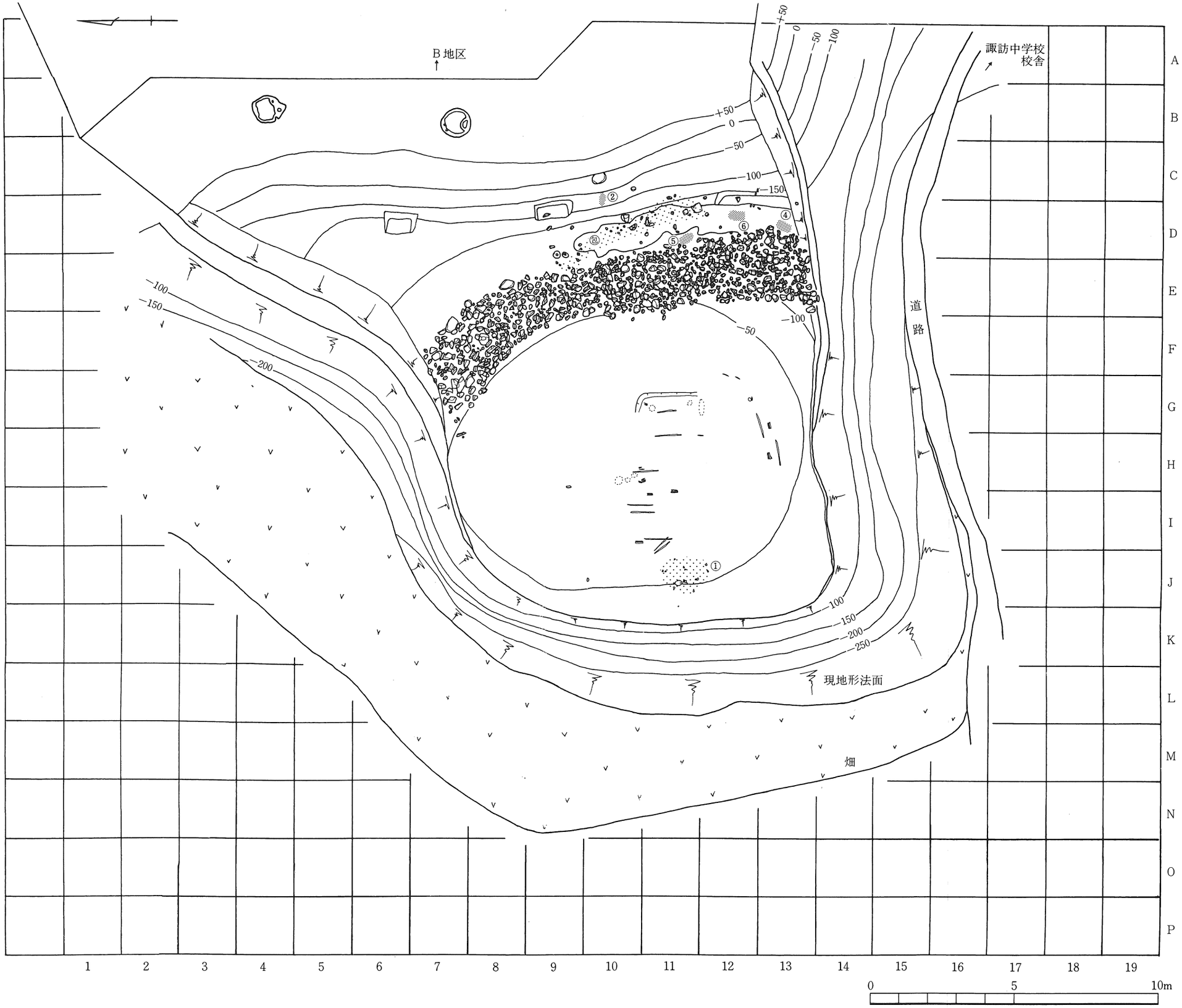
葺石の残存する墳丘東斜面に近く、埋葬主体と考えられる長方形の竪穴状遺構が部分的に確認された。この竪穴内底部に相当する11Gグリッド付近には、鉄剣1点と鉄鏃および玉類多数が発見された。鉄剣（F－2）は切先がほぼ真北方向になるよう置かれたものと考えられる。これを中心として北方と南方に他の遺物が配置されているように看取される。北方には、竪穴状遺構の壁部に近く、石製小玉12個から成る「玉第1集中」と、鉄鏃数点がある。一方南側には、鉄剣束の東南方向に41点の玉類から成る「玉第2集中」がある。この集中の内容は多彩で、勾玉3点・管玉7点・石製小玉4点・ガラス製小玉27点より構成され、密集度が高い。これより更に南側には、数点の鉄製品と、帯状のやや広い範囲に「玉第3集中」が存在する。内訳は、管玉6点・ガラス製小玉60点の合計66点である。

鉄剣（F－2）の西方に、間隔およそ80cmをおいて直刀（F－1）が発見された。この直刀は、F－2とほぼ完全に平行し、切先が北を向いている。また、この周囲には鉄鏃や鉄鏃群があって、それぞれ直刀と同じく南北方向を示している。一群を形成するものである可能性が高い。また、直刀に隣接して、ガラス製小玉6点が検出された。

10～11Hグリッドには、直刀（F－5）を中心とする遺物群が発見された。F－5は、F－1・F－2とは逆に切先が南を向いている。これに密接して、東側には鉄鏃1点が並列し、西側には鉄鏃一括がまとまって検出されている。また、直刀の柄部分には48点の玉類が密集出土し、「玉第4集中」を形成している。更に、柄の北方約50cmには、朱の分布が2箇所認められた。これには遺物を伴っていない。

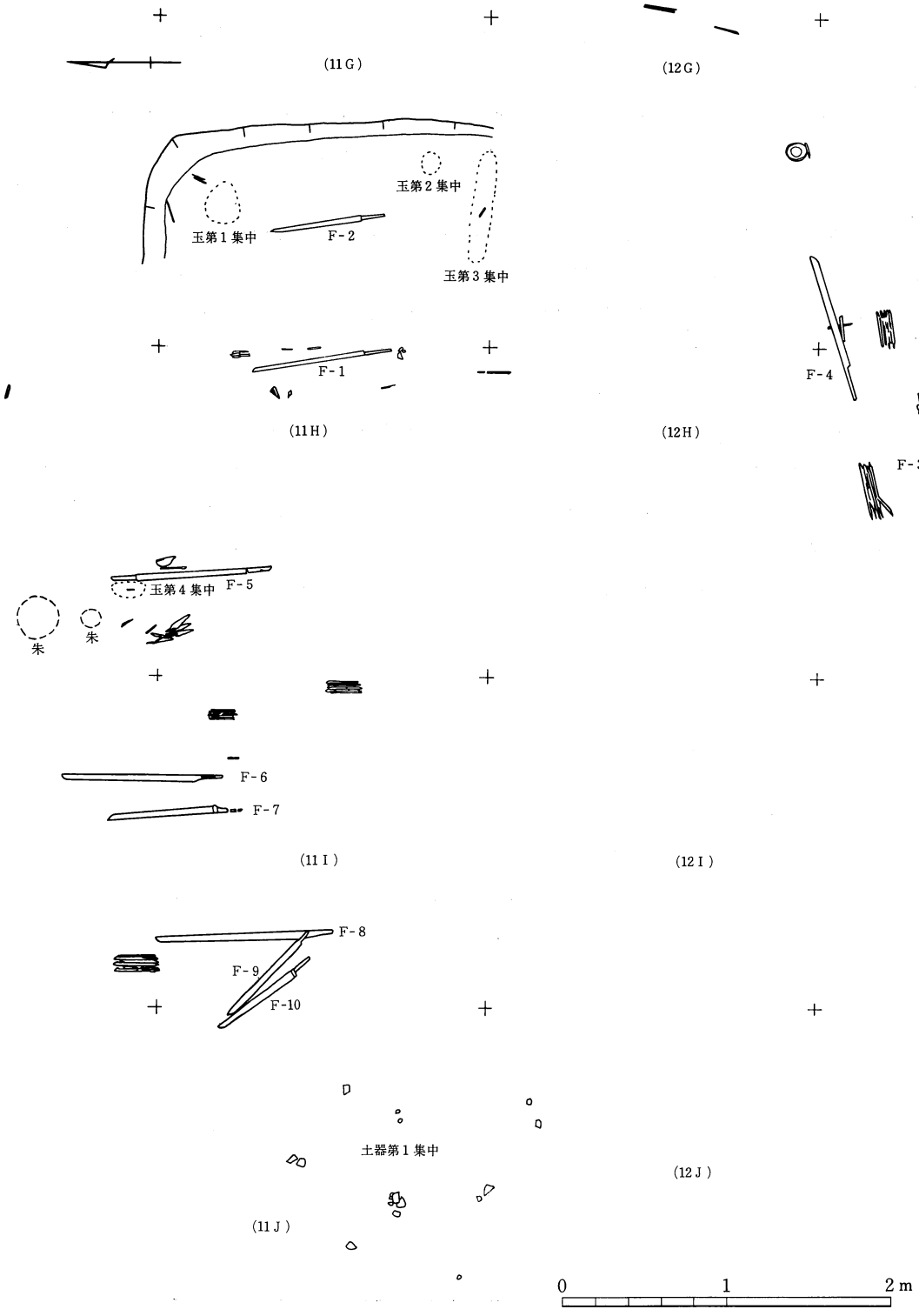
10～11Iグリッドにかけて、F－6・F－7の2点の直刀が平行して発見されている。切先はいずれも北方向を指しているが、刃のある方向は逆で、F－6は西、F－7は東にある。これらと平行して、東側に刀子および鉄鏃一括が検出されている。

これより更に西側に、3本の刀剣が重なり合って検出された。直刀（F－8・F－10）および鉄剣（F－9）である。F－8は全長110cmを計る長大な直刀で、切先を北に向けている。F－9



第50図　一時坂古墳平面図（1/150）

○内数字は土器集中番号・㋐は包含層出土土器の分布範囲
等高線数字は原点A-2（標高798,578m）からの比高（±cm）

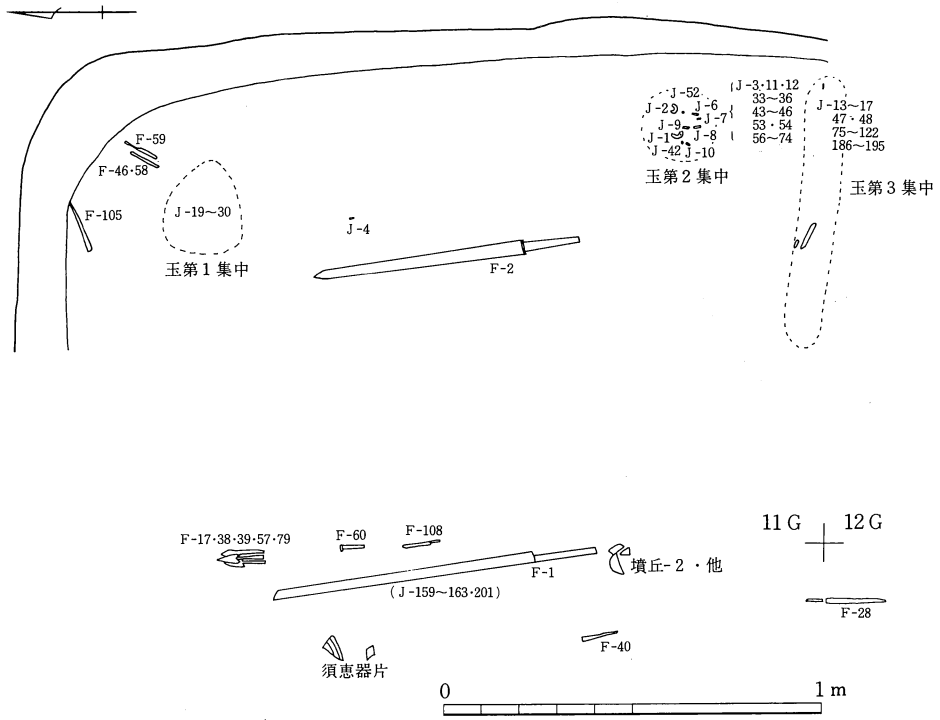


第51図　一時坂古墳墳丘の遺物分布全体図（1/40）

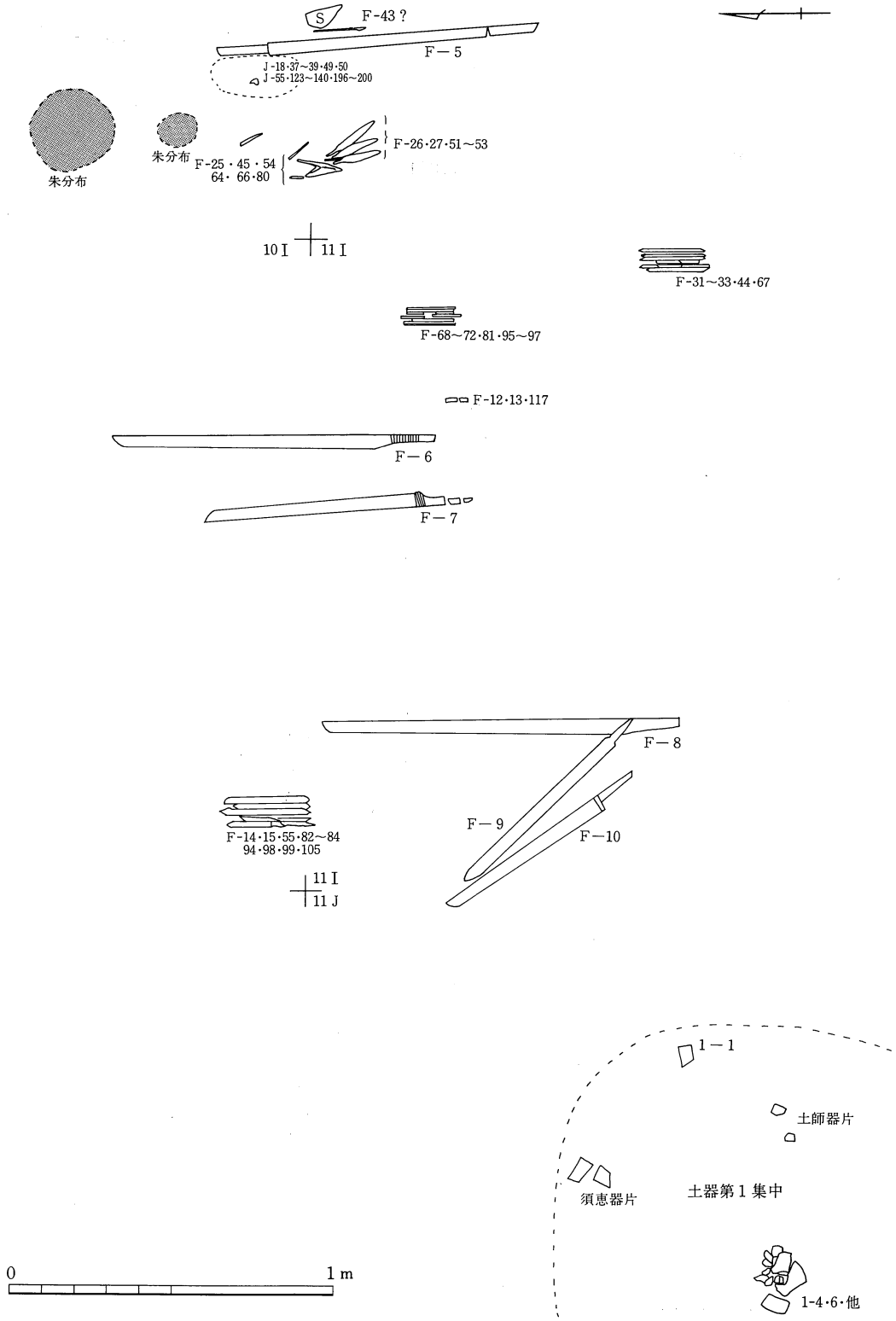
の鉄剣は柄をF－8の鍔付近に重ね、北西方向を向いている。さらにF－10の直刀が、F－9と切先付近で接触しながらほぼ同一方向を向いている。また、F－8の北西に隣接して、鉄鏃一括がやはり北を向いて出土している。これらは、重複出土の状況等からみて、本来同時的副葬品と認められるが、F－9・F－10については後世のなんらかの原因による移動があった可能性がある。

以上の各遺物は、概ねグリッド11列にあって、並列的な関係にあると理解される。これに対し、13G～Hグリッド付近の遺物分布は、群としての方向が異なっている。この群に属するのは、直刀2点（F－3・F－4）および一括出土の鉄鏃2対である。これらは切先方向をおよそ東北東に向けて平行している。また、直刀F－4の南側に一括の鉄鏃、これとは斜めに平行する直刀F－3の北側に一括の鉄鏃という配置も対照的である。

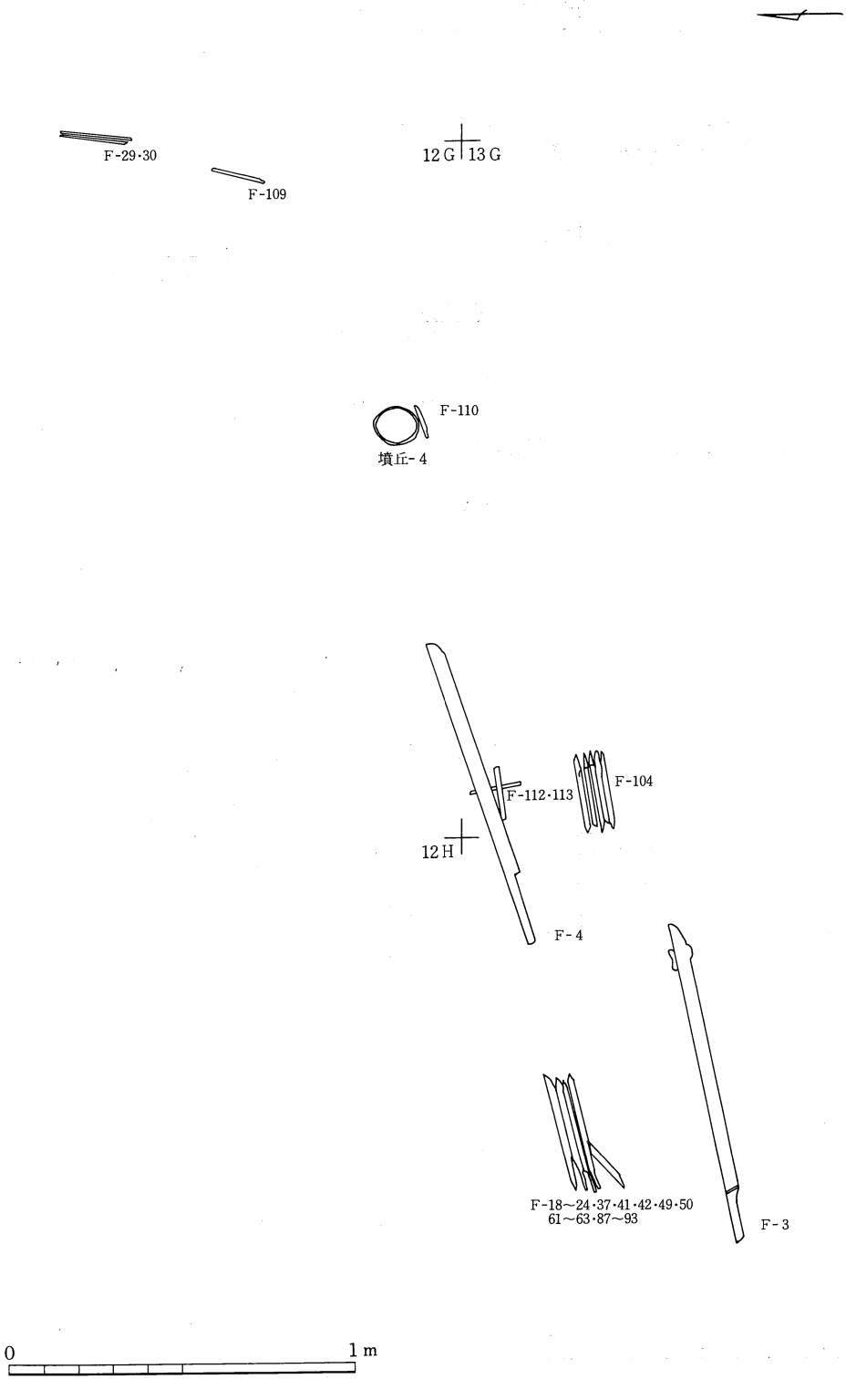
以上、墳丘上の主たる遺物の出土状態について、その配置を中心に略述した。検出された層位が現在の地表面から僅か下方であるだけなのにも係わらず、これらの保存状態が極めて良好であり、しかも完形品が多いという点も特筆に値しよう。出土レベルがほとんど同じであること等からしても、埋葬時の様相をかなり強く残したまま埋没していた副葬品の遺物群であると理解して差しつかえない。なお、精査にも係わらず鏡の出土がなかった点にも注意を喚起しておきたい。



第52図　一時坂古墳墳丘の遺物分布(1)（1/20）

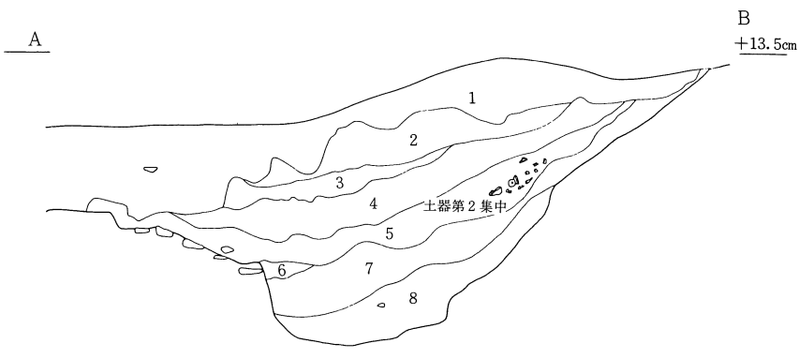


第 53 図　一時坂古墳墳丘の遺物分布(2)(1/20)



第54図　一時坂古墳墳丘の遺物分布(3)（1/20）

第55図　一時坂古墳葺石と周溝底の土器集中（1/60）



1……表土耕作土層。撹乱された黒色土層。
2……黒色土層。粒状こまかくやや軟弱。
3……漆黒色土層。粒状こまかく均質。
4……暗褐色土層。粒状こまかく、堅くしまる。遺物包含(土器破片)。
5……黒色土層。粒状非常にこまかくよくしまる。遺物包含(土器第2集中他)。
6……黒色土層。ローム粒を若干含む。
7……黒色土層。ローム粒を多く含む。遺物包含（土器第4・5集中他)。
8……黄褐色土層。ローム質多い。遺物包含(土器第6集中)

④　周溝内の遺物分布

一時坂古墳の特徴の一つは、墳丘上以外に、大量の遺物が周溝内より出土したことである。

本古墳の周溝は、古墳の山側（西側）にのみ存在するもので、これは丘尾切断という築造方法にも起因するためである。墳形自体は隅丸的な方形もしくは円形と見られるが、溝はかなり直線的に掘られているため、その幅は葺石と直線的に平行する部分においては約４ｍ、北寄りの葺石コーナー付近では約９ｍを計る。また、深さは山側の落ち際から計って、最深部出約2.4ｍもある深いものである。この深い周溝内の覆土については、比較的安定的に短期間の内に堆積したように観察される。周溝南半の、覆土最下底に一段と溝が深く掘り込まれた部分には、ロームブロックなどローム質土を多く含有する黄褐色土層がある。この土層は粘質で堅い。これより上層の土は基本的には黒色土層である。これらは数層に分けられるが、比較的均質で、短期間の内に一気に埋没したと考えられる。覆土中の遺物はほとんど本古墳の所属する時期に一致するもので、混入遺物は極めて少なく、こうした推定を裏付けている。

周溝内からの出土遺物はすべて土器類で、出土層位から大きく二つに分けられる。一方は覆土中層を中心とする出土遺物で、比較的広範囲に分布し破片が多い。もう一方は覆土下層から周溝底にかけての遺物で、これらは複数の群を成して狭い範囲に集中的に出土した。ほとんどが完形品である。

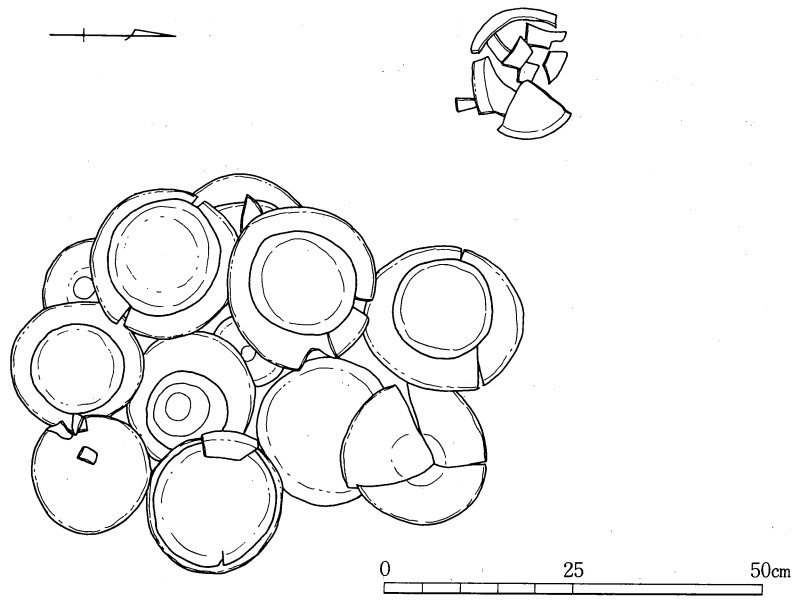
前者に属するのは、「土器第２集中」および「覆土中の土器群」である。「土器第２集中」は、10Ｃ～Ｄグリッドのセクションベルトにおいて、覆土中層から検出された土器群で、比較的狭い範囲に集中している。土師器・須恵器から構成され、須恵器甕などの完形品を含む半完形の土器と破片から成っている。本群は、一括遺物ではあるが他の土器集中のような配列状況は認められず、ある時期に山側の周溝外から転がり込んだようにも観察される。しかし、時期的には全く他と同時と考えられ、器種構成にも共通点が認められることから、遺存の背景としては「土器第４～６集中」と同様のものが予想される。「覆土中の土器群」には覆土中層出土の他の土器すべてが一括される。これらは主として10～11Ｄグリッドにかけて帯状に分布する土器群で、圧倒的に破片が多い。覆土中層出土が最も多く、一部は葺石に密着して出土した。当初、一種の土器集中と認め「土器第３集中」と呼称したが、配列や密集等の状況が確認できなかったためこれを改め、他の集中とは性格が異なると理解し「土器第３集中」は欠番とした。土師器が多く、接合によって復元可能となった資料も数多くあった。

後者に属するのは、「土器第４集中」・「土器第５集中」・「土器第６集中」で、覆土下層から周溝底にかけてそれぞれ密集して群を形成する。これらは極めて整然と配置された完全セットの土器配列で、土師器および須恵器から構成されている。配列状況・器種構成ともほとんど同様である。とりわけ特徴的なのは、土師器の高坏を一種の器台のように使用して概ね２列に長方形に並べ、この上に、土師器坏や須恵器蓋坏など他器種の土器を載せている様相である。３つの土器集中は、ほぼ同時期・同性格のものであろうが、詳細に見ると、出土レベルには若干の差異があり、また

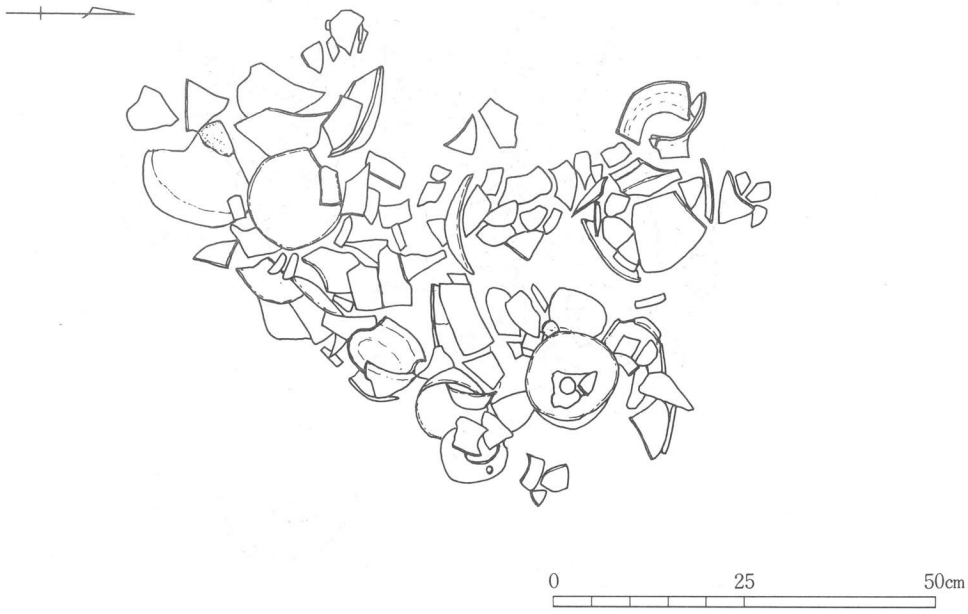
土師器の調整法にも集中間の相違が認められる。遺棄にわずかな時間差や行為者の差異を予想させる。また、この土器配列においては、こうした特異な出土状況によって、本古墳における使用の同時性が、集中ごとに完全に保証されている。当地方における土師器の編年や、須恵器との時期的並行関係等を明らかにする上では、第一級の資料と位置付けられる。

「土器第4集中」は13Dグリッド、葺石の下端に接してあり、周溝底からは若干上層の黒色土中に検出された。他の2集中に比べると土器の破損が目立ち、埋没直後に土などで押し潰されたように看取されたが、土器はいずれも完形に復元でき、密集状態からも配列状況にあったことは明らかである。土師器高坏の上に他の土師器を載せている。須恵器では甕1点がある。「土器第5集中」は11Dグリッドの葺石の下端に接してあり、やはり周溝底からは若干上層の黒色土中に検出された。セットほとんど破壊されずに残存し、土師器高坏の上には、基本的には須恵器蓋坏が載る(4例)。須恵器の蓋付高坏1点がある。また、セットとは少し離れて土師器壺1点が置かれていた。「土器第6集中」は12Dグリッドの、周溝の内最も深い部分の底部にほぼ密接してあり、葺石下端からはやや離れている。覆土最下層のロームブロックを含む黄褐色土層に埋没していた。これもほとんど破壊されていないセットで、高坏の脚部と坏部の分離したものが数点あったが、土器破損は最も少ない。土師器高坏の上には、基本的には土師器坏を載せ、1点だけ須恵器が載っている。

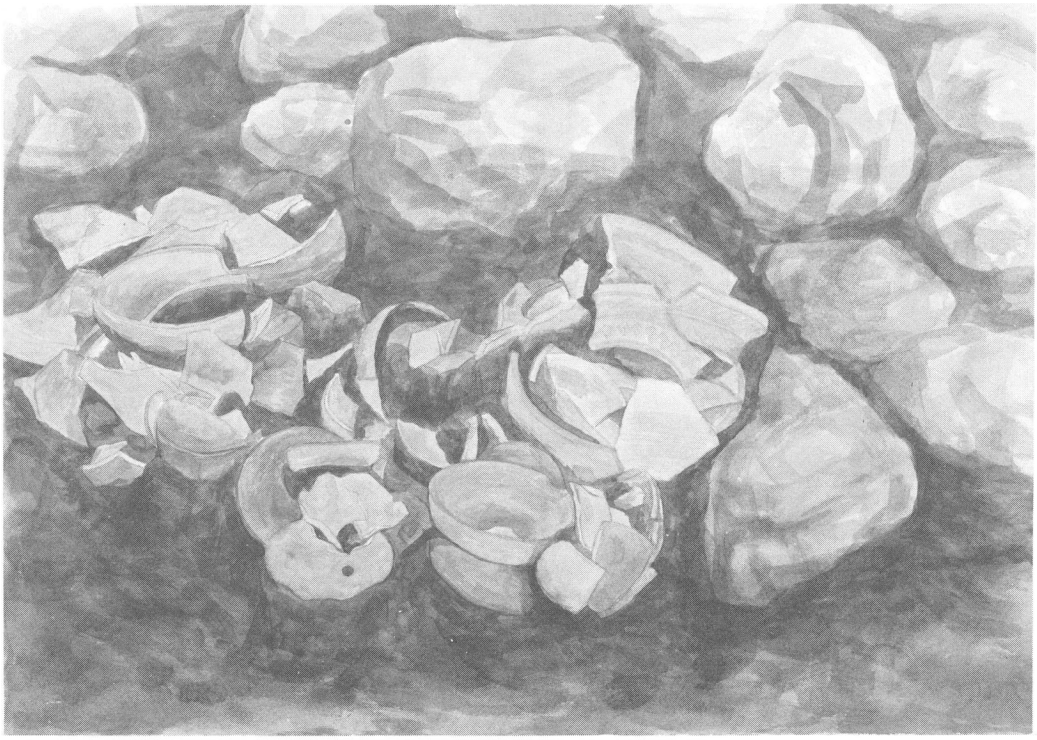
古墳周溝内における完全セットの土器配列の発見は当地方では初めてである。しかし、これまでにもこうした土器群が周溝内に残されていることは、諏訪市湖南の本城遺跡1号古墳などでも注意はされ、ある種の墓前祭祀などが想定されていた。今回の出土例はこうした周溝の性格等を巡る諸問題に関し、重要な意義を有する資料と評価されよう。



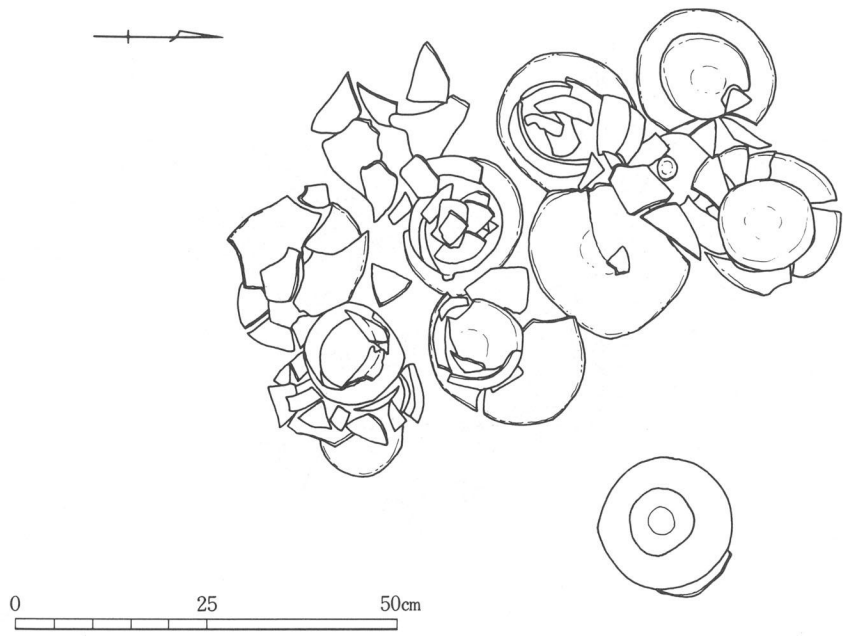
第56図　一時坂古墳土器第6集中平面図(1/10)



第57図　一時坂古墳土器第4集中平面図（1/10）



第58図　一時坂古墳土器第4集中スケッチ図



第59図　一時坂古墳土器第5集中平面図（1/10）

第60図　一時坂古墳土器第5集中スケッチ図

⑤　遺物

鉄製品

［鉄剣・直刀］（第61～63図　第６表）

鉄剣（Ｆ－２）は、全長67.7cm、茎15.3cmあり、刃部と茎の比は約１：４になる。剣形は両関直角式で、刃部巾は鍔元で４cm、厚さ0.9cmの断面レンズ状、鎬のない形で、鋒に近い部分ほど先細りし、鋒先はヘラ状である。茎幅は2.8cmで、厚さ0.5cmで断面長方形、茎尻へと細くなり、茎尻は尻直に切っている。目釘穴は２個見られた。剣身全体に木目痕が残っており、関際と茎部分には1.3cm幅で直交する木目痕が残っているが、鍔材と見られる。剣全体の錆化は著しく、木目痕の錆着がよく残っている。出土地点は11Ｇグリッドで、ロームの壙の掘り方が東側に一部分残っていたが、主体部は木棺部直葬とみられ、鉄剣は掘り方の壁と並行しており、剣の鋒は北を向いて出土した。

鉄剣（Ｆ－９）は、全長70.4cm、茎13.8cm、刃厚が関元で0.7cm、鋒先で0.6cmの薄手大形の鉄剣である。剣形は関が両関直角式で、刃部幅は関元で4.0cm、鋒でやや細身になり、断面レンズ状で鎬は通っていない。しかし片側の関際の中央部に丸みをもった稜がわずかに見られる。鋒先はヘラ状である。茎部は厚さ0.4cm、幅2.7cmの断面長方形で、目釘穴は１個だけである。刃部には外装（鞘）とみられる柾目の木目痕が鋒部と関元によく残っている。また茎には鍔とみられる部分に、直交する幅２cmの木目のない部分がみられ、木以外の鍔が付いていた可能性もある。出土地点は11Ｉグリッドの西側で、直刀（Ｆ－８・10）と交差するように出土した。本鉄剣の鋒は、直刀（Ｆ－10）と同様に北西を指しているが、直刀（Ｆ－８）は北を指していた。この３本の刀剣が交錯する状況などからみて、いずれも北を指して並列していたと見られる。また、剣の北方には鉄鏃一括（Ｆ－14・15・55・82～84・94・98・99・105）が遺存しており、その集積状況から10数本以上とみられ、胡禄に入った状況と推定でき、これらの出土品は同一の槨内の副葬品の可能性が強い。

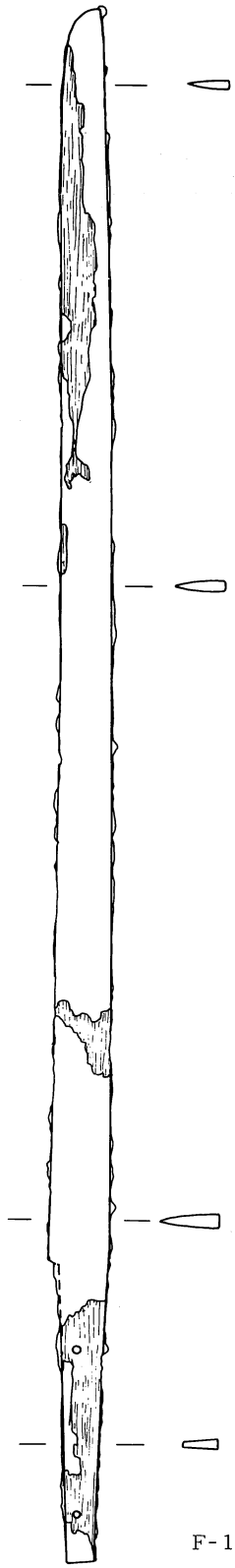
直刀（Ｆ－１）は、全長83.5cmの比較的錆化の少ない直刀で、刀身部は平棟平造で関は片関斜角で、鋒（切先）は脹切先、茎尻は一文字切りである。直刀のスタイルは内彎形であるが、直刀の中央棟部分を中心に、鋒部で0.8cm下り茎尻でも0.8cm下るスタイルで、刃は鋒部に次第に細身になり、斬る機能よりも刺突の機能を感じさせてる。茎部分は、関際で３cm、茎尻で1.5cmと細めており、目釘穴は９cm間隔で２個ある。刀身の各所に柾目の木目痕が錆着し、茎もよく残っており、関際には約２cm幅に木目痕が直交してみられるが鍔材であろう。出土地点は11Ｈグリッドの東側で、鋒部を北に、刃部は東を向いて出土した。また、本直刀と並行するように、鉄鏃・鉄釘・刀子などが出土しており、同一副葬の可能性もある。

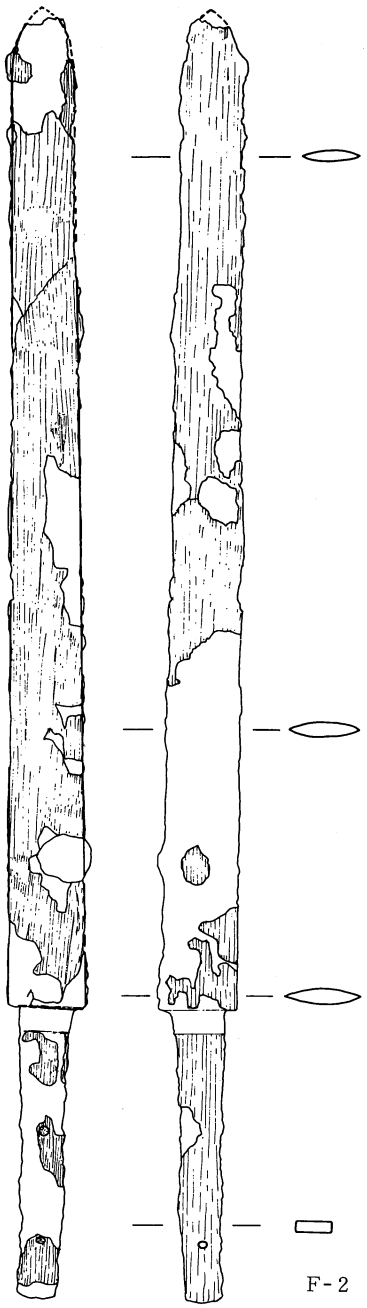
直刀（Ｆ－３）は、錆化の激しい直刀で、発見時の全長92.5cm、茎14.5cm、刃長78.0cmであったが、鋒近くと茎部分が二分して折損していた。刃身は平棟平造の脹切先、関は木質で錆が著しく錆着しているが、片関撫角式とみられる。茎は尻にかけて細るが、茎中央辺の刃側には絞りが

みられた。目釘穴は木質と錆のため１個が判明しただけである。直刀のスタイルは、棟の中央部を中心にして、鋒で0.5cm、茎尻で0.5cm下る。内彎した直刀で、刃幅の広い短い形である。刀身全体に錆化が著しいので柾目の木質がよく残っている。関際には刀身に直交する鍔の痕跡がよく残っている。鹿角製様の状態のようにも観察されるが、木製か鹿角製か判然としない。出土地点は13Hグリッドのほぼ中央で、鋒部を東方向にし、刃部は南を向いていた。直刀（Ｆ－４）とは同方向に一刀身西にずれて並んでおり、鉄鏃一括（Ｆ－18～24・37・41・42・49・50・61～63・87～93）と約40cm間隔をおいて並列している。

直刀（Ｆ－４）は、鋒端を約１cm欠損するが、現全長99.0cmである。刀身部は平棟平造で、片関の撫角式あるいは浅い直角の関とみられるが、木質刀装具と紐巻きが錆着していて現認できない。直刀のスタイルは内彎形であるが、刀身のほぼ中央部棟を基に、鋒で0.5cm下り、茎尻では1.5cm下る内彎刀である。刃は関際で0.8cm、鋒部で0.6cmとなる。茎の長さは19.0cm茎幅2.8cm、厚さ0.8cm、茎尻は隅尻切であるが面取りをしている。目釘穴１個がみられ目釘も残っているが、茎全体に木質と麻とみられる撚り紐が捲かれ、ほかの目釘は確認できない。茎は元から尻までほとんど幅が同じであるようだが、下面の中央にやや絞りがみられる。直刀全体に木質の錆着がみられるが柾目の木痕である。また間際には特に木質が良く遺存しており、茎部には約2.5cm幅の鍔部分がみられ、そこから茎尻にかけて柄部分の外装がよく残っている。柄の構造は茎のまわりに断面卵形の木柄を合せるが、茎の背は木柄で包まれない。その外側に麻糸で撚った紐（★麻＝からむし）を茎尻まで捲いている。ちなみに紐のまき方は、１cmあたり７巻きである。直刀全体の錆化はかなり著しい。出土地点は13Gグリッドの北西隅になるが直刀の鋒部はほとんど東（Ｎ－70°－Ｅ）を向いており、刃は南に向いていた。本直刀の南側に刀子（Ｆ－112・113）・直刀（Ｆ－３）の先に鉄鏃一括（Ｆ－104）等が同方向を向いて並列していた。また、直刀（Ｆ－３）が鋒部を接するように並列して出土した。直刀（Ｆ－４）と（Ｆ－３）、そして約30cmおいて一括して出土した鉄鏃・刀子は先端を同方向にする一群であって、同一槨内の副葬品の可能性が高いとみられる。

直刀（Ｆ－５）は、全長99.0cmの完形で出土した直刀であるが、錆化激しく刀身先方で折損した。刀身形は平棟平造。脹切先で関は木質の錆着が多いが、片側でみると片関斜角式である。茎は茎尻に向けて細るが中央部にやや絞りがみられ、茎尻は一文字切である。目釘穴は茎の外装材である木と、その外側に巻いた麻紐の錆着の剝離部分で２個認められた。直刀のスタイルは内彎刀であるが、関際から10cm位の棟を中央にして鋒で0.4cm、茎尻は0.7cm下げている。したがって内彎刀としては刀身の内反りは少なく、茎の内反りが強い形である。錆化の著しい直刀で全体に外装材の柾目木質が錆着している。ことに関際では鞘材の様子がみられるが、鞘材は幅4.2cmで、刀身幅は3.4cmである。また茎部では柄の構造が観察でき、茎芯の上に木質をあて、その外側に麻紐を巻くが、１cm間に８巻きがみられる。鍔部分には直交する鍔材の痕跡はみられないので鍔材あるいは鍔の様相については不明確である。出土地点は11Hグリッド中央で、10Hグリッドにかかっている。鋒は南方に向け、刃は西を向いて発見されたが、西側には並列して鉄鏃一括（Ｆ－





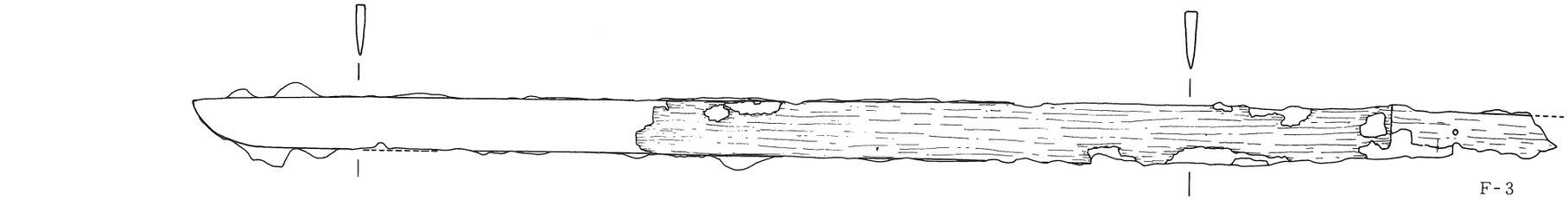
第 61 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(1) (1/4)

26・27・51～53）の出土があり、尖頭部を南に向けて出土している。本直刀の柄部分にはガラス小玉が検出され、また直刀の北方50cm位の位置に、朱を敷いた状況の部分が2箇所みられた。これらはほぼ同一レベルにあって、その範囲からしても同一副葬品とみられる。

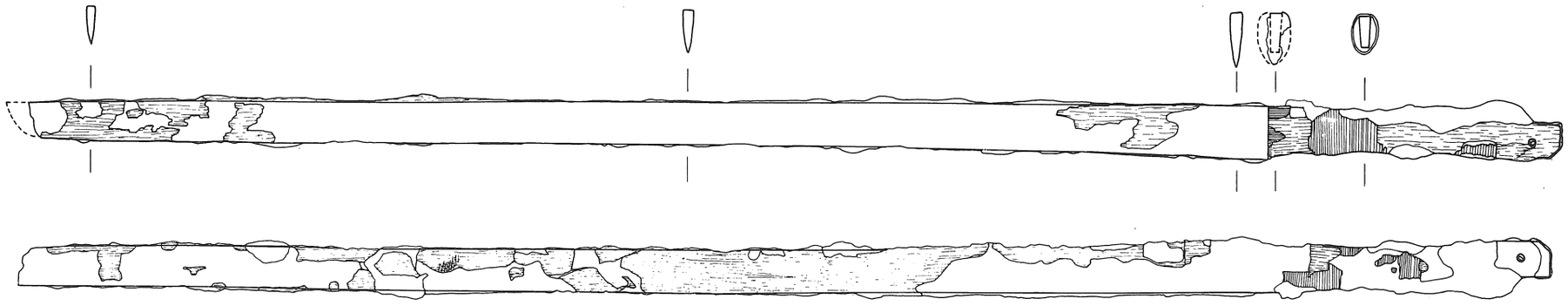
直刀（F－6）は、全長97.6cmある直刀で、比較的遺存状態はよかった。刀身形は平棟平造、脹切先。関は片関、撫角式、茎元抉りで鍔装具のあたる茎に切込みをつけている。茎尻は一文字切であり、目釘穴は2個が確認できた。直刀のスタイルは内彎する直刀で、関際約20cmの刃部の棟を中心にして鋒で1.8cm下り、茎尻は2cm下るという内反り形であり、柄での内反りの強い印象を与える直刀である。刃部は関際から鋒まであまり幅が減じないが、先端近くで幅が小さくなるので、見た目は内彎しながら鋒部が外反するようにみえる。錆化は少なかったが、刃部両側とも木目痕の錆着は少なかった。茎部分には柄装具の状況がよく遺存しているが、茎の上に木柄をあて、その上に麻紐を丁寧に巻いている。この紐巻きは1cm間隔に6～7巻きの状況である。鍔部分には約2.4cm幅の鍔とみられる部分がみられるが、材質については不明である。出土地点は10Iと11Iグリッドの東側で鋒部を北方に、刃は西向きにしており、直刀の東側に小刀子、また鉄鏃一括（F－68～72・81・95～97）が刃部を北にして出土しており、同一副葬品の可能性がある。

直刀（F－7）は、現在長79.0cmの直刀で、刀身・茎が折損して発見された。刀身形は平棟平造。関は片関直立斜角式というべきか、例を知らないタイプで、茎は尻にかけて細くなる類直形である。直刀のスタイルは内彎する直刀であるが、棟の中央を頂点にして鋒で0.4cm下り、茎尻で0.5cm下る内彎形である。刃幅は関際から鋒にかけて次第に細るが、中央部手前で絞りがみられ、これが磨き減りかどうかは不明である。茎は折損が多いが目釘穴1個が確認できた。直刀全体の錆化は著しいが、刃部には木目痕の錆着が多く見られる。茎では鹿角柄装でその上に紐巻きがされたと観察できた。また、鍔部分も鹿角鍔とみられる痕跡が認められた。鋒部は発見時の観察では脹切先の様子がうかがえた。茎尻については不明であった。出土地点は10Iから11Iグリッド中央辺で鋒を北に、刃は東を向いて出土している。

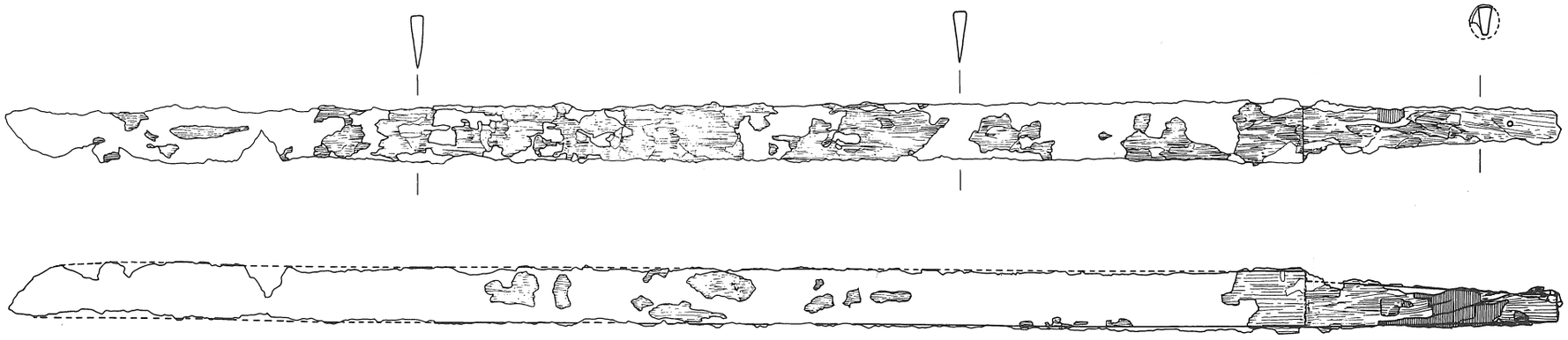
直刀（F－8）は、全長110cmの最大直刀である。刀身形は平棟平造、脹切先。関は片関直角茎元抉で茎尻は隅抉尻になっている。直刀のスタイルは、関際の背棟を基点とすると、鋒の背で0.4cm、茎尻の背で0.9cm下るという内反り刀で、特に内反り刀にみせているのは刃中央にかけ3.4cm幅にこけており、鋒先端部にかけて3.0cmと細るため、棟の内反り以上に刃部の内彎形が目立っている。刃部は刃幅が広く、棟厚は薄手で基部は関際から茎尻まで棟厚も茎幅も同じ造りであるが、茎尻の内反りは強い。関際の抉りこみは直刀（F－6）とともに県下では類例をまだ知らないもので、刀装の構造上注目されるべきものである。目釘穴は茎尻に1個現認でき、茎の長さからみてまだ存在するかもしれないが錆のため不明である。この直刀の刃部・茎の表面には、ほかの直刀と違って、木質の錆化はみられない。また鍔部分にも鍔の構造とみられる痕跡が残っていない。出土地点は11Iグリッドの北西部で、黒土層中であって槨形は確認できなかった。直刀の鋒を真北に向け、刃部は西にした出土状況であるが、鉄剣（F－9）と交差し、直刀（F－10）とも併



F-3

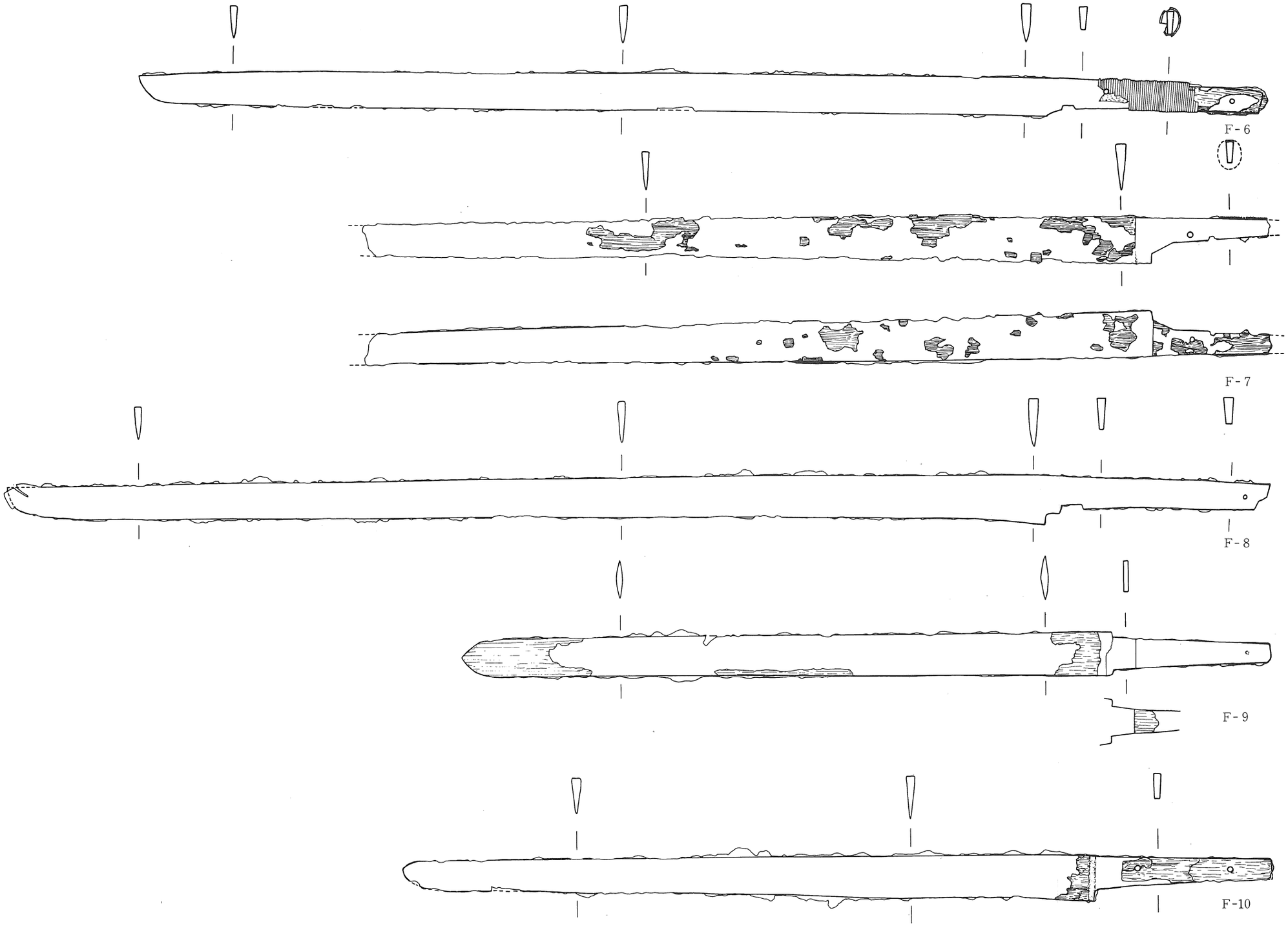


F-4



F-5

第 62 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(2) (1/4)



第 63 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(3)（1/4）

存し、しかも本直刀の鋒先方部に鉄鏃等の一括が同方向を向いて出土している。これらは同一副葬品としての可能性が高い。

直刀（F－10）は、全長75.3cmある直刀で、刃部は60cmである。刀身形は平棟平造の片関直角式で茎尻は一文字切である。鋒部分は脹切先であるが、棟側が落とされた形で剣先形にみえる。直刀のスタイルは内彎形直刀であるが、刀身の中央棟が高く鋒部で0.3cm下り、茎尻で0.7cm下るという、柄の内反り形をしており、鋒部とあいまって剣に近いスタイルを見せている。刃部は関際から約20cm辺にかけて刃幅が絞られている。茎部では茎胴が茎尻にかけて中細りとなっているが、中央腹側にやや絞りがみられ、目釘穴は2個であった。直刀全体に錆化が激しく、剝離部分も多いが、刃部関際には鞘材とみられる柾目木質がよく遺存している。茎部にも木質が錆着しているが、関際に3.0cmの木質のない部分があり、鍔の位置であるが、関際の0.5cm幅は鹿角製の装具があったとみられる。出土地点は11Ⅰグリッドの北西で、鋒部は北西を指し、刃は西向きであった。近接して出土した直刀（F－8）と鉄剣（F－9）は鋒と刃は同方向を指しており、北側の鉄鏃一括と合せ、同一副葬とみられる状況であった。

［鉄鏃］（第64～71図　第7表）

鉄鏃は茎部の破片も含めて合計136点、個体数では恐らく100点前後が出土しているが、これらを主として平面形態の差によって次のように分類した。なお、一部に無篦被の可能性のあるもの（F－105ア・イ）があるが、ほとんどが関篦被を呈すると思われ、棘篦被を持つものは検出されていない。墳丘上における遺物の異存状態は前述のとおり、攪乱を受けている可能性があるため、鉄鏃がすべて当時の状況で残存しているとは考えがたいが、全体の組成としては観察による分類で短頸鏃23点・長頸鏃67点となっている（短・長頸の別が不明なものを除く）。

Ⅰ類　短頸の鏃を一括した。

Ⅰ類a　鏃身部が細長い柳葉形を呈する。鏃身部はほとんど関有であると思われるが、鏃身部の元側が拡がるもの（F－11～13）と直線的なもの（F－14･15）がある（F－11～16･F－105ア・イ・カ～シ）。

Ⅰ類b　鏃身部が大形の平刃柳葉鏃で、腸抉を呈する（F－17・104ア）。

Ⅰ類c　Ⅰ類bと同じく腸抉を呈する柳葉鏃であるが、鏃身部がやや小形である。刃部の断面は片丸又は片切刃を呈するようである（F－18～27）。

Ⅱ類　長頸の鏃である。なお、短頸と長頸の分類基準であるが、鏃身部長と篦被部長がほぼ同じ、又は鏃身部長の方が長い物を短頸とし、篦被部長が鏃身部長よりもある程度以上長い物を長頸とした。

Ⅱ類a　長頸の柳葉鏃で、すべて腸抉を有するらしい。鏃身部が割と大きめのもの（F－37～39）と小形のもの（F－28～36）がある（F－28～36・F－105ウ～オ・ス・セ）。F－37の鏃

身部平面形は三角鏃となる可能性もある。

II類ｂ　片刃鏃で、すべて腸抉を有する。刃の断面は平刃のものと片切刃のものがある。（F－40～56・104イ～ヒ）

III類　Ⅰ類またはII類の篦被部～茎部破片である（F－57～103）。

出土した鉄鏃を2類5種に分類した。このうちⅠ類ａは柳葉とも、蒲の穂形といえるが、剣の刃部形に似ており、剣身形短頸鏃と呼称したこともある。鏃身部を剣身に例えるならば、両関撫角式、断面レンズ状（鏑無しで両丸造り）といえよう。しかし、本鉄鏃は刃の関部分に、やや脹りをもつのが特徴的である。諏訪地方古墳には例のない型式の鉄鏃である。

Ⅰ類ｂは、腸抉柳葉形片丸造りと呼ぶ鉄鏃（F－17）例である。本例は諏訪市大熊片山古墳出土鉄鏃と近い型式とみられる。また、Ⅰ類ｃは腸抉柳葉式鉄鏃であるが、Ⅰ類ａより鏃身部が小形である。また詳細にみれば刃部は片切刃造りが主流で、片丸刃造りとみられる例（26）は僅かである。

II類は長頸鏃であって、鏃身は腸抉柳葉形のの範疇に入るが、大形と小形がみられる。鏃身の大形の鉄鏃には片切刃造（F－29・30・38・39）がみられ、鏃身の小形に鉄鏃に片丸造（28）、あるいは両丸造（F－33・35・36・37）が窺えるという傾向がある。

II類ｂは片丸形長頸鏃の一群で、いずれも刃側に逆刺（腸抉）がある。刃部は片刃であるが、平刃造（F－40・41・51・52）と片切刃造（F－42・43・44・50・53・54・55）がある。特徴的なのは、片刃鏃のなかでも逆刺（腸抉）が、腸抉柳葉式鉄鏃と同様に切れ込みが深いことである。

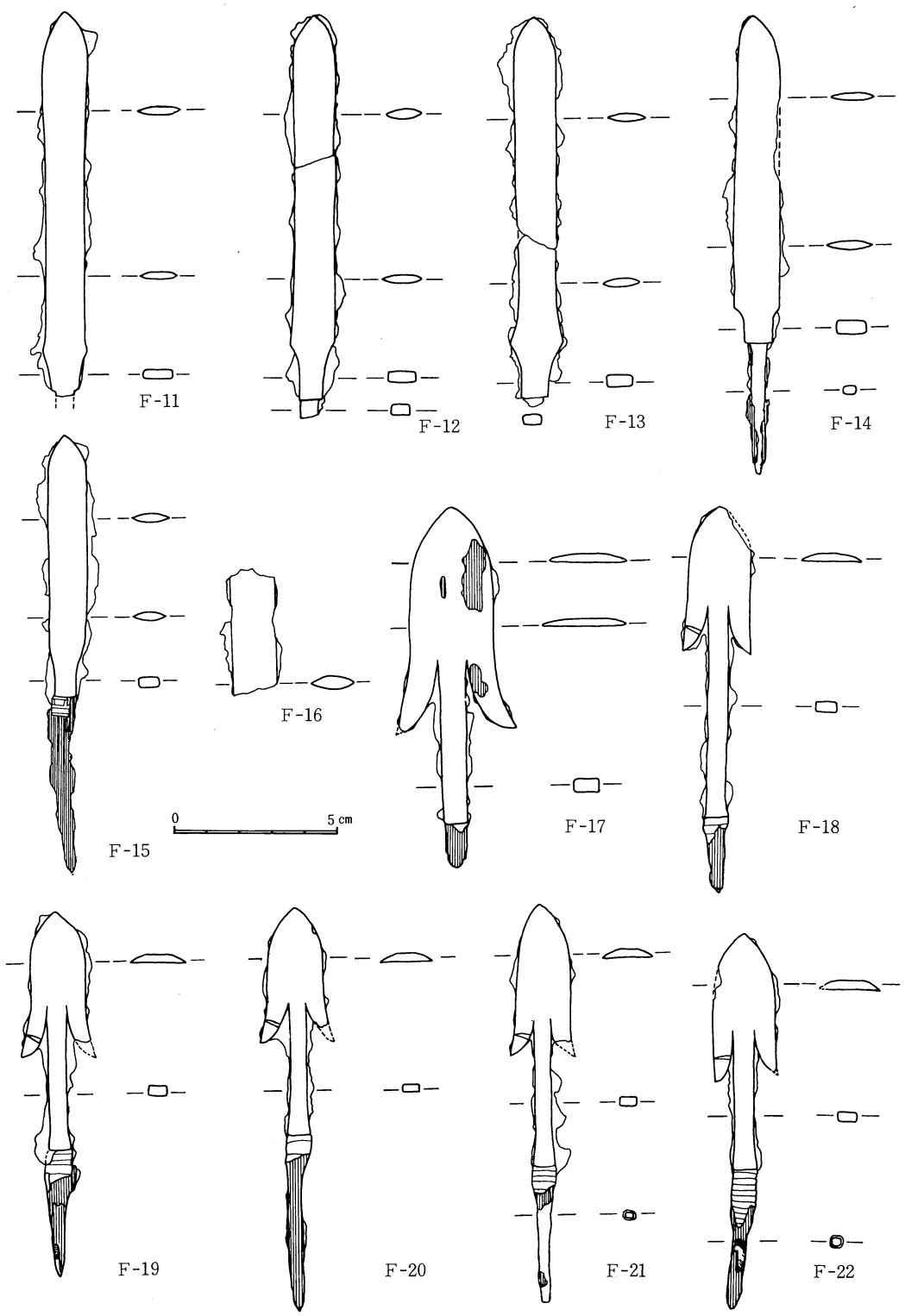
III類は鉄鏃の篦被（棒状部）と、茎部の破片である。関部分から茎部の破片が多いが、この数は21点あって、鉄鏃の数を示すものであろう。関から茎部の装着状態の観察できるのが多く、矢柄の竹に茎を坩入し、その上から植物（木皮等）を巻いているとみられるが、接着剤（ウルシ等）の使用は不明である。

鉄鏃が10余本まとまって錆着して出土している（F－104／F－14・15・55・82～84・94・98・99・105）が、鉄鏃の長さ、尖端が同一方向、などからして胡禄（矢入れ）か、あるいはそれに相当する植物質（皮・木等）の入れ物に入って副葬されたものとみられる。当地方の古墳としては類例のない出土の状態であって注目に値しよう。

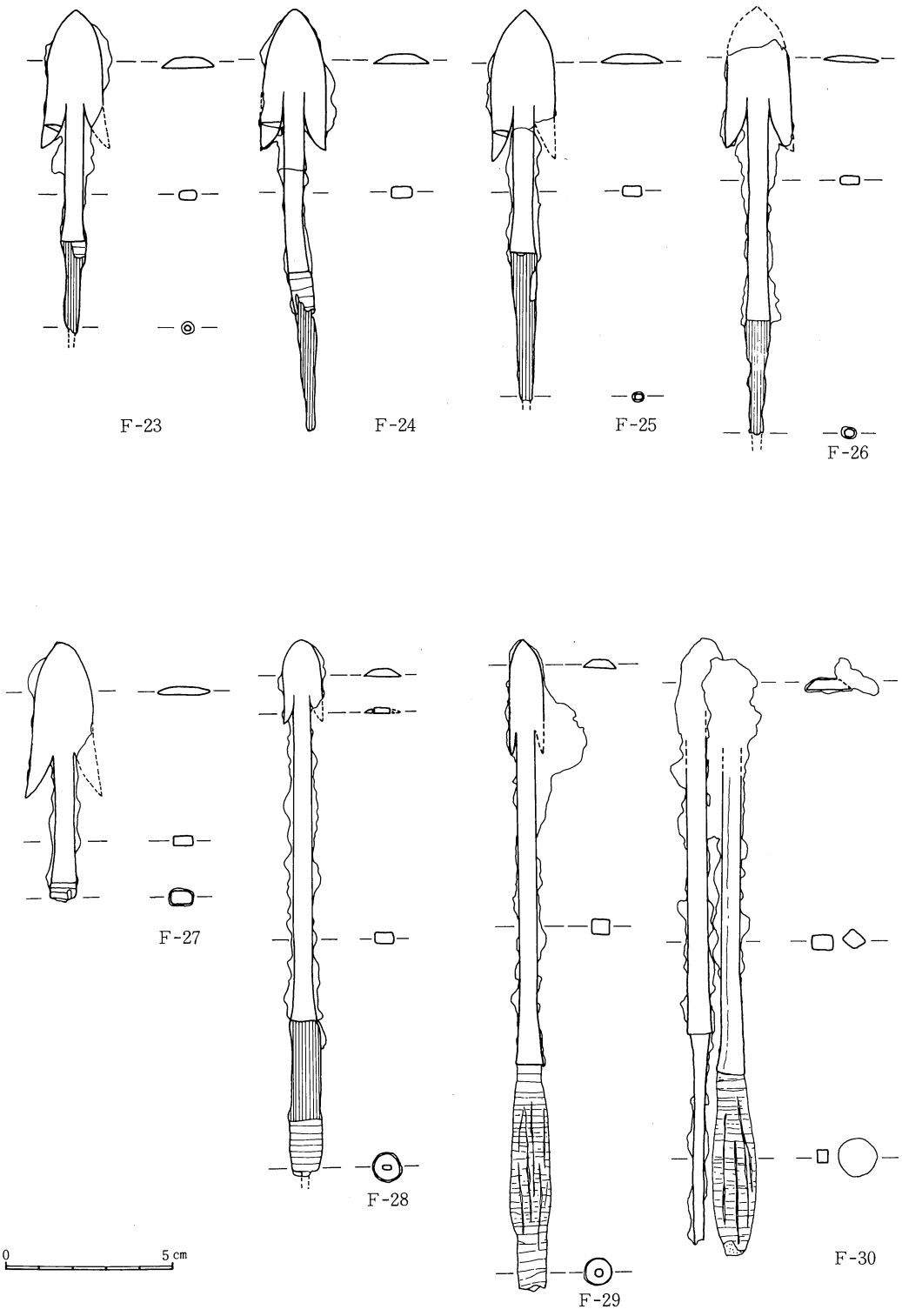
［刀子その他］（第72・73図、第8表）

刀子は13点が出土している。柄部が残存するものが多い。鹿角柄と思われるものが5点ある（F－107・112・113・116・117）が、他に柄の材質が明確でないものもある。

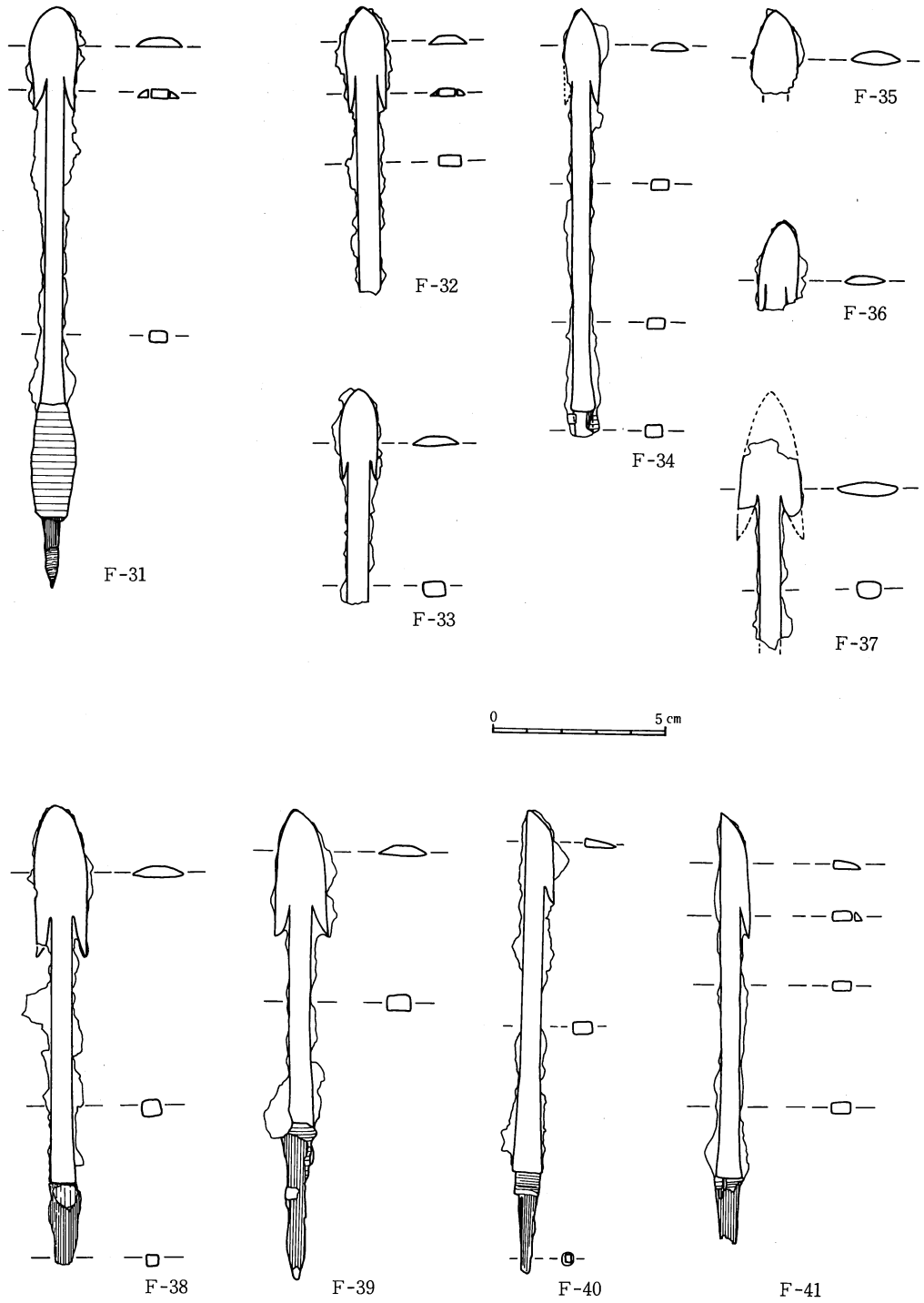
また、用途不明の鉄製品が数点出土しているが、主体部にともなうものであるかどうか不明確である。



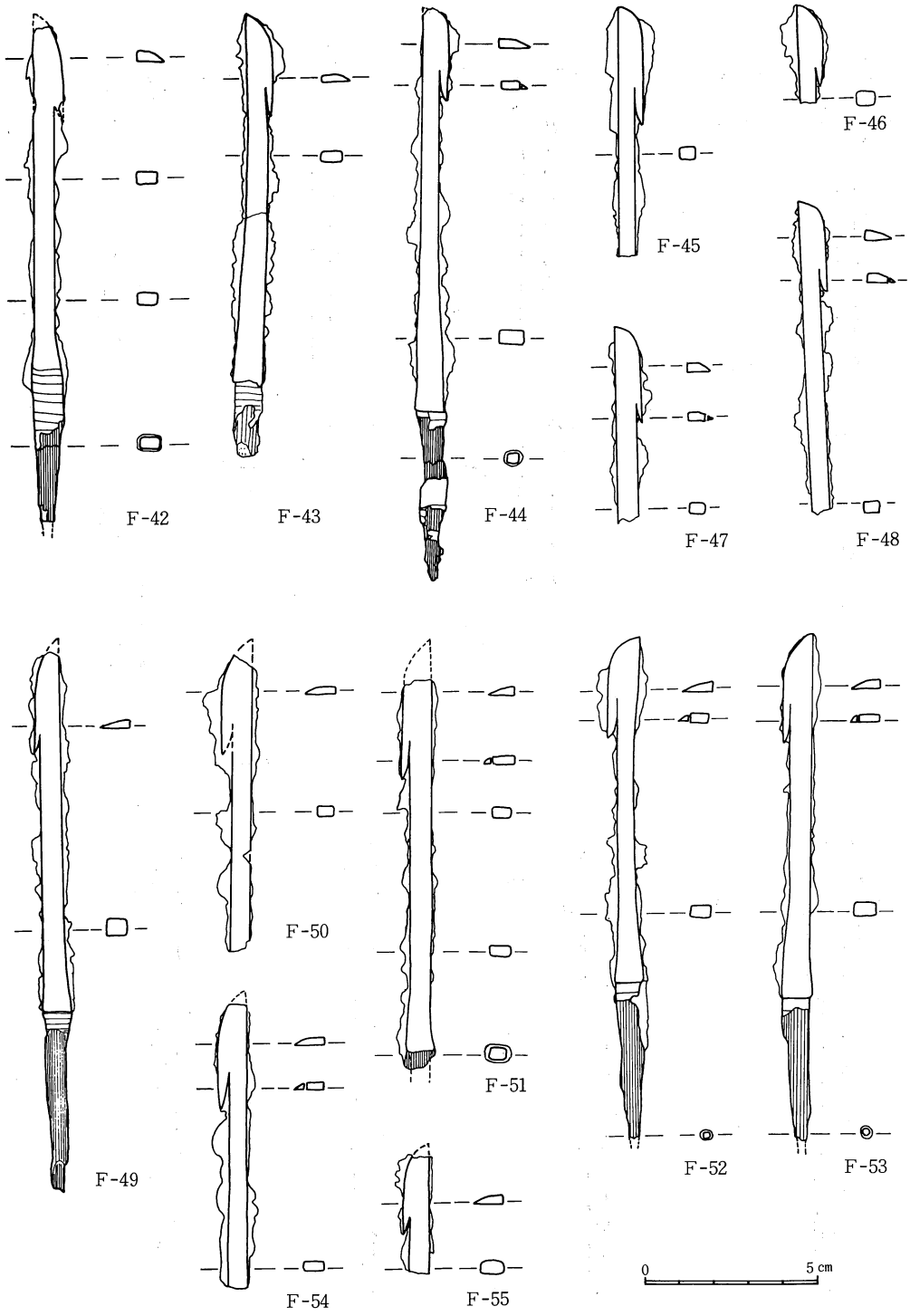
第64図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(4)（1/2）



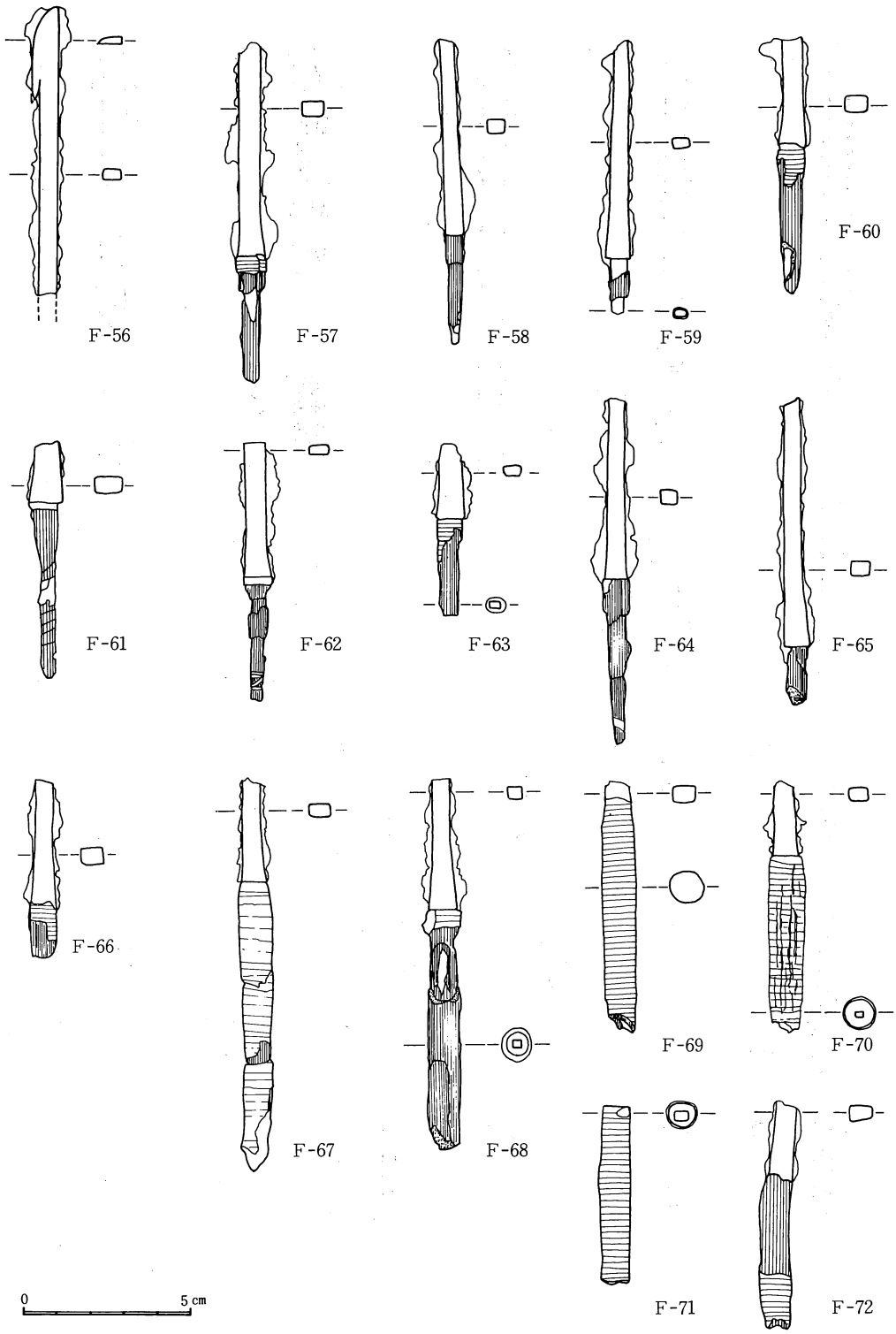
第65図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(5)（1/2）



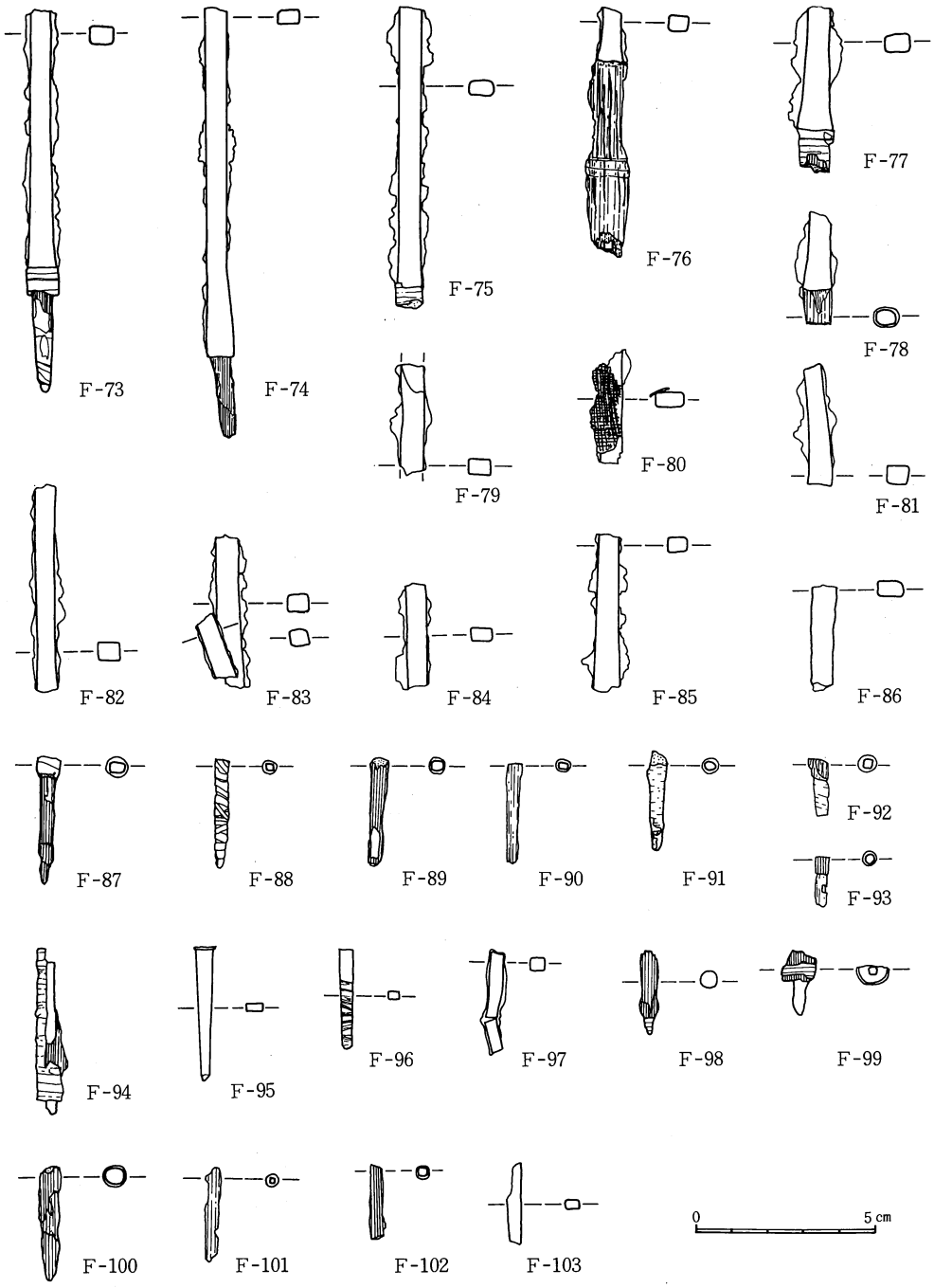
第 66 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(6) (1/2)



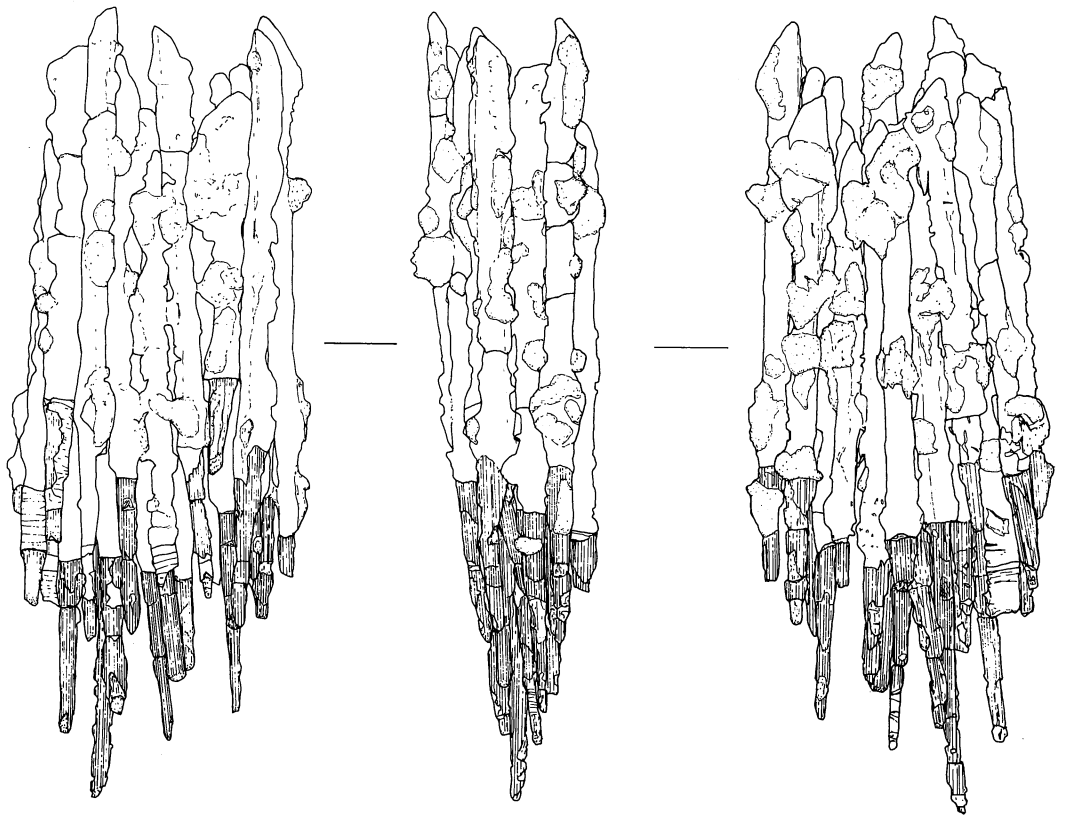
第67図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(7) (1/2)



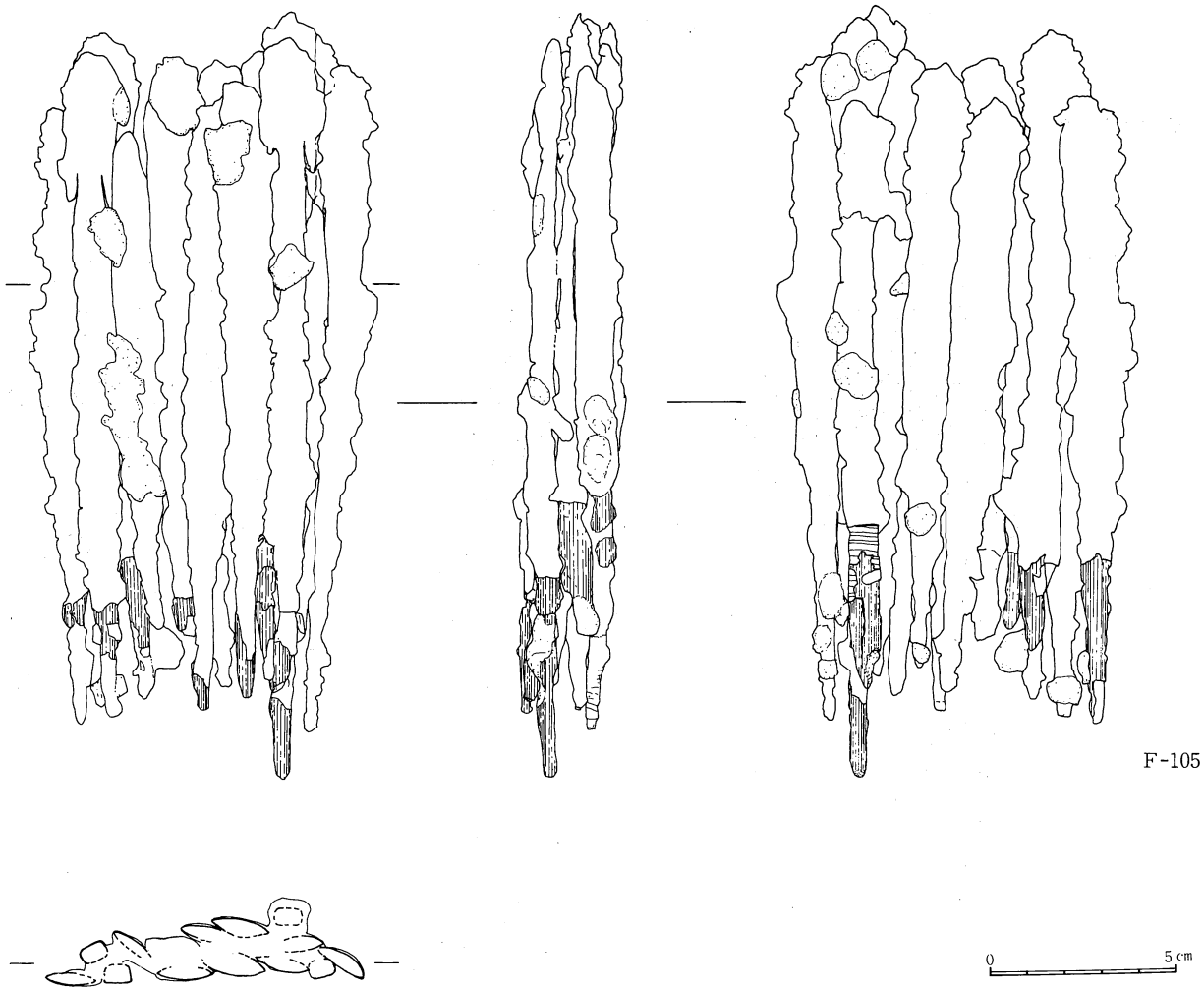
第 68 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(8) (1/2)



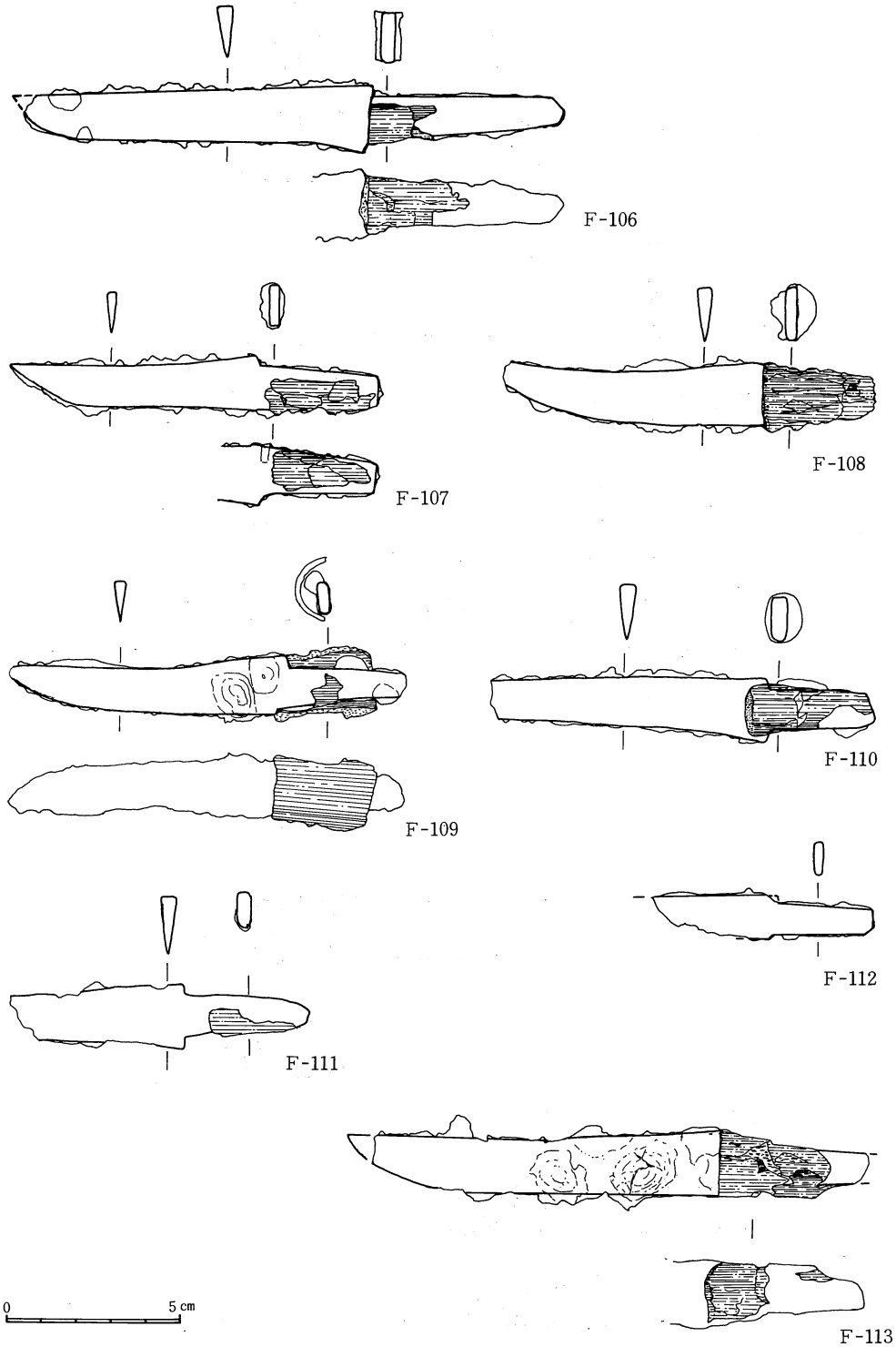
第 69 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(9) (1/2)



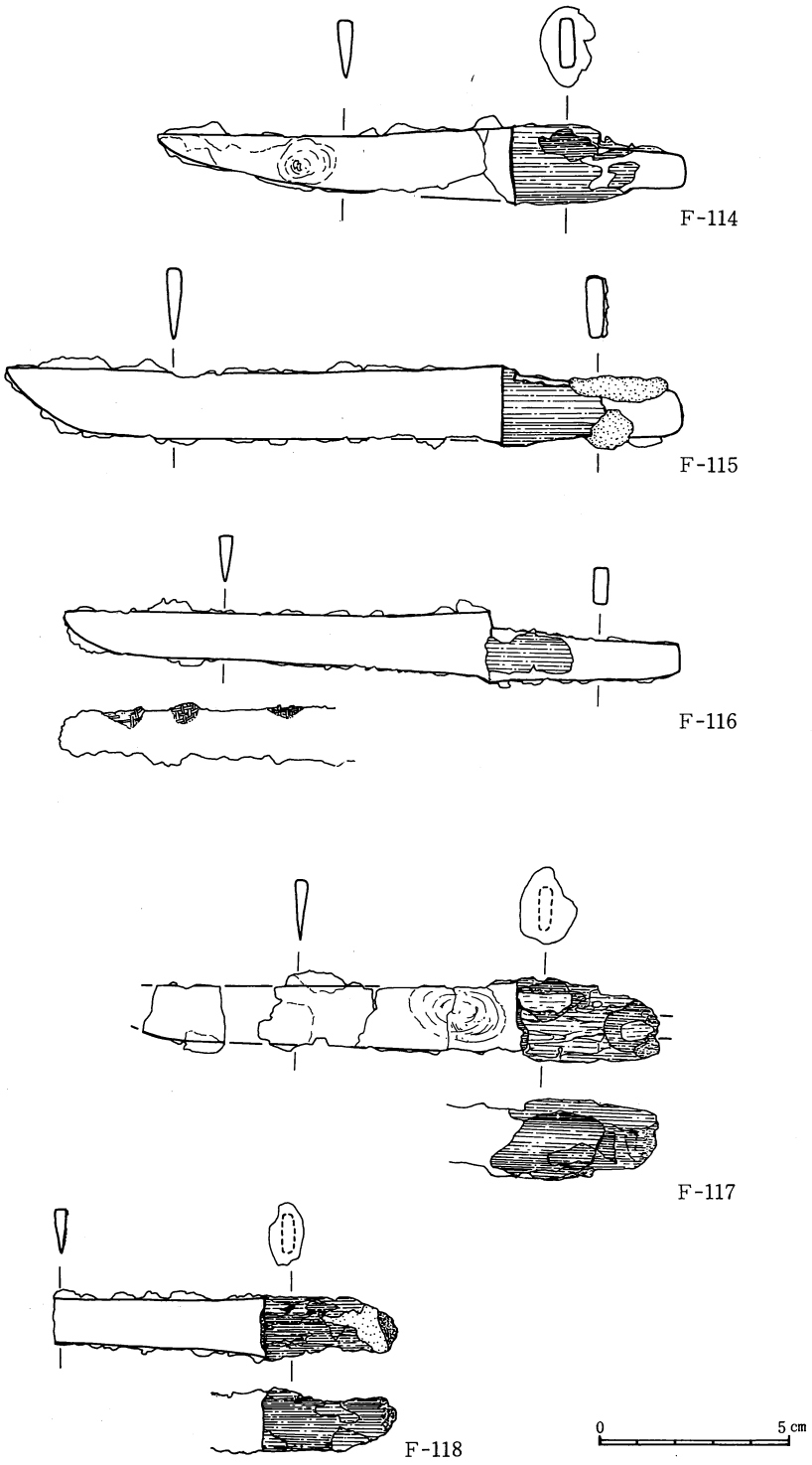
第 70 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(10)（1/2）



第 71 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(11)（1/2）



第 72 図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(12)（1/2）



第73図　一時坂古墳墳丘出土鉄製品(13)（1/2）

第６表　一時坂古墳墳丘出土直刀・鉄剣観察表（カッコ内の数値は現存長）

図版番号	器種	全長 (cm)	茎長 (cm)	刃長 (cm)	刃幅元・先 (cm)	棟厚元・先 (cm)	茎幅元・先 (cm)	茎厚元・先 (cm)	鍔材	鍔厚	関	目釘	造り	切先	反り	切先方位	レベル元・先 (cm)	備考
F－1	直刀	83.5	16.5	67.0	4.0 3.5	0.8 0.5		0.7	木		片関斜角	2	平棟平造	脹切先	内反り	N10°W	－33 －38	
F－2	鉄剣	67.7	15.3	52.4	4.0 3.1	0.9 0.5	2.8 2.0	0.5	木	1.2	両関直角	2	断面レンズ	ヘラ状		N 8°W	－26 －27	
F－3	直刀	90.0	14.5	75.5	3.8 3.3	0.8 0.6	3.0	0.8	木	1.5	片関撫角	1	平棟平造	脹切先	内反り	N78°E	－38 －32.5	
F－4	直刀	99.0	19.0	80.0	3.5 2.5	0.8 0.6	2.5	0.8	木	2.5	片関撫角	1	平棟平造	脹切先	内反り	N70°E	－37 －30	鋒約1cm欠損
F－5	直刀	99.0	16.4	82.6	3.4 3.1	1.0 0.6	2.0		木		片関斜角	1	平棟平造	脹切先	内反り	S 5°E	－34 －35	
F－6	直刀	97.6	18.7	78.9	3.2 2.8	1.0 0.6	2.4 1.8	0.8 0.6		2.4	片撫茎抉	2	平棟平造	脹切先	内反り	N 0°	－41 －49	
F－7	直刀	(79.0)	(12.0)	(67.0)	4.0 3.0	1.0 0.8	3.0 1.0	1.5 0.5	鹿角	1.8	片関直斜	1	平棟平造	脹切先	内反り	N 4°W	－46 －52	直立斜角式
F－8	直刀	110.0	19.5	90.5	4.3 2.8	0.8 0.6	2.8 2.3	0.8 0.9	木	1.8	片直茎抉	1	平棟平造	脹切先	内反り	N 0°	－47 －52	
F－9	鉄剣	70.4	13.8	56.6	4.0 3.2	0.7 0.6	2.7 1.7	0.4	木？	2.0	両関直角	1	断面レンズ	ヘラ状		N44°W	－39 －52	
F－10	直刀	75.3	15.3	60.0	3.8 3.0	0.8 0.7	2.7 1.8	0.7	鹿角？	2.0	片関直角	2	平棟平造	脹切先	内反り	N46°W	－43 －50	

第７表　一時坂古墳墳丘出土鉄鏃観察表（カッコ内の数値は現存長）

図版番号	頸部	篦被	鏃身部	両刃/片刃	断面形	平面形	全長 (cm)	鏃身部長 (cm)	篦被部長 (cm)	茎部長 (cm)	重量(g)	方位	レベル	備考
F－11	短頸	関篦被	——	両刃	両丸	柳葉	(11.7)	10.3	1.2	(0.1)	15	N 0°	－30	Ⅰ類a
F－12	短頸	関篦被	関有	両刃	両丸	柳葉	(12.2)	10.0	1.7	(0.5)	23	N 2°W	－37 －39	Ⅰ類a
F－13	短頸	関篦被	関有	両刃	両丸	柳葉	(11.8)	9.9	1.6	(0.3)	20	→F- 12		Ⅰ類a
F－14	短頸	関篦被	関有	両刃	両丸	柳葉	13.9	8.9	1.0	4.0	20	→F-105		Ⅰ類a
F－15	短頸	関篦被	関無	両刃	両丸	柳葉？	13.2	6.6	1.3	5.3	16.5	→F-105		Ⅰ類a
F－16	短頸	——	——	両刃	両丸	柳葉？	(3.8)	(3.8)	——	——	7.5			Ⅰ類a
F－17	短頸	関篦被	腸扶	両刃	平刃？	柳葉	(11.0)	(6.8)	4.9	(1.3)	18.7	N 1°W	－33 －30	Ⅰ類b
F－18	短頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃？	柳葉	11.7	4.4	6.4	2.3	13	N75°E	－37 －38	Ⅰ類c
F－19	短頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃？	柳葉	9.0	4.4	4.4	3.8	13.5	→F－18		Ⅰ類c
F－20	短頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃？	柳葉	12.3	4.1	4.0	5.4	11.5	→F－18		Ⅰ類c

図版番号	頸部	篦被	鏃身部	両刃/片刃	断面形	平面形	全長(cm)	鏃身部長(cm)	篦被部長(cm)	茎部長(cm)	重量(g)	方位	レベル	備考
F－21	短頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃	柳葉	(12.1)	4.6	5.6	(4.1)	13	→F－18		Ⅰ類c
F－22	短頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃？	柳葉	(11.4)	4.5	4.2	(4.2)	12	→F－18		Ⅰ類c
F－23	短頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃	柳葉	(9.7)	(4.1)	4.1	(2.8)	10	→F－18		Ⅰ類c
F－24	短頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃？	柳葉	12.7	4.3	5.5	4.8	14	→F－18		Ⅰ類c
F－25	短頸	関篦被	腸扶	両刃	平or片切刃？	柳葉	(11.7)	4.5	4.4	(4.5)	16	S 1°W		Ⅰ類c
F－26	短頸	関篦被	腸扶	両刃	平刃？	柳葉	(11.9)	(3.3)	6.7	(3.4)	14	S20°E		Ⅰ類c
F－27	短頸	関篦被	腸扶	両刃	平刃？	柳葉	(7.8)	4.7	3.9	(0.6)	9			Ⅰ類c
F－28	長頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃？	柳葉	(16.1)	2.5	9.7	(4.6)	20	S 0°		Ⅱ類a
F－29	長頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃	柳葉	(19.6)	3.4	10.0	(6.8)	26.3	N 8°E	－8 －10	Ⅱ類a
F-30ア	長頸	関篦被	？	両刃	片切刃	柳葉？	(18.2)	？	？	(6.3)	43	→F－29		Ⅱ類a
イ	長頸	関篦被	？	両刃	？	柳葉？	(19.0)	？	？	(5.5)		→F－29		Ⅱ類a
F－31	長頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃？	柳葉	16.7	3.0	9.4	5.3	22.5	N 1°W	－38 －36.5	Ⅱ類a
F－32	長頸	——	腸扶	両刃	片切刃	柳葉	(18.3)	3.0	(6.3)	——	10.7	→F－31	－38 －36.5	Ⅱ類a
F－33	長頸	——	腸扶	両刃	片切刃or片丸	柳葉	(6.2)	2.7	(4.1)	——	8	→F－31		Ⅱ類a
F－34	長頸	——	腸扶	両刃	？	柳葉	(12.3)	(2.8)	(9.5)	(8.0)	16			Ⅱ類a
F－35	？	——	——	両刃	？	柳葉	(2.5)	(2.5)	——	——	3			Ⅱ類a
F－36	長頸？	——	腸扶	両刃	？	柳葉	(2.6)	(2.6)	——	——	2.6			Ⅱ類a
——	？	——	腸扶	両刃	？	柳葉	(3.8)	3.8	——	——	5.3			Ⅱ類a
F－37	長頸？	——	腸扶	両刃	平刃？	柳葉？	(6.0)	(1.6)	(4.4)	——	6.5	→F－18		Ⅱ類a
F－38	長頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃or片丸	柳葉	(13.2)	4.3	7.7	(2.3)	12.7	→F－17		Ⅱ類a
F－39	長頸	関篦被	腸扶	両刃	片切刃	柳葉	(13.6)	3.7	6.4	(4.4)	11.1	→F－17		Ⅱ類a
F－40	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(13.3)	2.7	8.2	(2.9)	13.3	N18°W	－32	Ⅱ類b
F－41	長頸	関篦被	腸扶	片刃	片切刃	片刃箭	(12.4)	3.6	7.9	(1.3)	12	→F－18		Ⅱ類b
F－42	長頸	関篦被	腸扶	片刃	片切刃？	片刃箭	(14.2)	(2.4)	7.5	(4.4)	23	→F－18		Ⅱ類b
F－43	長頸	関篦被	腸扶	片刃	片切刃	片刃箭	(12.8)	3.0	8.4	(2.2)	14.5	N40°W		Ⅱ類b
F－44	長頸	関篦被	腸扶	片刃	片切刃	片刃箭	(16.5)	(2.7)	9.9	(4.9)	17.5	→F－31		Ⅱ類b

図版番号	頸部	篦被	鏃身部	両刃/片刃	断面形	平面形	全長(cm)	鏃身部長(cm)	篦被部長(cm)	茎部長(cm)	重量(g)	方位	レベル	備考
F－45	長頸	——	腸扶	片刃	片切刃or平刃	片刃箭	(7.2)	3.3	(4.5)	——	5.9			Ⅱ類b
F－46	長頸	——	腸扶	片刃	?	片刃箭	(2.9)	2.4	(1.0)	——	3.1	S25°W	−26	Ⅱ類b
F－47	長頸	関篦被	腸扶	片刃	片切刃	片刃箭	(5.6)	2.7	(3.4)	——	4.8			Ⅱ類b
F－48	長頸	関篦被	腸扶	片刃	片切刃	片刃箭	(9.0)	2.5	(6.9)	——	12.3			Ⅱ類b
F－49	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(15.6)	(2.9)	8.1	(5.2)	15	→F－18		Ⅱ類b
F－50	長頸?	——	腸扶	片刃	片切刃?	片刃箭	(8.5)	(?)	(?)	——	7.4	→F－18		Ⅱ類b
F－51	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(11.2)	(3.0)	9.0	(0.5)	13.7			Ⅱ類b
F－52	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃or片切刃	片刃箭	(14.5)	2.9	8.3	(4.2)	14.5			Ⅱ類b
F－53	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃?	片刃箭	(14.6)	3.1	8.5	(4.1)	16			Ⅱ類b
F－54	長頸	——	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(8.1)	(3.2)	(5.3)	——	8.4	S3°E		Ⅱ類b
F－55	長頸	——	腸扶	片刃	片切刃?	片刃箭	(3.4)	(2.2)	(1.6)	——	3.2	→F-105		Ⅱ類b
F－56	長頸	——	腸扶	片刃	平刃?	片刃箭	(8.6)	2.8	?	——	9.6			Ⅱ類b
F－57	長頸	関篦被	——	——	——	——	(10.1)	——	(6.3)	(3.8)	11.8	→F－17		Ⅲ類
F－58	長頸	関篦被	——	——	——	——	(9.1)	——	(5.8)	(3.3)	7.8	→F－46		Ⅲ類
F－59	長頸	関篦被	——	——	——	——	(8.1)	——	(6.5)	(1.6)	6.6	S25°W	−26	Ⅲ類
F－60	?	関篦被	——	——	——	——	(7.7)	——	(3.3)	(4.4)	8	N1°W	−30	Ⅲ類
F－61	?	関篦被	——	——	——	——	(7.1)	——	(1.8)	(5.3)	5.3	→F－18		Ⅲ類
F－62	?	関篦被	——	——	——	——	(7.7)	——	(4.0)	(3.7)	5.6	→F－18		Ⅲ類
F－63	?	関篦被	——	——	——	——	(5.1)	——	(2.2)	(2.9)	5.5	→F－18		Ⅲ類
F－64	長頸	関篦被	——	——	——	——	(10.2)	——	(5.2)	(4.9)	9.8			Ⅲ類
F－65	長頸	関篦被	——	——	——	——	(9.1)	——	(8.3)	(1.7)	8.4			Ⅲ類
F－66	?	関篦被	——	——	——	——	(5.3)	——	(3.8)	(1.6)	6.2			Ⅲ類
F－67	?	関篦被	——	——	——	——	(11.7)	——	(3.1)	8.6	11.2	→F－31		Ⅲ類
F－68	?	関篦被	——	——	——	——	(11.0)	——	(3.9)	7.2	13.9	N1°W	−36 −32	Ⅲ類
F－69	?	関篦被	——	——	——	——	(7.5)	——	(0.6)	6.9	9.6	→F－68		Ⅲ類
F－70	?	関篦被	——	——	——	——	(7.5)	——	(2.2)	5.3	11.2	→F－68		Ⅲ類

図版番号	頸　部	篦　被	鏃身部	両刃/片刃	断面形	平面形	全　長 (cm)	鏃身部長 (cm)	篦被部長 (cm)	茎部長 (cm)	重量(g)	方　位	レベル	備　考
F－71	?	——	——	——	——	——	(5.3)	——	——	5.3	5.8	→F－68		Ⅲ類
F－72	?	関篦被	——	——	——	——	(6.8)	——	(2.4)	4.6	8.3	→F－68		Ⅲ類
F－73	長　頸	関篦被	——	——	——	——	(10.6)	——	(7.1)	(3.5)	14			Ⅲ類
F－74	長　頸	関篦被	——	——	——	——	(12.0)	——	(9.7)	(2.2)	12.2			Ⅲ類
F－75	長　頸	関篦被	——	——	——	——	(8.4)	——	(7.8)	(0.6)	10.7	S27°W		Ⅲ類
F－76	?	関篦被	——	——	——	——	(6.9)	——	(1.6)	(5.3)	10.7			Ⅲ類
F－77	?	関篦被	——	——	——	——	(4.6)	——	(3.5)	(1.1)	6.9			Ⅲ類
F－78	?	関篦被	——	——	——	——	(3.1)	——	(2.1)	(1.0)	4.7			Ⅲ類
F－79	?	——	——	——	——	——	(3.1)	——	(3.1)	——	3.8	→F－17		Ⅲ類
F－80	?	——	——	——	——	——	(3.1)	——	(3.1)	——	2.5			Ⅲ類
F－81	?	——	——	——	——	——	(3.4)	——	(3.4)	——	4.2	→F－68		Ⅲ類
F－82	?	——	——	——	——	——	(5.7)	——	(5.7)	——	5.4	→F-105		Ⅲ類
F－83	?	——	——	——	——	——	(4.2)	——	(4.2)	——	6.6	→F-105		Ⅲ類
F－84	?	——	——	——	——	——	(2.9)	——	(2.9)	——	1.9	→F-105		Ⅲ類
F－85	?	——	——	——	——	——	(4.4)	——	(4.4)	——	4.8			Ⅲ類
F－86	?	——	——	——	——	——	(3.9)	——	(3.9)	——	3.2			Ⅲ類
F－87	?	——	——	——	——	——	——	——	——	(3.5)	——	→F－18		Ⅲ類
F－88	?	——	——	——	——	——	——	——	——	(3.0)	——	→F－18		Ⅲ類
F－89	?	——	——	——	——	——	——	——	——	(2.7)	——	→F－18		Ⅲ類
F－90	?	——	——	——	——	——	——	——	——	(3.0)	——	→F－18		Ⅲ類
F－91	?	——	——	——	——	——	——	——	——	(2.7)	——	→F－18		Ⅲ類
F－92	?	——	——	——	——	——	——	——	——	(1.6)	——	→F－18		Ⅲ類
F－93	?	——	——	——	——	——	——	——	——	(1.4)	——	→F－18		Ⅲ類
F－94	?	——	——	——	——	——	(4.7)	——	——	(4.7)	2.4	→F-105		Ⅲ類
F－95	?	——	——	——	——	——	(3.7)	——	——	(3.7)	1.3	→F－68		Ⅲ類
F－96	?	——	——	——	——	——	(2.8)	——	——	(2.8)	1.0	→F－68		Ⅲ類

図版番号	頸部	篦被	鏃身部	両刃/片刃	断面形	平面形	全長 (cm)	鏃身部長 (cm)	篦被部長 (cm)	茎部長 (cm)	重量(g)	方位	レベル	備考
F－97	?	——	——	——	——	——	(2.9)	——	——	(2.9)	2.1	→F－68		Ⅲ類
F－98	?	——	——	——	——	——	(2.3)	——	——	(2.3)	0.4	→F-105		Ⅲ類
F－99	?	——	——	——	——	——	(1.8)	——	——	(1.8)	1.0	→F-105		Ⅲ類
F－100	?	——	——	——	——	——	(3.7)	——	——	(3.7)	1.8			Ⅲ類
F－101	?	——	——	——	——	——	(2.6)	——	——	(2.6)	0.5			Ⅲ類
F－102	?	——	——	——	——	——	(2.1)	——	——	(2.1)	0.7			Ⅲ類
F－103	?	——	——	——	——	——	(2.3)	——	——	(2.3)	1.0			Ⅲ類
F-104ア	短頸	関篦被	腸扶	両刃	平刃?	柳葉	(10.1)	4.5	4.2	(2.7)	計390.0	N80°E	－33 －29	Ⅰ類b
イ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	15.8	3.2	7.6	5.6				Ⅱ類b
ウ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	15.2	3.1	7.9	4.8				Ⅱ類b
エ	長頸	関篦被	?	片刃	平刃	片刃箭	(14.3)	2.8	7.5	(3.8)				Ⅱ類b
オ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	片切刃?	片刃箭	(15.0)	?	?	(4.8)				Ⅱ類b
カ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(16.7)	3.7	8.2	(5.9)				Ⅱ類b
キ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(13.3)	3.0	7.0	(3.6)				Ⅱ類b
ク	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(14.9)	3.5	8.2	(3.8)				Ⅱ類b
ケ	長頸	関篦被	?	片刃	平刃?	片刃箭	(13.7)	?	?	(1.8)				Ⅱ類b
コ	長頸	関篦被	腸扶?	片刃	平刃	片刃箭	(16.9)	?	?	5.9				Ⅱ類b
サ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(14.1)	3.2	7.0	(4.0)				Ⅱ類b
シ	長頸	関篦被	?	片刃	片切刃?	片刃箭	(11.5)	?	?	(1.6)				Ⅱ類b
ス	長頸	関篦被	?	片刃	?	片刃箭	(14.1)	?	?	2.6				Ⅱ類b
セ	長頸	関篦被	?	片刃	?	片刃箭	(12.2)	3.4	7.7	(1.6)				Ⅱ類b
ソ	長頸	関篦被	?	片刃	平刃	片刃箭	(17.2)	?	?	(2.2)				Ⅱ類b
タ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃?	片刃箭	(12.1)	2.9	6.4	(3.1)				Ⅱ類b
チ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(13.3)	2.5	8.0	(3.2)				Ⅱ類b
ツ	長頸	関篦被	腸扶	片刃	平刃	片刃箭	(13.8)	3.4	7.5	(3.6)				Ⅱ類b
テ	長頸	関篦被	?	片刃	平刃	片刃箭	(11.7)	?	?	(0.9)				Ⅱ類b

図版番号	頸部	篦被	鏃身部	両刃/片刃	断面形	平面形	全長(cm)	鏃身部長(cm)	篦被部長(cm)	茎部長(cm)	重量(g)	方位	レベル	備考
F-104ト	長頸	関篦被	?	片刃	平刃	片刃箭	16.1	?	?	5.0				Ⅱ類b
ナ	長頸	関篦被	?	片刃	平刃	片刃箭	(11.7)	?	?	(1.3)				Ⅱ類b
ニ	?	関篦被	腸扶	?	平刃?	?	(13.8)	?	?	(4.9)				Ⅱ類b
ヌ	長頸	関篦被	?	片刃	平刃?	片刃箭	17.2	?	?	5.2				Ⅱ類b
ネ	長頸	関篦被	?	片刃?	平刃?	片刃箭	(13.7)	?	?	(2.9)				Ⅱ類b
ノ	長頸	関篦被	?	片刃	?	片刃箭	(14.4)	?	?	(4.1)				Ⅱ類b
ハ	長頸	関篦被	?	片刃	?	片刃箭	(12.9)	?	?	(1.8)				Ⅱ類b
ヒ	長頸	関篦被	?	片刃	?	片刃箭	(16.7)	?	?	(5.1)				Ⅱ類b
F-105ア	短頸	無篦被?	関有	両刃	両丸?	柳葉	(15.9)	9.7	(5.8)		計 366.0	N0°	元東-210	Ⅰ類a
イ	短頸	無篦被?	?	両刃	両丸?	柳葉	16.3	?	?	?			西-211	Ⅰ類a
ウ	長頸	関篦被	腸扶	両刃	?	柳葉	(15.6)	4.3	10.2	(2.5)			先東-210	Ⅱ類a
エ	長頸	関篦被	?	両刃	?	柳葉	17.9	?	?	4.4			西-211	Ⅱ類a
オ	長頸	関篦被	腸扶	両刃	?	柳葉	18.0	4.3	11.0	4.4				Ⅱ類a
カ	短頸	関篦被	?	両刃	両丸?	柳葉	16.9	?	?	5.4				Ⅰ類a
キ	短頸	関篦被	?	両刃	?	柳葉	13.5	?	?	?				Ⅰ類a
ク	短頸	関篦被	?	両刃	両丸?	柳葉	17.9	?	?	6.4				Ⅰ類a
ケ	短頸	関篦被	?	両刃	両丸?	柳葉	16.5	?	?	5.1				Ⅰ類a
コ	短頸	関篦被?	?	両刃	両丸	柳葉	16.7	?	?	5.5				Ⅰ類a
サ	短頸	?	?	両刃	?	柳葉	17.1	?	?	3.9				Ⅰ類a
シ	短頸	?	?	両刃	?	柳葉	16.7	?	?	5.1				Ⅰ類a
ス	長頸	?	腸扶	両刃	?	柳葉	20.0	3.7	?	?				Ⅱ類a
セ	長頸	関篦被	腸扶	両刃	?	柳葉	17.9	3.4	11.0	4.5				Ⅱ類a

第８表　一時坂古墳墳丘出土刀子観察表

図版番号	全　長（cm）	重量（g）	方　位	レベル	備　考
F－106	(15.7)	35.3	S70°W	E-31 W-31	
F－107	10.7	14.1	N60°W	－27	
F－108	(10.7)	21.7		－20	鹿角柄
F－109	(11.5)	19.8	N 8°W	－33.5	
F－110	(11.0)	22.3	N14°W	E-7 W-7	
F－111	(8.6)	12.3	N73°E		
F－112	(6.3)	8.5	S75°E	－40.5	
F－113	(14.3)	31.8		－31	鹿角柄
F－114	14.0	28.3		－32	鹿角柄
F－115	17.8	51.7	N75°E		
F－116	16.3	30.9			
F－117	(12.8)	24.8	S85°W		鹿角柄
F－118	(9.2)	13.0	N 1°W	－37	鹿角柄

注１……レベルは全てレベル原点Ａ－２（標高 798.578m ）を基準としている。

注２……第７表において錆化のため計測・分類が困難な項目については？を記した。なお、鉄鏃の分類および各部名称については、小久保他1983・飯塚1987等を参考にした。

玉類（第74図・第75図・第９表）

一時坂古墳の墳丘上からは、図示した204点の玉類が発見された。これらの内の多くは、鉄製品など他の遺物とともに検出されており、埋葬主体に伴う副葬品であることは明らかである。しかし、ごく小さいものが多いこともあって、一部は発掘によって取り除かれた墳丘の盛り土をフルイにかけることによって検出されたものである。

玉類の種類としては、勾玉・管玉・小玉があり、素材としては石製とガラス製とがある。これらは11の類型に分類することが可能であった。各類型の詳細については後述する。

他の副葬品とともに出土した玉類の大部分は、墳丘上の最も東側の埋葬主体を形成すると考えられる鉄剣（Ｆ－２）の近くに３箇所、これより西側に３本目の直刀（Ｆ－５）の鍔付近に１箇所の合計４集中をもって濃密分布状態を示した。また、これらの中間に位置する直刀Ｆ－１付近からもやや集中的に数点が出土している。

第１集中はＦ－２の切先方向にあって、類型ＳＳ－Ⅰに属する石製小玉12点から成る。これらは極めて規格性が高く、製作法が特徴的な一群である。

第２集中はＦ－２束の東南方向に隣接し、41点より成る。内訳は、勾玉３点（類型Ｍ－Ⅰ・Ｍ－Ⅱ・Ｍ－Ⅲ各１点）、管玉７点（類型Ｋ－Ⅱ）、石製小玉４点（類型ＳＳ－Ⅱ）、ガラス製小玉27点（類型ＳＧ－Ⅰが５点・ＳＧ－Ⅱが３点・ＧＳ－Ⅲが19点）のである。本集中は最も濃密に集中し、かつ内容がバラエティーに富んでいる点、特徴的である。

第３集中はこれよりやや南側にあって、66点から成る。内訳は、管玉６点（類型Ｋ－Ⅱ）、ガラス製小玉60点（類型ＳＧ－Ⅰが２点・類型ＳＧ－Ⅲが48点・類型ＳＧ－Ⅳが10点）で、ガラス製小玉が大部分を占める一群である。

第４集中はＦ－５の鍔付近にあって、48点より成る。内訳は管玉１点（類型Ｋ－Ⅱ）、石製小玉３点（類型ＳＳ－Ⅱ）、ガラス製小玉44点（類型ＳＧ－Ⅰが２点・類型ＳＧ－Ⅱが１点・類型ＳＧ－Ⅲが36点・類型ＳＧ－Ⅳが５点）で、これもガラス製小玉が大部分を占める。

また、Ｆ－１に隣接して出土した玉類の内訳は、ガラス製小玉６点（類型ＳＧ－Ⅲが５点・類型ＳＧ－Ⅳが１点）である。

これらの内、特に濃密な分布を示す第１・第２集中については、埋葬時の状態をある程度類推することができる。すなわち、前者は点数と高い規格性からみて一種の腕輪として、また後者は点数の多さと内容の豊富さ等から首飾りとしての使用が想定されよう。

以上、玉類分布の特徴について略述した。一時坂古墳は中期古墳としては、比較的豊富な副葬品を有し、特に鉄製品の多さは特徴的であるが、玉類もガラス製小玉を中心に非常に多くが検出された点は注意される。

本遺跡出土の玉類については、種類・形態・素材・大きさ・製作法等によって、次のように分類することができた。以下、類型別に特徴を記述することとしたい。

－種類－	－類型－	－素材－	－大きさ－	－製作法その他－
・勾玉	M－I	石製	大	研磨
	M－II	石製	中	研磨
	M－III	ガラス製	小	溶製・研磨
・管玉	K－I	石製	大	研磨
	K－II	石製	小	研磨
・小玉	SS－I	石製	大	研磨・管玉分割か
	SS－II	石製	小	研磨・管玉分割か（？）
	SG－I	ガラス製	大	溶製・研磨
	SG－II	ガラス製	中	溶製・研磨
	SG－III	ガラス製	小	溶製
	SG－IV	ガラス製	極小	溶製

（類型M－I）

石製の勾玉である。本遺跡の出土品の中では大型品に属し、1点のみが検出された（J－1）。石質は黄褐色半透明の玉髄で、長さ37.2cmを計る。完形品で、全面にわたってよく研磨されている。

（類型M－II）

石製の勾玉である。本遺跡の出土品の中では中型品で、1点が検出された（J－2）。石質は深緑色の碧玉で、長さ22.9cmを計る。完形品で、前面にわたってよく研磨され、器面には光沢が認められる。

（類型M－III）

ガラス製の勾玉である。本遺跡の出土品の中では小型品で、1点が検出された（J－3）。ガラス色はコバルトブルーで、本遺跡出土の玉類の大部分を占めるガラス製小玉の色・質と同様のものである。現在長12.5cmを計るが、下部を欠損している。平面的な形態は石製の勾玉と同様と考えられるが、両面とも平面的に仕上げられ、断面形はやや偏平である。ガラス溶製後、研磨によって成形されたものである。

（成形K－I）

石製の管玉である。本遺跡の出土品の中では径が大きい一群で、明らかに他と区別され大型品と言える。最大径はおよそ7～8mmである。本類型は、一時坂古墳からは1点も検出されず、B地区の3号周溝状遺構の溝内で発見された方形の土壙墓中より7点が出土している。（後述）

（類型K－II）

石製の管玉である。本遺跡の出土品の中では径が小さく、小型品に属する。最大径はおよそ5㎜で、一時坂古墳のみから15点が出土している。（J－4～J－18）。

長さは13㎜から31㎜といろいろであるが、主体を成すのは20㎜前後のものである。色調はいずれも灰青色から灰緑色で似ているが、石質は様々である。一般に古墳出土の管玉は碧玉製が多いが、本古墳では4点のみ（J－6・10・17・18）で少ない。その他のものは、色調は類似するものの、碧玉に比べかなり軟弱な石質の石を素材としている。これらには滑石や一種の凝灰岩が含まれるが、その他これらに似た石質不明のものもあるため、一覧表では仮に「滑石等」と一括した。

石質に係わらず、加工状態は精緻で、全面研磨によって入念に成形されている。標準より長さの短いJ－13・15は、端部が斜めであり、一部に破損痕もあって、欠損後の再加工品である可能性もある。標準より長さの長いのはJ－18の1点のみである。J－9は片端に穿孔痕が2つ認められる。内1つは途中で作業が中断されており、穿孔の失敗の痕跡であろう。

（類型SS－I）

石製の小玉である。石製小玉の中では大型品で、以下に述べる通りかなりの斉一性を有する特徴的な類型である。14点が検出されているが（J－19～J－32）、J－31・32を除くこの内の12点は「玉第1集中」からの一括出土である。

石質は全く同じで（灰青色の滑色に類する石）ある。また、法量的にも極めて規格性が高く、径は4.1～4.5㎜、厚さは2.0～2.7㎜の範囲に入り、同時に生産されたものであると考えられる。この4.1～4.5㎜という径は、本古墳出土の管玉の径に概ね一致するものである。断面形は整った長方形となっている。また、穿孔について観察すると、他の玉類に比べ直線的に成され、端部において盃状に拡がることがほとんどない。これは、穿孔作業が端部成形より先行して行われたことを示すものと考えられる。これらのことから、本類型に属する玉は、「管玉」もしくは「管玉状のもの」を分割することによって生産されたものである可能性がある。

（類型SS－II）

石製の小玉である。石製小玉の中では小型品である。9点検出されている（J－33～J－41）。この内の4点が「玉第2集中」から、3点が「玉第4集中」から、それぞれ他の玉類とともに集中的に出土している。

石質や加工の特徴は、類型SS－Iとほぼ共通するが、類型内における斉一性はそれほど感じられない。径2.5㎜～3.0㎜、厚さは1.0～2.2㎜を計る。形態的特徴からみて、製作方法としては類型SS－Iと同様、「管玉状のもの」の分割も考えられるが、径が本古墳出土の管玉類とは一致していないこともあって不明確である。

（類型SG－I）

ガラス製の小玉である。本古墳出土のガラス製小玉のなかでは、径が大きく、大型品に属する。

J－42～J－51の10点が出土している。この内、5点が「玉第2集中」から、2点が「玉第3集中」から、2点が「玉第4集中」から、それぞれ他の玉類とともに出土している。

最大径は5.2㎜以上で、他類型からは法量的に明確に区分される。厚さは3.3㎜～6.6㎜と様々で、断面形も、長方形状・台形状・樽状などいろいろある。ガラスの色調としては、9点が小玉の大部分と同じくコバルトブルーで、1点がモスグリーンである。製作法としては、ガラス溶製後の研磨が認められる。研磨の度合いは様々であるが、特に上下の端部は入念に磨かれ、平面的に面取りされるものが多い。穿孔部についても研磨の認められるものがある。

（類型ＳＧ－II）

ガラス製の小玉である。本古墳出土のガラス製小玉のなかでは中型品に属する。J－52～J－55の4点が出土している。3点が「玉第2集中」、1点が「玉第4集中」からの出土である。

径は4.1㎜～4.9㎜と比較的そろっており、ＳＧ－Ⅰ・ＳＧ－Ⅲとは法量的に区別される。厚さは4点とも3.0㎜である。また、色調がすべてライトブルーであり、ガラス製小玉の他の類型においてはコバルトブルーが主体を成すのと比べ特異である。製作法としては、いずれも溶製後に研磨を行っている。特に上下の端部は平面的に磨かれている。

（類型ＳＧ－Ⅲ）

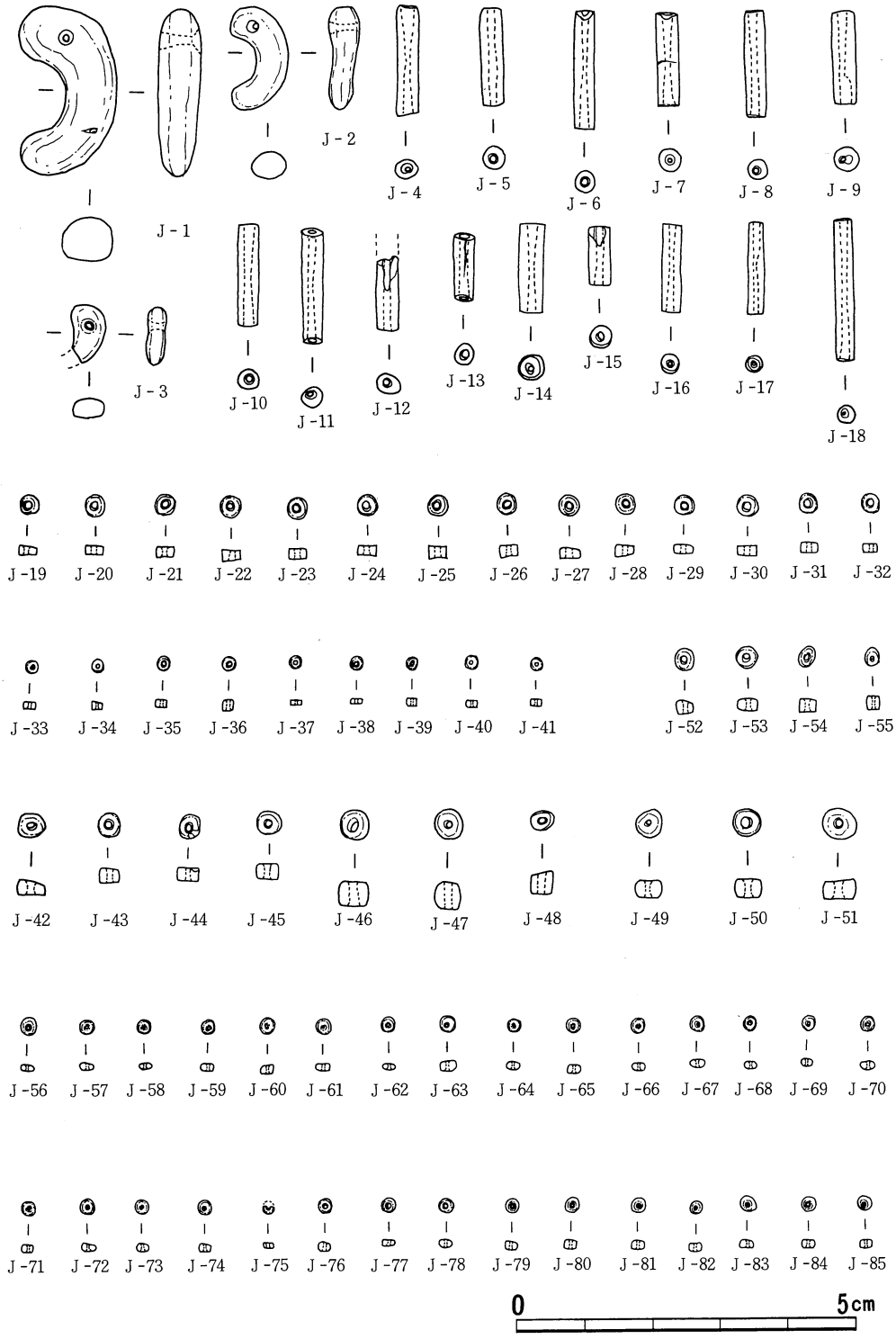
ガラス製の小玉である。本古墳出土のガラス製小玉のなかでは小型品で、本古墳出土の玉類の大部分に当たる64％がこの類型に属する。本類型の玉は、「玉第2集中」より19点、「玉第3集中」より48点、「玉第4集中」より36点、Ｆ－1に隣接して5点、その他墳丘上より22点の、合計130点が検出されている。

形態的特徴や製作法においては、概ね類型ＳＧ－Ⅳと共通しているが、径が2.1㎜以上4.0㎜未満で、ＳＧ－Ⅳとは区別される。厚さにはいろいろあるが、1.5㎜～2.0㎜の範囲に入るものが多い。色調にはコバルトブルー・ライトブルー・ライトグリーン・イエローの4種類がある。内訳は、コバルトブルー108点・ライトブルー19点・ライトグリーン2点・イエロー1点で、圧倒的にコバルトブルーが多く、全体の83％を占める。製作法としては、観察される限りは研磨が認められず、溶製に際して、凝固前に分割されたままであると考えられる。分割に当たっての「糸引き」の痕跡もいくつかに観察される。孔も溶製時において空間として残されたものであろう。こうした製作法を反映して上下の端部はあまり平面的でなく、断面形も楕円形に近い。

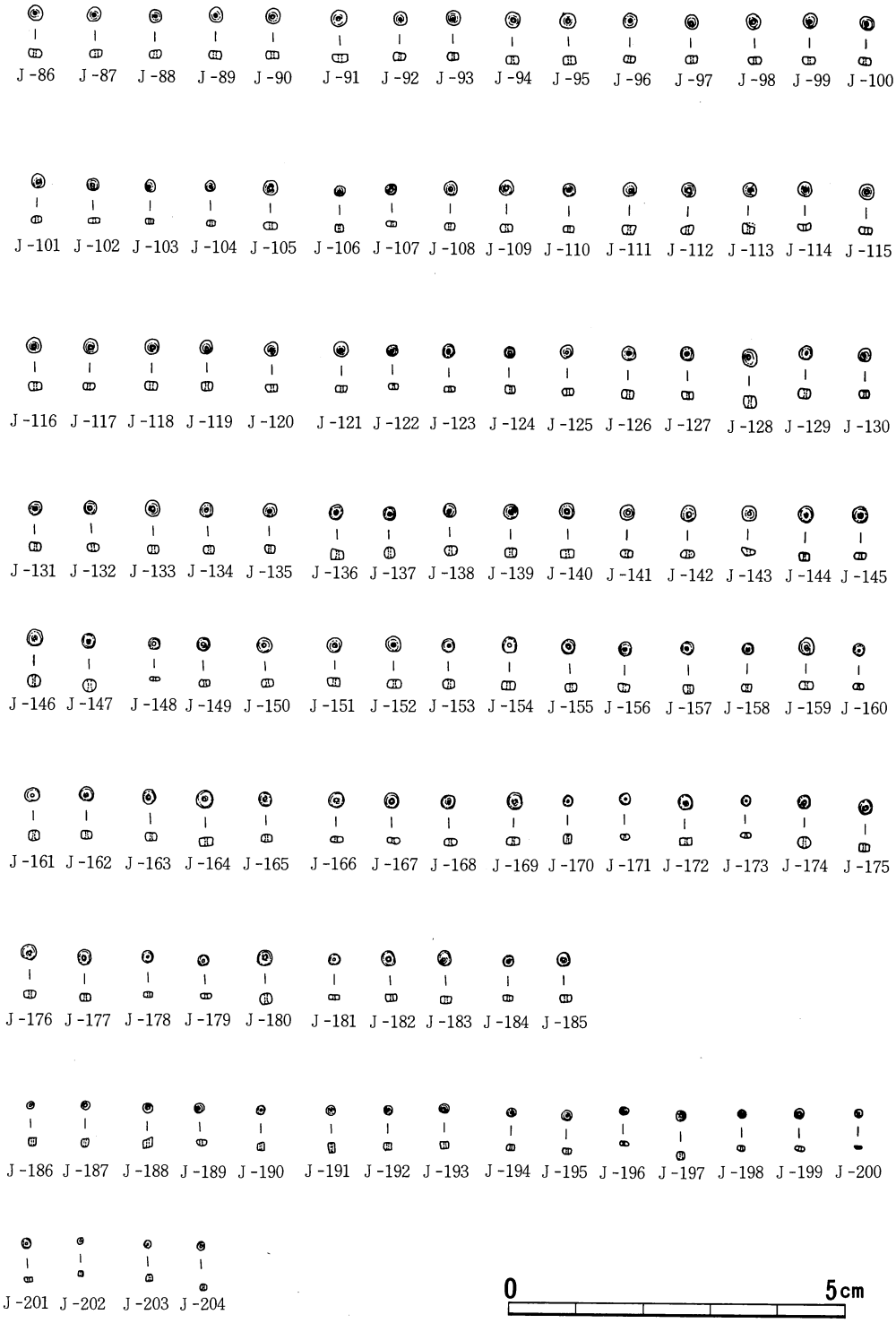
（類型ＳＧ－Ⅳ）

ガラス製の小玉である。本古墳出土のガラス製小玉のなかでは極小品である。19点出土し、この内の10点が「玉第3集中」から、5点が「玉第4集中」から、1点がＦ－1に隣接して検出された。他の3点は墳丘上から発見されたものである。

径は2.0㎜以下と極めて小さい。厚さは1.0㎜～2.1㎜で概ね薄いが、径に比して厚めのものもある。色調はコバルトブルー15点・ライトブルー3点・ライトグリーン1点である。製作法や形態的特徴は類型ＳＧ－Ⅲと共通している。



第74図　一時坂古墳墳丘出土玉類(1)(2/3)



第 75 図　一時坂古墳墳丘出土玉類(2)(2/3)

第９表　一時坂古墳墳丘出土玉類観察表

図版番号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(厚さ)(mm)	最大径(mm)	製　法	出土地点	出土レベル(cm)	備　考
J－1	勾　玉	M－Ⅰ	玉　髄	黄褐色半透明	37.2	11.3×9.3	研　磨	11G玉第2集中	－32	
J－2	勾　玉	M－Ⅱ	碧　玉	深緑色	22.9	7.7×6.1	研　磨	11G玉第2集中	－33.5	
J－3	勾　玉	M－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	(12.5)	6.3×4.1	溶製・研磨	11G玉第2集中	－32	下部欠損
J－4	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	24.3	5.0	研　磨	11G剣F-2に隣接	－2	
J－5	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰緑色	22.0	4.8	研　磨	11G玉第3集中	－27.5	
J－6	管　玉	K－Ⅱ	碧　玉	灰緑色	26.2	4.9	研　磨	11G玉第2集中	－29	
J－7	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰緑色	21.0	5.2	研　磨	11G玉第2集中	－29	中央部折損
J－8	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	23.5	4.4	研　磨	11G玉第2集中	－29	
J－9	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	20.6	5.2	研　磨	11G玉第2集中	－29	穿乱一回失敗
J－10	管　玉	K－Ⅱ	碧　玉	灰緑色	22.5	4.8	研　磨	11G玉第2集中	－32	
J－11	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	25.0	4.7	研　磨	11G玉第2集中	－32	
J－12	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	(16.4)	5.2	研　磨	11G玉第2集中	－32	半　欠
J－13	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	15.2	4.8	研磨(欠損後再研磨？)	11G玉第3集中	——	
J－14	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	19.9	5.6	研　磨	11G玉第3集中	——	
J－15	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	13.0	4.7	研磨(欠損後再研磨？)	11G玉第3集中	——	端部小欠損
J－16	管　玉	K－Ⅱ	滑石等	灰青色	19.8	4.2	研　磨	11G玉第3集中	——	
J－17	管　玉	K－Ⅱ	碧　玉	灰緑色	20.9	3.7	研　磨	11G玉第3集中	——	
J－18	管　玉	K－Ⅱ	碧　玉	灰緑色	31.7	4:0	研　磨	10H玉第4集中	——	
J－19	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.2	4.2	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－20	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.2	4.5	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－21	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.0	4.5	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－22	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.7	4.5	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－23	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.2	4.4	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－24	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.1	4.2	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－25	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.7	4.2	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－26	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.7	4.2	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－27	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.5	4.4	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－28	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.7	4.2	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－29	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.0	4.1	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土
J－30	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.2	4.5	研磨、管玉切断？	11G玉第1集中	－34.5	一括出土

図版番号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(厚さ)(mm)	最大径(mm)	製　法	出土地点	出土レベル(cm)	備　考
J－31	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.2	4.2	研磨、管玉切断？	墳丘上	フルイ	
J－32	小　玉	SS－Ⅰ	滑石等	灰青色	2.0	4.2	研磨、管玉切断？	墳丘上	フルイ	
J－33	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.5	2.7	研磨、管玉切断？	11G玉第2集中	－32	
J－34	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.7	2.5	研磨、管玉切断？	11G玉第2集中	－32	
J－35	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.8	3.0	研磨、管玉切断？	11G玉第2集中	－32	
J－36	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	2.2	2.8	研磨、管玉切断？	11G玉第2集中	－32	
J－37	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.0	2.5	研磨、管玉切断？	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－38	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.1	2.8	研磨、管玉切断？	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－39	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.8	2.8	研磨、管玉切断？	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－40	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.8	2.8	研磨、管玉切断？	墳丘上	フルイ	
J－41	小　玉	SS－Ⅱ	滑石等	灰青色	1.8	3.0	研磨、管玉切断？	墳丘上	フルイ	
J－42	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	3.4	5.8	溶製、研磨	11G玉第2集中	－32	
J－43	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	3.8	5.2	溶製、研磨	11G玉第2集中	－32	
J－44	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	3.3	5.4	溶製、研磨	11G玉第2集中	－32	
J－45	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	3.8	5.6	溶製、研磨	11G玉第2集中	－32	
J－46	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	5.6	6.8	溶製、研磨	11G玉第2集中	－32	
J－47	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	6.0	6.2	溶製、研磨	11G玉第3集中	——	
J－48	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	5.8	5.4	溶製、研磨	11G玉第3集中	——	
J－49	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	モスグリーン	4.0	6.2	溶製、研磨	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－50	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	4.4	6.1	溶製、研磨	10H玉第4集中	——	
J－51	小　玉	SG－Ⅰ	ガラス	コバルトブルー	4.3	7.5	溶製、研磨	墳丘上	フルイ	
J－52	小　玉	SG－Ⅱ	ガラス	ライトブルー	3.0	4.5	溶製、研磨	11G玉第2集中	－29	
J－53	小　玉	SG－Ⅱ	ガラス	ライトブルー	3.0	4.9	溶製、研磨	11G玉第2集中	－32	
J－54	小　玉	SG－Ⅱ	ガラス	ライトブルー	3.0	4.5	溶製、研磨	11G玉第2集中	－32	
J－55	小　玉	SG－Ⅱ	ガラス	ライトブルー	3.0	4.1	溶製、研磨	10H玉第4集中	——	
J－56	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.5	3.8	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－57	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.2	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－58	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.3	3.0	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－59	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－60	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.2	溶　製	11G玉第2集中	－32	

図版番号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(厚さ)(mm)	最大径(mm)	製　法	出土地点	出土レベル(cm)	備　考
J－61	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－62	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.1	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－63	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.7	3.3	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－64	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.0	2.9	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－65	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.8	3.0	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－66	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.0	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－67	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.2	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－68	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.1	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－69	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.0	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－70	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.1	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－71	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.0	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－72	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.1	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－73	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	2.9	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－74	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.1	溶　製	11G玉第2集中	－32	
J－75	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.3	2.3	溶　製	11G玉第3集中	——	半　欠
J－76	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－77	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.3	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－78	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－79	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－80	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－81	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－82	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－83	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.4	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－84	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－85	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－86	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－87	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－88	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－89	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－90	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	

図版番号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(厚さ)(mm)	最大径(mm)	製　法	出土地点	出土レベル(cm)	備　考
J－ 91	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 92	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 93	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 94	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 95	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	3.3	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 96	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 97	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 98	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－ 99	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－100	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－101	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	2.9	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－102	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.3	2.8	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－103	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	2.7	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－104	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.4	2.3	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－105	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－106	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	2.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－107	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.3	2.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－108	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－109	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－110	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.5	2.9	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－111	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－112	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－113	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.4	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－114	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－115	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－116	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－117	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.2	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－118	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	2.9	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－119	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－120	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.0	溶　製	11G玉第3集中	——	

図版番号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(厚さ)(mm)	最大径(mm)	製　法	出土地点	出土レベル(cm)	備　考
J－121	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－122	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトグリーン	1.3	2.4	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－123	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.2	2.9	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－124	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.5	2.3	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－125	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.5	2.8	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－126	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.1	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－127	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.0	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－128	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.7	3.4	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－129	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	3.0	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－130	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	2.8	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－131	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－132	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	2.9	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－133	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－134	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.1	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－135	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－136	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.3	3.3	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－137	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.2	2.8	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－138	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	3.0	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－139	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	3.2	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－140	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.0	3.1	溶　製	10H玉第4集中	－35	一括出土
J－141	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.7	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－142	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.1	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－143	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－144	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.2	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－145	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.6	3.3	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－146	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	3.6	3.3	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－147	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	3.8	3.1	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－148	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.0	2.3	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－149	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.3	3.0	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－150	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.9	3.1	溶　製	10H玉第4集中	——	

図版番号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(厚さ)(mm)	最大型(mm)	製　法	出土地点	出土レベル(cm)	備　考
J－151	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.0	3.2	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－152	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.0	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－153	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.1	2.9	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－154	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.1	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－155	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－156	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.0	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－157	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.0	2.9	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－158	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.9	2.4	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－159	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトグリーン	1.8	3.6	溶　製	11H、F-1隣接	——	
J－160	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	1.3	2.6	溶　製	11H、F-1隣接	——	
J－161	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.0	溶　製	11H、F-1隣接	——	
J－162	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.1	溶　製	11H、F-1隣接	——	
J－163	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	3.0	溶　製	11H、F-1隣接	——	
J－164	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.8	溶　製	墳　丘　上	採　集	
J－165	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.0	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－166	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.5	3.1	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－167	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.4	3.1	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－168	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	3.0	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－169	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.4	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－170	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	ライトブルー	2.1	2.5	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－171	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	イエロー	1.2	2.5	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－172	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.9	2.9	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－173	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.3	2.2	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－174	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.4	2.9	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－175	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.0	3.1	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－176	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.0	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－177	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.8	3.1	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－178	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.3	2.3	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－179	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.2	2.2	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－180	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	2.4	3.0	溶　製	墳　丘　上	フルイ	

図版番号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(厚さ)(mm)	最大径(mm)	製　法	出土地点	出土レベル(cm)	備　考
J－181	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.2	2.4	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－182	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.4	3.0	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－183	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.5	3.2	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－184	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.0	2.3	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－185	小　玉	SG－Ⅲ	ガラス	コバルトブルー	1.7	2.9	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－186	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.6	1.3	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－187	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.8	1.7	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－188	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	2.0	2.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－189	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.4	1.9	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－190	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.9	1.7	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－191	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	2.1	2.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－192	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	ライトブルー	1.5	1.9	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－193	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.5	2.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－194	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.2	1.8	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－195	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.1	2.0	溶　製	11G玉第3集中	——	
J－196	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	ライトグリーン	1.0	1.4	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－197	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.6	2.0	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－198	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.0	1.4	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－199	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.0	1.9	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－200	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	ライトブルー	0.9	1.9	溶　製	10H玉第4集中	——	
J－201	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	ライトブルー	1.2	2.0	溶　製	11H、F1-隣接	——	
J－202	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.1	1.2	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－203	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.3	1.2	溶　製	墳　丘　上	フルイ	
J－204	小　玉	SG－Ⅳ	ガラス	コバルトブルー	1.4	1.5	溶　製	墳　丘　上	フルイ	

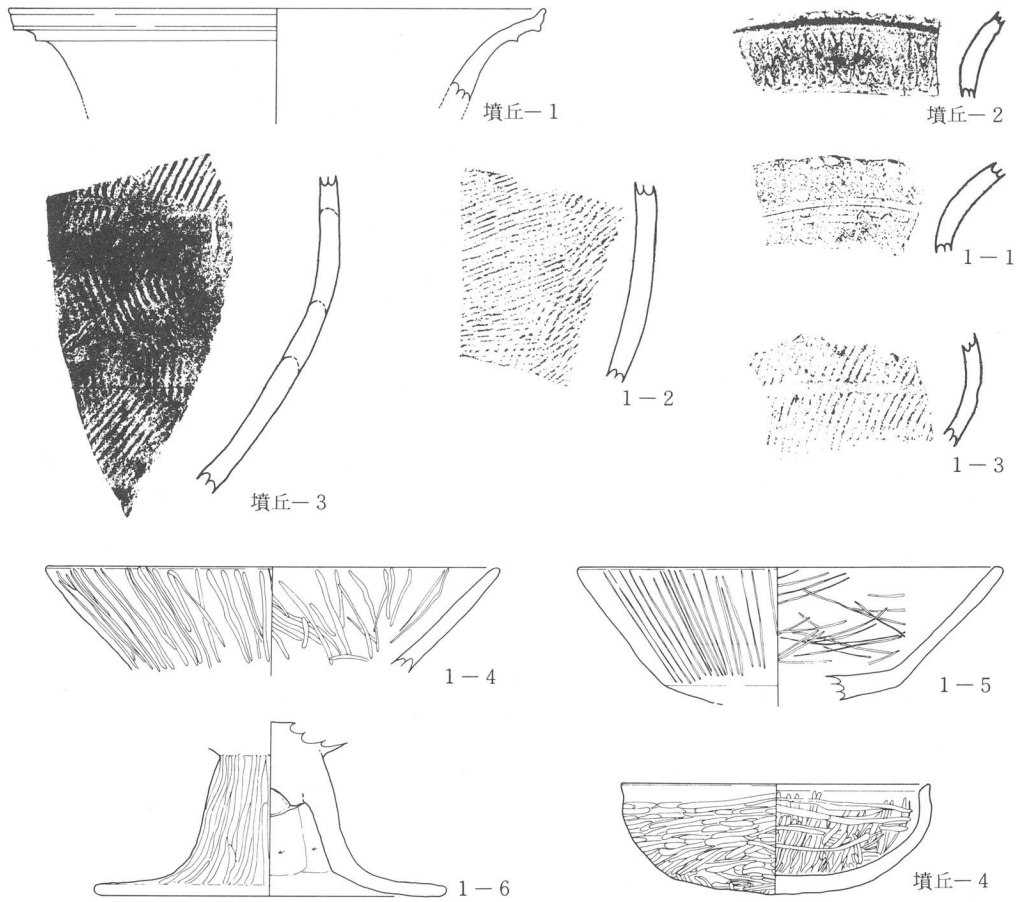
（注）　1．出土レベルは原点A－2（標高 798.578m ）からの比高を±cmで示す。

2．備考欄の「一括出土」は、集中区の中でも特に密集して一括出土したことを示す。

3．材質（石質）欄の「滑石等」は、滑石およびこれに類する比較的軟弱な石（凝灰岩その他を含むと考えられるが、不明が多い）を示す。

墳丘出土土器（第76図）

墳丘上からは須恵器片・土師器片などが検出されているが、完形の１点を除いてすべて破片であり、全体の器形を窺えるものはない。ただ、11・12Ｊグリッド付近に若干の土器片の集中が見られたため第１集中とした。（１－４～６）は土師器高坏の破片である。坏部（１－４・６）の外面にはタテヘラミガキが加えられ、内面には斜位または横位のヘラミガキが加えられ、内面には斜位または横位のヘラミガキが施されている。いずれも１／３～１／５周からの復元実測である。（１－４）と（１－６）は同一個体である可能性がある。第１集中からは他に須恵器片・土師器片が出土している。（墳丘－４）は12Ｇグリッドからの出土で、完形の内黒土師器坏である。口径12.0cm、器高4.4cmを測り、丸底を呈する。器形は後述する周湟内出土土器の分類の２類ａに近いが、口縁部がややくびれ、口縁内側に稜を有する。外面は口縁直下より密で丁寧なヨコヘラミガキ、底部は平行なヘラミガキを施す。内面はヨコナデの後、密な放射状のヘラミガキを施し、横位のヘラミガキを数条加える。底部には平行なヘラミガキを施す。他には須恵器甕・坏、土師器などの破片が検出されているが、埋葬主体に確実に伴うと思われるものはない。



第76図　一時坂古墳墳丘出土土器（1/3）

周湟内出土土器

以下、一時坂古墳周湟内出土土器について略述する。出土土器には、須恵器・土師器・内黒土器がある。これらの土器について、その形態的分類・出土地ごとの特徴などについて述べる。なお、個々の遺物の細部の特徴については第10表を参照されたい。

出土土器の分類規準について（第77～79図）

A．須恵器

一時坂古墳では、特に周湟中から、異存状況の良好な須恵器が何点か出土した。その出土状況の特徴は先述したとおりであり、ここでは個々の遺物の特徴について略述する。なお、須恵器各部の名称や調整手法の呼称については、『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古クラブ、1966）を参考にした。また、文中や観察表中に、回転ヘラケズリの方向について示したものは、すべてロクロの回転方向である。坏身・蓋については分類を設けたが、詳細は第５集中の項で述べる。

B．土師器

本墳の土師器は、須恵器に付随して、大部分が周湟底もしくは周湟埋積土中から出土した。その出土状況は、須恵器とセットで出土しており、主に第２・４・５・６集中にまとまっていた。出土した土師器は、形態的特徴から見て、幾つかのグループに分けられる。他資料との比較が充分でないため、系譜を考慮した分類に至らず、細分を心掛けた。

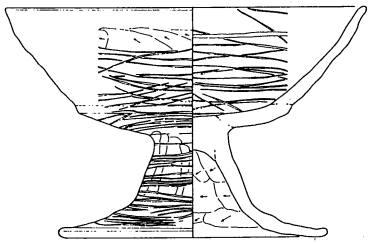
〔高坏〕

１類　坏体部は直線的で、口縁端部にやや強いヨコナデを加えて、軽く外反させるものが多い。坏部の段は弱く残る。脚部はあまり中膨らみに胴が張らず、ほぞ継ぎによって坏部と連結する。脚口縁部は内面のヨコナデによってやや内彎して甲高くなる。調整はヘラケズリを多用し、横方向の細いヘラミガキを加えるのが特徴的である。つくりが雑なものが多い。

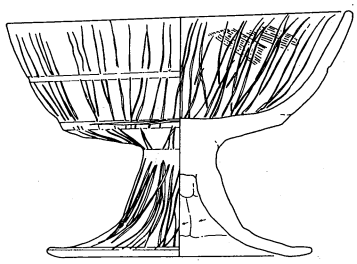
２類　１類と形態上は大差ない。坏部の底部からの立ち上がりが内彎して少し外へ張り出し、口縁が外反する。脚部はすべてほぞ継ぎで、脚口縁は外反しながら開く。そのため脚口縁端部は反り返って地面に付かない。タテヘラミガキを多用し、特徴ある暗文を描き出す。内面は坏底部と体部の屈曲部から放射状に磨き上げ、底部見こみ部は平行に磨く。

３類　坏体部に段を２つもつもの。坏体部から外反しながら立ち上がり、小さな段をなして内彎しながら大きく開く。脚部も、口縁端部にさらに粘土板を付けて内屈し垂下させる。大形で、第４集中（４－８）の１点のみの出土である。

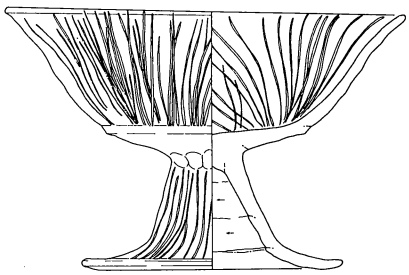
４類　４類ａは坏体部が直線的もしくはやや内彎し、１類に近い。脚部は２類とほぼ同じ。坏体部の中位外面の、おそらく粘土紐～帯の接合痕と思われる部位に、意図的に浅い沈線を施し、一



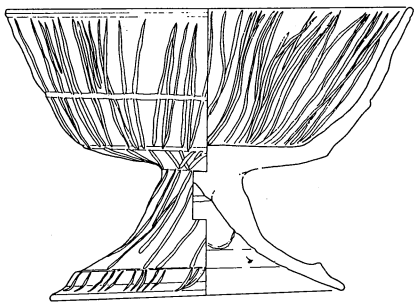
高坏1類



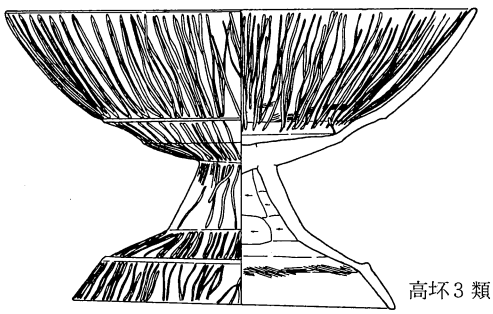
高坏4類a



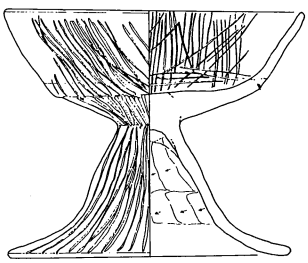
高坏2類



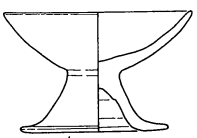
高坏4類b



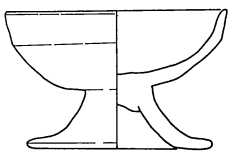
高坏3類



高坏5類



高坏6類a



高坏6類b

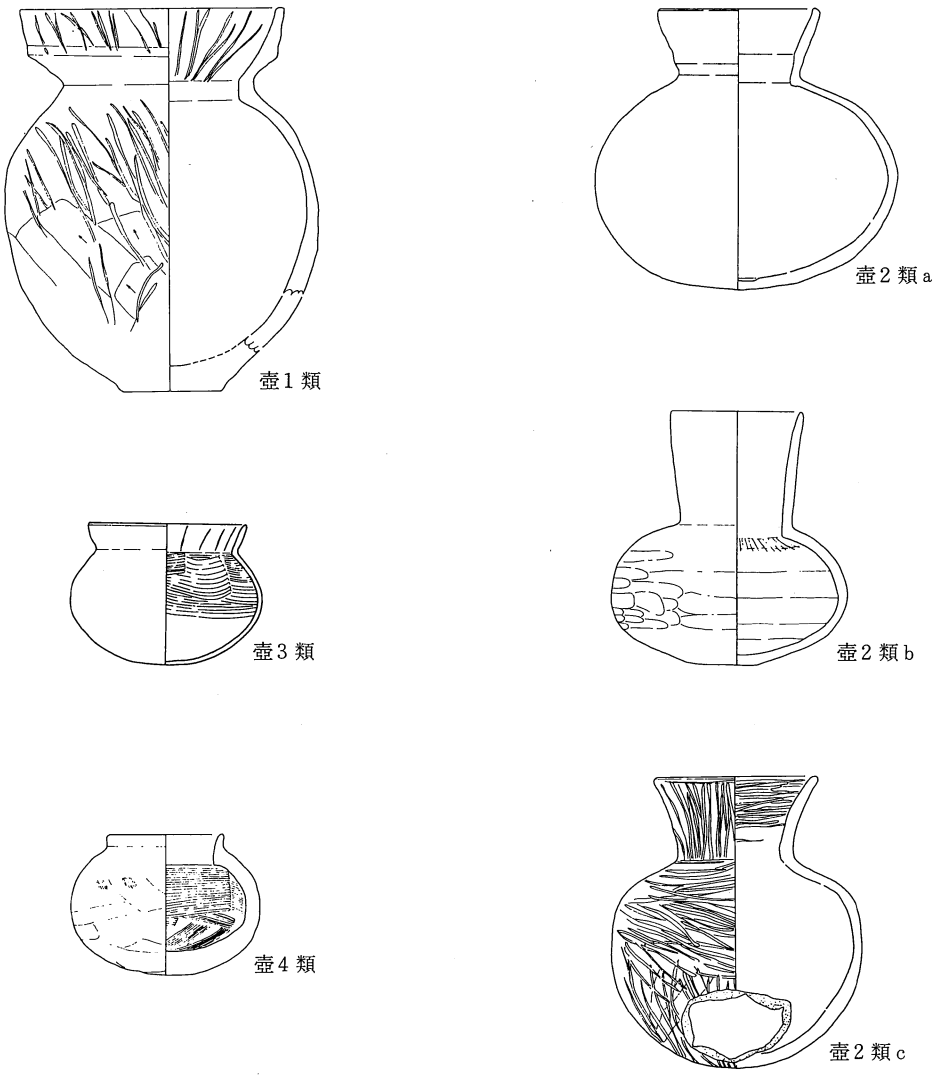
高坏形態分類図

第77図　一時坂古墳周湟出土土器形態分類図(1)

種の文様装飾効果を出しているものである。4類bは坏部の形態はほとんど4類aに同じ。ただ、大形で、脚部は滑らかに外反して開き、いわゆる3段階成形の高坏の形態に類似する。端部は3類と同じように、さらに段をもって垂下させる。須恵器の短脚高坏の端部に似ており、ロクロナデしたように丁寧に調整され、須恵器製作技法の影響も考えられる。

5類　坏部が小さく、口径と底径がほぼ同じくらいのものである。坏口縁は直線的であまりのびず、坏は浅い。脚上端は絞り込みが強く、胴中膨らみとなる。内外面をタテヘラミガキするが、横方向に加えるものがある。つくりが雑なものが多い。

壺形態分類図



第78図　一時坂古墳周湟出土土器形態分類図(2)

6類　小型の高坏である。6類aは酒坏形で、脚は2類に同じ。6類bは口縁が立ち上がり、模倣坏に脚を付けたものとも見られる。厚手でやや雑なつくりである。脚はいずれもほぞ継ぎする。

〔壺〕

1類　1個体のみである。平底球形の体部をもち、口縁部は大きく拡がってから垂直に立ち上がる。

2類　偏平な体部に、くびれた頸部から口縁部が長く立ち上がるもので、いわゆる坩の類である。aは、直線的に外上方へのびる口縁を持つ。bは垂直方向に長くのびる。口縁と体部の比は1：1に近い。cは、体部の肩が張り、口縁部は外反しながら開く。

3類　中位が張り出す体部で、口があまりすぼまらずに、くの字に折れて外上方へ短くのびる口縁部を有するものである。

4類　体部の形態は3類にほぼ同じ。口縁部は、体部の上端を上方へ小さく折り曲げた程度のものである。大小があるが、須恵器の無頸壺、もしくは有蓋短頸壺を模したものが含まれると思われる。

〔甕〕

小型の1類と、大型の2類がある。1類は、偏平なミカン形の体部をもち、口縁部の段や屈曲が明瞭なaと、肩が張り出し、口縁の屈曲があまり明瞭でないbがある。いずれも平底である。

〔坏〕

口縁部の形態で2つに分けた。

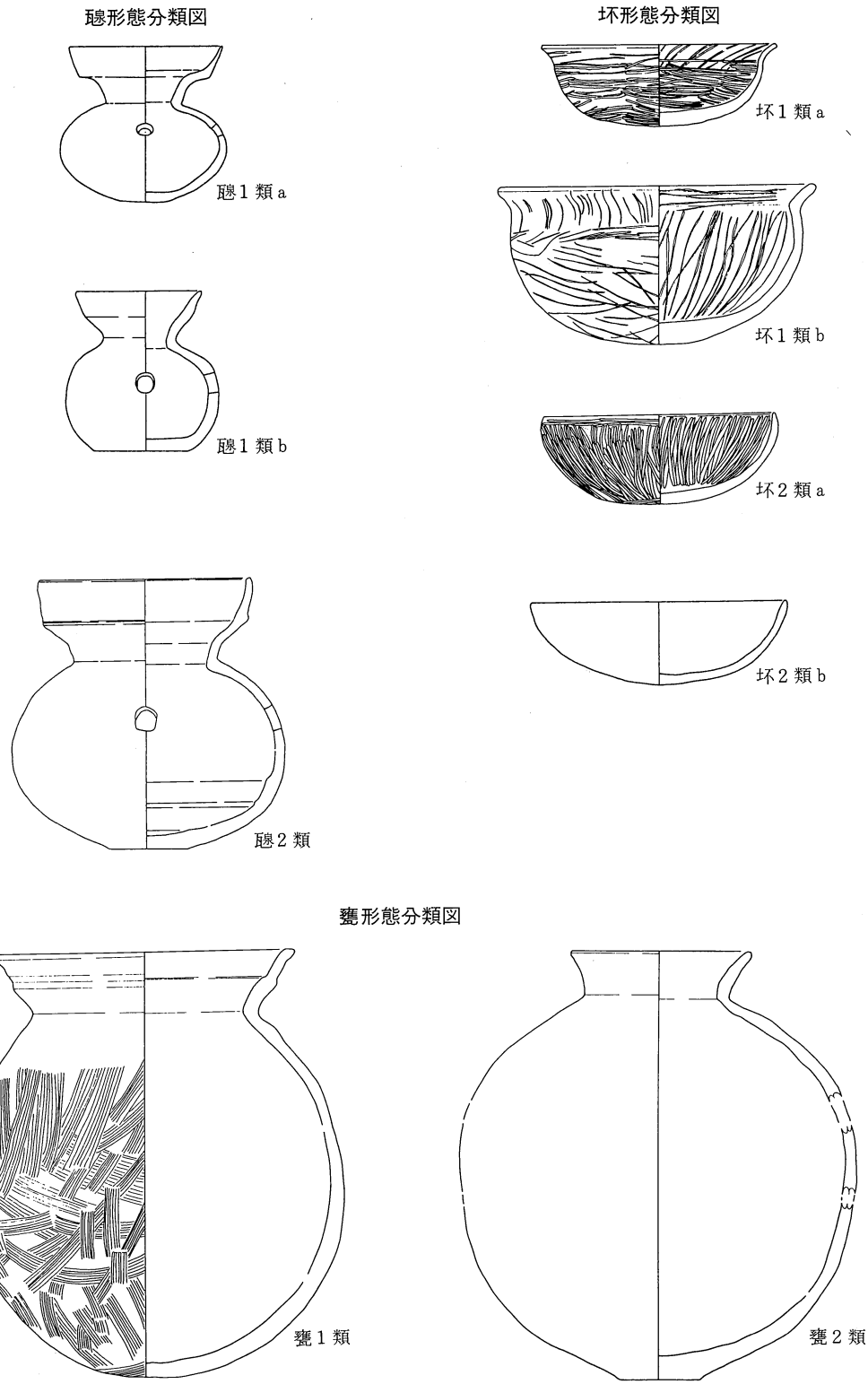
1類　丸味をおびた底部から小さく湾曲して立ち上がり、くの字に折れて頸部を為し、小さく外反する短い口縁部を有する。いわゆる内斜口縁坏の類である。内外ともていねいにヘラミガキする。これは坏の深さからさらにa，bに分けた。うちa（浅いもの）がいちばん多い。

2類　口縁部が小さく内彎するものをa、体部からの続きでそのままおさめるものをbとした。

1・2類ともに、底部外面をヘラケズリするが、2類はヘラミガキを加えず、そのままにするものが目立つ。

〔甕〕

実測可能なものが2点ある。口縁部の形態から2つに分けた。1類は球形の体部からくの字に折れて、外反しながらのびる口縁を持つ。くの字に折れたあと、一度段を為して、再び外反してのびる有段口縁状になる。平底・丸底がある。



第79図　一時坂古墳周湟出土土器形態分類図(3)

各集中出土の土器について

出土状態の項で述べたが、ここでは、土器第２・４・５・６集中、周湟内包含層に分けて、主に器種構成に注目して述べてみたい。

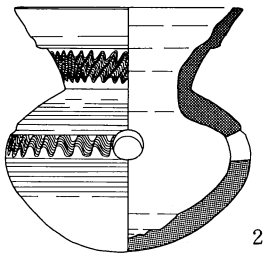
〔第２集中〕（第80図）

他集中との比較で、数量的にも集中の度合いからしても、包含層中のまとまりの一部である可能性がある。須恵器瑯の他、土師器壺・坏類が少量出土した。土師器高坏に関しては、第５集中や周湟内包含層中に含まれる高坏（１類）の特徴に類似する。高坏１類を基軸としながらも、成形・調整において、より粗雑化・簡略化する傾向が窺える。

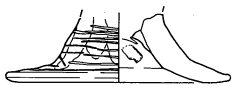
〔第４集中〕（第81～83図）

須恵器１点、土師器17点・内黒土器２点がある。土師器類は、一時坂古墳出土土器中の諸器形のうち甕だけを除いてほぼ全器形が出揃った。甕は移入品と思われる須恵器小型甕（４－１）によって補塡されており、興味深い。土師器瑯は３点出土しており目をひく。瑯１類ａは、須恵器瑯の模倣性が強い。

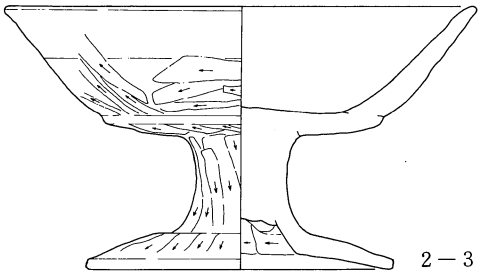
さて注目されるのは土師器高坏である。第４集中出土の高坏は、詳細に観察した結果、２・３・６類に分類できた。２類のうち、４－３～４－６は、成形技法･調整技法（とくに暗文の施文法）・暗茶褐色の色調・胎土などから見て、おそらく同一人物の製作になるものと思われる。さらにこのグループは、第６集中から出土した、同じく高坏２類における諸特徴に極めて近似している。焼成後の色調や胎土の若干違うものを含むので確証はないが、第４・第６集中出土の土師器高坏２類は、極めて時間的に近いもの、場合によっては同一作者の手によるものである可能性がある。この結果は、特徴的な出土状況を見せる一時坂古墳の周湟内土器集中の設定時期を考慮する上で重要な資料である。



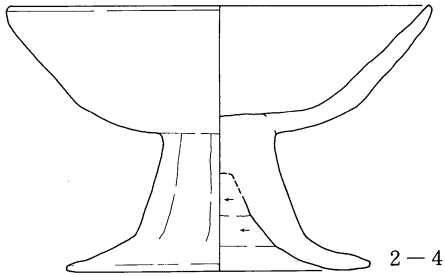
2－1



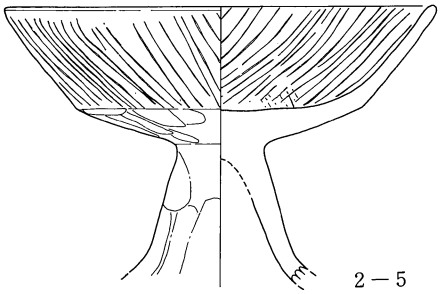
2－2



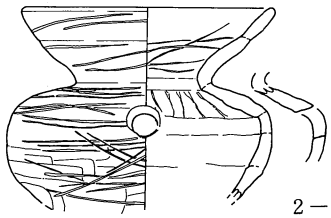
2－3



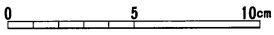
2－4



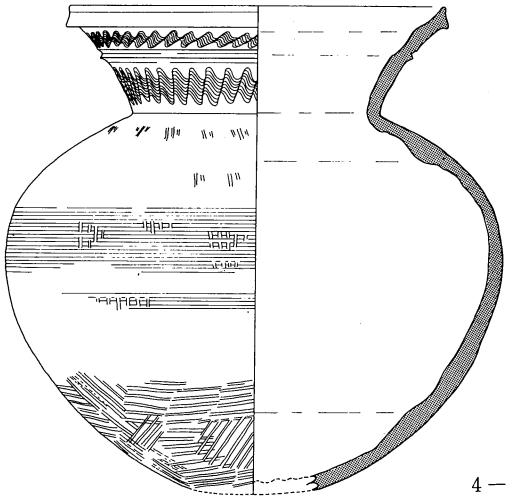
2－5



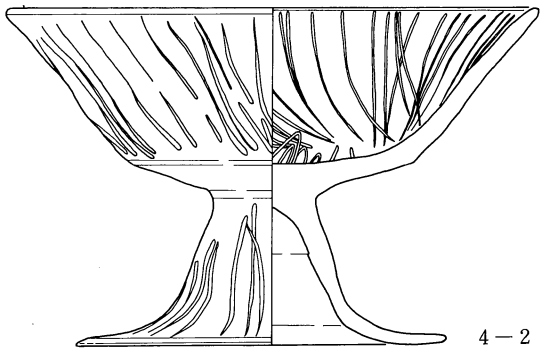
2－6



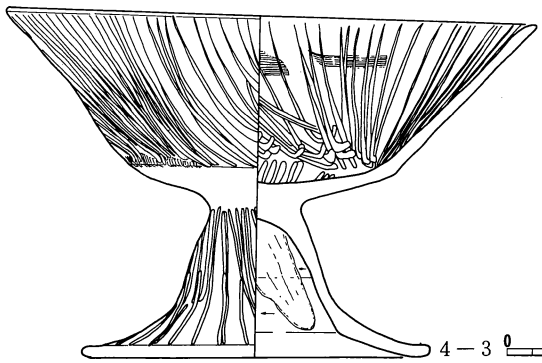
第80図　一時坂古墳土器第2集中出土土器（1/3）



4－1



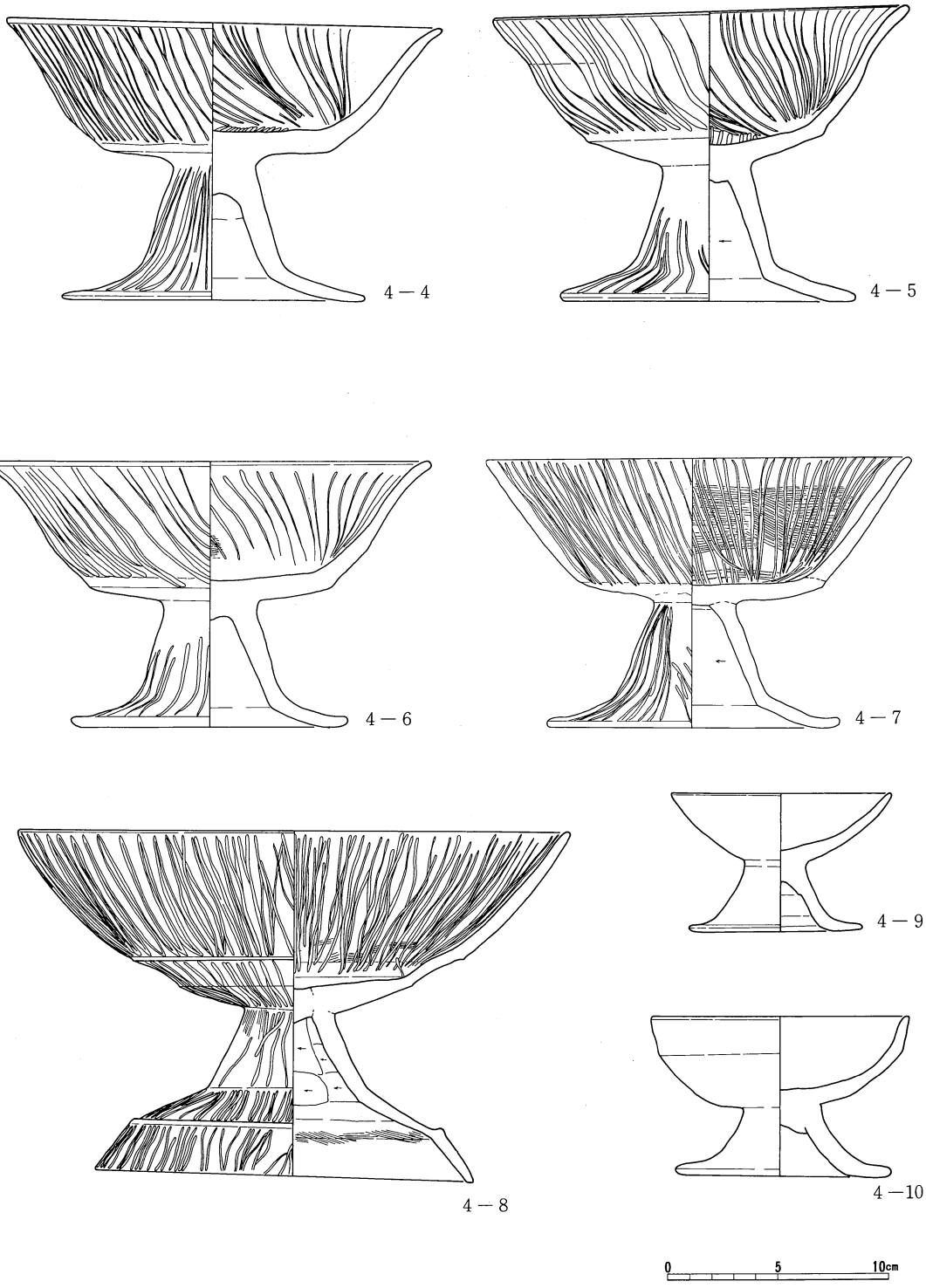
4－2



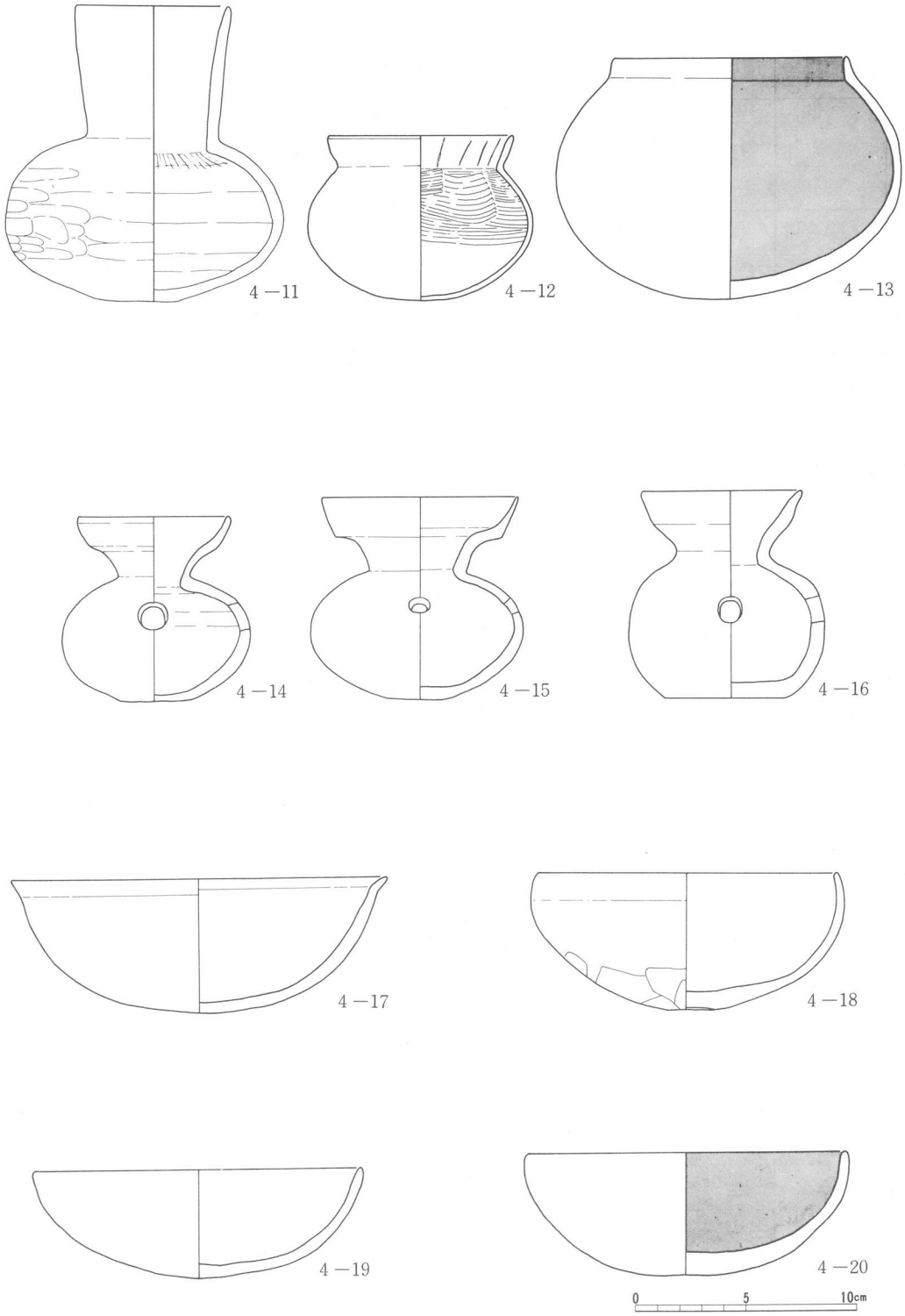
4－3

0　5　10cm

第81図　一時坂古墳第4集中出土土器(1)（1/3）



第82図　一時坂古墳土器第4集中出土土器(2)（1/3）



第83図　一時坂古墳土器第4集中出土土器(3)（1/3）

〔第５集中〕（第84～86図）

須恵器10点（蓋・身をセットとすると５対）・土師器12点と、須恵器の出土が注目される。先述したように、この集中の須恵器坏身・蓋は、すべて土師器高坏の上に、蓋と身が合わさった状態で出土した。坏身・蓋は形態の差からそれぞれ２種類に分類できる。

坏蓋　天井があまり高くなく平坦で、口縁もほぼ真下に垂下するａ（５－１・５－３）と、天井部が丸味を帯び、口縁部がやや外方へ垂下するｂ（５－５・５－７）がある。ａは箱状を呈するのでｂよりも大きく見え、内のりも大きい。口縁部の処理については、ａは、内傾する端面を形成するときに、少し強めに押しナデてやや幅広く凹む面に仕上げるのに対し、ｂは軽く、内傾の度合いも小さい。従って口縁部はａの方が薄めで、端部が外側へ少し開くように見える。また外面の稜部下側のナデも、ａの方が強い。両者ともヘラケズリは天井外面ほぼ全体に及ぶが、稚拙である。

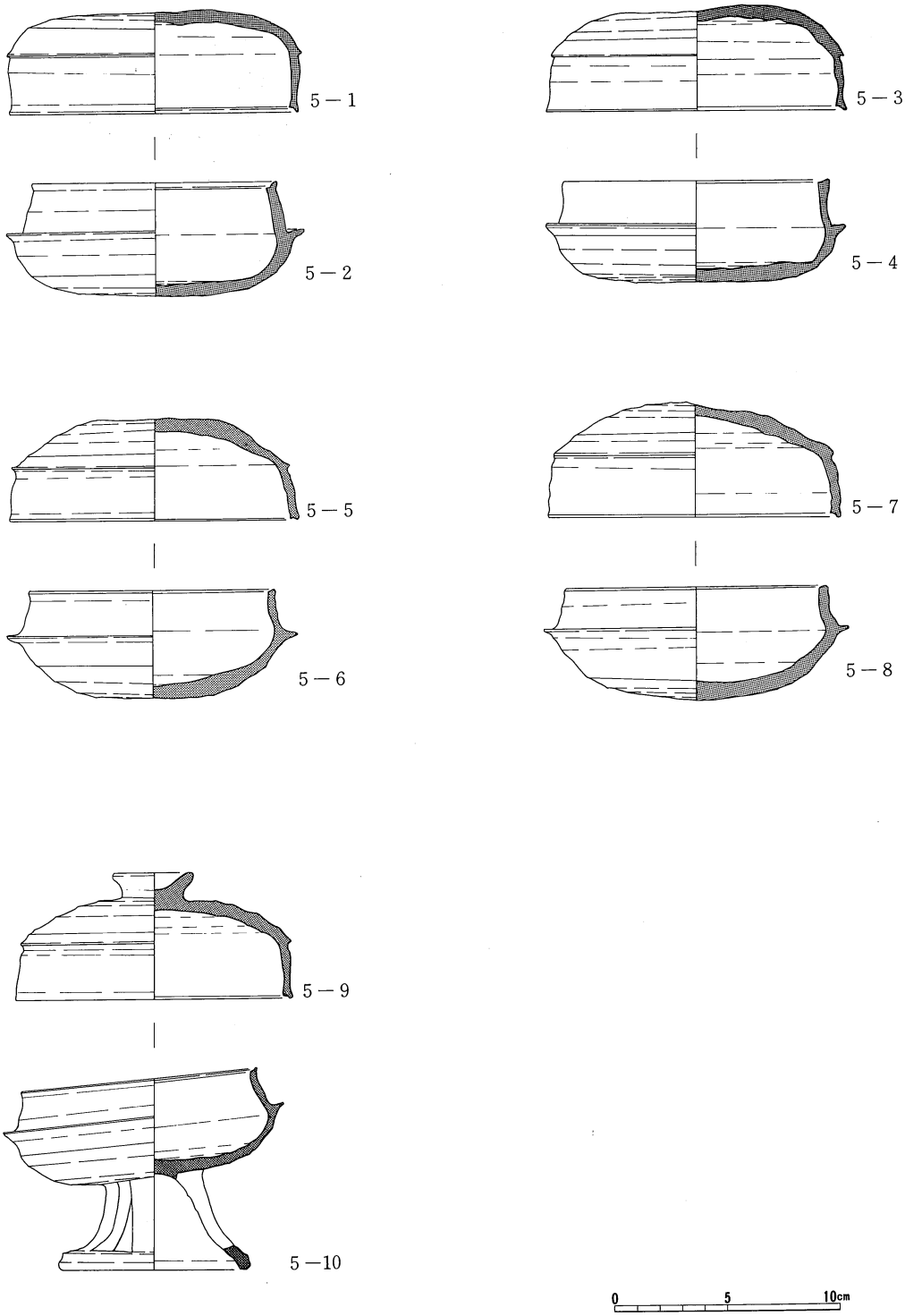
坏身　底部が平坦で、立ち上がりから口縁部まで直線的にのび、箱形を呈するａ（５－２・５－４）と、底部が丸味を帯び、体部と口縁部の境がやや強く屈曲するｂ（５－６・５－８）がある。坏蓋同様、坏身の口縁端部にも若干の調整の相違が見られる。すなわちａは端部の押さえナデが強く広い凹面を為すのに対し、ｂは幅が狭く平坦面に近い。また、口縁部と受部の境目は、ｂに比してａ類は屈曲して強い明瞭な線となって現われる。

坏身ａは坏蓋ａと、坏身ｂは坏蓋ｂと、それぞれ組み合わさって出土した。

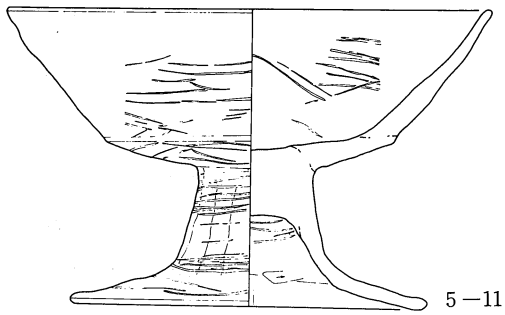
有蓋高坏　短脚一段透かしの高坏である（５－９・５－10）。身も蓋も前掲ｂに属する。本例で特記すべきは、蓋（５－９）の天井部に、本体（５－10）を正位に載せて焼成した痕跡が認められることである。このことは、本品が、焼成後、窯出しからずっとセットとして流通したものであることを示しており、産地直送をも予想させる。

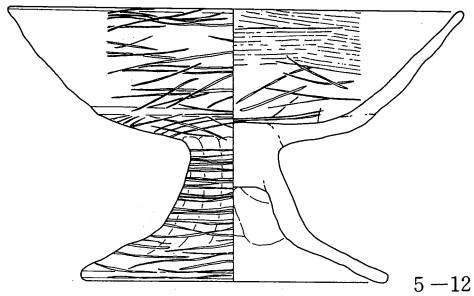
第５集中においては、土師器の坏類が１点も出土していない。これは出土状況から見て明らかなように、須恵器の有蓋坏が用いられているためである。須恵器の有蓋高坏が１点出土したが、土師器の高坏に須恵器の坏を載せることで須恵器有蓋高坏の代用を果たそうとしたのであろうか。

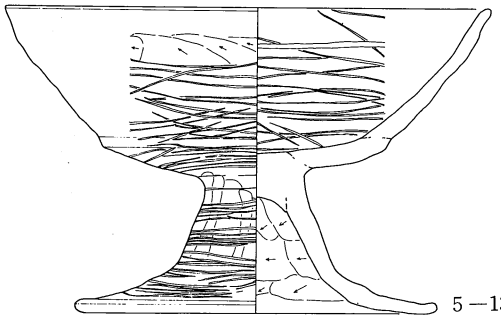
その土師器高坏は第５集中の場合、１類一形態に限られ、大きさに若干の違いはあるものの、明るい橙褐色を呈する色調や、ヘラケズリの多用、ヨコ方向の細かいヘラミガキ、暗文の削減、形態などにおいてお互いに近似しており、一括して製作・焼成されたものを含むと考えられる。特に、本古墳出土の高坏２～５類のヘラミガキがタテ方向であり、また周辺遺跡の同期の高坏の主流がタテヘラミガキであるのに対し、第５集中の高坏は異彩を放っている。第５集中の高坏は、第４・６集中に比べ、簡略化・粗雑化しているといえる。

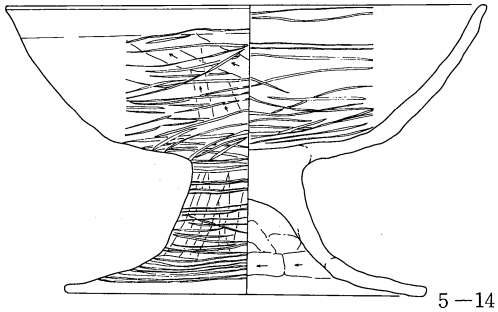


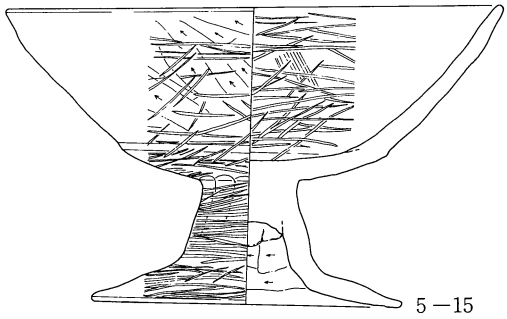
第84図　一時坂古墳土器第5集中出土土器(1)（1/3）

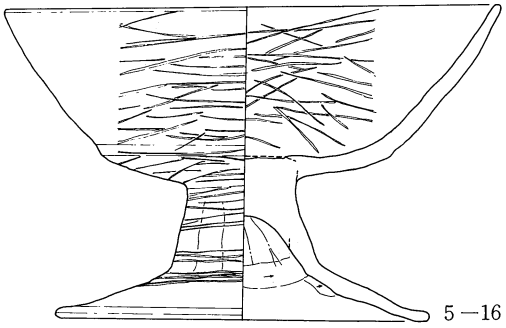

5－11

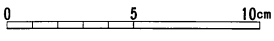

5－12


5－13

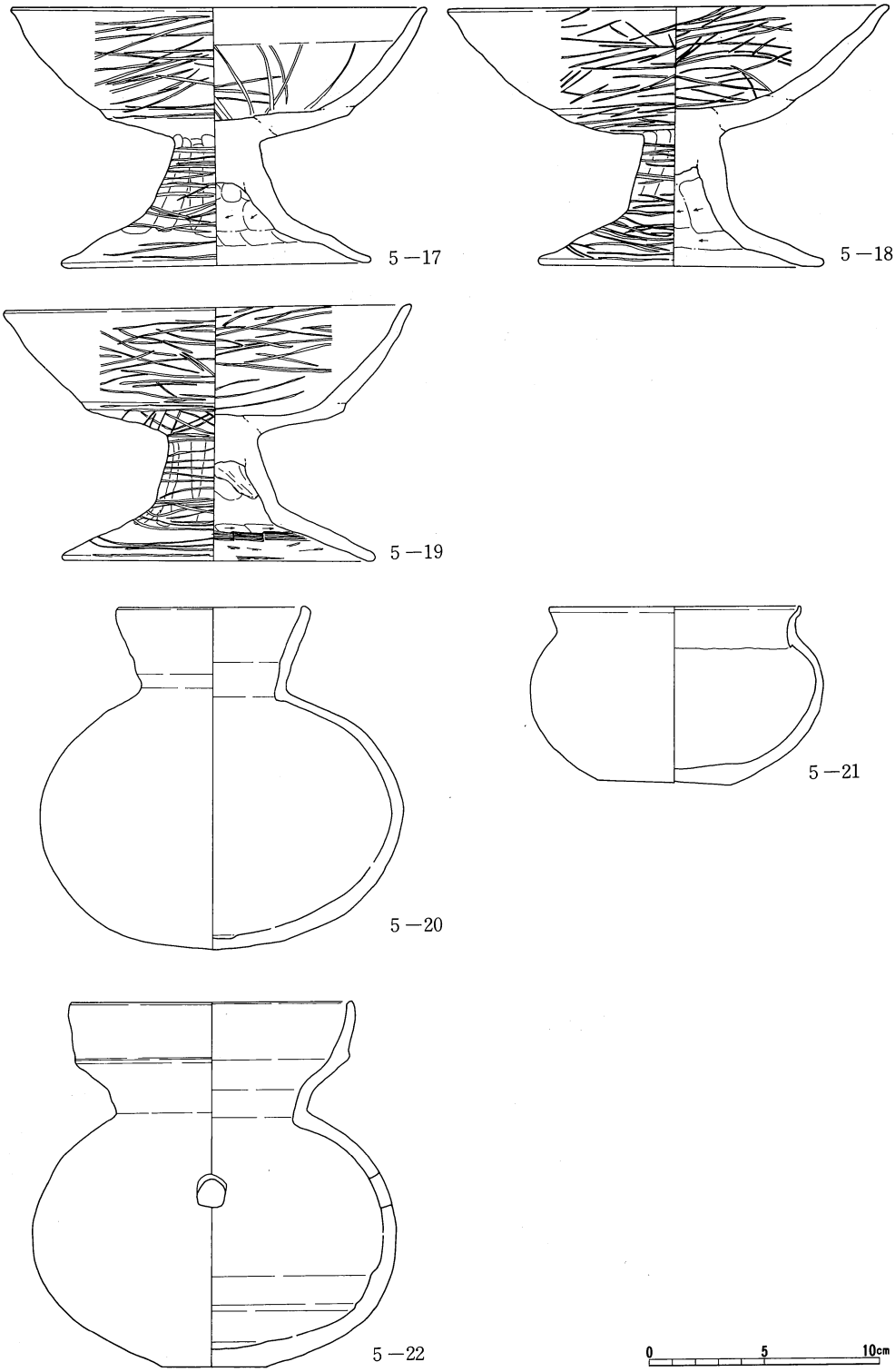

5－14


5－15


5－16



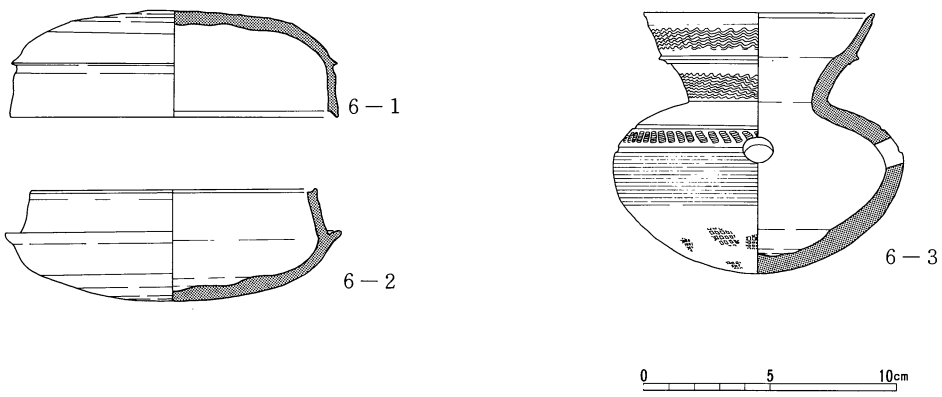
第85図　一時坂古墳土器第5集中出土土器(2) (1/3)



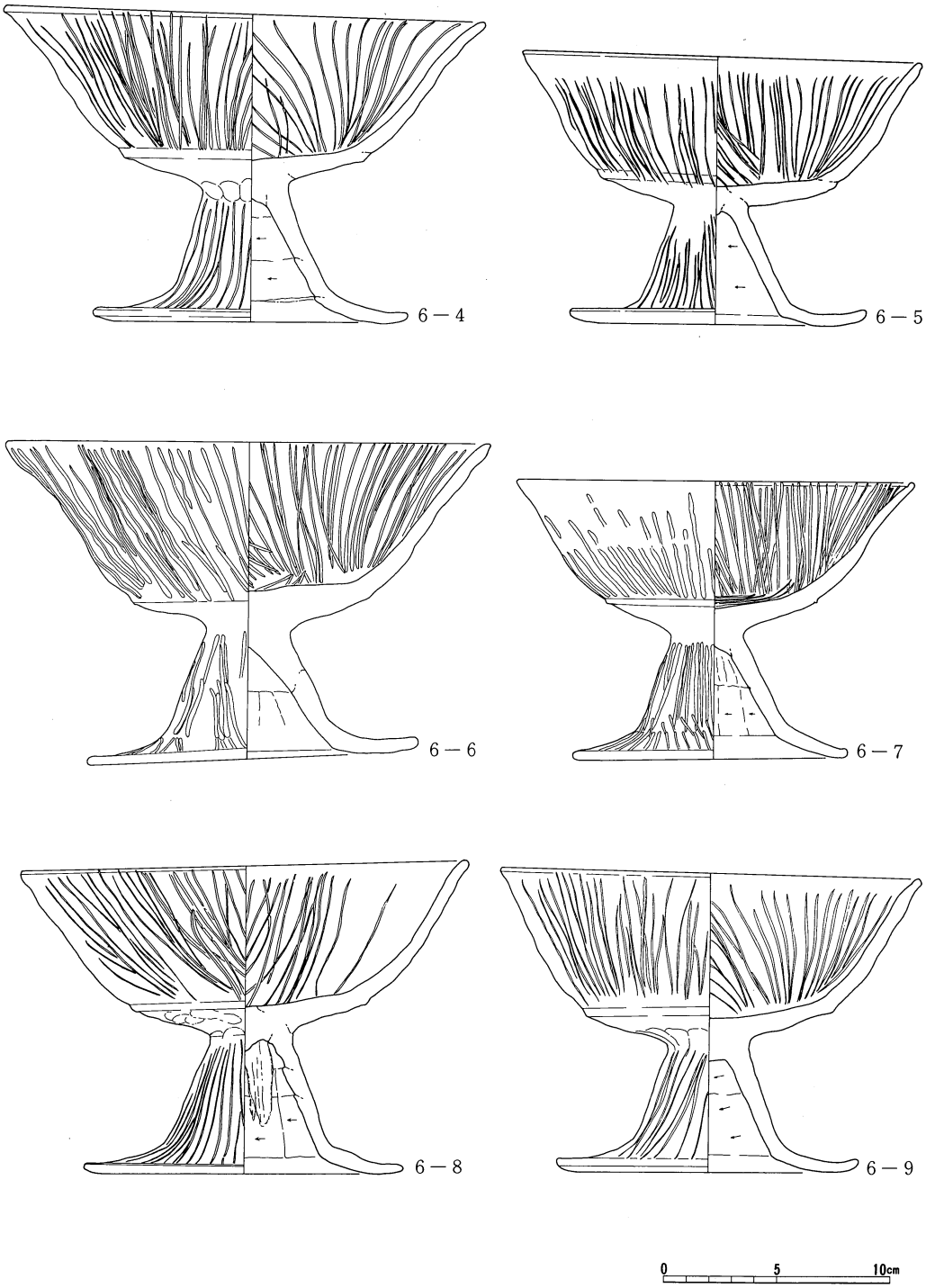
第86図　一時坂古墳土器第5集中出土土器(3) (1/3)

〔第６集中〕（第87～90図）

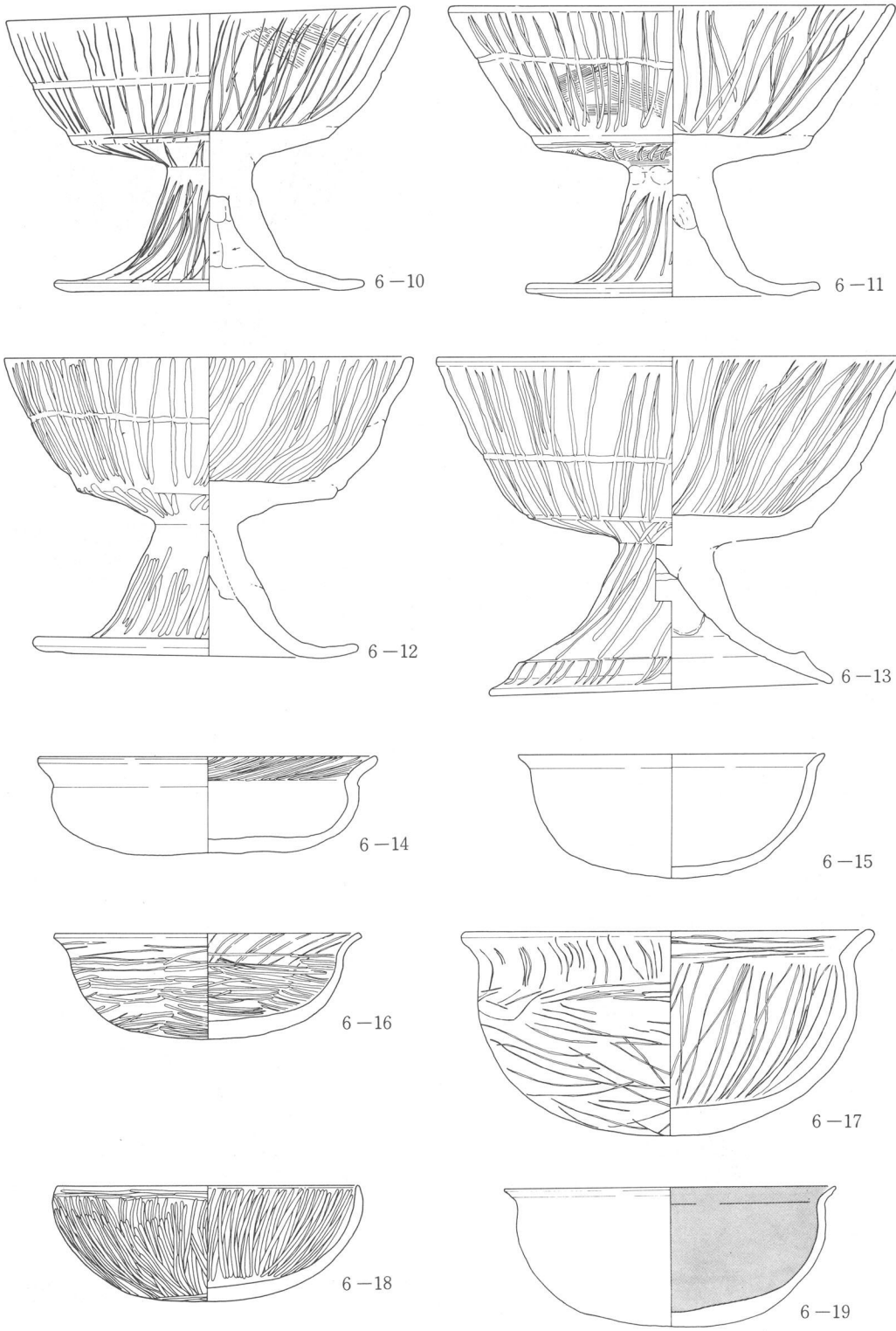
須恵器３点・土師器15点・内黒土器１点がある。土師器の内では、壺類・瑯を欠く。高坏は、第４集中の項で述べたように、２類どうしが非常に似ている。ただし、第４集中のように、焼成によって暗茶褐色できめ細かく光沢を放つ粘土ではなく、橙褐色で２～３㎜大の砂粒を多く含むものが目立つ（６－４・６－５・６－６・６－９）。従って同じ粘土で焼かれたものではないが、いぜん、その近似性は疑えない。また、４類の高坏は、坏部外面中位に、接合痕を沈線で残し、一種の文様装飾効果を果たしているものである。坏類は、つくりのていねいな、いわゆる内斜口縁坏が目立つ。これらの坏は大部分が高坏の上に載せられており、須恵器の不足を補塡する意味をもつものと思われる。蓋の存在は確認できなかった。



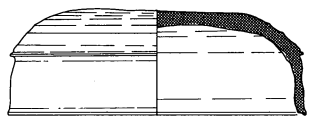
第87図　一時坂古墳土器第６集中出土土器(1)（1/3）

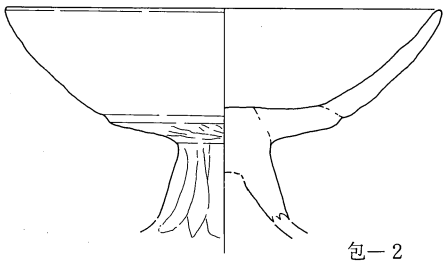


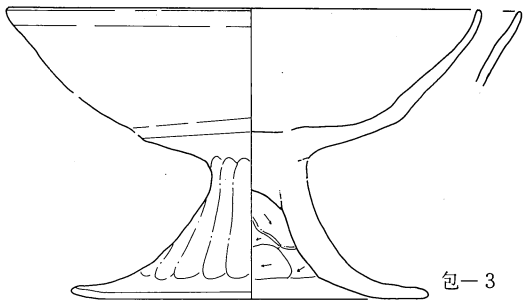
第88図　一時坂古墳土器第6集中出土土器(2) (1/3)

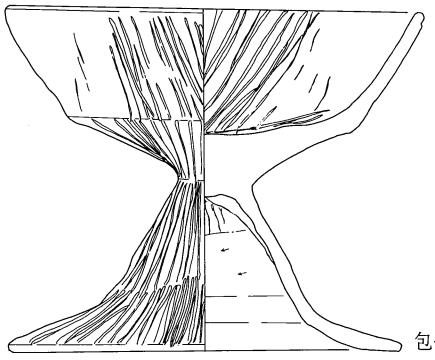


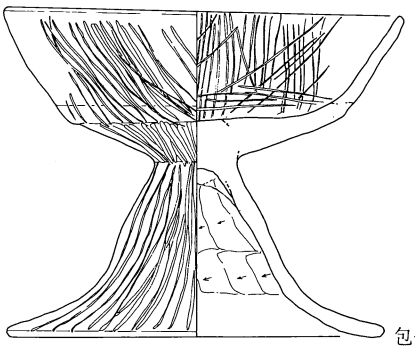
第89図　一時坂古墳土器第6集中出土土器(3)（1/3）

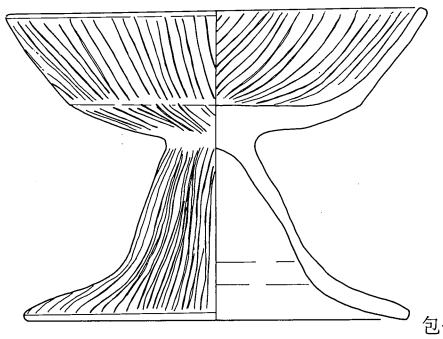

包－1

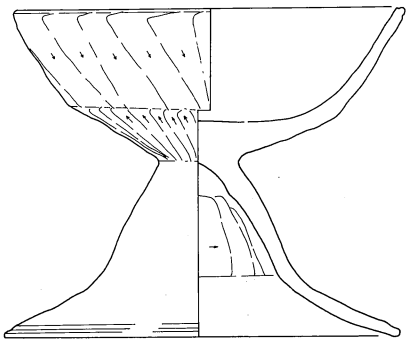

包－2

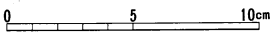

包－3


包－4

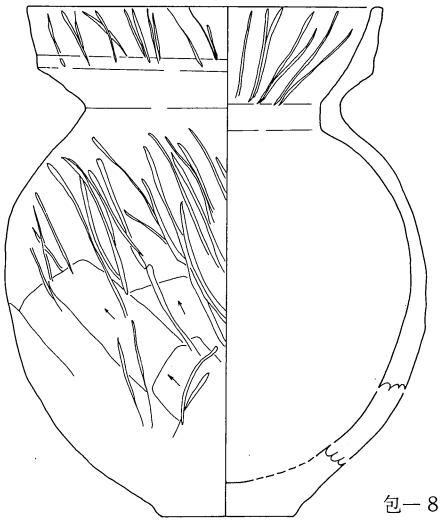

包－5


包－6

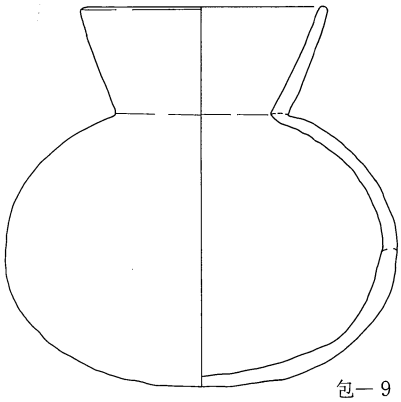

包－7



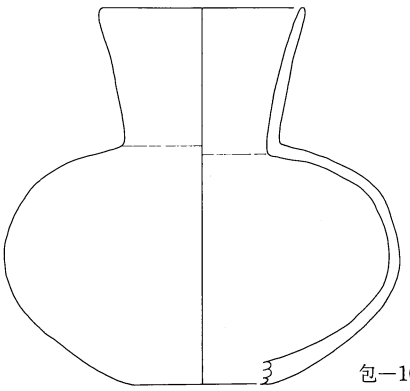
第90図　一時坂古墳周湟内土器包含層出土土器(1) (1/3)



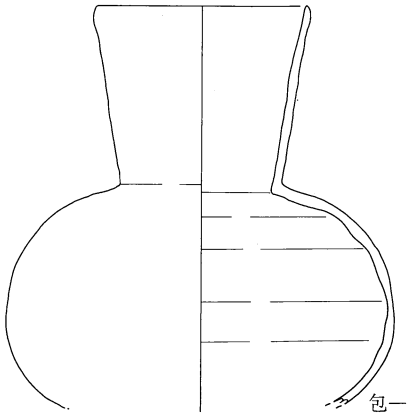
包－8



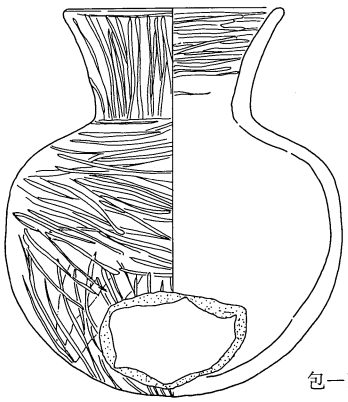
包－9



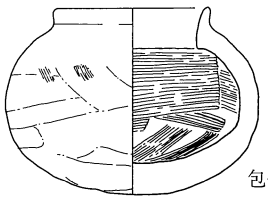
包－10



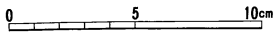
包－11



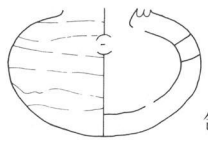
包－12



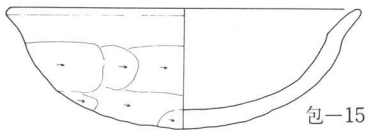
包－13



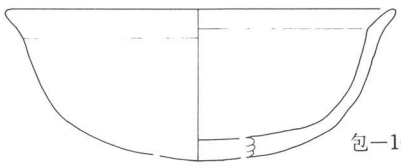
第 91 図　一時坂古墳周湟内土器包含層出土土器(2) (1/3)



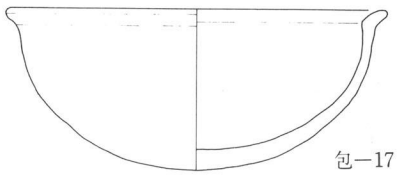
包－14



包－15

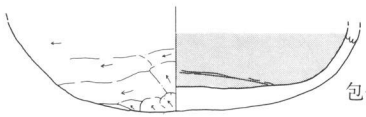


包－16

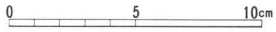


包－17

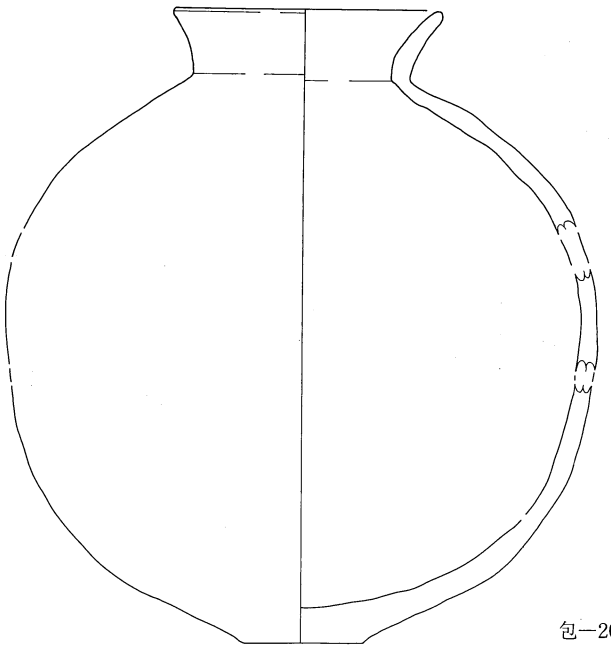
包－18



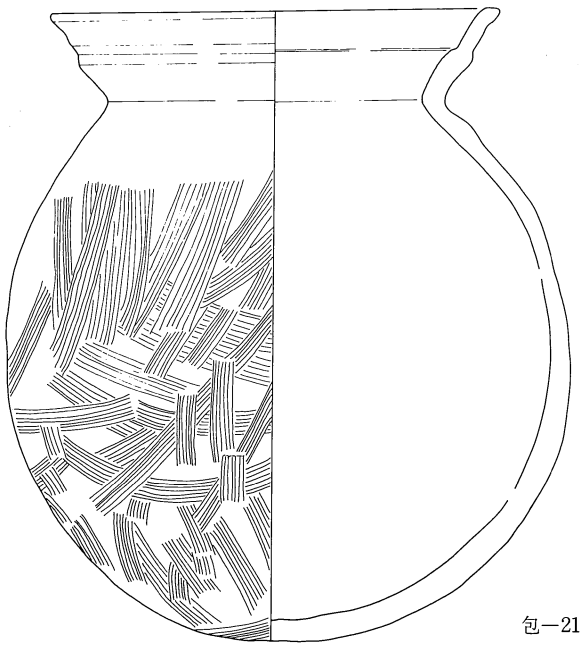
包－19



第 92 図　一時坂古墳周湟内土器包含層出土土器(3)（1/3）



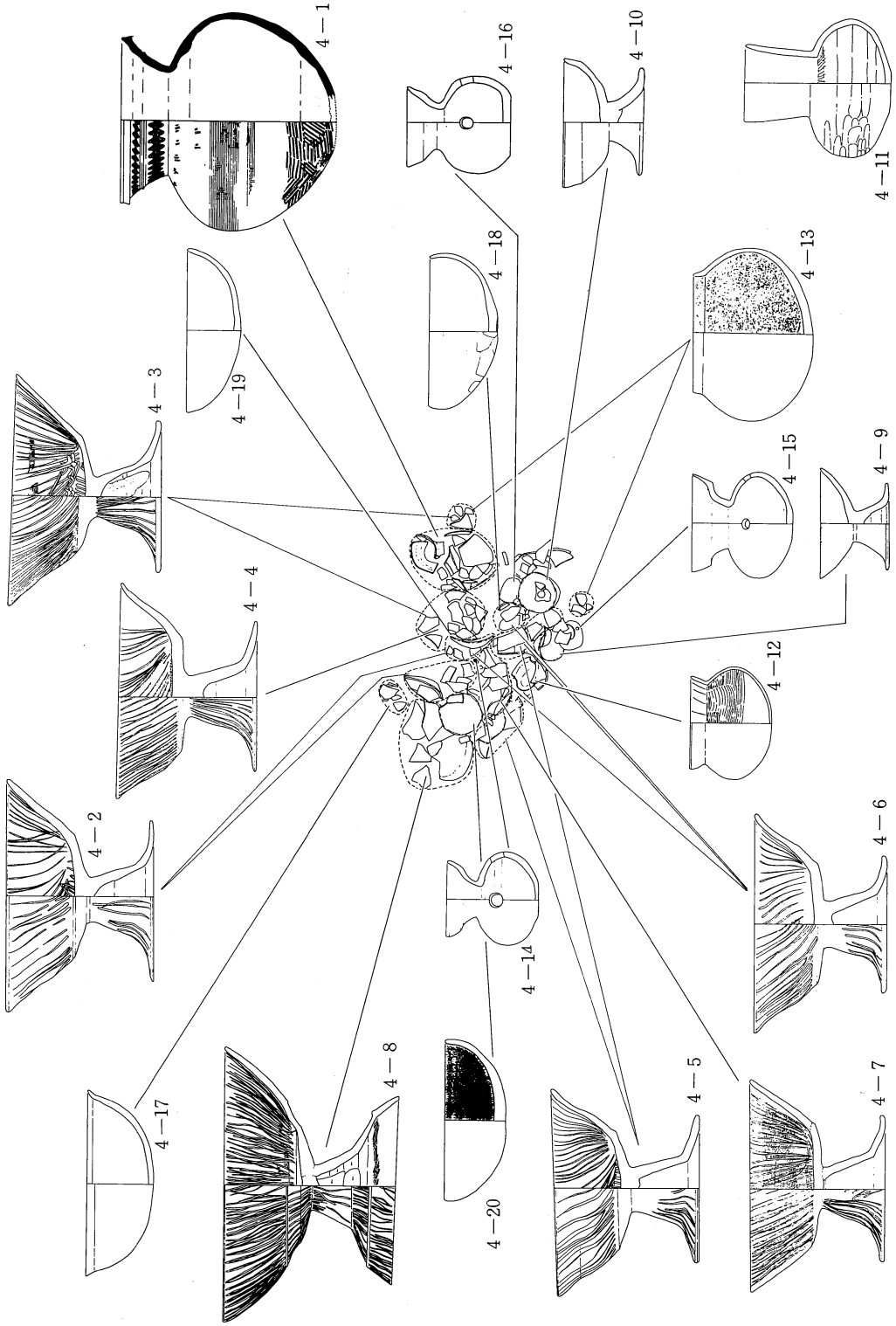
包—20



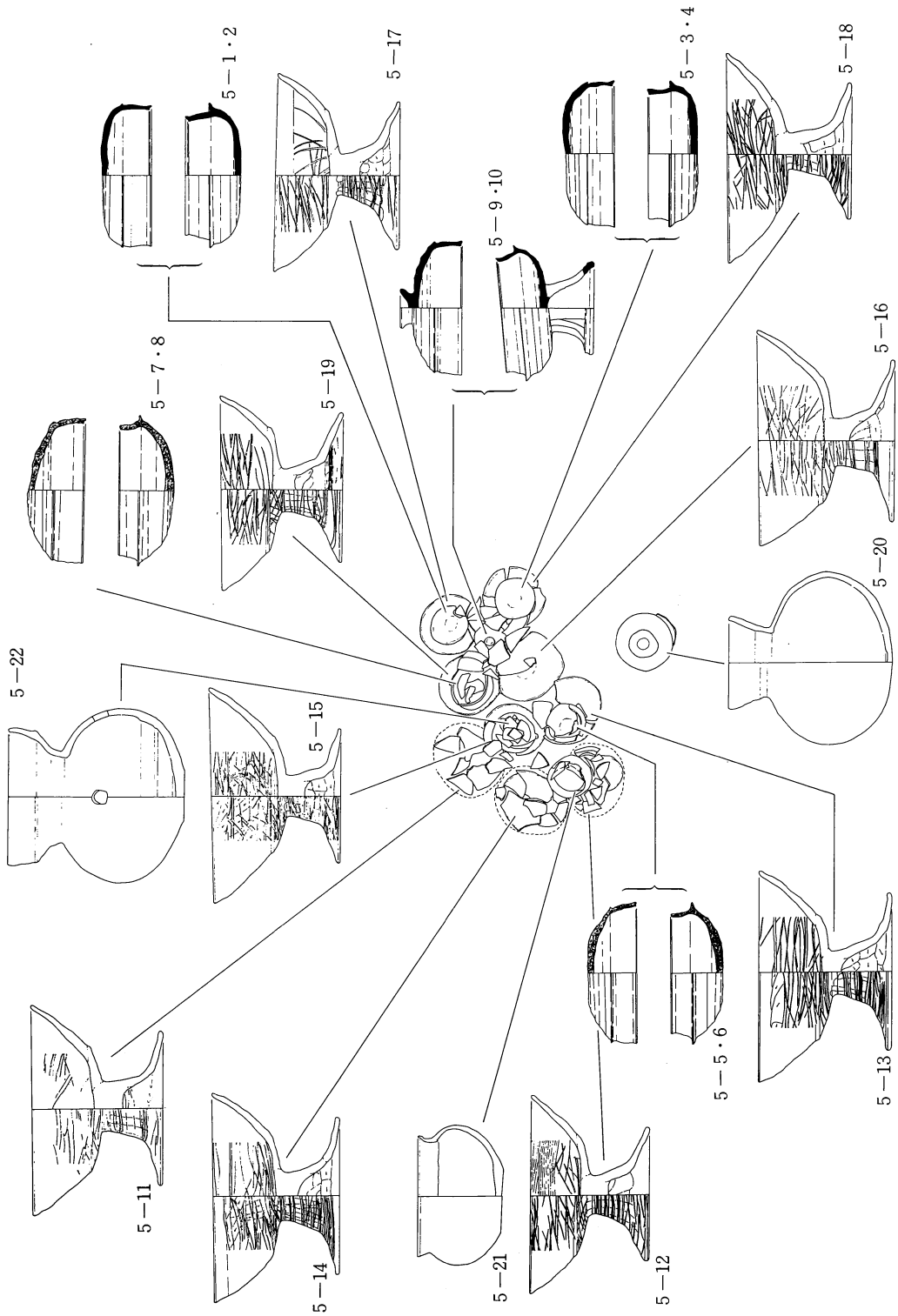
包—21

0　5　10cm

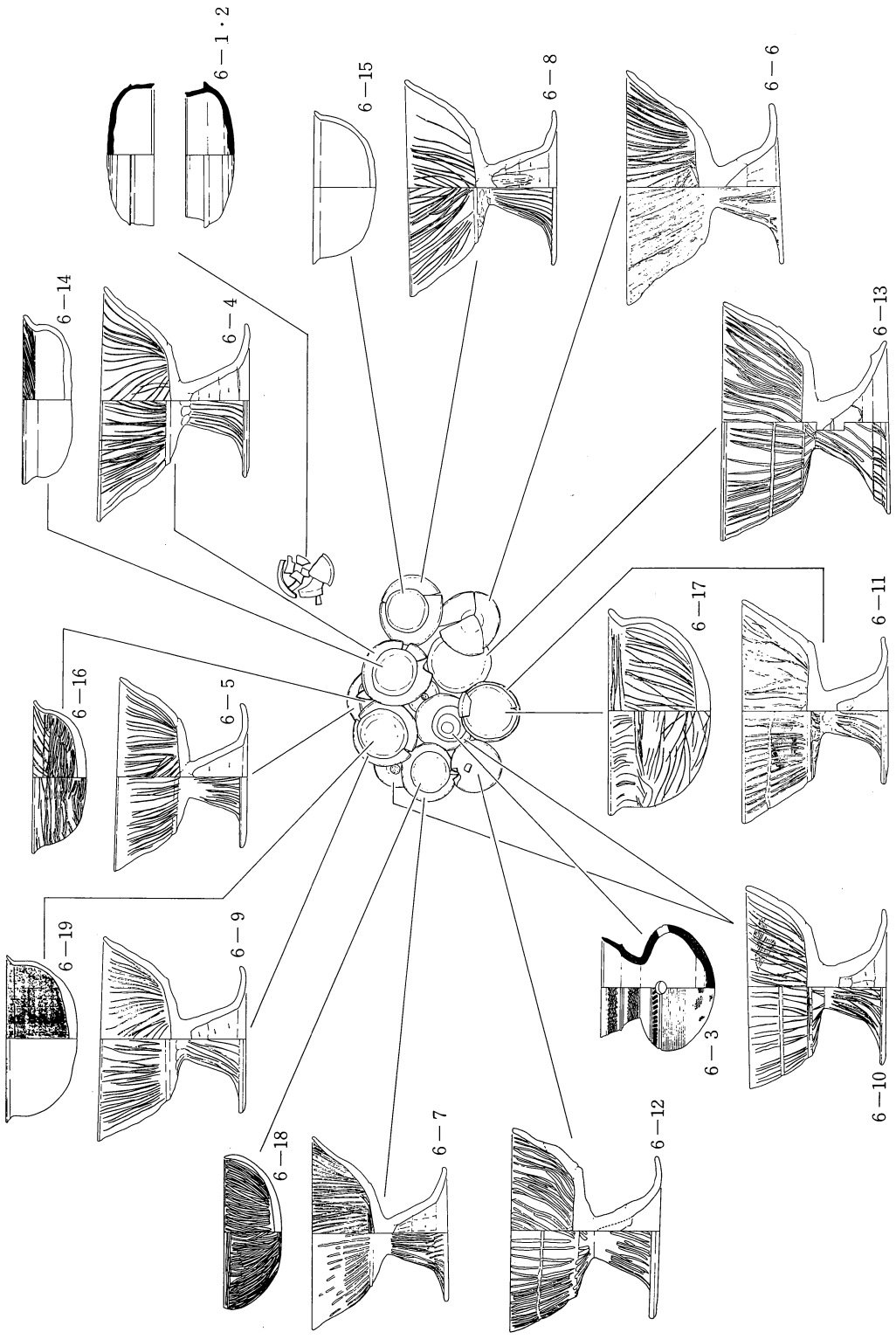
第 93 図　一時坂古墳周湟内土器包含層出土土器(4)（1/3）



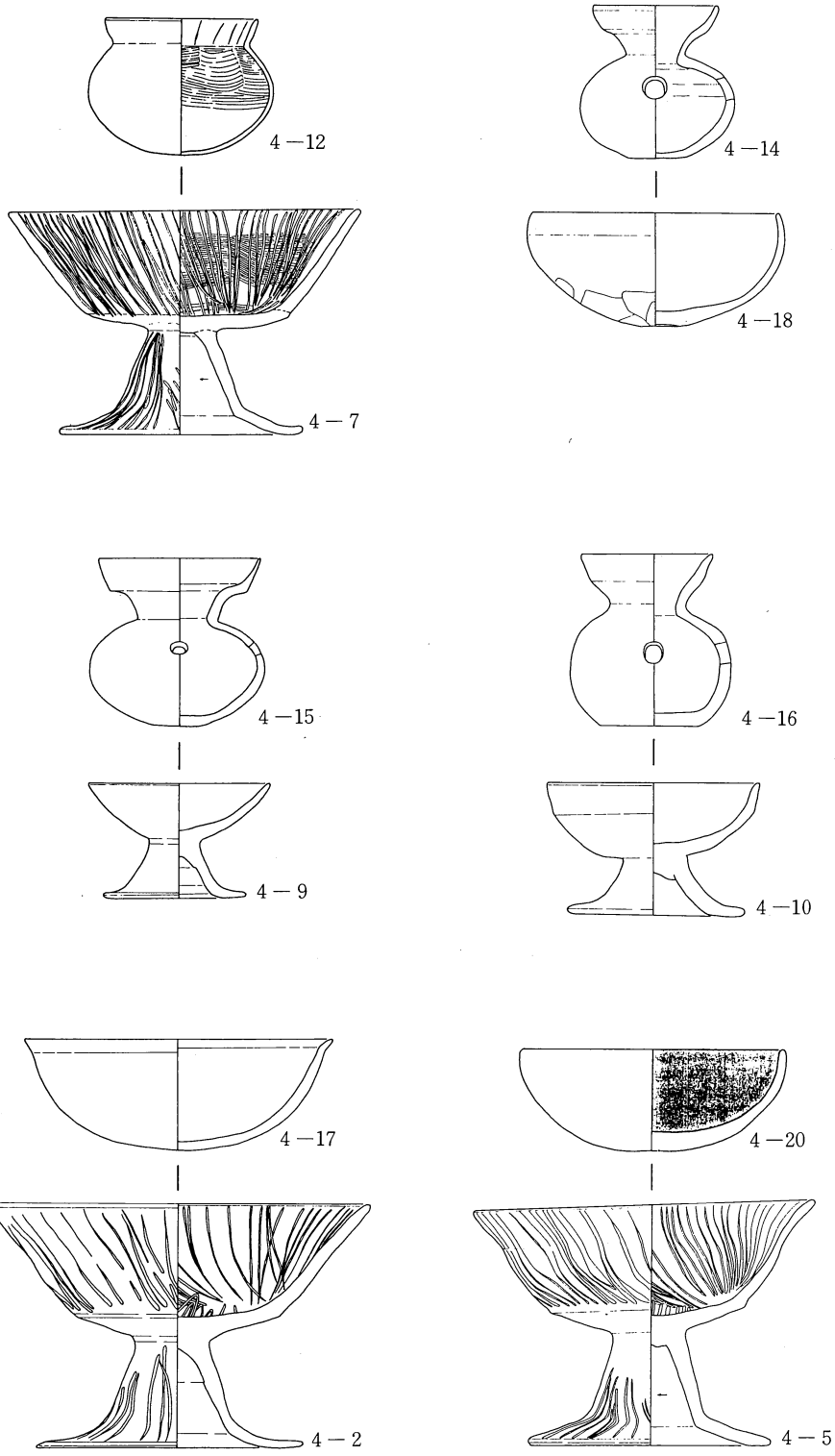
第 94 図　一時坂古墳土器第 4 集中土器出土状況



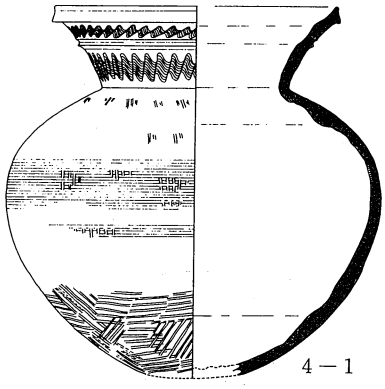
第95図　一時坂古墳土器第5集中土器出土状況

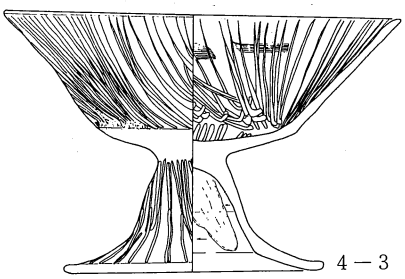


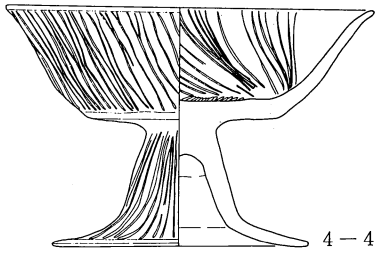
第 96 図　一時坂古墳土器第 6 集中土器出土状況

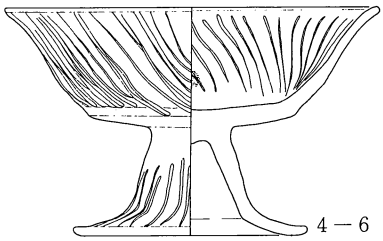


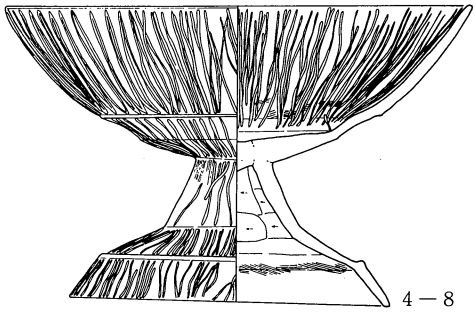
第 97 図　一時坂古墳土器第 4 集中出土土器組み合わせ関係想定図(1)

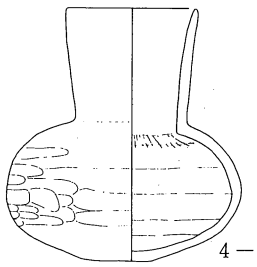


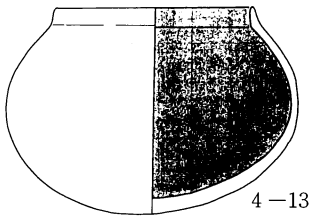


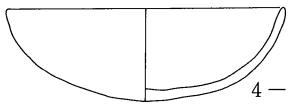




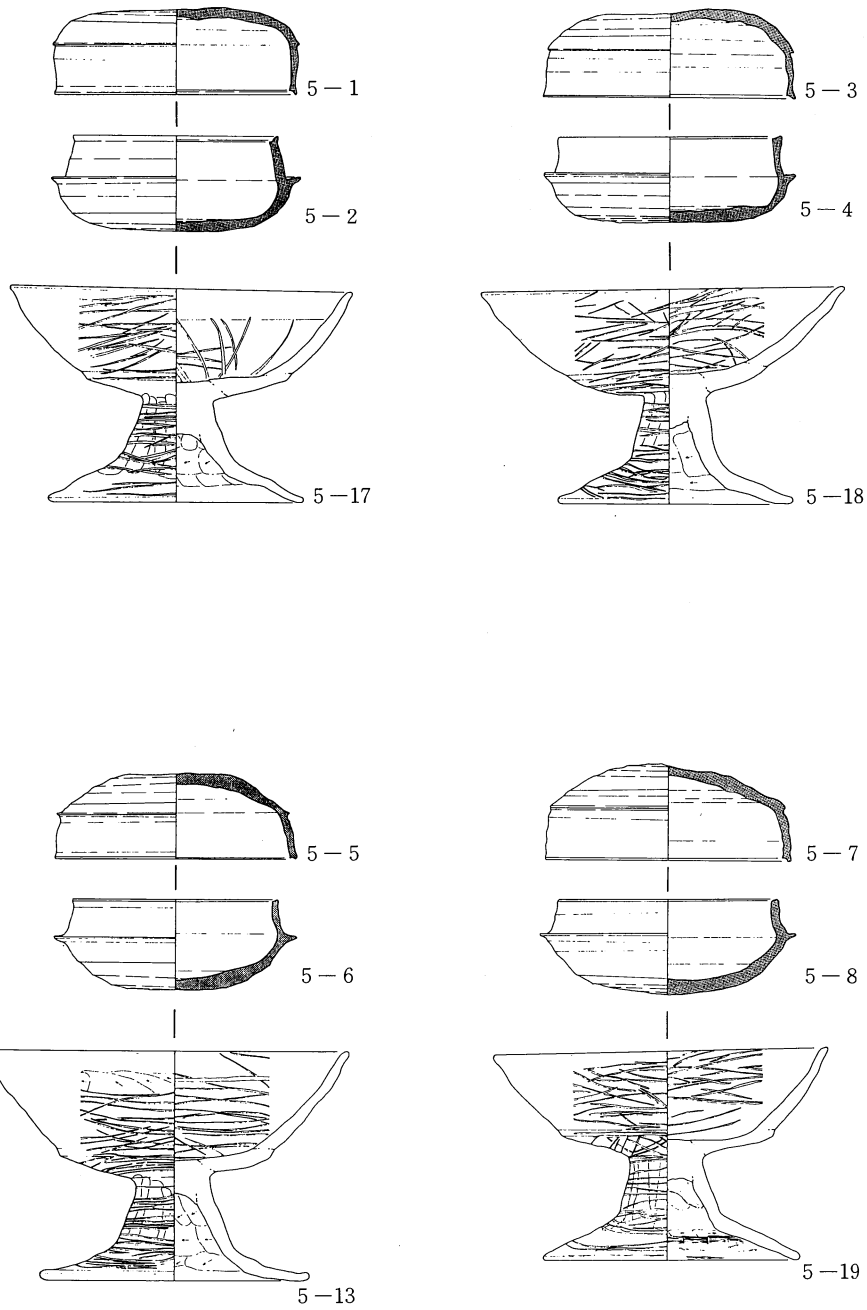




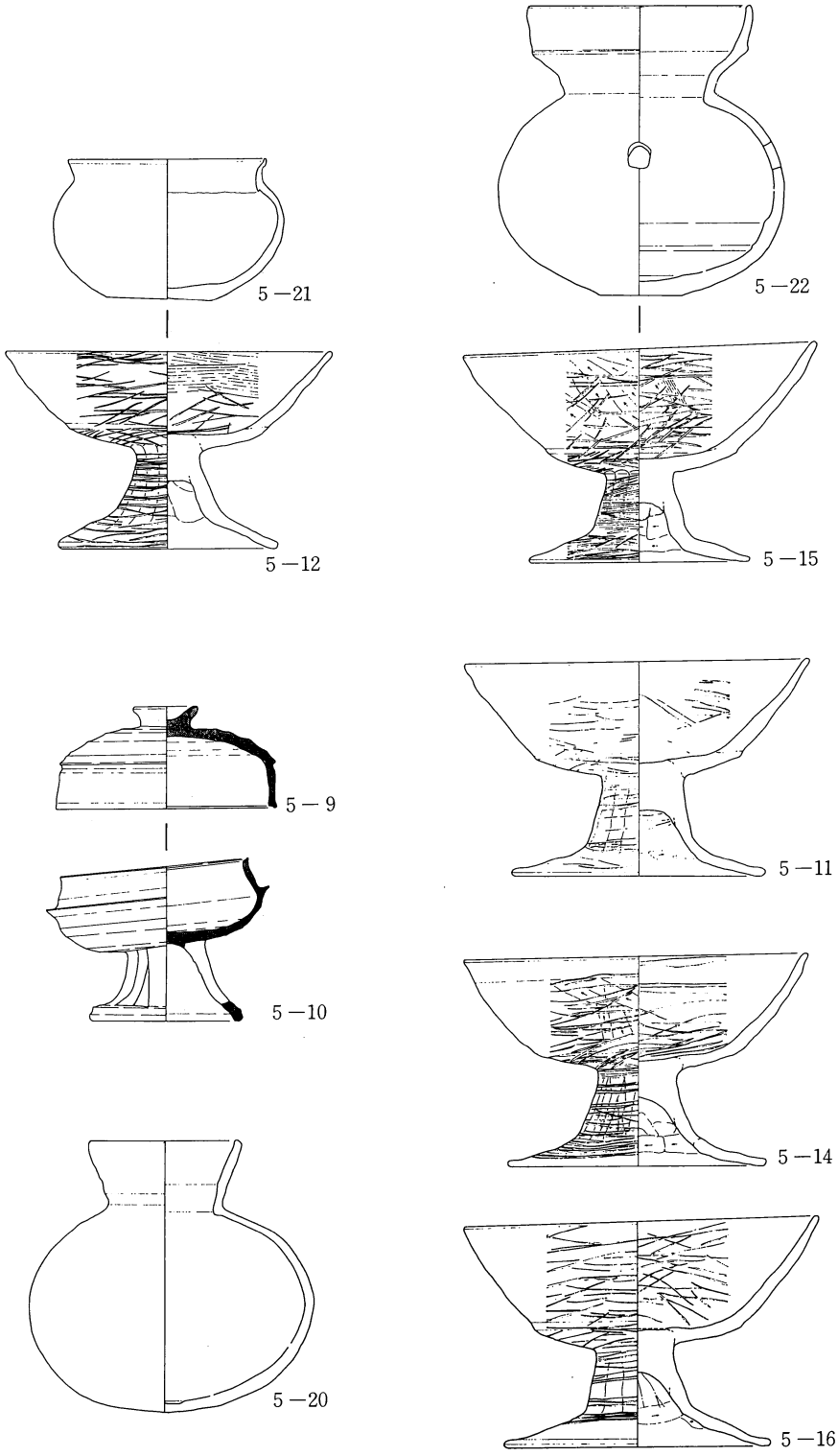




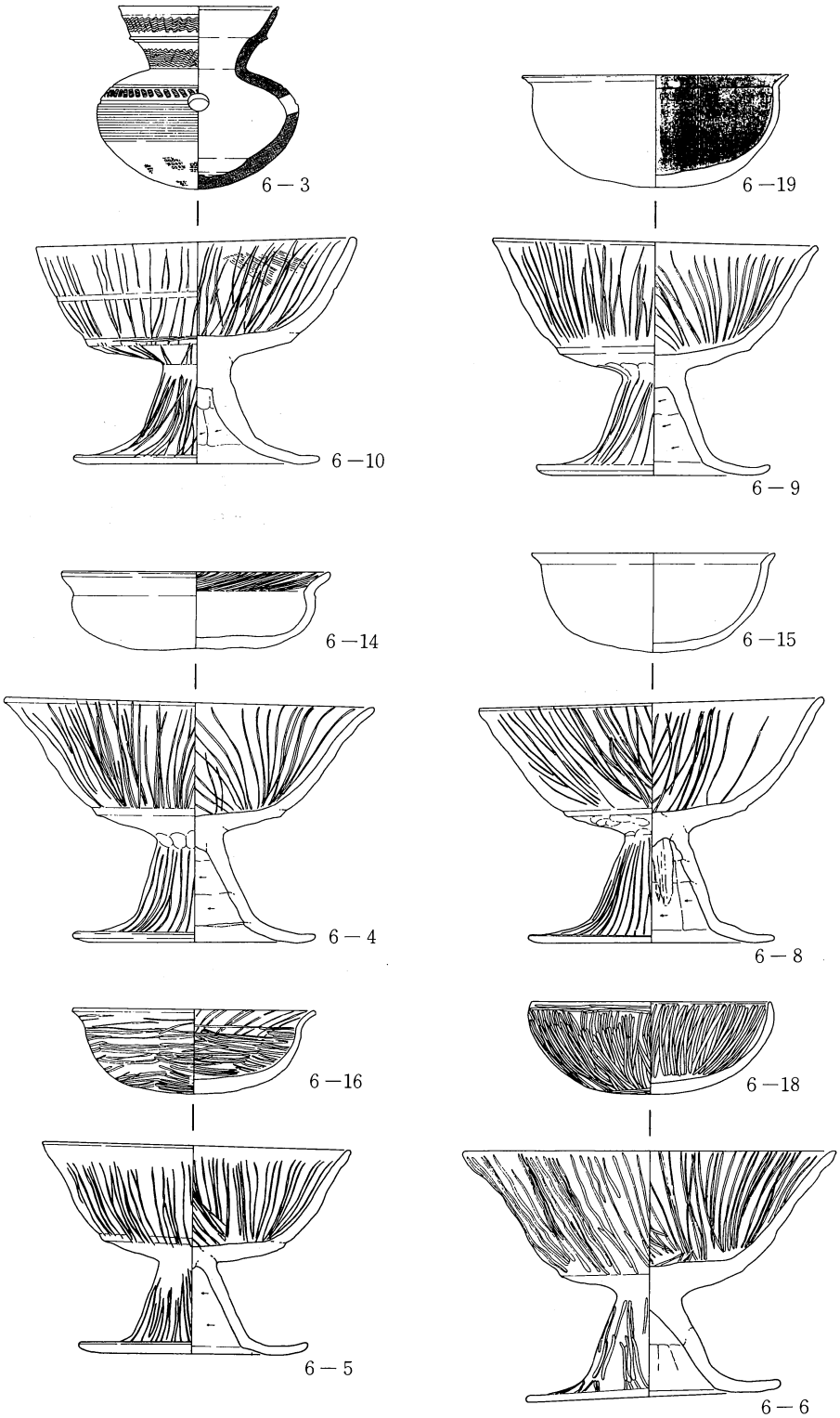
第 98 図　一時坂古墳土器第 4 集中出土土器組み合わせ関係想定図(2)



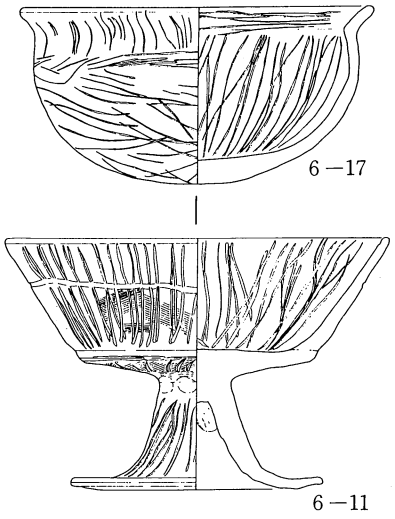
第99図　一時坂古墳土器第5集中出土土土器組み合わせ関係図(1)

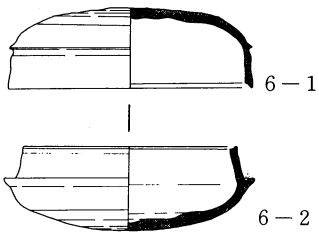


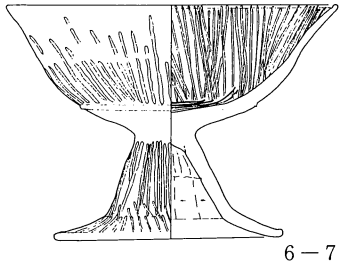
第100図　一時坂古墳土器第5集中出土土器組み合わせ関係図(2)

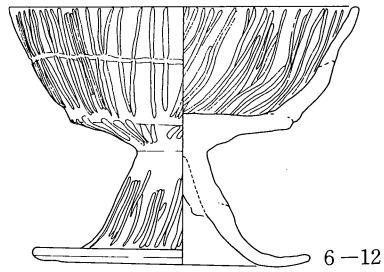


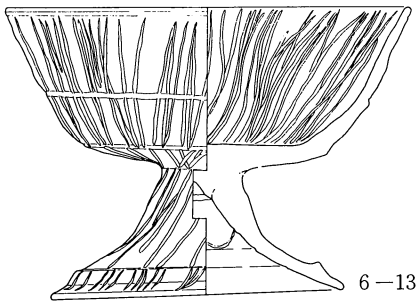
第101図　一時坂古墳土器第6集中出土土器組み合わせ関係図(1)











第102図　一時坂古墳土器第6集中出土土器組み合わせ関係図(2)

第10表　一時坂古墳周湟内出土土器観察表

第２集中

	器形	図版No.	法量（cm）	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
須恵器	甕	2－1	口径:8.9 体部径:9.6 器高:9.6	○小形である。 ○体部は中位がゆるく張出し、底部は少しとがり気味である。ここに１孔を穿つ。孔の上端をかすめてかすかな段が巡り、以下に擬描波状文を施す。 ○頸は細く外反して立上がったあと、段をなして口縁部に至る。段下に波状文を巡らす。 ○口縁部は平坦で水平な端部をもつ。稜は鋭い。	•体部、文様帯の上下をカキ目調整する。 •底部内面は指頭圧痕が残る。 •底部外面はヨコナデ仕上げ。	精良	特に良好	暗灰色	•黒色自然釉多量にかかる。 •体部下半に須恵器片が融着する。
土師器	高坏１類	2－3 2－4	(3)口径:9.2×2 器高:10.3 (4)口径:16.4 器高:10.3	•第５集中の高坏１類に同じ。 •全体的に成形・調整とも雑である。 •(4)の坏部の段はほとんどない。成形は雑。	•坏部は内外をヨコナデした後、体部外面下半をヨコヘラケズリ、底部外面をタテヘラケズリする。 •脚部は外面をタテヘラケズリし、内面はヨコヘラケズリする。 •底部口縁端部はヨコナデの後、ヘラで切りおとしたような端面を見せる。 •(4)はヘラケズリの後、ナデ仕上げで、ヘラミガキを施さない。	精良	良好	橙褐色	(3)口縁、脚口縁同位置に黒斑をひろくもつ。 (4)は口縁部２ヶ所（反対側）に黒斑を有す。
	高坏５類	2－5	口径:16.8 器高:(10.8)	•坏口縁径が脚口縁径とほぼ同じものと思われる。	•外面はヘラケズリし、ヘラミガキを粗く暗文状に加える。 •内面はタテヘラミガキ、底面は平行にミガく。	精良	良好	橙褐色	•坏体部と底部の同じ位置に小さな黒斑あり
	高坏６類	2－2	底径:8.9 器高:(2.7)	•小形高坏６類の底部と思われる。	•脚部外面ヘラケズリ後粗いヨコヘラミガキ。 •脚部と坏部の接合部内面をヘラオサエで接合。	精良	良好	橙褐色	
	甕１類ｂ	2－6	口径:5.0×2 器高:(7.7)	•小形の甕で体部上位が強く張り出して肩をなす。口縁部の屈曲は弱い。段は痕跡程度。 •肩部に焼成前に１孔を穿つ。	•外面体部下半はヨコヘラケズリする。他はヨコヘラミガキ。 •内面成形荒く、粘土紐痕や絞り目が残る。	精良	良好	橙褐色	•底部は水平に欠損する。意図的な穿孔か。

第4集中 (1)

	器形	図版No.	法量 (cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
須恵器	甕	4－1	口径:14.8 器高:(19.3) 体部径:19.8	• 口縁部はゆるく外反する。端部は上下に小さく突出して稜をもち、端面は外傾する凹面をなす。口縁中位に断面三角形の凸帯をめぐらし、上下に櫛描波状文を施す。 • 体部は中位より上に最大腹径をもち、ゆるく肩が張り出す。	• 体部外面は基本的にタテ方向の平向タタキを加える。体部中位をカキ目調整後、肩部、体部下位をナデ調整する。 • 体部内面頸部・底部には指頭圧痕が残る。	精良	良好	暗灰色	• 緑灰色の自然釉うすくかかる。 • 底部焼成後穿孔。 • 口縁がひずむ。
土師器	高坏2類	4－2 ～ 4－7	(2)口径:21.0 器高:13.2 (3)口径:20.9 器高:13.5 (4)口径:19.7 器高:12.5 (5)口径:19.8 器高:13.2 (6)口径:19.7 器高:12.1 (7)口径:19.2 器高:10.2	• 第6集中の高坏2類にほぼ同じ。坏体部下半が張出し、口縁は外反する。(7)は坏部はやや直線的である。	• 第6集中の高坏2類にほぼ同じ。坏部内面の暗文のいれかたに特徴がある。(7)のみ、内面にヨコハケ調整を加える。坏底部はユビオサエのまま。	精良	良好	橙褐色	
	高坏3類	4－8	口径:24.7 器高:15.5	• 坏部は底部から一目外反しながら短く立上がったあと小さく屈曲して外上方へ内彎ぎみにのびる。屈曲部にはそれぞれ小さな段を有する。口縁端部はそのまま丸くおさめる。 • 脚部は坏部から八の字に開き、屈曲して大きく開き、突帯を有する口縁部に至る。 • 口縁部は再び内屈してのび、端部は平坦にナデおさめる。	• 外面は全体にヨコハケ調整後、ヨコナデを加え、タテ方向に密な暗文状ヘラミガキを加える。坏部外面はジグザグ状に加える。 • 坏部内面もヨコハケ、ヨコナデ後、タテ方向に暗文状ヘラミガキする。 • 脚内面は口縁部はヨコハケ後、ヨコナデ、脚内面をヨコヘラケズリする。 • 各段や突帯はミガキ残す。	精良	良好	橙褐色	

第4集中(2)

	器形	図版No.	法量(cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
土師器	高坏6類a	4－9	口径:9.9 器高:6.2	•小形高坏である。他類の高坏の法量の2分の1である。 •坏部はゆるやかに彎曲して外上方へのび、端部は丸くおさめる。 •脚の形態は高坏2類に似る。	•内外面ともヨコナデ後、細いヨコヘラミガキを加える。 •脚部内面の調整は他の高坏類に同じ。	精良	良好	橙褐色	
	高坏6類b	4－10	口径:11.4 器高: 7.2	•坏部は外上方にゆるく立上がり、口縁部は小さく屈曲して垂直方向に立上がらせる。屈曲部外面に鈍い稜を有する。 •脚の形態はa類に似る。 •全体的にa類より厚仕立てである。	•外面はヘラケズリの後、ヨコ方向にヘラミガキを加える。	精良	良好	橙褐色	
	壺2類b	4－11	口径: 6.8 器高:13.4	•体部は中位が強く張り出し偏平。頸部で強くくびれる。 •底部は平底。 •口縁部は体部から垂直に立上がり、あまり開かず、直線的にのびる。 •体部と口縁部長の比は1：1。	•外面はヨコナデで、体部の最大腹径の部位のみ軽くヨコヘラケズリする。 底部はヨコヘラケズリ後、ナデ仕上げを行う。 •内面体部は軽くヨコナデし、粘土接合痕明瞭。 •口縁部はていねいにヨコナデを施す。 •頸部に絞り痕残る。	精良	良好	橙褐色	
	壺3類	4－12	口径:8.2 器高:7.4	•底部は丸みを帯び、体部は少し張出して偏平である。体部中位から内傾して少しのびたところでくびれ、くの字に折れて外上方へのびる。端部は丸くおさめる。内面の稜は鋭い。 •成形はていねいである。器壁はうすい。	•外面は頸部以下をヨコヘラケズリした後、粗いヨコヘラミガキを加える。 •内面は体部をハケ目調整し、ヨコヘラミガキを加える。口縁部にはさらに暗文状にタテヘラミガキを加える。	精良	良好	橙褐色	

第4集中(3)

	器形	図版No.	法量(cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
内黒土師器	壺4類	4—13	口径:10.3 器高:10.8	•無頸の壺である。 •底部は丸みを帯び、ゆるやかに内彎しながら立上がり、やや内傾して口縁に至る。 •口縁は鈍くくびれて、短く垂直方向に立上がる。 •成形はていねいである。	•内外面とも密なヨコヘラミガキを加える。内面口縁はヨコナデ仕上げ。	精良	良好	橙褐色	
土師器	聰1類a	4—14 4—15	(14)口径:6.7 器高:8.4 (15)口径:8.8 器高:9.3	•体部が強く張出すもの(4-14・15)と、肩をもち下半のあまりとがらないもの(4—16)がある。 •(16)は口縁部はあまり屈曲しない。底部は(14〜16)全て平底だが、(16)は特に広い。肩部上位に焼成前穿孔する。	•(14)は外面下半をヘラケズリし、内外ともていねいにヨコナデ仕上げする。 •(15・16)は内外ともヨコヘラミガキを加える。	精良	良好	橙褐色	
	聰1類b	4—16	(16)口径:7.2 器高:9.4						
	坏1類a	4—17	口径:16.9 器高: 6.1	•底部はあまり丸くなく、体部は強く立上がって内彎しながらのび、口縁部に至る。 •口縁部はくの字に折れ、外反しながら短くのびる。	•内外面をヘラミガキする。	精良	良好	橙褐色	
	坏2類a	4—18	口径:13.6 器高 6.1	•底部は丸く彎曲して立上がり、口縁部近くでやや強く内彎する。口縁端部は丸くおさめる。	•外面はヨコヘラケズリの後粗いヨコヘラミガキを加える。口縁はヨコナデ。 •内面はヨコナデ後、タテヘラミガキを行う。	精良	良好	橙褐色	•内面底部に種子(イネ?)圧痕あり。
	坏2類b	4—19	口径:14.7 器高: 4.9	•底部はヘラケズリによってゆるく彎曲させる。口縁部は内彎せず、丸くおわる、高坏2類に比して浅い。成形は雑。	•外面はヨコヘラケズリのままである。 •内面はヨコナデ調整する。	精良	良好	橙褐色	
内黒土師器	坏2類a	4—20	口径:14.3 器高: 5.5	•形態は(18)に近い。	•外面ヘラケズリの後、口縁部をヨコナデし、全面ヨコヘラミガキする。 •内面は黒色塗料塗布後ヨコヘラミガキする。	精良	良好	橙褐色	•内面は部分的に焼き戻る。

	器形	図版No.	法量(cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
須恵器	坏蓋a類	5－1	口径:12.6 器高:4.45	•天井部は大部分をヘラケズリし、低く平坦につくる。天井部と口縁部の境界は突出して鋭い稜をなす。 •口縁部は2.5cmを超える。やや内傾して下がり、端部はやや開く。端部は内傾し、回転ナデによって段をなす。内面の稜は特に鋭い。	•ロクロ成形、調整。 •ロクロヘラケズリは時計回り。	精良 0.5cm大砂粒少し含む。	良好	暗青灰色	•天井部外面にヘラ描き痕(?)あり。 •(5－2)とセットで出土。
		5－3	口径:13.2 器高: 4.7	•1に類似する。口縁部はやや内彎ぎみに垂下し端部は少し開く。口径は稜径を上回る。	•口縁の調整やや粗い。天井部内面をヨコナデ仕上げ。 •ヘラケズリは稚出。へそ部分を粗くヘラミガキする。 •ロクロヘラケズリは時計回り。	精良 0.5cm大砂粒少し含む。	良好	青灰色	•(5－4)とセットで出土。
	坏蓋b類	5－5	口径:12.65 器高: 4.65	•天井部はやや高くつくる。稜は鋭く小さく突出する。口縁部は外方に下がり、口径は稜径をしのぐ。 •端面はあまり内傾せず、ゆるい凹面をなす。外端部稜は鋭い。	•ヘラケズリ稚拙。全体の6分の5までケズる。 •ロクロヘラケズリは逆時計回り。	精良 0.3cm大砂粒やや多い。	良好	暗青灰色	•口縁ひずむ。 •(5－6)とセットで出土。
		5－7	口径:12.9 器高:5.15	•5に類似する。天井部ヘラケズリの範囲は全体の6分の5まで。稜はあまり鋭くない。端部は内傾して段をなす。	•ロクロヘラケズリは逆時計回り。 •天井内面をヨコナデ仕上げする。	精良	良好	青灰色	•(5－8)とセットで出土。
	坏身a類	5－2	口径:10.65 受部径:13.0 器高: 5.0	•底面は平坦で広く、ヘラケズリ部との境が少し外方へ突出し、箱形となる。体部は短かく強く内面して立上がる。 •受部はうすく外上方へのびる。稜は鋭い。 •口縁部は内傾して直線的に立上がる。2.2cmと高めである。端部は内傾して段をなし、鋭い稜を有す。	•ロクロヘラケズリは時計回り。	精良 0.3～0.5cm大の砂粒やや多い。	特に良好	暗青灰色 断面暗赤褐色	•底外面にヘラ描き沈線あり。 •底外面にうすく灰白色の自然釉ふりかかる。 •重ね焼き痕あり。 •(5－1)とセットで出土。
		5－4	口径:11.7 受部径:13.2 器高: 4.5	•体～底部は6に似る。 •受部はやや厚く、断面二等辺三角形を呈す。 •口縁は2ほどのびない(1.8cm)。口縁のナデ調整はていねいで少し外反ぎみとなる。端部は肥厚し、内傾する凹面をなす。稜は鋭い。	•ロクロヘラケズリは、逆時計回り。 •内面底部にタタキ目痕(?)残る。	精良 0.2～0.5cm大砂粒少し含む	特に良好	暗青灰色 断面暗赤褐色。	•受部上面に自然釉。 •(5－3)とセットで出土。

	器形	図版No.	法量(cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
須恵器	坏身b類	5－6	口径:10.75 受部径:12.75 器高: 4.7	•(8)に似る。体部は丸みを帯びる。 •各部の稜線が鋭い。 •口端直下の口縁部のナデていねいで、外面端部は少し外彎する。	•ロクロヘラケズリは、逆時計回り。	精良 黒色吹出し顕著	良好	青灰色	•(5－5)とセットで出土。
		5－8	口径:11.55 受部径:13.4 器高: 4.9	•体～底部はやや丸みを帯び、ヘラケズリ部分との境はあまり外へ張り出さない。 •受部はうすく外水平方向へのびる。稜は鋭い。 •立上りは1.7cmであまり高くない。受部から内傾ぎみに立上がり、端部は垂直になる。端面は平坦でやや内傾する。	•ロクロ成形・調整。 •ヘラケズリの範囲は全体の7分の5。逆時計回り。 •底内面をヨコナデ仕上げする。	精良 0.5cm大の砂粒含む。 黒色吹出しあり。	良好	暗灰色	•(5－7)とセットで出土。
	高坏蓋	5－9	口径:11.95 器高: 5.55	•天井はやや高く丸みを帯びる。稜は小さく鋭く突出する。 •口縁部はていねいにナデられ、ほぼ垂直に下がる。ていねいなナデにより、端部は内外にやや肥厚する。やや内傾して凹面をなす。 •天井部に中凹みのつまみを有す。	•内面天井部、ヨコナデする。 •ロクロヘラケズリは時計回り。 •全体的に調整はていねいである。	精良	良好	青灰色 断面暗赤褐色	•天井部外面に高坏を重ね焼いた痕跡(自然釉)が残る。 •(5－10)とセットで出土。
	有蓋高坏	5－10	口径:10.3 器高: 8.9 受部径:12.3 底径: 7.8	•坏身に短脚を接着したもの。 •身部底は、平坦で短く内彎して立上がり、口縁部へ続く。 •口縁部は内傾し、強いナデによって立上がって外端は外へ開きぎみになる。端部は内傾する凹面をなす。 •脚は短脚1段すかし(3孔)。端部はやや厚して内彎ぎみに丸くおさめる。	•底内面をヨコナデ仕上げする。 •ロクロヘラケズリは逆時計回り。	精良	特に良好	断面暗赤褐色	•(5－9)とセットで出土。

第5集中(3)

	器形	図版No.	法量(cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
土師器	高坏1類	5－11 ～ 5－19	(11)口径:18.8 器高:11.7 (12)口径:17.7 器高:10.8 (13)口径:18.8 器高:12.1 (14)口径:18.8 器高:11.4 (15)口径:19.3 器高:11.7 (16)口径:19.3 器高:12.3 (17)口径:17.7 器高:11.2 (18)口径:18.9 器高:11.3 (19)口径:17.4 器高:11.0	・坏底部外面はゆるく外側へ張出す。 ・坏部は底部からほぼ45°の角度で外上方に直線的にのび、口縁部に至る。口縁部はやや強いヨコナデによっていったん軽く内彎したあと、端部は小さく外反するのを特徴とする。口径は17～20cmである。端部は丸くおさめる。 ・外面の坏底部と口縁部の境目には粘土板の接合によるわずかな段を有す。段はヨコヘラミガキによってミガキ潰されてしまうものが多い。 ・脚部はほぞ継ぎにつながれ、胴中位はいく分外側へ張出す。絞り込みの際の握り具合を反映しているものと思われる。小さく開きながら短くのび、くの字に強く屈曲して底口縁に至る。 ・脚部口縁はヨコナデによって外見が甲高に張出すものが多く、端部は丸くおさめる。 ・高さは11～12cmに限られる。	・外面は全体をたて方向にヘラケズリするもの(13.14.15.18)と脚部のみをヘラケズリするもの(11.12.16.17.19)がある。いずれもヨコ方向に細かいヘラミガキを密に施す。 ・坏部内面はヨコハケ、又はタテハケ調整後、ヨコヘラミガキを加えるもの(12.15.19)と、ヨコナデのみでヨコヘラミガキを加えるものがある。(17)のようにヘラミガキ後、ヨコナデを加えるものがある。 ・脚内面は口縁部をヨコナデ調整した後、ヨコヘラケズリする。中には屈曲部下をヨコハケ調整するもの(17.19)がある。また粗いヘラミガキを加えるもの(11)がある。 ・脚と坏の接合はほぞでつなぐ。内面ケズリ後、器壁にへそを押しナデるのが一般的である。	精良	良好	橙褐色	
	壺2類a	5－20	口径: 8.0 器高:14.9	・底部は平坦でやや丸みを帯びる。擬口縁部分でやや屈曲して立ち上がり、体部中位で少し屈曲ぎみに張出す。体部上半と下半を分割成形して接合したような感じもする。 ・頸部は強くくびれ、外上方へ直線的にのびる。 ・口縁端部は小さく内彎して丸くおさめる。	・外面は口縁部タテヘラミガキ、体部上半を斜め→タテヘラミガキした後、下半をヨコヘラミガキする。最後に頸部と底部をヨコヘラミガキする。 ・内面はヨコナデ。口縁部のみタテヘラミガキする。 ・ヘラミガキは密でていねいである。	精良	良好	橙褐色	
	壺3類	5－21	口径:10.9 器高: 7.6	・第4集中(12)よりも大形。 ・底部は平坦である。 ・体部は中位よりやや上が一番張出す。内傾してくびれる。 ・口縁部は頸部からくの字に折れて外反しながら短くのび、端部は小さく内彎する。 ・内面は鋭い稜をもつ。	・内外面ともヨコナデ後、細くて粗いヨコヘラミガキを行う。	精良	良好	橙褐色	

第5集中 (4)

	器形	図版No.	法量 (cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
土師器	甕2類	5—22	口径:12.2 器高:15.8	• 形態は第4集中(14)に類似するが、大形である。 • 口縁部はほぼ垂直に立上がる。 • 底部は小さく平底をもうける。 • 有段口縁の壺形土器の形態に類似する。	• 内外面ともヨコナデ後、細く粗くヨコヘラミガキを加える。	精良	良好	橙褐色	

第6集中 (1)　　第6集中

	器形	図版No.	法量 (cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
須恵器	坏蓋a類	6—1	口径:12.8 器高: 4.2	• 天井部は平坦。 • 稜は小さく鋭く突出する。稜下面のナデ強い。 • 口縁部は小さく外反して垂下する。口径は稜径をしのぐ。端部は内傾する面をなし、鋭い稜をもつ。	• ロクロ成形、調整。調整ナデはていねい。 • 内面天井部をヨコナデ仕上げ。 • ロクロヘラケズリは逆時計回り。	精良 0.4cm 大砂粒少し含む。	特に良好	暗青灰色	• (6—2)とセットで出土。 • 全体の2分の1欠。
	坏身a類	6—2	口径:11.5 受部径:13.15 器高: 4.4	• 底部は平坦。内彎しながら口縁部へ続く。 • 受部はやや厚く、外上方へのびる。 • 口縁部は内傾し、端部直下を強くナデるため端部外形は少し外傾する。端部は内傾する凹面をなす。	• ロクロヘラケズリは逆時計回り。 • 底内面をヨコナデ仕上げする。	精良 0.4～0.5cm大砂粒少し含む	特に良好	暗青灰色	• (6—1)とセットで出土。
	甕	6—3	口径: 9.05 器高:10.3 体部径:11.3	• 体部は中位やや上方が強く張り出す。この最大径部上方に平行な沈線を施し、その中を櫛目状工具で刺突し列点文をなす、この部位に1孔を穿つ。 • 頸は細めで、1旦外反しながら立上がったあと段をなして口縁部に至る。段は小さく鋭く突出する。段をはさんで上下に櫛描波状文を施す。 • 口縁端部はつまみ出しぎみに仕上げる。端面は内傾する平坦面をなす。	• ロクロ成形、調整。 • 体部最大腹径部下にはカキ目調整を施す。 • 底部は格子目タタキ調整のあと軽くナデ仕上げする。	精良	特に良好	暗青灰色	• 底面に窯体の一部付着。 • 上半～内面にかけて暗緑灰色の自然釉多量にかかる。

	器形	図版No.	法量(cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
土師器	高坏2類	6－4 ～ 6－9	(4)口径:20.8 器高:13.4 (5)口径:17.3 器高:11.9 (6)口径:21.3 器高:13.7 (7)口径:17.5 器高:12.2 (8)口径:14.4 器高:13.8 (9)口径:18.3 器高:13.3	•形態は1類と大差ないが、坏部の深さが1類よりも若干深めである。坏底部からの立上がりは直線的でなく、内彎しながら立上がり、1類よりも大きく外反しておわる。 •坏底と口縁の境の段は1類よりも明瞭である。 •脚部は1類よりも絞りこみが強く、その分胴張りでやや広く開いてのびる。脚口縁は外彎しておわるものがほとんどで、1類のように甲高にならない。 •(4.6)は他よりもやや大きめである。	•坏部外面はヨコナデ後、タテ方向に暗文状のヘラミガキを施す。坏底部外面はナデる(6)か、未調整のままなのが特徴的である。 •脚部は口縁部をヨコナデしたあとタテ方向に暗文状ヘラミガキを施す。 •坏部内面はヨコナデ後、タテ方向に暗文状ヘラミガキを施す。 •脚部内面は口縁部ヨコナデの後、ヨコヘラケズリし、へそを器壁にナデつける。	精良	良好	橙褐色	
	高坏4類a	6－10 ～ 6－12	⑽口径:17.9 器高:12.9 ⑾口径:20.0 器高:13.1 ⑿口径:18.5 器高:13.5	•形態は高坏2類にほぼ同じである。坏部の口縁端部が外反せず、ほぼ直線的にのびる点が違う。 •段が明瞭で全体的にがっちりとできあがった感じがある。 •坏部外面は体部中位に幅0.2～0.3cmの沈線がめぐる。これは粘土の接合痕を沈線によって有段化、文様装飾化しているものと思われる。	•沈線施文後、ヨコナデまたはヨコハケ(11)調整し、タテヘラミガキを加える。坏底部外面も同様である。 •脚部外面は他の高坏に同じ。 •坏部内面はヨコナデまたはヨコハケ(10)調整し、暗文状タテヘラミガキを加える。 •脚部内面調整は他に同じ。	精良	良好	橙褐色	
	高坏4類b	6－13	口径:21.4 器高:15.0	•坏部の形態は高坏4類aに同じ。沈線による有段化が高坏4類aよりも顕著である。 •脚部はあまり屈曲せず、大きく開き、口縁部やや上に突帯を設ける。	•内外の調整は高坏4類aに同じ。脚内面はヨコナデ仕上げする。	精良	良好	橙褐色	

	器形	図版No.	法量(cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
土師器	坏1類a	6－14 6－16	⑭口径:15.3 器高: 4.5 ⑯口径:13.6 器高: 4.8	•底部は平坦に近い。体部は短く立上がって屈曲し、外反して短くのびる内斜口縁をなす。 •整形はていねい。 •(14)は(16)に比べ底部が平坦で、より強く彎曲した体部を有す。口縁の屈曲も強く、内面の屈曲部は明瞭な稜をなす。	•外面は口縁ヨコナデ後、全面ヨコヘラミガキを行う。 •内面は口縁ヨコナデ後、タテヘラミガキ、後体部のみヨコヘラミガキを行う。	精良	良好	橙褐色	
	坏1類b	6－15 6－17	⑮口径:14.0 器高: 5.8 ⑰口径:18.3 器高: 9.2	•形態は1類aに似るが、やや底が深く、底部から体部の立上がりはゆるい屈曲をもつ。 •(17)は坏1類aを大形化した器形である。底部は厚い。内面頸部は稜をもつ。	•調整は1類aにほぼ同じ。内面は全面ヨコヘラミガキを行う。 •外面は口縁部ヨコナデ後、タテヘラミガキを行う。体部はヨコヘラミガキを施している。 •内面はヨコナデ後、口縁部ヨコヘラミガキを行う。体部は放射状暗文。	精良	良好	橙褐色	
	坏2類a	6－18 6－18	口径:13.6 器高: 5.2	•底部からゆるやかに彎曲して立上がり、口縁部は内彎して丸くおさめる。	•口縁部外面はヨコヘラミガキ後、密なタテヘラミガキ。内面も密なタテヘラミガキが施されている。	精良	良好	橙褐色	
内黒土師器	坏1類b	6－19	口径:15.2 器高: 6.4	•内面の稜は明瞭である。 •成形・調整ともていねい。	•内外面を密にヨコヘラミガキする。	精良	良好	橙褐色	

包含層（1）

	器形	図版No.	法量（cm）	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
須恵器	坏蓋a類	包－1	口径:11.6 器高: 4.2	•天井部は低く平坦。稜は小さく突出する。 •口縁部は一旦内彎ぎみに下がってから垂直に下がる。端部は内傾する段をなす。口径は稜径をしのぐ。	•ロクロヘラケズリは逆時計回り。 •天井内面をヨコナデ仕上げする。	精良	やや甘い	暗赤灰色	•10Cグリッド出土。
土師器	高坏1類	包－2 包－3	(2)口径:8.5×2 器高:(8.3) (3)口径:18.8 器高:11.4	•第5集中高坏1類に近似する。	•坏部底～脚部はヘラケズリしたまま。坏部はヨコナデ仕上げする。簡略な調整である。	精良	良好	橙褐色	
	高坏5類	包－4 ～ 包－7	(4)口径:16.0 器高:13.2 (5)口径:15.5 器高:13.0 (6)口径:16.2 器高:12.1 (7)口径:15.0 器高:12.8	•口径と底径がほぼ等しいもの。 •脚と坏部の接合部は強く絞り込まれて脚は胴張りが強い。	•内外面をヘラミガキするものと、ヘラケズリを残すもの(7)がある。 •坏内面のヘラミガキは体部をタテヘラミガキした後、底部を一定方向にそろえてヘラミガキする。	精良	良好	橙褐色	
	壺1類	包－8	口径:13.7 器高:(20.0)	•体部は少したてにつぶれた球形を呈し、肩が少し張る。頸部は垂直に短く立上がった後、外反し、段をなして垂直方向に立上がる。	•内面口縁～外面はタテヘラミガキする。 •内面は荒く、ヨコナデ～ヘラケズリする。 •底部外面はハケ目調整する。	精良	良好	橙褐色	
	壺2類a	包－9	口径:4.0×2 器高:15.0	•口縁はあまり内彎せず、直線的。	•口縁部はヨコナデ。 •体部はヨコナデ～ヨコヘラミガキ。 •体部上半と下半を分割成形か。	精良	良好	橙褐色	
	壺2類b	包－10 包－11	(10)口径: 7.7 器高:(14.5) (11)口径: 8.2 器高:15.6	•体部は横に強く張出す。 •(10)は口縁部はあまり長くのびない。 •(10.11)とも底部を欠く。	•内面は口縁部ヨコヘラミガキ。縁 •外面は、口縁部タテヘラミガキ。 •体部はヨコヘラミガキ～下半をタテヘラミガキする。	精良	良好	橙褐色	

包含層 (2)

	器形	図版No.	法量 (cm)	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
土師器	壺2類c	包—12	口径:4.2×2 器高:15.2	•底～体部下半は丸い。肩部で屈曲して内傾し、頸部に至る。頸部は強い稜はもたない。 •口縁部は外反しながらのびる。 •体部下半に焼成後穿孔する。	•内外面ともヨコヘラミガキする。	精良	良好	橙褐色	
	壺4類	包—13	口径:3.0×2 器高: 7.3	•第4集中(13)に似るが、小形。 •底部は軽く、ヘラケズリするが肉厚のまま。	•内外面ともヨコハケ調整。口縁部をヨコナデする。	精良	良好	橙褐色	
	甑2類	包—14	体部径: 7.6 器高:(5.0)			精良	良好	橙褐色	
	坏1類a	包—15	口径:13.5 器高: 4.7	•深さの浅いもの。	•外面下半は荒いヨコヘラケズリ。他はヨコナデ。	精良	良好	橙褐色	
	坏1類b	包—16 ～ 包—18	(16)口径:15.2 器高: 6.0 (17)口径:(15.2) 器高:(6.6) (18)口径:(13.1) 器高: 7.0	•やや深いもの。 •(18)の体部の彎曲は強い。 •(16)は頸部があまりくびれない。	•内外面とも底部ヨコヘラケズリの後、ヘラミガキする。 •(17・18)の内面は放射状の密なタテヘラミガキ。	精良	良好	橙褐色	
	甕1類	包—20	口径:11.2 器高:24.9	•球形～卵胴形の体部。頸部は稜をなしてすぼまり、外反しながらのびる。	•内外面ともヨコヘラケズリする。 •口縁部ヨコナデ。 •外面はヨコヘラミガキ。	精良	良好	橙褐色	
	甕2類	包—21	口径:17.2 器高:24.4	•丸底で球形の体部を有する。 •頸部はくの字に折れてやや外反する。 •口縁部は複合口縁で一度段をなして再び外反してのびる。	•口縁部はヨコナデ。 •外面体部はタテハケ調整。 •内面はヘラケズリする。	精良	良好	橙褐色	
内黒土師器	坏	包—19	器高:(3.3)		•外面ヘラケズリ。	精良	良好	橙褐色	

第11表　一時坂古墳周湟内出土土器器形別数量表

	器形	第2集中	第4集中	第5集中	第6集中	包含層	計
須恵器	甕		1				1
	坏			4	1		5
	蓋			4	1	1	6
	高坏			1			1
	鉢	1			1	1	2
	小計	1	1	9	3	1	15
土師器	高坏 1類	2		9		2	13
	2類		6		6		12
	3類		1				1
	4類a				3		3
	4類b				1		1
	5類	1				4	5
	6類a		1				1
	6類b		1				1
	壺 1類					1	1
	2類a			1		1	2
	2類b		1			2	3
	2類c					1	1
	3類		1	1			2
	4類		1(1)			1	2(1)
	鉢 1類a		2			1	3
	1類b	1	1				2
	2類			1			1
	坏 1類a		1		2	1	4
	1類b				3(1)	3	6(1)
	2類a		2(1)		1		3(1)
	2類b		1				1
	甕 1類					1	1
	2類					1	1
計		5	20	21	19	20	85

(2) その他の墳墓

古墳時代に属する、その他の墳墓はいずれもB地区より発見されている。これらについては、一部に後世の攪乱による破壊や削平が認められ、発掘調査に際して墳丘の存在が確認できなかったものがある。なかでも、ここで「周溝墓」および「石室状遺構」として扱った遺構については、特に墳丘の有無が問題となるが、本報告書においては「周溝墓」を仮に次のように定義しておくことにする。

「平面形で、方形あるいは円形の溝を囲遶して墓域を画した墓。封土は低いか、確認不能である。主体部は地山に残るもの、または封土中にあって消失して確認できない事もある。弥生後期の周溝墓の系列上に置く墓制である。当地方の出現期竪穴式系古墳と周溝墓のちがいは、副葬品の多少、墓前祭式の有無により分けた。」

検出された遺構は以下のとおりである。

・1号周溝墓 ――― 平面形はいわゆる前方後方形を呈する。前方部は陸橋の形態をとり、他に陸橋を1箇所有する。主体部・墳丘は確認できなかった。周溝中に方形小竪穴1基がある。

・2号周溝墓および土壙墓 ――― 平面形は円形に近いが西南半は破壊されており不明。陸橋を有する可能性がある。主体部・墳丘は確認できなかった。周溝中に大型の方形土壙墓とこれに平行する完形土器配列が検出された。

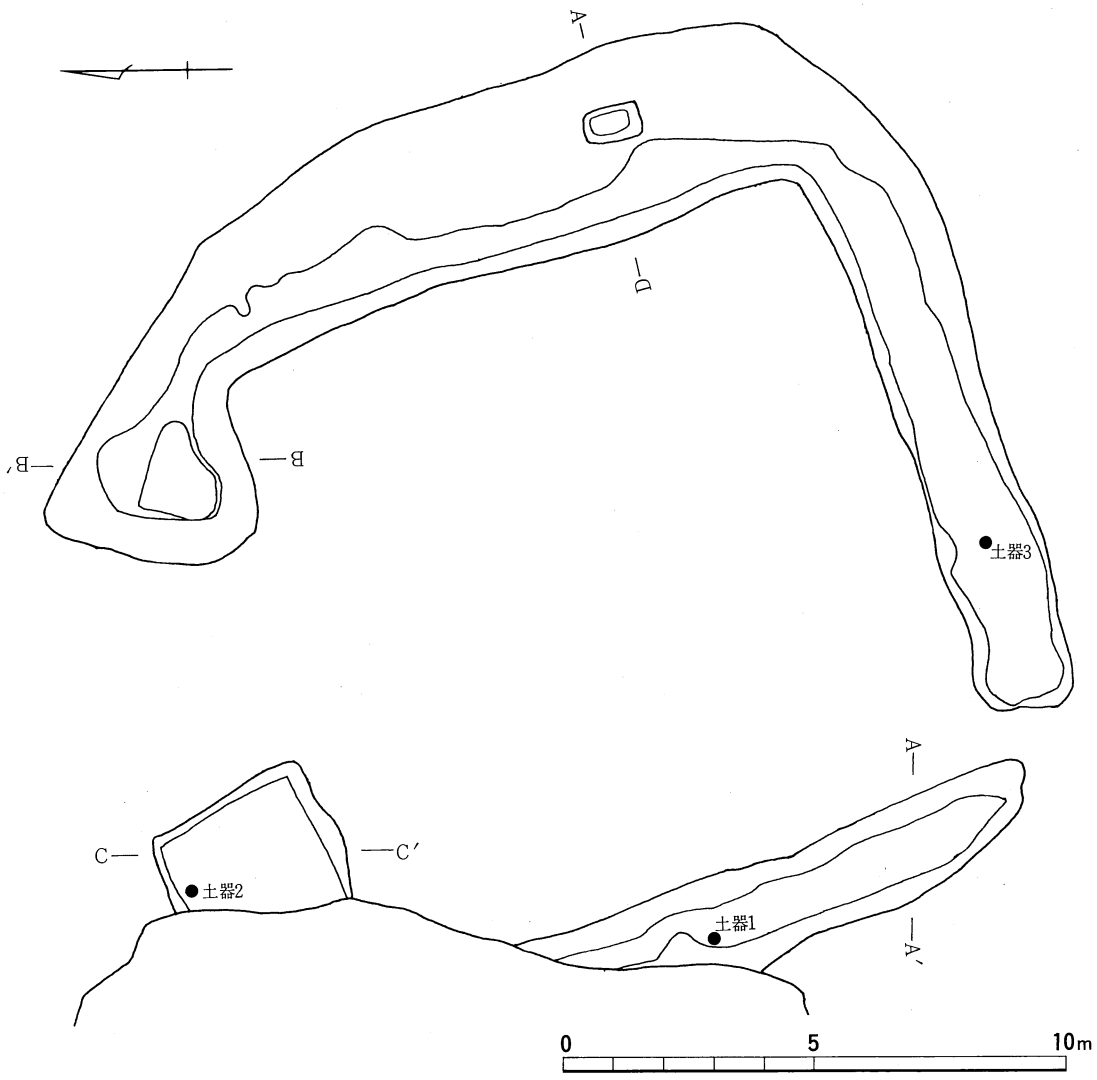
・3号周溝墓 ――― 西半が破壊されており、平面形は円形もしくは方形である。陸橋を有する可能性がある。主体部・墳丘は確認できなかった。周溝覆土中に方形の配石が検出された。また、周溝の中心より部分に方形小竪穴2基がある。

・石室状遺構 ――― 形態は竪穴式石室と同じだが、配石部分が2m弱と小型である。墳墓の主体部と考えられるが、墳丘や周溝は確認されなかった。

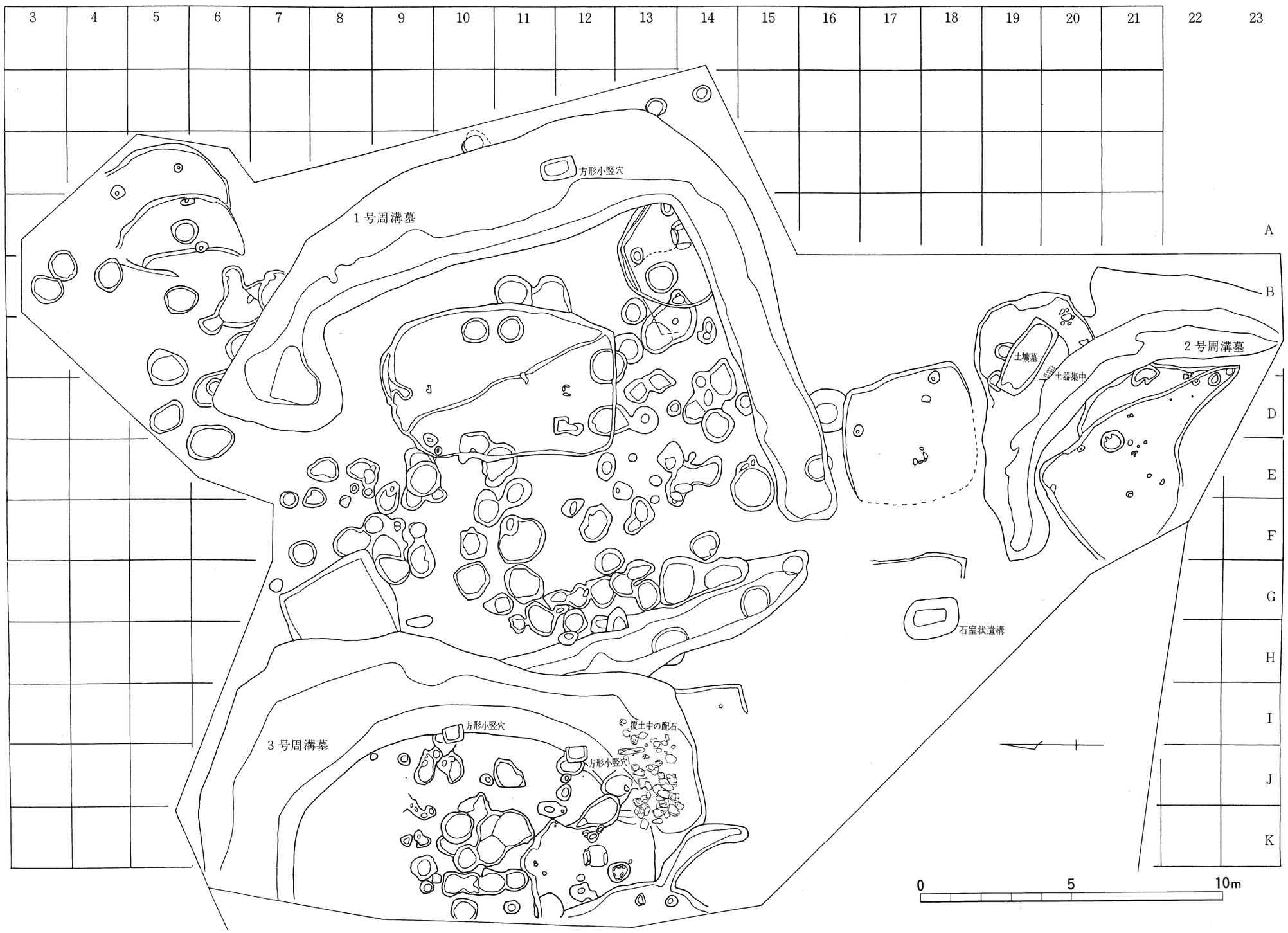
1号周溝墓（第104・105図）

緩やかな西向き斜面であるB地区の東半から検出された大形の方形周溝墓である。試掘調査段階から周溝の一部が複数確認されていたが、全域の発掘によって全体形状が明らかとなり、周溝墓として確認された。遺構確認面は本遺跡の地山を形成するローム土の上面である。しかし、調査の初期段階より、本周溝墓の主体部に相当するような遺構や遺物および墳丘を形成するような盛り土などは全く確認されなかった。これは、表土が比較的薄く、全般に後世の削平も著しいことから、本来的には封土などが存在した可能性も否定できない。1号周溝墓の付近は縄文・弥生時代の遺構の密集地区であり、本遺構によって多くの他の遺構が破壊されているものと見られる。また、1号周溝墓も西側の溝の一部を、これより新しく設けられた3号周溝墓の溝によって失っている。遺構の密集を反映するように、発掘の過程においては周溝の覆土中から他の時代の流込遺物もいくつか検出された。

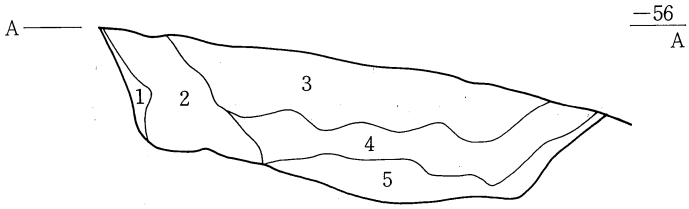
1号周溝墓は一辺約19mを計る当地方では大型の方形周溝墓である。平面形はいわゆる前方後方形を呈し、主軸は概ね、北北西－南南東方向を示す。前方部は両側の溝を太くし端部に角度をつけることによって外開き形に作り出している。前方部先端に外部との境界を持たず、いわゆる陸橋の形態をとる。またこれとは別に、南側コーナーに陸橋部を有する。周溝の形態は比較的精緻である。特に、内側は入念に成形されていると見え、溝に囲まれた内部の前方後方形は、よく整っている。緩斜面とはいえ、ある程度の斜度を有する台地上に立地しているためもあってか、それぞれの周溝の幅と深さはまちまちである。比較的斜度のない南と西の溝はやや細く、山側の急斜面へと続く北側の溝は太くなっているが、これは斜度のきつい山側の掘削をより容易に行うための工夫と考えられる。またこれに関連して注意されるのは、前方部を形成する東西の溝端部の内、山側に当たる北の端部がやや丸味を帯びて掘られているのに対し、やや平坦な南の端部に



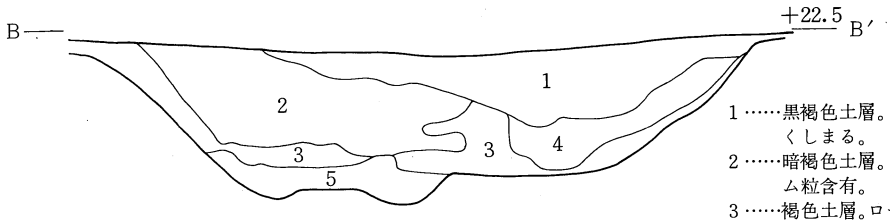
第103図　1号周溝墓平面図（1/150）



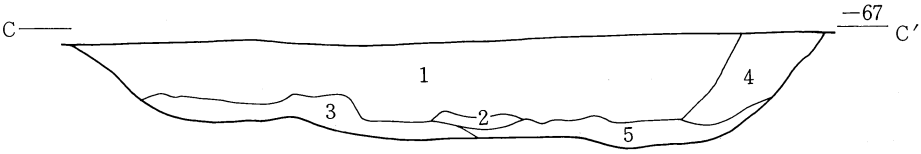
第104図　B地区遺構分布図（1/150）（遺構名は古墳時代の遺構）



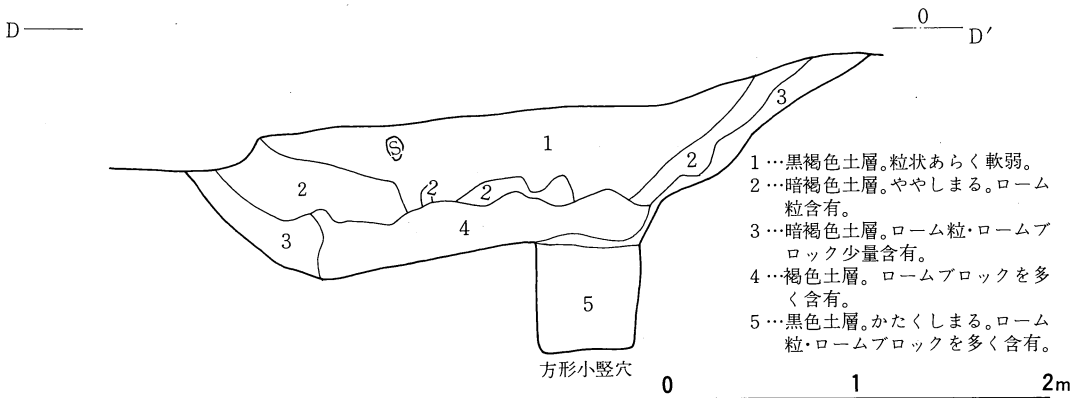
1……黄褐色土層。軟弱なローム質土。
2……褐色土層。粒状細かくしまる。小ロームブロック含有。
3……黒色土層。粒状あらく軟弱。
4……黒褐色土層。やや軟弱。小ロームブロック含有。
5……暗褐色土層。やや粘質でよくしまる。



1……黒褐色土層。粒状細かく、かたくしまる。
2……暗褐色土層。よくしまる。ローム粒含有。
3……褐色土層。ローム粒を多く含有。
4……褐色土層。ややかたく、ローム粒を少量含有。
5……褐色土層。かたくしまる。ローム粒、ロームブロックを多く含有。



1……黒褐色土層。粒状ややあらく軟弱。
2……黒色土層。粒状細かくややしまる。
3……黄褐色土層。粘質でかたい。ローム粒多く含有。
4……黄褐色土層。ロームブロックを含有。
5……黄褐色土層。よくしまる。ローム粒多く含有。

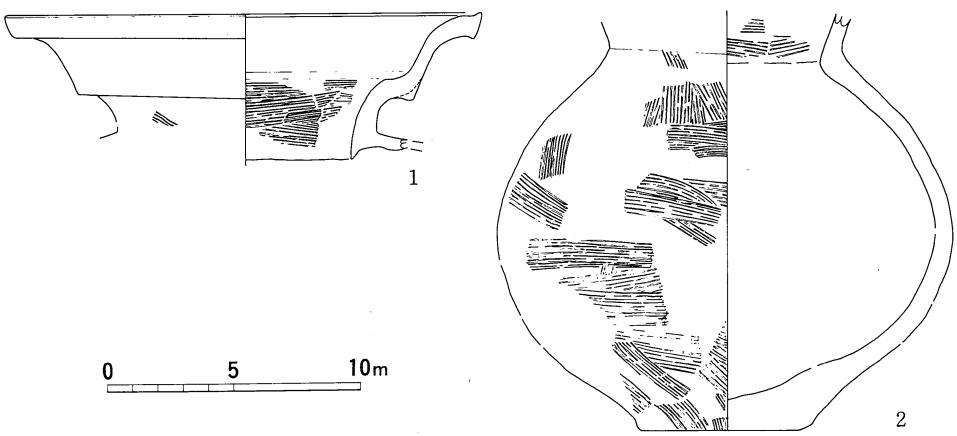


1…黒褐色土層。粒状あらく軟弱。
2…暗褐色土層。ややしまる。ローム粒含有。
3…暗褐色土層。ローム粒・ロームブロック少量含有。
4…褐色土層。ロームブロックを多く含有。
5…黒色土層。かたくしまる。ローム粒・ロームブロックを多く含有。

第105図　1号周溝墓セクション図（1/40）

ついては底面が平らで平面形も角張っている点である。関連遺構として、周溝東側コーナー付近の底面に、長方形を呈する小竪穴１基が検出された。この方形小竪穴は、周溝底面よりさらに50cm以上の深さを有し、しかも壁はほとんど直に掘られている。周溝の埋没以前のある時期に周溝内に設けられたものと解釈される。なお、本遺跡からはこれと同様な方形小竪穴が、一時坂古墳周湟内、３号周溝墓の周溝部からもそれぞれ２基ずつ検出されている。

周溝内から検出された遺物としては、土師器破片のほか若干の縄文土器・弥生土器片・石器類等がある。古墳時代に属する土器は西側周溝覆土中より発見された土師器壺の口縁部破片（１）・前方部南側の周溝端部の底面より出土した土師器壺胴部の破片（２）・南側周溝の底面より出土した土師器壺の胴部破片（３）の３点である。１は有段口縁を呈する土師器壺の口縁～頸部破片であり、口縁を一部欠く以外は全周が残存している。周溝の覆土中の出土である。口径18.9cmで、胎土に砂粒を含み、焼成は良好、やや淡い橙褐色を呈する。頸部はやや短めで、段部外面は粘土紐の張り付けにより稜をつくり出している。外面の調整はヨコナデで、肩部からくびれ部にかけては部分的にハケ目が残るようである。口辺部内面もヨコナデだが、頸部内面には横方向のハケ目が残る。２は、周溝底から検出された壺胴部の破片で、約５分の３周ほどが残存している。やや偏平な下ブクレ気味の球形胴を呈するが、平底を有する。頸部はやや外反してたちあがる。外面肩部は縦方向、胴部は横方向、底部近くは縦から斜め方向のハケ目調整が施され、頸部内面にも横方向のハケ目が残るが、頸部以下の内面には丁寧なヨコナデが施されている。胎土に砂粒を含み焼成は良好で、外面には剝落が認められる。やや淡い茶褐色を呈し、黒斑を有する。胴部最大径17.8cm（推定）、底径6.9cmで、現在高16.3cmを測る。図示し得た２点のほかに、南側周溝底から壺の胴部と思われる土師器片が一括出土している（３）。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で淡茶褐色を呈し、内側はナデ、外面は丁寧に磨かれる。器厚は数mmである。



第106図　１号周溝墓出土土器（1/3）

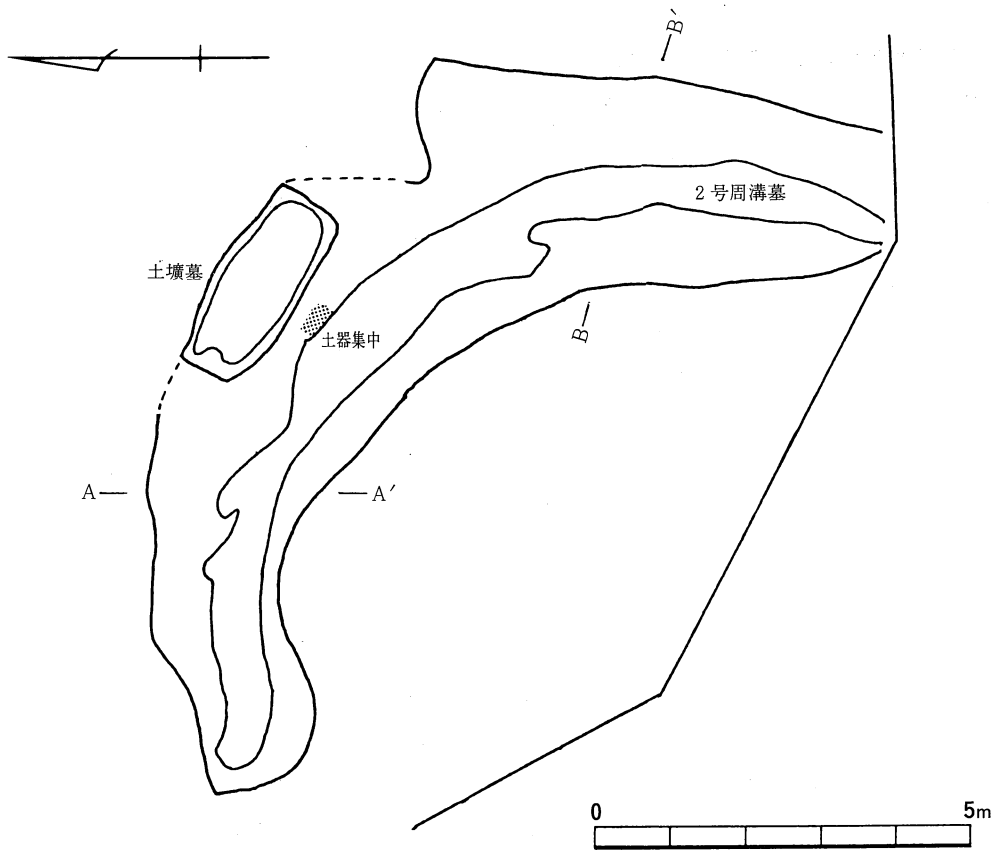
2号周溝墓および周溝中の土壙墓

B地区南端において発見された円形と見られる周溝墓である。平面形は円形に近いものと考えられるが、西南半は後世の攪乱によって破壊されているため、全体の形状は明らかでない。この遺構に隣接して、平安時代の9号住居跡がある。9号住居跡の調査中に周溝の一部と、周溝内に存在する方形の土壙墓が検出されたことを契機として確認された遺構である。遺構の重複部付近は残存する溝の形状が乱れており、プランが一部明確にできなかった。また、発掘の過程においては、主体部に相当する遺構・遺物や墳丘の盛り土は全く確認できなかった。しかし、1号周溝墓と同様に周辺には後世の攪乱も有り、墳丘等が存在しなかったとは断定しがたい。遺構確認面はローム土上面である。周溝中の方形土壙墓を調査中に、これに隣接するとともにほぼ平行して長方形状に並べられた完形土器（土師器）の土器配列を検出した。土壙墓・土器配列ともに2号周溝墓の関連遺構と判断されたが、特に両者が近接していたため、便宜上、土器群は土壙墓に付属するものと捉えた。

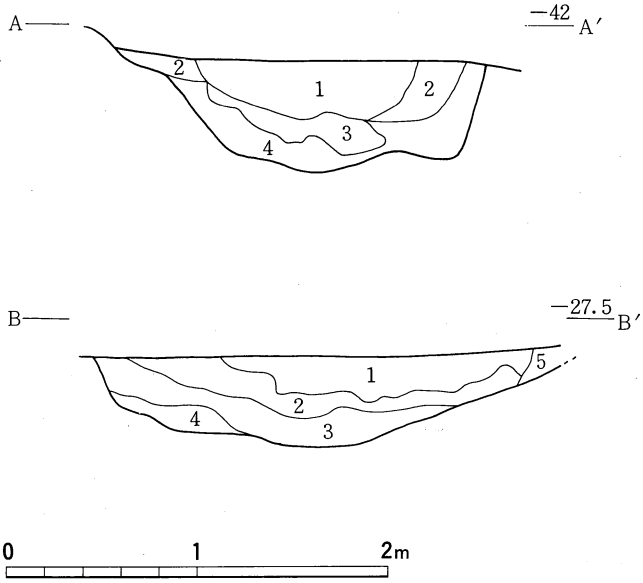
2号周溝墓は残存部で見る限り、平面形は円形を呈し、直径は約13mを計る。周溝北端やや西寄り部分で溝が切れているように観察され、陸橋部が存在する可能性がある。しかし、これより西側が広く失われているため、確認はできない。南半の形状も明らかにし得ない。全体的には形状は不明確であるが、この陸橋部と見られる部分をあえて1号周溝墓の前方部になぞらえてみた場合、両周溝墓の主軸方向がほぼ一致することになるので、一応注意しておきたい。溝は規模に比して幅が大きい。特に山側となる北東方向は著しい。これは1号周溝墓の場合と同じく、溝掘削時の工法上の工夫と見られる。

土壙墓は2号周溝墓の北東隅、溝の山側落ち際付近において発見された。周溝墓の覆土中層より掘り込まれたものである。長軸方向もほぼ溝に沿っており、周溝が完全に埋没する以前に設けられた2号周溝墓の関連遺構とみるのが妥当である。長径約2.2mを計る大型の方形小竪穴で、深さはおよそ50cmである。覆土はロームブロックを多量に含有する黄褐色土で、掘削後、直ちに一気に埋め戻された形跡が明らかである。遺物としては、覆土下層より同一規格の滑石製の管玉7点が出土した。少量ながらも、こうした副葬品的遺物が出土したことから、本小竪穴は一種の土壙墓と判断されるに至った。

この周溝中の土壙墓の南西側にごく近接して土師器の土器配列が検出された。この土器群は、一部に土圧による破損なども認められるが、明らかに長方形に並べ置かれた様態を示し、また土壙墓の長軸と完全に平行している。また、土器の置かれた面はレベル的には土壙墓の掘り込み面と一致している。このため、前述のとおり便宜上土壙墓に所属するものと捉えている。いずれにしても2号周溝墓関連遺構であることは間違いないが、これを一種の墓前祭祀的遺構と仮定した場合は、この土器配列が2号周溝墓の失われた主体部に対する供献であるか、あるいは外側の土壙墓に対する供献であると考えるかが課題となろう。土師器は基本的にはまず高坏を2列に配置し、この上に他器形の土師器を載せるという形態をとっている。これは、本遺跡A地区の「一時



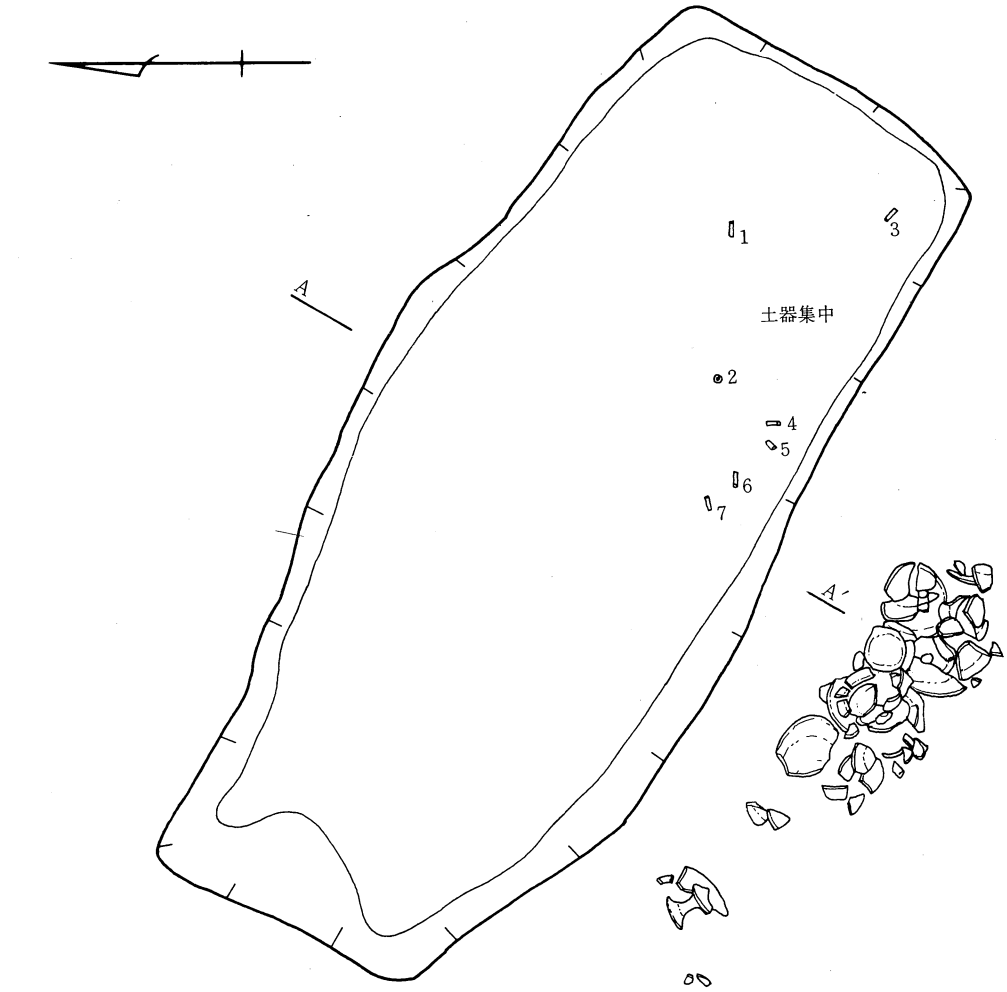
第107図　2号周溝墓・土壙墓平面図（1/100）

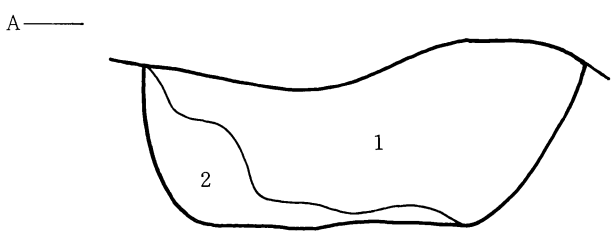


1……暗褐色土層。やや軟弱で、ローム粒を少量含有。
2……暗褐色土層。粒状細かく、ややしまる。
3……褐色土層。ロームブロックを非常に多く含有。
4……褐色土層。ローム粒・ロームブロックを多く含有。

1……黒褐色土層。粒状あらく、やや軟弱。
2……暗褐色土層。粒状細かく、ややしまる。
3……暗褐色土層。小ロームブロックを多く含有。
4……褐色土層。ローム粒・ロームブロックを多く含有。
5……褐色土層。ローム粒を含有。

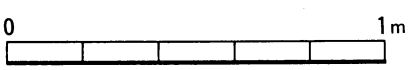
第108図　2号周溝墓セクション図（1/40）





1……黄褐色土層。大ロームブロックを多量に含有し、かたくしまる。

2……褐色土層。ロームブロックを少量含有し、かたくしまる。



第109図　土壙墓平面図・セクション図（1/20）

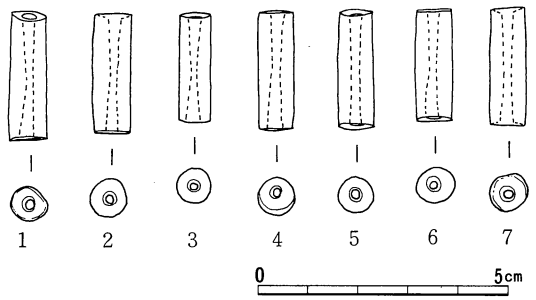
坂古墳」周湟底において検出された「土器第４・５・６集中」の在り方と完全に共通するものである。同一遺跡内の複数の墳墓から、これまで確実な確認例のない同様な祭祀的遺構が検出されたことになり、墓前祭祀行為の復元の可能性なども含め、極めて重要である。一時坂古墳周湟底の土器集中との相違点にも注意が必要であろう。使用器種は、一時坂古墳例ではすべての土器集中に須恵器が含まれ、また須恵器が大切に扱われているように観察され、一部には須恵器の代用品として模倣土師器が使用されている可能性もある。これに対し、土壙墓例では須恵器は１点も含まれず、対照的に、一時坂古墳には見られなかった内面黒色処理の土師器が多用されている。若干の時期差は考慮するとしても、同様の祭祀的行為を行う以上は両墳墓の有機的関連を想定することはとくに無理とは思われず、注目される事実である。

（土壙墓内出土の玉類）

土壙墓内の覆土下層より、管玉７点が出土した。土壙墓の南部分に比較的集中して検出されている。

本遺跡からはＡ地区の一時坂古墳とＢ地区のこの土壙墓より玉類が出土している。これらについては一括して形態分類を行った（Ｐ.113参照）。土壙墓出土の管玉は類型Ｋ－Ｉに属する、研磨により製作された石製の玉である。一時坂古墳出土の管玉（Ｋ－Ⅱ類）に比べ、最大径が大きい点と色調に特徴がある。

７点の管玉は同一の石材から製作された同一規格品である。長さはおよそ22㎜～26㎜、太さは７～８㎜で法量的にそろっている。石材は深緑色の滑石で、軟質の石を素材としているが表面の光沢が美しい。いずれも入念な研磨によって精緻に製作されている。両側の端部がやや盃状に凹むものが多い。



第110図　土壙墓出土玉類（2/3）

第12表　土坂墓出土玉類観察表

番　号	種　類	類　型	材質(石質)	色	長さ(mm)	最大径(mm)	製　法	出土レベル(cm)
1	管　玉	Ｋ－Ⅰ	滑　石	深緑色	25.7	7.5	研　磨	－121
2	管　玉	Ｋ－Ⅰ	滑　石	深緑色	23.8	8.0	研　磨	－117.5
3	管　玉	Ｋ－Ⅰ	滑　石	深緑色	21.9	7.0	研　磨	－112.5
4	管　玉	Ｋ－Ⅰ	滑　石	深緑色	24.0	7.5	研　磨	－112
5	管　玉	Ｋ－Ⅰ	滑　石	深緑色	23.9	7.0	研　磨	－112
6	管　玉	Ｋ－Ⅰ	滑　石	深緑色	22.2	8.0	研　磨	－123
7	管　玉	Ｋ－Ⅰ	滑　石	深緑色	23.4	8.1	研　磨	－121

（注）出土レベルは原点Ｂ－１（標高802.905m）からの比高を㎝で示す。

（土壙墓土器集中の土器）

前述のように、土壙墓付近からは、内面に黒色処理を施したものを含めた土師器による土器配列が検出されているが、各個体はいずれも完形、あるいは復元可能なものであった。これらについて形態的分類を試みた。分類は一時坂古墳周湟出土土器（以下古墳周湟出土土器と略す）の分類に準じ、混乱を避けるため各器形ごとに、古墳周湟出土土器の分類で用いた数字の次の数字からをあてた。

〔高坏〕

7類　器形は古墳周湟出土土器の1類にやや似るが、全体的に小型であり、バランス的には脚部がやや短小である。坏部底面と体部の境界は屈曲し稜をなすが、明確な段とはならない。口縁下の内面はやや強いナデにより内彎気味となる。脚部は外方に向けて開きながら端部で屈曲気味となる。脚部外面と坏部には粗いヨコヘラミガキが施される。

8類　坏部がやや浅めで、くっきりとした稜を有する。脚部は7類よりも外方に開き、端部の屈曲も強い。また、やや胴膨れとなる。坏部の外反度・脚部の形態差などによりａ・ｂ類に分けた。

〔壺〕

5類　小型丸底土器で、胴部はやや偏平である。約2分の1個体からの復元であり，内黒を呈する。

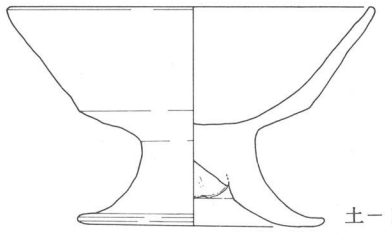
〔坏〕

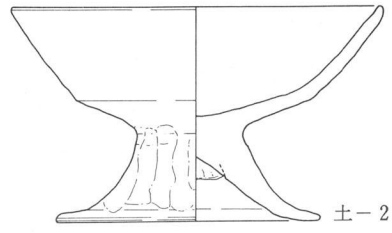
3類　器形は古墳周湟出土土器の2類ａに近いが，薄手で焼きがよい。

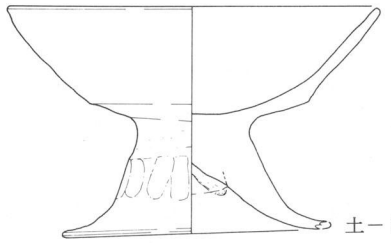
4類　丸底で、内彎しながら立ち上がり、屈曲気味に外反して口縁に至る。ハケ目調整と暗文状の放射状ヘラミガキが加えられるものがある（土－15・16)。すべて内黒を呈する。

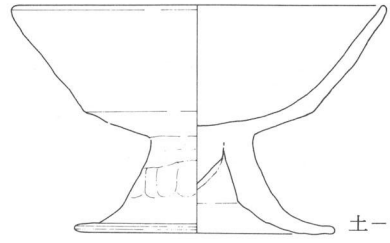
5類　須恵器坏蓋を模したような形態を呈する。屈曲部外面の稜はあまり顕著でない。内黒を呈する。

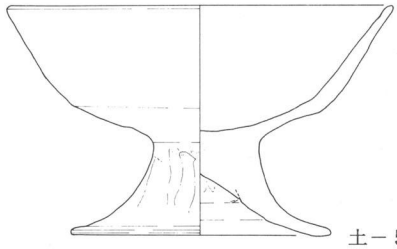
これらの土器の全体的な特徴として，内面黒色処理が施されるものが多いことが挙げられ，17個体中8個体が内黒の土師器でしめられている。この土器群には須恵器が全く含まれず，すべて土師器により構成されていること，古墳周湟の土器集中では須恵器に特別な意味が持たされている可能性があることなどを併せ考えると、本土器群においては内黒の土師器に何らかの意味（例えば須恵器の補完、等）が持たされていることが考えられよう。また、前述したようにこれらの土器は、部分的に攪乱を受けているが、設置（？）した当時の状況を割合と良く残している。そこで、可能なものについてセット関係を復元してみると、土師器―内黒の土師器という組み合わせが圧倒的に多い。さらに器形毎にかなり規則的な組み合わせが行われているなど，古墳周湟出土の土器群と併せて今後の検討が必要となろう。本土器群の所属時期はその形態的特徴などから、古墳周湟出土土器の所属時期とあまり大きな隔たりはないと考えられる。

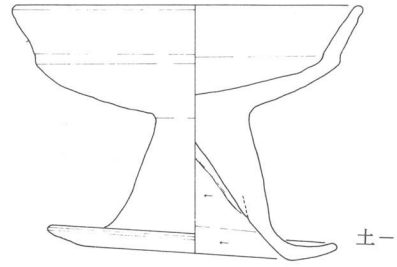

土－1

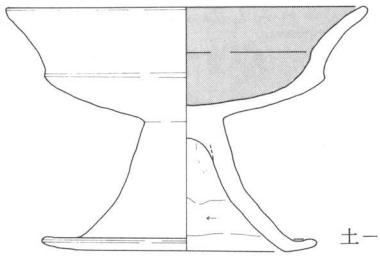

土－2

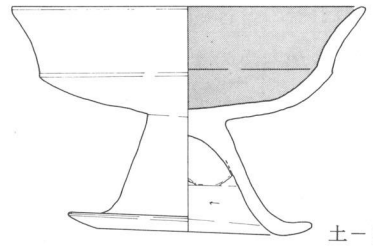

土－3

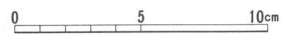

土－4


土－5

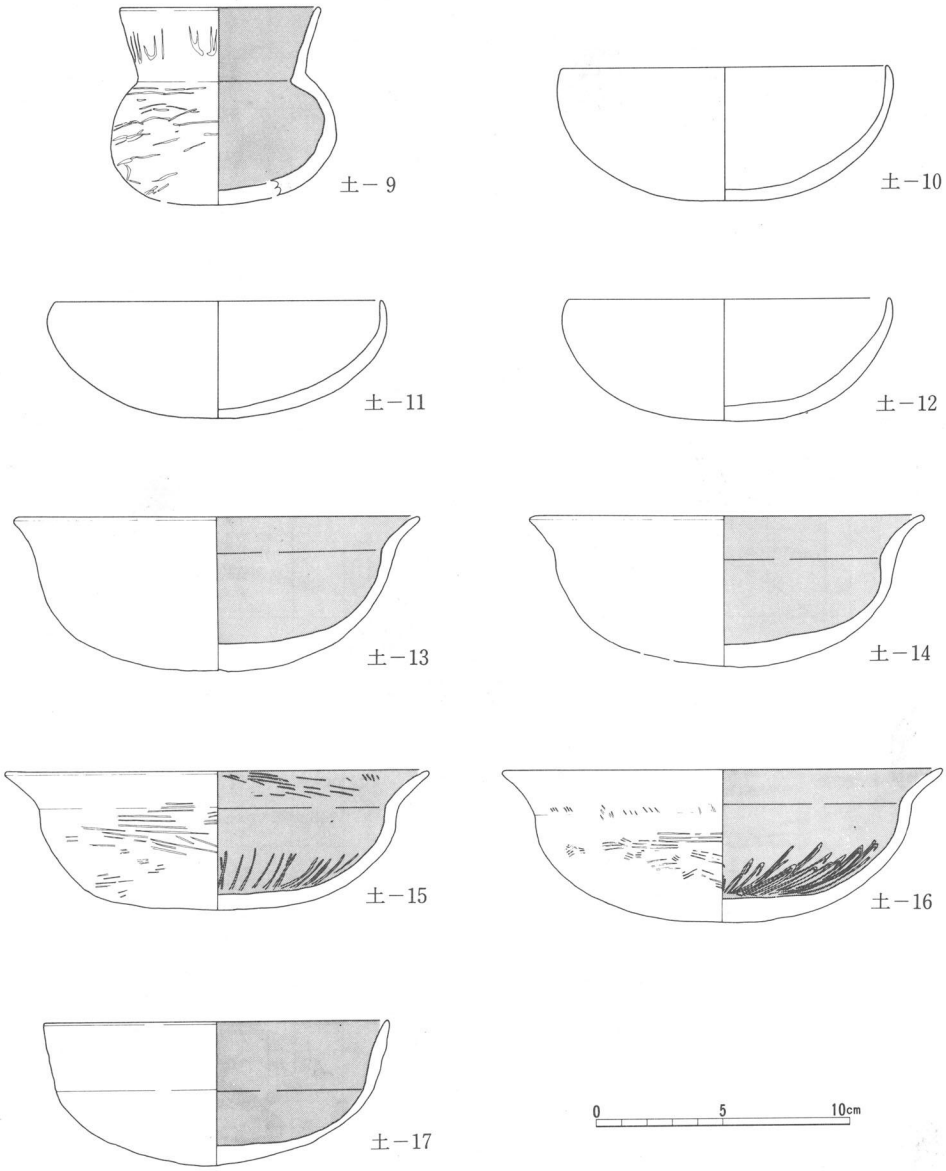

土－6


土－7

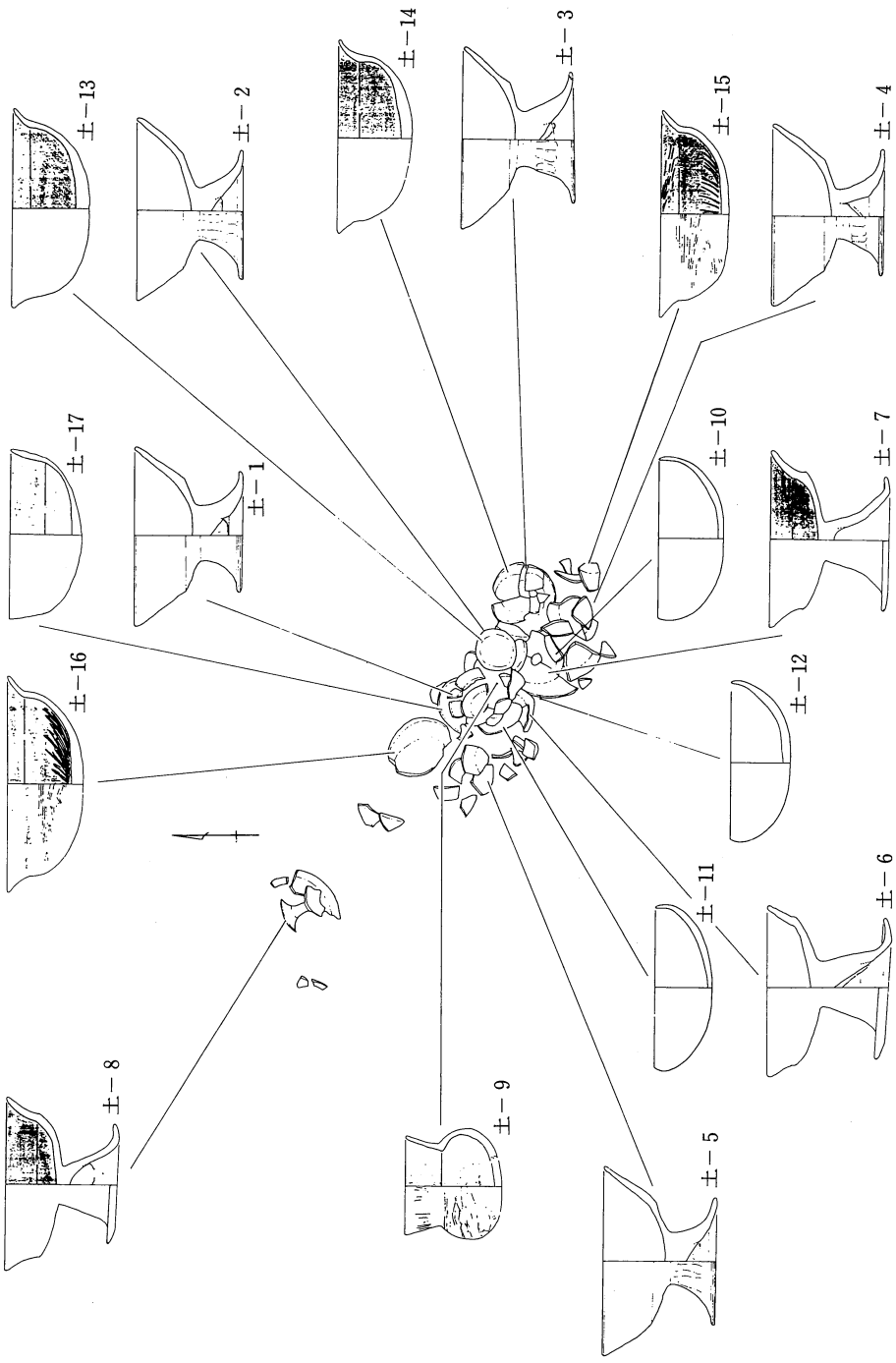

土－8



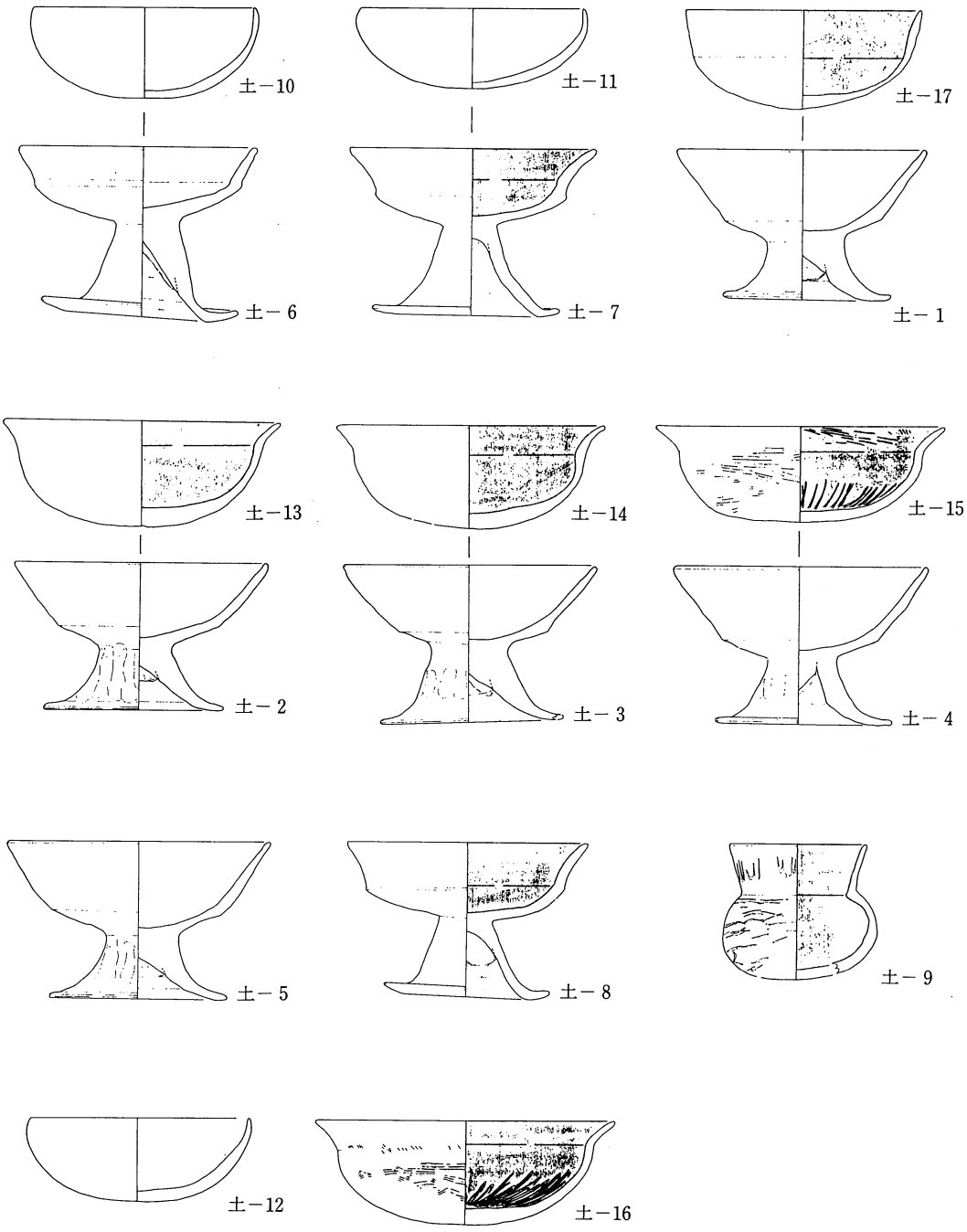
第111図　土壙墓土器集中出土土器(1)（1/3）



第112図　土壙墓土器集中出土土器(2)（1/3）



第 113 図　土壙墓土器集中土器出土状況



第114図　土壙墓土器集中土器組み合わせ関係図

第13表　土壙墓出土土器観察表（1）

	器形	図版No.	法量（cm）	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
土師器	高坏7類	土－1 ～ 土－5	(1)口径:14.5 底径: 9.7 器高: 8.6 (2)口径:14.6 底径:10.4 器高: 8.5 (3)口径:14.4 底径:10.6 器高: 9.0 (4)口径:14.5 底径:10.2 器高: 9.0 (5)口径:15.2 底径:10.3 器高: 9.0	• 坏部外面は底部と体部の境界で屈曲し、外方に向けて立ち上がる。稜はあまり顕著ではない。 • 坏部内面は内彎しながら立ち上がる。坏部内面の口縁直下は、やや強いナデのため内彎が強調される。 • 坏部外面の上半部もやや強いナデのためわずかに外反気味となる。 • 脚部は外反しながら端部に向けて開く。外面はやや屈曲気味となり端部に至る。 • (3・4)は坏部・脚部の接合部が、強い横方向のナゾリあるいはしぼり込みのためにややくびれる。 • 坏部・脚部の接合はほそい継ぎ。 • 坏部に比して脚部がやや短小である。	• 全体的に器面がやや荒く、ザラザラした感じ。 • 坏部は内・外面ともヨコナデののち荒いヨコヘラミガキ（キズ状に跡が残る）。 • 脚部外面はタテヘラケズリの後ヨコヘラミガキ。(3・4)は坏部との接合部に強いナゾリ(?)が加えられる。 • 脚部底面はヨコナデ。	• 砂粒 • 石英粒含む	良好	やや淡い橙褐色	やや軟質気味
	高坏8類a	土－6	(6)口径:13.4 底径:11.3 器高: 9.8	• 坏部はやや浅めで、はっきりとした稜をもつ。 • 坏部内面の口縁部下は強いナデ又はヨコヘラミガキのためにやや内彎気味となり、外面の口縁部下は1～2条の強いヘラミガキのためややくびれ気味となる。 • 脚端部は屈曲して外反する。 • ホゾ継ぎだが、しぼり込みのため脚部はわずかに胴ぶくれとなる。	• 坏部は内・外面とも密なヨコヘラミガキ。 • 脚部外面はタテヘラケズリの後タテヘラミガキ。端部はヨコナデ。 • 脚部内面はホゾなでつけ後ヨコヘラケズリ。底面はヨコナデ。	• 砂粒と緻細な金雲母片少量含む。	良好	やや淡い褐色	
	坏3類a	土－10 ～ 土－12	(10)口径:12.8 器高: 5.2 (11)口径:12.9 器高: 4.7 (12)口径:12.7 器高: 4.8	• ほぼ丸底だが、底部に直径3cmほどのわずかに平らな面をもつ。 • 器形は底部から内彎気味に立ちあがり、そのまま内彎しながら丸くおさまる。 • 古墳周湟出土土器の2類aに似るが、器壁が薄めで焼きも良い。	• 外面は、ヘラケズリ後細いヨコヘラミガキで、底面のみやや粗い単一方向のヘラミガキ。 • 内面はヨコナデの後ヨコヘラミガキ。	• 細砂粒と緻細な金雲母片少量含む。	良好	橙褐色	

第13表　土壙墓出土土器観察表（2）

	器形	図版No.	法量（cm）	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	その他
内黒土師器	高坏8類b	土－7 土－8	(7)口径:14.2 底径:10.8 器高: 9.6 (8)口径:13.9 底径: 9.7 器高: 9.1	•（土－6）に似るが、坏部の稜が（土－6）よりシャープであり、体部の外反度も強い。 •脚部も（土－6）より広がって端部に至る。	•坏部内面はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。 •外面も丁寧なヨコヘラミガキ。 •脚部外面は、タテヘラケズリ後密なヨコヘラミガキ。内面はヨコヘラケズリで端部はヨコナデのみ。	•微細な金雲母片わずかに含む。	良好	（外面）橙褐色	
	壺5類	土－9	(9)口径: 8.0 器高: 7.8	•体部はやや偏平である。 •口辺部の外面は、頸部から外方に向けてやや内彎気味に立ち上がり、わずかに外反しながら口縁に至る。	•体部外面はヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。口辺部はヨコナデののち粗いタテヘラミガキ。 •口辺部内面にはヨコナデ後粗いヨコヘラミガキが加えられる。	•微細な金雲母片わずかに含む。	良好	（外面）やや淡い褐色	
	坏4類	土－13 ～ 土－16	(13)口径:16.0 器高: 6.2 (14)口径:15.5 器高: 6.0 (15)口径:17.8 器高: 5.5 (16)口径:17.4 器高: 6.0	•丸底で、底部から内彎しつつ立ち上がり、やや屈曲気味に外反して口縁に至る。 •（13・14）よりも（15・16）の方が口径が大きく、口縁部の外反も強めである。	•体部下半をヘラケズリした後、全面に密で丁寧なヨコヘラミガキが加えられる。（13・14）の底部は内・外面共に単一方向のヘラミガキを加えているようである。 •（15・16）はヘラケズリ後、体部外面～口辺部内面にかけて横～斜め方向のハケ目調整が加えられる。掘曲部外面には縦方向のハケ目が残る。いずれもハケ目調整後、密なヨコヘラミガキが加えられる。 •（15・16）の内面には、暗文状の放射状ヘラミガキが加えられる。	•微細な金雲母片少量含む。	良好	（外面）やや淡い褐色	
	坏5類	土－17	(17)口径:13.6 器高: 5.7	•底部と体部の境界に、あまり顕著ではない稜をもつ。 •体部はやや直線的に立ち上がる。 •器壁は薄めである。	•内・外面とも丁寧・密なヨコヘラミガキ。	•微細な金雲母片を少量含む	良好	（外面）やや淡い褐色	

3号周溝墓（第115～第119図）

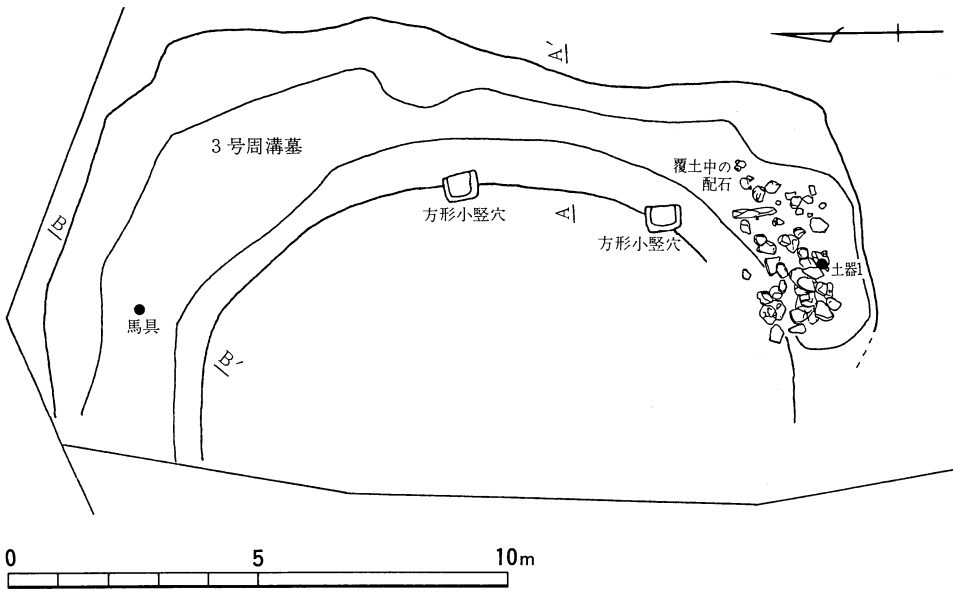
3号周溝墓はB地区西半において発見された。1号周溝墓の西に接近し、溝の一部が重複し、1号の西側溝を破壊している。したがって、構築時期は本遺構のほうが1号周溝墓より新しい。遺構確認面はローム土上面である。溝の一部および覆土中の配石によって遺構の存在が確認された。発掘調査段階においては、主体部に相当するような遺構、遺物、墳丘や盛り土の存在は確認できなかった。南端付近に溝が浅くなる部分があり、陸橋的にも観察されるが、西半の破壊のほか密集する他時代の遺構の重複の影響もあり，遺構確認面であるローム土上面が荒れているため、確認不能であった。

西半が破壊されており，周溝墓としての全体形状は明らかでない。残存部からみる限り、平面形は円形に近いものと考えられるが、方形の可能性もある。直径あるいは長径約16.5mを計る。溝の内形はより円形的であるが、外形については溝が太い部分がコーナーのようにも見えるため方形的である。陸橋を有する可能性もあるが、前述のような状況のため不明である。周溝は、山寄りの東側部分は比較的深く、南北がやや浅い。最深部では約1.2mにも達しており、周溝墓の周溝としてはかなり深いほうであろう。

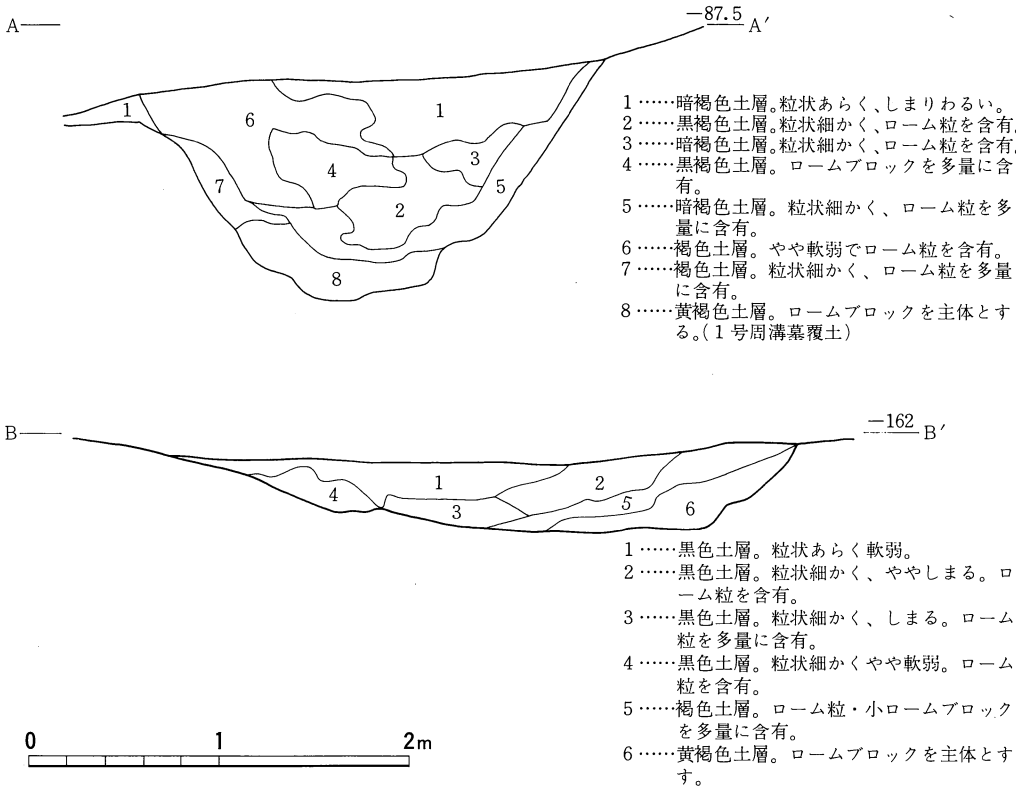
関連遺構としては、覆土中の配石および方形小竪穴がある。配石は周溝の南端近くにあって、覆土中層において検出されたものである。ほぼ方形を呈し、長径約3.6mを計る。安山岩など地元産の山石によって構成されている。人頭大程度の角礫が多いが、他にも平板状の礫や小礫もある。また東隅付近に長さ90cmの石柱状のものが1点あって注意される。配石のレベルにはやや幅があって、それほど平面的ではない。状況的には覆土が完全には埋没しない時期において一定範囲に石を投げ込んだように観察される。礫中に出土遺物は認められないが、配石の最底面において、土師器の甕1点が破片の集中として検出された。この土器は破片接合によって完形に復元が可能であったが、胴部は1/3程度が欠損している。本配石の性格については、周溝の埋没以前に設けられていることから、3号周溝墓を意識したものであることはほぼ間違いない。また、形状や、石柱状の礫・底面の土器の存在などから、祭祀的遺構であるかこの配石自体が一種の墳墓である可能性もあろうが確認は困難である。

方形小竪穴は東側溝の内寄りに2基検出された。ほぼ同規模・同形状・同主軸方向の長方形で、長径約70cm・短径約50cmを計る。同様の方形小竪穴は、規模の差異は若干認められるものの、本遺跡A地区の一時坂古墳より1基、B地区の1号周溝墓からは2基が検出されており、注意される。

本周溝墓からの出土遺物は周溝内より検出されている。他時代の遺物の流入もあるが、古墳時代に属すると考えられる遺物としては、前述の覆土中の配石底面より出土した土師器1点の他には、鉄製品2点がある。鉄製品は、刀子1点・馬具（轡）1点であるがいずれも覆土中の出土であり、確実に本遺構に伴うものであるとは確認できない。



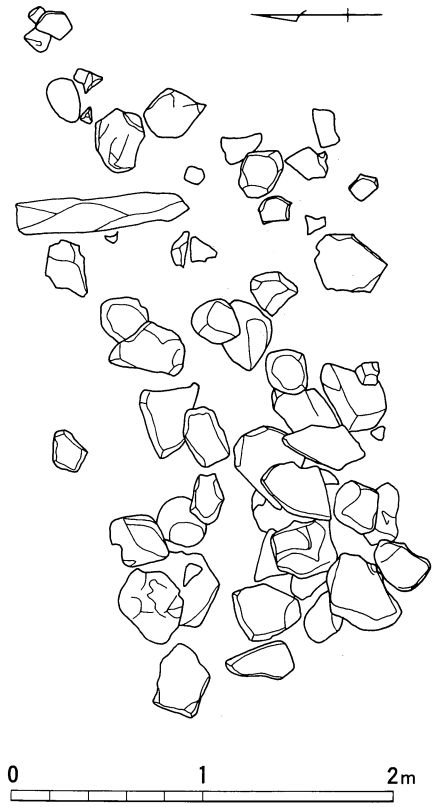
第115図　3号周溝墓平面図（1/150）



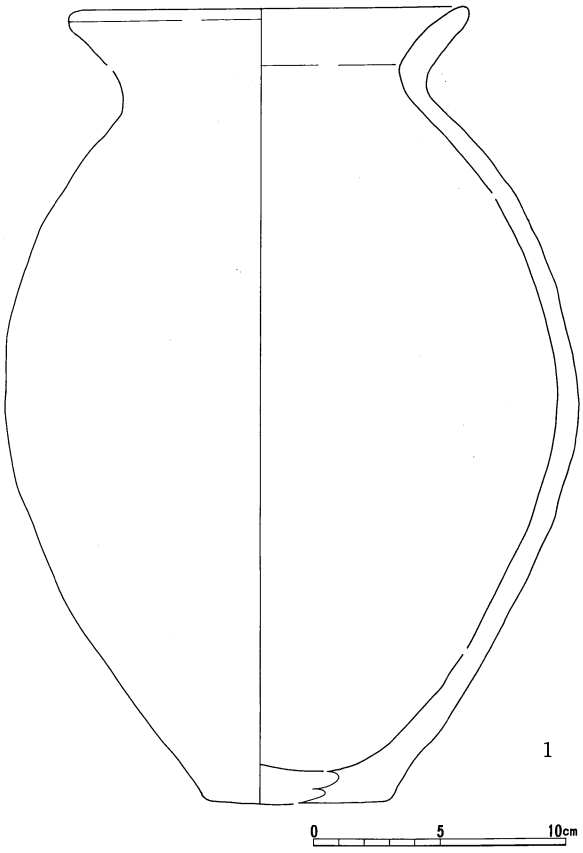
1……暗褐色土層。粒状あらく、しまりわるい。
2……黒褐色土層。粒状細かく、ローム粒を含有。
3……暗褐色土層。粒状細かく、ローム粒を含有。
4……黒褐色土層。ロームブロックを多量に含有。
5……暗褐色土層。粒状細かく、ローム粒を多量に含有。
6……褐色土層。やや軟弱でローム粒を含有。
7……褐色土層。粒状細かく、ローム粒を多量に含有。
8……黄褐色土層。ロームブロックを主体とする。（1号周溝墓覆土）

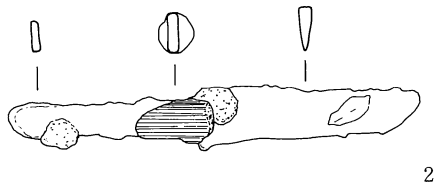
1……黒色土層。粒状あらく軟弱。
2……黒色土層。粒状細かく、ややしまる。ローム粒を含有。
3……黒色土層。粒状細かく、しまる。ローム粒を多量に含有。
4……黒色土層。粒状細かくやや軟弱。ローム粒を含有。
5……褐色土層。ローム粒・小ロームブロックを多量に含有。
6……黄褐色土層。ロームブロックを主体とす。

第116図　3号周溝墓セクション図（1/40）



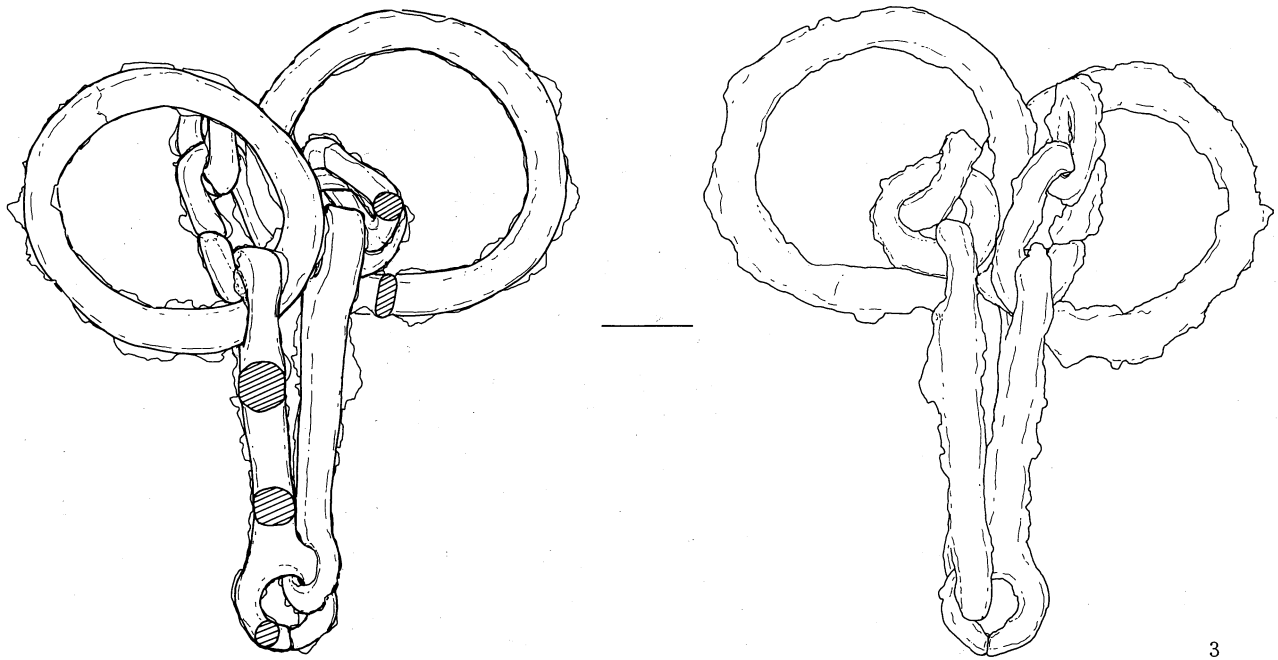
第117図　3号周溝墓覆土中の配石（1/40）





第118図　3号周溝墓出土遺物(1)（1…1/3、2…1/2）

1は土師器の甕で、約3分の1個体程度が残存している。器形は長胴気味で、平底を有する。器高のほぼ中央に胴部最大径を持ち、頸部でくびれた後外反して口縁に至り、口辺部は肥大する。胎土に砂粒を含み焼成は普通で、内・外面とも淡茶褐色を呈する。器面が荒れているため調整は不明確である。いずれも推定であるが、口径15.8cm・底径7.3cm・器高31.5cmを測る。2は刀子で、柄部に木質が残存している。3は轡である。



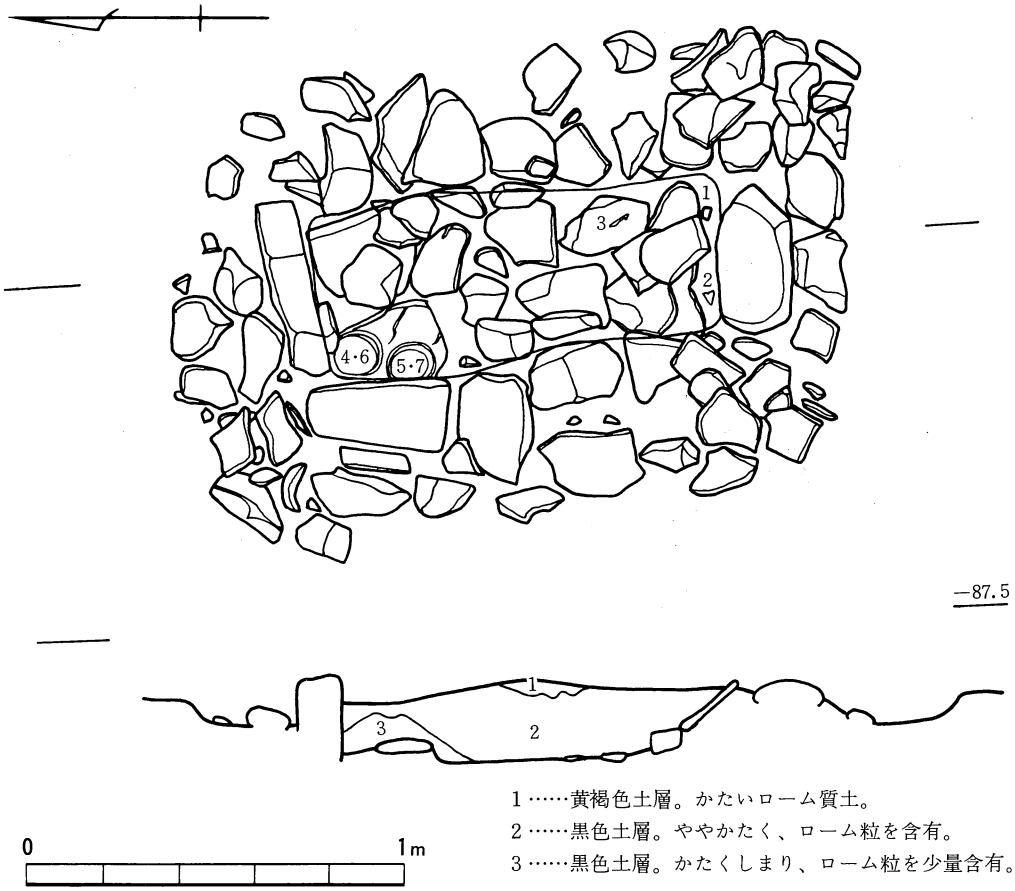
第 119 図　3 号周溝墓出土遺物(2) (1/2)

石室状遺構　(第120・121)

B地区西南部において検出された、一種の墳墓である。B地区においては全域にわたって3基の周溝墓が存在するが、この区域のみ周溝墓がなく、ちょうど空白部を埋めるような位置に本遺構が検出された。発見された石室状遺構は、古墳などの墳墓の主体部に相当するような遺構と思われるが、検出時にはこれより上部に墳丘を形成するような盛り土は確認できなかった。また、周辺部については、B地区でも最も後世の攪乱が著しい区域であることもあってか、周構なども検出することができなかった。

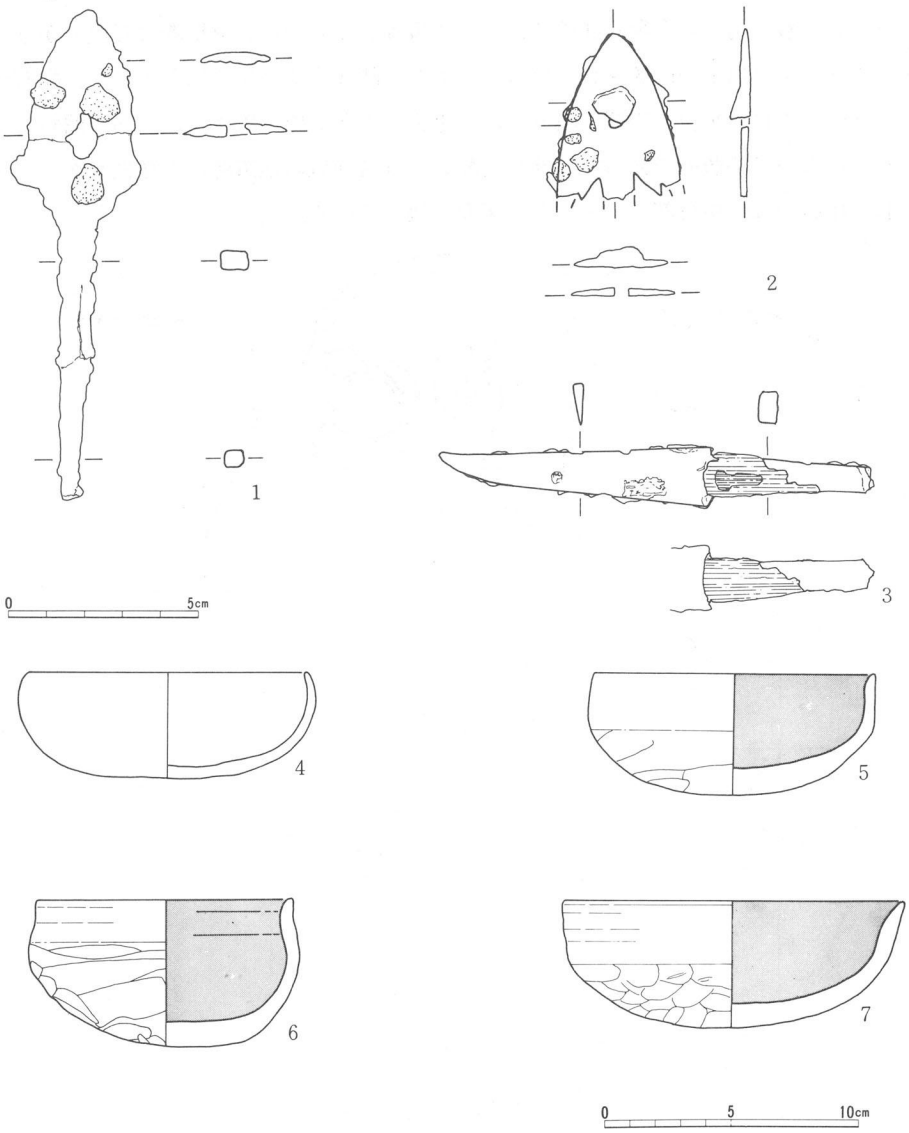
石室状遺構の形態・構造は、古墳の竪穴式石室とほとんど同じで、平板状の礫を精緻に敷き詰めて構築してある。しかし、配石部分の全長は1.8m、竪穴部分は長軸で1m強とかなり小型で、一般の竪穴式石室とは規模の点で異なっている。長軸方向は概ね北を向いている。北壁には大きめの平板石が立てられている。

遺物は少ないがいずれも副葬品と考えられるものである。竪穴内底面の北壁近くには土師器の坏4個体が、2個ずつ重ねて置かれ、南壁付近には、鉄鏃・刀子破片3点が検出されている。



第120図　石室状遺構平面図・セクション図(1/20)

1・2は透かしを有する鉄鏃で、錆化のために細部ははっきりしないが、2は重抉を呈する。4～7は土師器でいずれも完形であり、5～7は内黒を呈する。4は土壙墓出土土器の坏3類と調整・焼成共に良く類似するが、4の方が偏平で内彎が強く、器壁に少数の「繊維痕」が残る。5・6は坏5類に類似するがやや厚手である。7は古墳周湟出土の壺4類にやや似る。体部～底部外面にかなり荒いケズリ、口辺部にヨコナデを施した後、ヨコヘラミガキを加える。内面は密なミガキが施される。4は口径11.0cm・器高4.2cm、5は口径11.0cm・器高4.8cm、6は口径10.0cm・器高5.8cm、6は口径13.3cm・器高5.0cmを測る。



第121図　石室状遺構出土遺物（1～3…1/2、4～7…1/3）

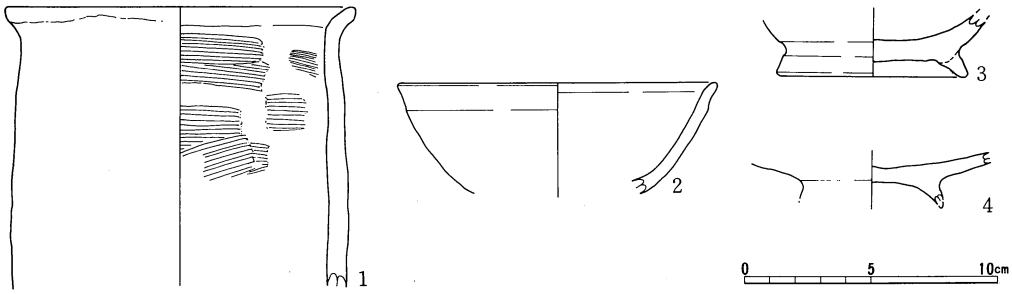
4．平安時代の遺構・遺物

9 号住居跡（第122・123図）

本遺跡において検出された唯一の平安時代住居跡である。B地区東南端付近、2号周溝墓の周溝部の土壙墓のあたりに重複して発見された。遺構検出面はほぼローム土上面である。調査過程においては、かまどを構成する石と竪穴の落ち込みが発見されたため確認されたものである。覆土は東半にのみ残存し比較的薄い。西半は覆土・床面ともに失われている。

本住居跡は方形の竪穴住居跡である。しかし西半が後世の攪乱によって失われているほか、残存部についても上層に削平の影響が顕著で、完全に遺存していない。東壁際に石組のかまどが存在するが、これも半分以上が破壊されている。かまどに隣接する南側の床面上には、配石が認められる。これはいずれも平板状の礫で構成され、中央に大きな礫を置きこの周囲を囲むように小さい礫を配したもので特徴的である。こうした配石は近隣地域の他遺跡にも類例があり、注意される。なお、住居のほぼ中央部にのみかたい床面が残っている。

第122図　9号住所跡平面図（1/40）



第123図　9号住居跡出土遺物（1/3）

遺物はかまど付近においてのみ検出された。いずれも土師器の小破片で、坏・甕等がある。

この他に、石室状遺構東側に若干の遺物散布が認められたため、3号住居後と仮称している。

1は土師器甕胴部上半の破片で、部分的に約2分の1周している。長胴甕で、頸部はあまりくびれずに口縁部が外反する。胎土におおきめの砂粒（～mm）を含んでいるが焼成は良好で、内・外面ともに褐色を呈する。外面～口縁部内側はナデが施されるが、胴部内面にはハケ目（？）が残る。2は坏の胴部上半破片で、3は底部破片である。4は皿の底部であるかも知れない。2は胎土に砂粒・石英粒・微細な金雲母片を含み、淡茶褐色を呈する。また、胴部外面が荒れている。3は張り付けの高台を有する坏底部で、胎土に砂粒を含み茶褐色を呈する。台の接合部には一条のナゾリが入る。

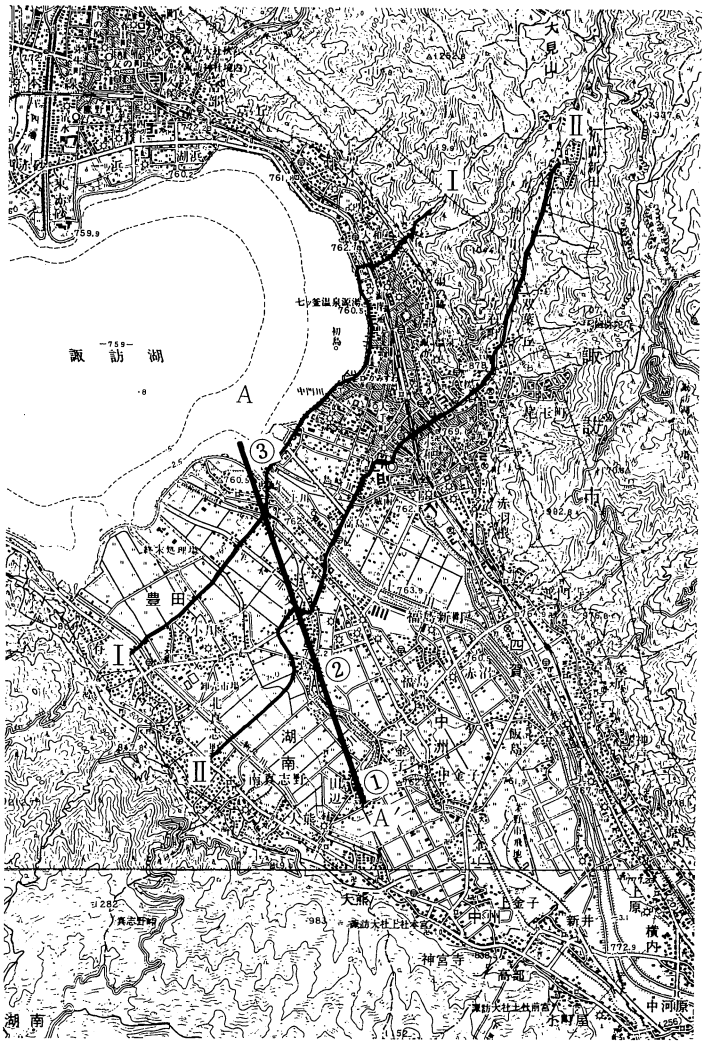
V　調査のまとめ

1．4号住居跡の逆断層について

諏訪盆地東壁山体基部には、盆地西壁の糸魚川－静岡構造線に併走するNW－SE方向の断層線が数条認められる。もとより、この断層群はフォッサ・マグナ西縁線を形成するもののうちの一部であり、盆地床面下にも多数存在するはずのものであるが、厚い盆地内堆積土砂に覆われた盆地中心部では、その実体を観ることは出来ない。しかし最近の放射能探査（αトラック）の成果により、盆地床面下（盆地底）に数条のかなり規模の大きな断層の存在が予想されるようになった（註 1・第124図・第13表）。

盆地東壁山体の断層地形は、一般的には西落ちの形をとり、走向は、N30～40°Wを示すが、その基部にあっては斜面堆積土砂に覆われていることが多く、断層そのものを目にすることはまれである。今回4号住居跡で検出された断層は、住居址床面に堅く締め堅められており、これがキー層を成し断層変位量、変位の仕方を認めることが出来たもので、貴重な事例といえよう。

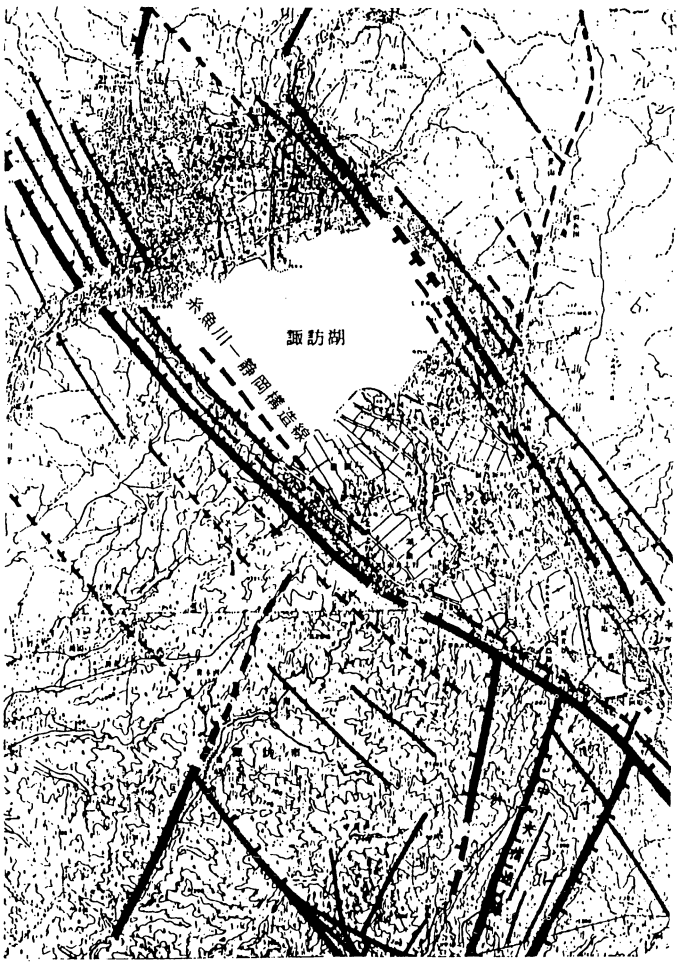
これまでも遺跡発掘現場では、住居址床面が切断されたり、傾動が測定された事例も相当数あったものと思われるが、地盤異



第124図　αトラック測線配置ならびにC¹⁴年代測点地点位置図

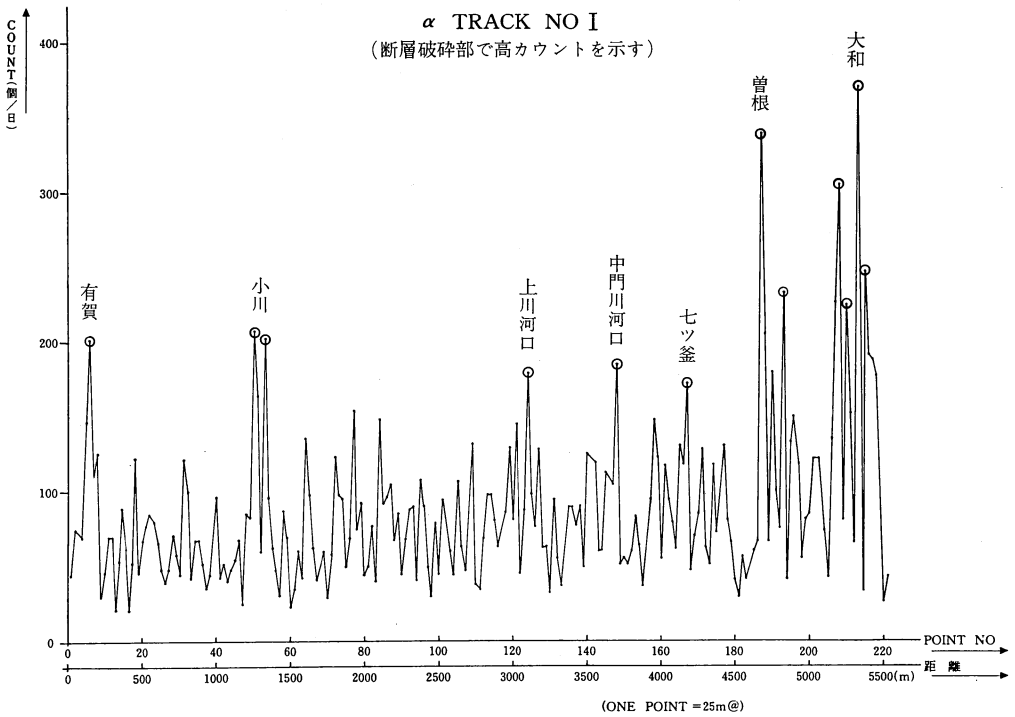
常－断層等に基づく地盤の異常な挙動－の現象として報告された例は少い。フォッサ・マグナ地帯に含まれる諏訪盆地では、一葉の地形図上に多数の断層－活動断層が記されている（第125図）。先史人類の生活空間も、そのかなりの部分がこの断層図に示される変位帯に重なり合っている。人間の生活要素である水・太陽光線・居住可能な大地・食糧生産（採取）等は、地形遷急箇所附近に得られることが多く、集落立地もこの意味で何らかの地形遷急点を含むエリアとして存在・立地していることが多い。先史遺跡図の中に、この断層網を投影してみるならば、盆地周囲の無数の断層階の上に、あるいはまたがり先史集落は形成され、見方によればむしろ集中しているように見える（第126）。

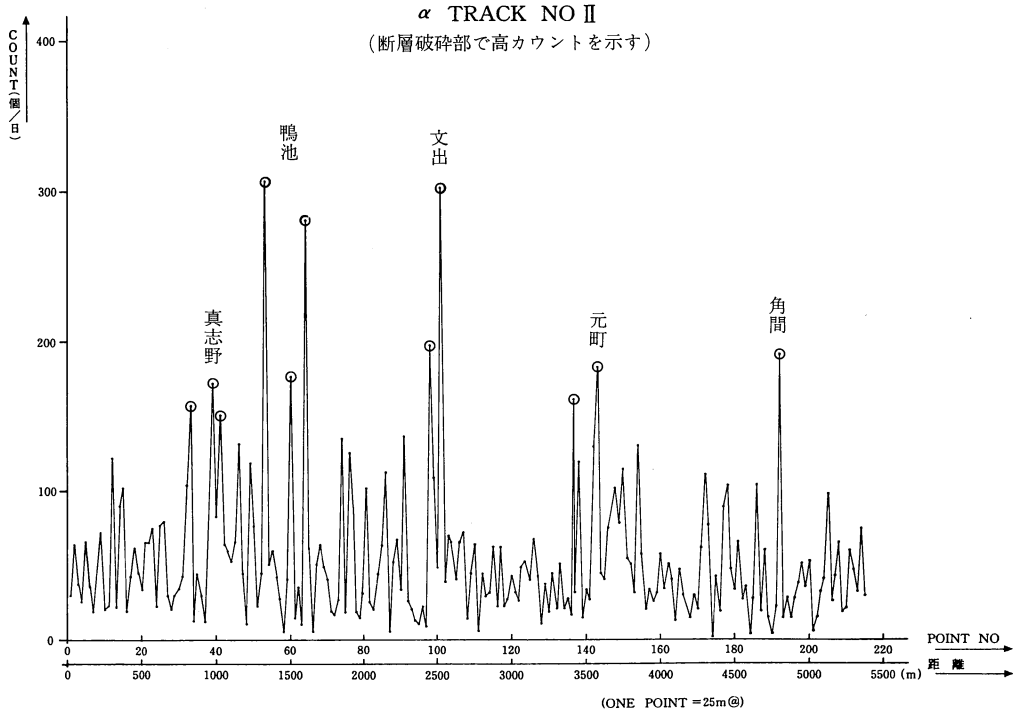
諏訪盆地内の断層活動は、総体的には盆地落ち・山体隆起の形をとり，諏訪盆地造盆地運動は進行している。盆地内堆積土層にみられる変位量は、盆地中心部で20～30m（B.P.1000年）の測定値があり、盆地底の沈下量を示していると考えられる（第124－127図）。荒神山遺跡の竪穴床面にみられる断層変位量は、ほぼ50～60cmの山体隆起であり、小田井沢扇状地を截断する小断層崖に隣接した派生断層（小断層）と考えられる。一般的に、山体隆起速度がミリ／年のオーダーであるのに対し、盆地内の沈下速度は数十ミリ／年のオーダーとなり、盆地床面と山麓部の接合線上での見かけ変位量が最大となる。茅野横内の断層崖・四賀赤津川・大和千本木川の扇状地の截断・下諏訪高浜の稲荷平の台地形成等は一連の地盤変位によるものと考えられる。盆地壁山体そのものの変位は、地形的に明瞭なものとして認められるが、山麓部の二次堆積土砂に覆われている部分では、無数の小断層の複合として断層変位帯が形成されていると観るべきであり、その検出は難しい。



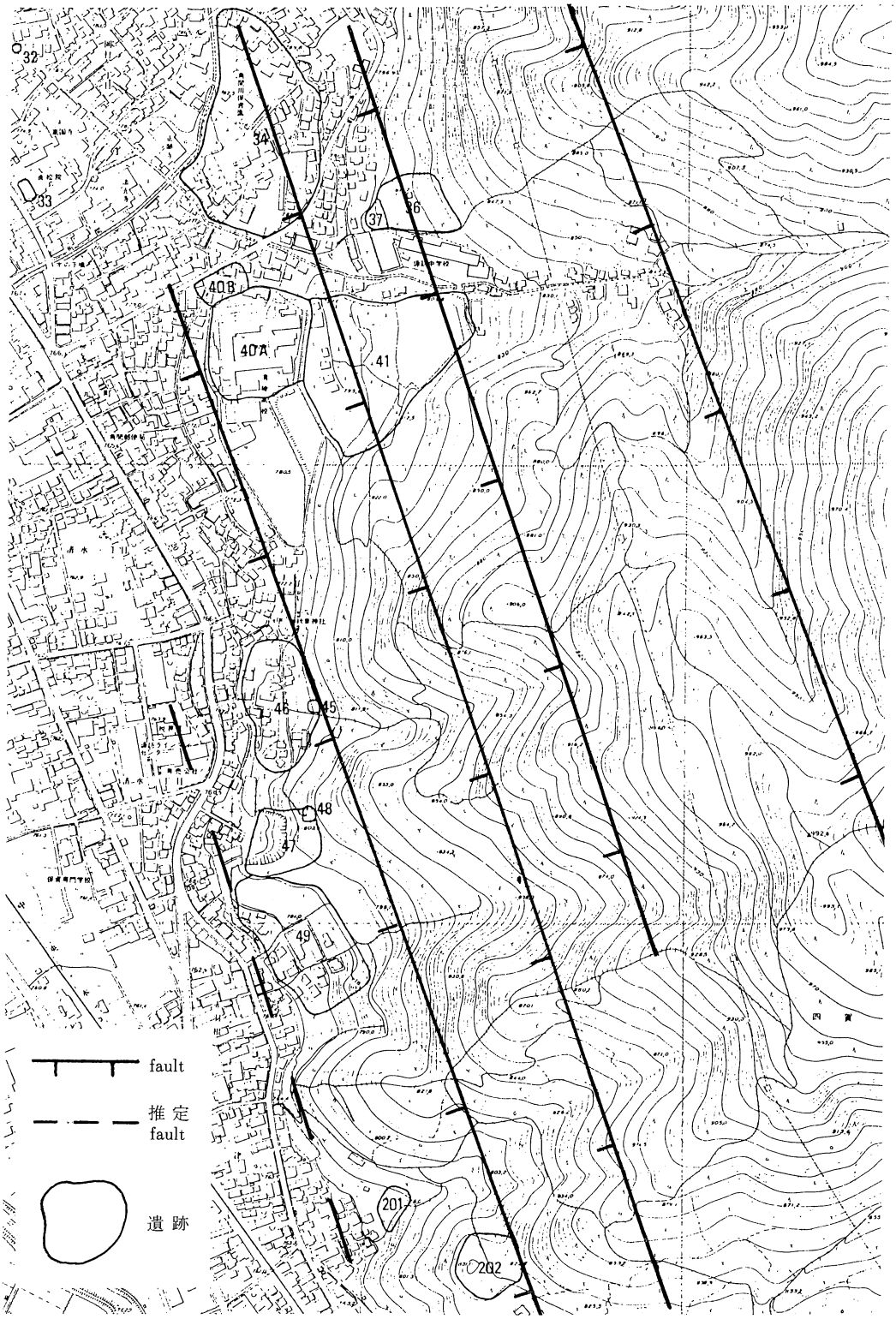
第125図　諏訪盆地の断層系

今回の一時坂遺跡4号住居址床面に記された断層変位の検出は、





第13･14表　α ＴＲＡＣＫ No.1 ･No.2 測定表

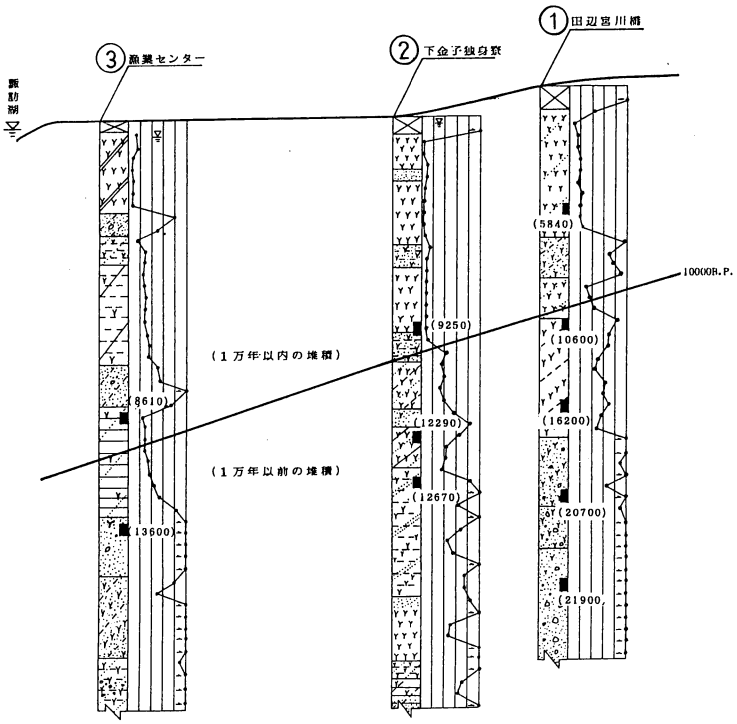


第126図　断層群および遺跡分布図

盆地西側の荒神山遺跡の断層と対を成し、諏訪盆地造盆地運動を解明する貴重な手掛りであり、また、20世紀人類の居住空間もまたこれらの小断層群に重なり合って存在することから、生活大地の問題を考える契機を与えてくれるものといえよう。なお、盆地床面下にもいくつかの埋没した遺跡が存在するはずであり、やがては盆地内堆積土層中の遺跡図も作成されるものと期待される。

（註１）

γ線法では、これまで厚い盆地内堆積土砂が障害となり、盆地底の破砕の状況を捉えることが困難であった。第124図に示すⅠ、Ⅱの測線に25mピッチで特殊フィルムを埋め込み、地中より発するα線によるフィルム面の擦痕の数を鏡下で観測した結果が、第13・14表に示すものである。ＮＯＩ測線（角間～真志野）を例にみれば、まず角間集落付近にαトラック高カウントを検出し、次いで元町付近、盆地中央の文出付近、鴨池付近に高カウントが記録され、真志野に達していることがわかる。この高カウント地点は、地中深所より発生するα線の数が多いことを意味し、この測定調査にあっては盆地底の断裂ないし破砕部を示していると解せられる。従って、従来考えられてきたように、盆地底が舟底のような１本の断層により落ち込んでいるのではなく、盆地底に数条の断裂が存在し、その複合したものが盆地底を形成していると考えられる。



第127図　C^{14}法による湖南沖積原の年代測定図（A－A′測線）

2．一時坂遺跡における遺構分布について

ここでは、一時坂遺跡における各時代の遺構分布について、現時点においてのまとめと問題点の整理を行っておきたい。

はじめに、遺構分布分析の前提となる遺跡立地の問題に触れておきたい。本遺跡は、背後に急峻な山塊を有する、西向きの緩斜面上に立地している。現在の地形は東側に山地へ向かう急斜面、北・南側は谷、西側は盆地平坦部へ向けて下る崖があって、みかけ上はひとつの独立した舌状台地である。しかし、実際には南側の谷は、自然地形としてあった小谷をある時期において人工的に削り道としたものであり、さらにこの道を挟んで南側にある現在の諏訪中学校校舎部分も本来的には台地の一部であったと考えられる。遺跡の範囲としては、この南半も含まれると考えるのが自然であり、実際にも諏訪中学校の校舎建築工事に際して土器などが出土したとの情報がある。次に、今回の発掘区内については、遺跡地全体が長い期間耕作地として使用されていたため、これらによる撹乱が広く存在する。最も著しい撹乱は、発掘区の中央部、A地区とB地区の間にある。この部分は両地区をそれぞれ平坦な農地として利用するために、法面として垂直方向に削平され、この削平がローム層上面にまで達しているため、すべての遺構が破壊され失われている。こうした大規模な撹乱によって既に多くの遺構が失われていることを前提として、各時代の遺構分布について考えてみたい。

縄文時代の遺構は、中期の住居跡と前期を主体とする小竪穴群である。このうち、住居跡については、まず中期初頭に属するものが2軒あって、発掘区の北東隅に重複して確認されている。この時期の住居は当地方の他遺跡においても、比較的大集落を形成することが少ない。しかし、今回例のように台地隅に重複して2軒のみというのはやや不自然である。該期の遺物が包含層にも若干認められたことなどからみて、本来は他にも住居が存在し、他時代の遺構や撹乱によって破壊された可能性が高い。次に中期中葉に属する住居跡は3軒あって、2軒がB地区西端に重複して存在し、1軒が東端付近に古墳時代の1号周溝墓と重複してある。この時期についても、台地の形状や大きさから考えて、やや遺構が少ない。中期初頭同様に破壊された住居跡が存在した可能性が高い。しかし、注目したいのは両時期とも発見された住居跡がいずれも台地の周辺部に片寄っていることである。そして、台地中心部には小竪穴群が密集的に遺存し、周辺部には存在するものの数が少ない。この小竪穴群の所属時期については必ずしも明らかではないが、出土遺物から見る限りにおいては縄文前期末葉ころから同中期中葉にかけてものものが多く、その他同前期前葉や他時代のものが若干含まれると見られる。従って、検出された住居の存在した時期においても台地中央部には小竪穴群が同時に設けられていたと見てさしつかえない。また、撹乱の影響を考慮するとしても、中央部については住居跡の存在した可能性はほとんどない。このことは、縄文時代に複数の時期において、本台地の中央部に小竪穴、周辺部に住居という、場の使い分けが行われていたことを示すと言えよう。こうした在り方は、近年多くの他遺跡において確認

されている環状もしくは弧状・馬蹄形状等の縄文時代集落の構造と基本的に一致するものであると捉えられる。

次に、弥生時代の遺構について見てみたい。弥生時代に属するものとしては住居跡7軒が検出されている。すべて竪穴式住居である。この数は縄文時代の遺存住居跡数に比べて多く、撹乱による影響がなければ更に多くの住居がかつて存在していた可能性は高い。本時代の住居は縄文時代と異なり、B地区の台地の全体にほぼ均質に分布しているようである。時期としては中期から後期および最末期まであってやや広く、比較的長期にわたって小規模集落が営まれていたように解釈される。弥生時代の集落構造については当地域では、大規模な調査例が少ないこともあって必ずしも明らかでない。また、集落の立地についても発見された遺跡の数そのものが少ないため、集落は盆地平坦部の沖積地の地下深くに存在するのではないかなどと漠然と予想されていた。しかし、近年の市内の発掘調査で本遺跡と同様に、縄文時代の集落遺跡が立地している台地と同じ台地上に弥生時代の小規模集落が存在する遺跡が確認され始めている。こうした高台に集落が立地してる点はあるいは当地方の特徴とも見られるため、今後の調査による類例の増加が期待される。また、こうした高台上の弥生遺跡に隣接して古墳が築造されている点に注目する見解もあるが、本遺跡例はまさにこれに相当しているため、この点についても一応注意しておきたい。なお、台地中央やや東よりの位置に、長径7m余にも及び石囲炉2基を有する大規模住居が残されていることも注目に値しよう。

古墳時代の遺構はすべて墳墓である。この時代の遺構については次項以降において、さまざまな角度から考察を試みているので、ここでは分布に関する一般的状況について述べるにとどめたい。まず今回新発見された一時坂古墳は本台地の西端、盆地側先端部に築造されたものである。これは原地形を利用しながら、丘尾切断法によって墳丘を作り出したものである。また、墳丘上の副葬品のうち直刀類からみた主体部の主軸方向は概ね南北方向に一致している。この一時坂古墳の時期的に先行する方形の周溝である1号周溝墓は、逆に台地の東端に立地している。平面的な規模としては一時坂古墳に匹敵するものである。前方部の設定位置からみた遺構の主軸方向は南北方向に近い。この1号周溝墓の西側に若干重複して3号周溝墓、南側にやや空間をおいて2号周溝墓がそれぞれ隣接している。1号周溝墓と2号周溝墓中間よりやや西よりに、石室状遺構がある。これは小規模ながら古墳の主体部に相当する遺構で、周辺部の撹乱が著しいため確認ができなかったが、墳丘等の施設が存在した可能性も否定できない。時期的にも隣接しているこれらの墳墓群が同一台地上に存在することは、本台地が一種の聖地として該期の集団に意識されていたことは確実であろう。また、個性的な幾つかの墓制が見られること、一時坂古墳と2号周溝墓溝内に同様な墓前祭祀的な土器配列が見られる点などは注目されるべきであろう。こうした分布状況からみて、A地区・B地区の中間の撹乱によって失われた部分にもなんらかの墳墓もしくはこれに類する遺構が存在した可能性は高い。こうした古墳時代の複数墳墓の密集が確認されたのは当地方では本遺跡が初めてであり、貴重な発見例となった。

3．一時坂古墳出土土器について

(1)　須恵器の成形・調整技法について

まず、底部、天井部外面の回転ヘラケズリの方向についてであるが、ロクロが時計回りのものが3点（21%）、ロクロが逆時計回りのものが11点（79%）ある。これはＴＫ208～23型式段階の傾向に一致する。また、坏身と蓋でセットとなるものは、ロクロの回転方向も同じ場合がほとんどである。

次に6世紀以降増えるとされる、坏身や蓋内面の仕上げヨコナデが、高坏を含めた坏身・坏蓋13点中7点に認められる。内訳は坏身2点、蓋5点である。ほか第5集中(4)には坏身内面にタタキ目痕が残る。ヘラ描き沈線の認められるのは第5集中（1、2）である。ヘラ先で直線を引く（第128・129図）。（1、2）はセットで出土した。

また焼成面であるが、特に竪緻で外面に自然釉のかかるもの（第2集中－1、第4集中－1、第5集中－1・2・4・9・10、第6集中－1・2・3）がある。とりわけ甕と瑤の焼成状況は似ており、緑灰色の自然釉がたっぷりとかかる。胎土には若干の差異は認められるが、肉眼観察で得られた知見はない。

(2)　一時坂古墳周湟内出土須恵器の時期

以上、一時坂古墳出土須恵器について略述したが、時期的にはいずれもＴＫ208～23型式、Ⅰ型式3～4段階ころのものと考える。須恵器出土数量の少なさもあって、集中ごとの時期差を読み取るには至らなかった。また今回は報告できないが、本古墳出土の須恵器は、焼成状況やつくりからみて、複数の窯からそれぞれセットとして流通してきた可能性のあるものを含む。今後考えるべき課題である。

(3)　周湟内出土土器の出土状況ならびに器種、器形について

さて繰り返し述べていることだが、1号墳の周溝内には第2・4・5・6の土器集中が検出された。そのうちある特定の意味をもつと思われるのは、第4・5・6集中である。第4集中は、破損が大きく、旧状は推測にとどまらざるを得ないが、第5・6集中はほぼ設置時期に近い状況で保存されていた。

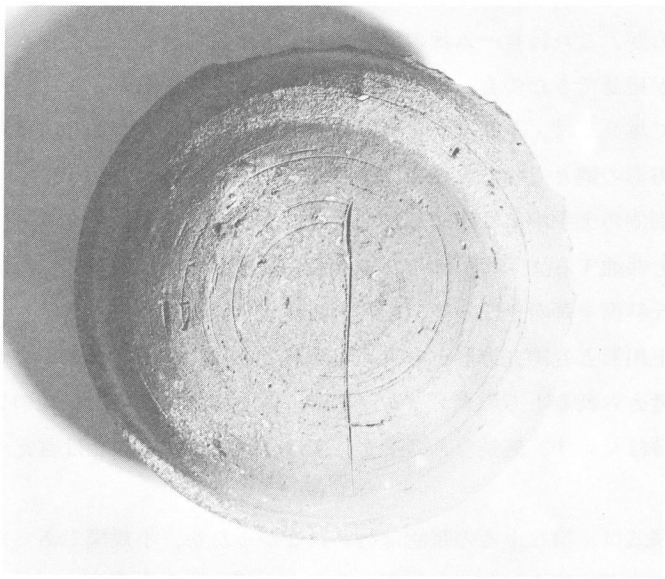
土器配列について注目したい。まず各集中の外観であるが、墳丘と平行に、だいたい2列に並べられる。第4集中は90cm×60cm、第5集中は80cm×50cm、第6集中は75cm×55cmとほぼ同規模の範囲内に土器がまとまる。形は長方形を呈しまるで枢状の木箱に納められていたような感がある。事実、遺存状態のもっとも良い第6集中の高坏（6－10）は、第96図に見るように、高坏の坏部と脚部が離ればなれに出土しているが、これは出土状況から判断して、土圧による分離と見

るよりも、人為的に折ったものと看取される。これは容器にうまく納めるための所作とも考えられる。このように容器に器物を収納して周湟中に設定した例は滋賀県服部遺跡などにあるが、細部の比較検討は別稿に譲る。また細かく見ると、墳丘に向かって左側に瑯を載せた高坏を置き、これを取り巻くように他の高坏類を並べたらしい。瑯は特異な器形で、他の器形に比べて儀器としての色彩が強いと考えられるが、これが少量ながらも（第4集中3点、第5・6集中各1点ずつ）必ず伴っている。むしろ、出土状況からすると土器を配列して何らかの祭儀が取り行われたとすれば、瑯が祭儀上必要不可欠な存在であったと見られる。

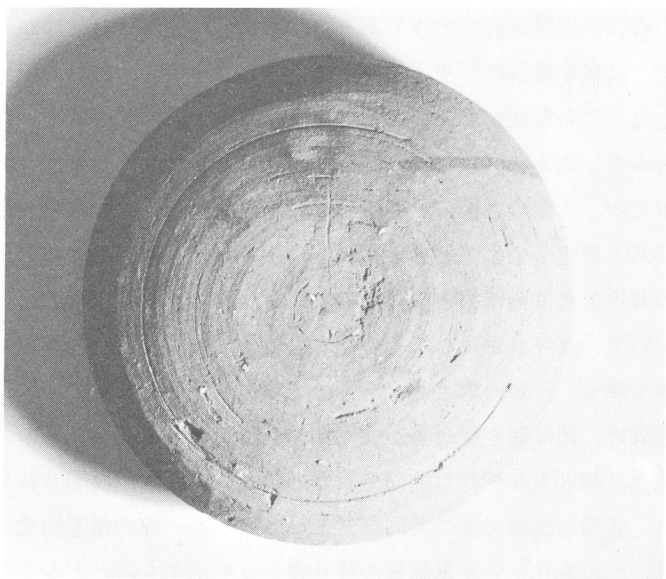
第5集中と第6集中は、その配列方法や数量において極めて類似性が高いことが指摘できる。そして、出土状況を詳細に検討した結果、第4集中も第5・6集中と同様の土器配列を為していた可能性が高いことがわかった。数量的に見ると、第4集中が20点、第5集中が22点、第6集中が19点（以上は個体として確認、復元されたもの）と、ほぼ同数を示す。同じように、高坏の数量をみると、第4集中が9点、第5集中は10点(うち1つは須恵器)、第6集中が10点となっており、全個体数の5割前後を占めるという斉一性を示している。さらに数量的な面を追及したい。第5・6集中は、設定当時の状況にかなり近い状況で遺存していたと観察される好例であるが、この中で高坏を器台として用い、なんらかの器物を載せていた数が、第5集中では7点（うち1点は須恵器有蓋高坏)、第6集中も7点ある。第4集中も、坏などの数量から、これに近い数を持っていたものと推定される。このように見ると、絶対数量の不足は否めないにしても、各土器集中は、その数量に一定の規制が働いているものと推論される。その規制とは、恐らく土器を周湟底に設置する儀式の内容や手順に関わるものと推測するが、これは他例の分析や文献史学上の追及を加えた後言及すべきであろう。

以上のように見てくると、一時坂古墳の周湟中において、5世紀後半期、それもＴＫ208～23型式期近辺の時間内で何らかの祭儀が行われたことは、ほぼ間違いないと思われる。しかも、土器の細部形態や器種構成の違いから、若干の時間差は窺えるものの、出土層序・埋没状況や、土器配列法・数量などからみて、主体部初葬に比較的近い時間内に連続して祭儀が行われたと見ることができる。その絶対的な時間幅は明言し得ないが、相対的にみると、出土状況からは、第4・第6集中の設置が比較的近い時間内にあり、第5集中の設置は少し離れた時間差をもつと思われる。さらにこれら土器集中の埋没した層より上位に、４×２ｍぐらいの範囲内にかなり多量の土器片を含む包含層が展開する。数量表に示すように、個体数は他集中に近く、同様な土器集中がさらにもう1ケ所あった可能性がある。こうしたことから、祭儀は最低3～4回取り行われたものと推定される。さらにその祭儀内容に一歩踏み込んでみると、①土器集中内に古墳時代の祭祀遺構に多い石製模造品等がまったく含まれないこと、②鉄製品、鏡、玉類など主体部や副室の副葬品的内容を含まないこと、③土器集中の土器が食器主体であること、④壺や甕類は高坏に載せられず、器形の使い分けが明瞭であること、などの特徴から、実質的な食物供献を伴う祭儀であると推論される。同様な出土事例は、一時坂古墳と盆地を挟んで対面する西山山麓に立地する、

本城遺跡１号墳に見ることができる。諏訪湖盆においては、前期から中期前半期の古墳がなく、中期後半になって突発的に古墳が造営され始めるという感がある。このような状況で、少し距離の離れた古い時期の古墳に、類似したあるいは通有な祭儀内容がみられるのは興味深い事実である（ただし、古墳周湟内の土器供献例は関西から関東にかけて若干ある)。これが湖盆における古墳造営開始の背景と関連するのか、また被葬者の属した集落・領域がどこなのかといった問題は今後検討していきたい。



第128図
一時坂古墳土器第５集中出土
須恵器ヘラ描き沈線(図版5-1)



第129図
一時坂古墳土器第５集中出土
須恵器ヘラ描き沈線(図版5-2)

4．一時坂古墳の墳丘および古墳祭式

墳丘の地層は別稿に詳細に記述があるが、所見を簡単に述べると、地山のローム層がかなり強い傾斜で、東北の山塊から沖積地に向かって、舌状台地を形成している。舌状台地先端に古墳の立地を選定したものの、墳丘を築造するのに、北側に大きい溝を堀り、この土を盛り上げて高くしている。この溝は墓域を画する性質の構造物と考えてよいだろう。

溝の堀りあげは、まず表層の黒色土を墳丘西側に盛り、次第に深く堀りローム層に達する頃は、手近の墳丘東側に盛り上げているが、これはローム塊の混入した土層が見られることからも判る。さらに1号槨（仮称）の東半分が確認できたのも、この土層が存在したからである。

墳丘の東側の溝はローム層まで堀り下げ、下底部から葺石を貼っている。葺石の貼り方は東面と北側がややカーブ、あるいは方形の隅ともみられるように貼っている。前述したように、この葺石の貼り方は、北側、西面、南側の土手中には確認されなかった。このような石の在り方は、大熊片山古墳の葺石の在り方とも共通するように思える。すなわち丘陵、舌状台地先端に墓域を画す溝を堀り、さらに山側の墳丘斜面を葺石を貼って、区画を強調しているようである。

墳丘全体としては、円形とも上円形とも隅丸方形ともみえる墳形である。葺石も意味をもつように考えられるが、生活域とも考えられる下方の大ダッショ遺跡、あるいは角間川扇状地の方向から見上げても葺石を貼った部分は見えず、族長たちの墓としては、際だった存在とは言えそうもない。

この古墳に埋葬された人々の祭式は、墳丘上での祭祀は行われなかったか、小規模であったと思われる。墳丘上の盛り土が溝の内部に流入したことは伺えるが、土器の流入の痕跡はみられない。僅か墳丘上の西端に高坏等の存在が確認されたのみであった。墳丘上祭祀が行われなかったことに替るように、溝底において、高坏を器台にして上に坏、盌、甕などを乗せ、整然と配列した祭式が執行されたことが判明した。この祭式が可能性として5～6回（土器の集中箇所）行われたこと、溝底での埋没状況からみて、或る時間差のあったことが判ってきた。この事は、墳丘上における槨と木棺の復元を試みたが、7個の木棺、6個の槨の可能性がある。この木棺、槨の数と対応するような数の、墓前祭式と想定してよいと考えられるのである。前期古墳にみられる、首長権継承儀式とされる墳頂上の葬送祭式は一時坂古墳にはみられなかった。この古墳では、一人の葬送が行われる度に湟底において、高坏を台にしてその上に当地方に輸入初期の須恵器の甕を中心に置くように食器類の土器を乗せ、一定の数と配置をもって葬送祭式が行われている。

この様に一時坂古墳における祭式は、被葬者と葬送者が共同飲食をした跡と考えられるのである。つまり、被葬者＝一族の祖霊とて神と人が相嘗（共同で飲食）のような祭式が展開されていたものと考えられる。この祭式は、古墳が地域集団の共同祭式という姿から一族の祖霊祭式への転換、首長墓から家族墓（同族墓）への変化という墓制観の移り変わりを示すものととらえられよう。

5．一時坂古墳における木棺・槨の復元の試み

本古墳の築造は舌状台地先端部を利用し、墓域を画する溝を東側に深く掘って、墳丘側に葺石を貼っている。溝の堀りあげた土は墳丘上に盛っていたとみられる。現地表面は遺物出土面から約10cmであるが、槨・棺の埋葬を考慮すれば、約１メートルは盛土が高かったとみられる。

墳丘上に木棺直葬のための土壙（槨）を堀っているが、残存遺物上の耕作土が薄いため落ち込みの確認できたのは１基だけであった。しかし幸運にも出土品の鉄剣・直刀・鉄鏃等については、原位置を保っていると確認できた。また玉類・朱塊についても同様と思われる。

出土遺物のうち鉄剣・直刀・鉄鏃の配列については、発掘時点から規則性のあるものと注目していた所であった。つまり、鋒（切先）の方向が北を指す例が７例（Ｆ－１・２・６～10）あり、また茎を北に向けている例（Ｆ－５）、これらに対し直交するように鋒を東方に向けている例（Ｆ－３・４）がある。この鉄剣と直刀の規則性に適合するように、鉄鏃の一括集合体の並列する例が、数例みられた。この出土品の原位置性を重視し、刀剣が遺体の左右に副葬される例の検討（註１）を参考に、直刀３と４の出土位置をモデルに、木棺の復元を試みた。すなわち諏訪地方をはじめ、天竜川水系と古東山道ぞいの佐久地方における、古墳出現期の竪穴式系古墳主体部を検討してみた。

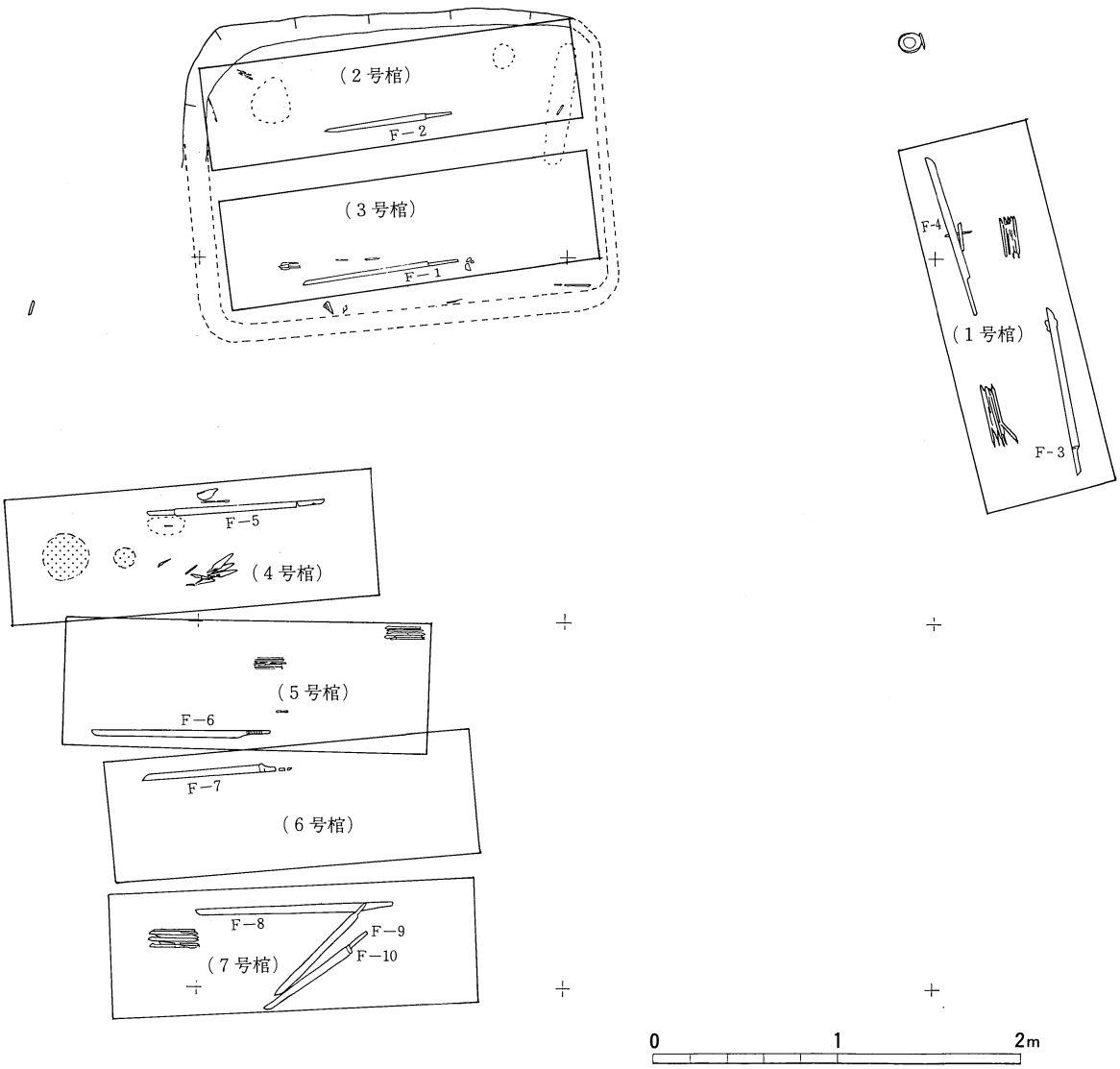
それによると諏訪地方では、木棺幅はフネ古墳、片山古墳、本城１号墳例が70～100cmで長さは古式古墳ほど長大であるが、片山古墳、本城１号墳では200cmとなる。伊那谷については、石子原古墳・妙前大塚古墳が諏訪地方と同様な傾向を示しているが、注目したいのは新井原12号墳の槨である。本例は副葬品が厚葬されているが、長さ230×幅190cmの方形の礫槨竪穴式であった。中信地区では、最古の弘法山古墳の槨は大形であり、中山36号墳は幅150cmであってこれは槨の大きさかと思われる。桜ケ丘古墳と安坂古墳はいずれも石槨であるがその幅が60～100cmであって、その内部に入る木棺の大きさが想定できる。最近発見された佐久地方で初めての古式古墳である滝峯古墳からは220×170cmの粘土床の主体部が確認された（註２）。棺は180×130cmと推定されている。

以上の検討をもとに、一時坂古墳墳丘上における出土遺物の位置から、主体部の木棺と槨について復元を試みたい。

直刀（Ｆ－３）と直刀（Ｆ－４）の２本は、約40cmの間隔を置き鉄鏃一括集合体（Ｆ－12･57）と並列している。直刀の鋒（切先）はいずれも東を指し、刃側を南にしていた。この原位置遺物を、竪穴式系古墳の想定木棺の平均的な数値で囲ってみた。

出土品の収まる範囲は、長さ200cm、幅70cmがもっとも多く、この寸法は１尺が23cmの高麗尺に近いようにみられる。直刀（Ｆ－３・４）のグループはこの想定木棺値の範囲に見事におさまるのでこれを１号棺と仮称した。鉄剣（Ｆ－２）と直刀（Ｆ－１）のグループは、東側に土壙の一部が残存している。しかし鉄剣と直刀の間隔は、１号棺の例をみると広すぎるので、二つの棺を

想定したい。東を2号棺としてみたが棺の大きさを少し小形にした方がよいかも知れない。西側の直刀（F－1）のグループは、鉄鏃等を囲むと基本形の木棺寸法で大体まとまるので3号棺とした。直刀5のグループは、鉄鏃一括集合体と並列しているが直刀の鋒とか鏃先が南を向いている。しかし北部に朱塊がみられることなどから青銅鏡の存在、あるいは頭部位置が考えられる。これらの遺物をグルーピングすると、やはり基本形でまとまるので4号棺とした。直刀（F－6）も、並列する鉄鏃一括集合体が二個あり、これも基本形にまとまる。しかし鉄鏃を入れると、直刀が棺と平行しなくなるが、一応5号棺とした。直刀（F－7）グループも同様の操作で6号棺



第130図　一時坂古墳埋葬主体部木棺想定図（1/40）

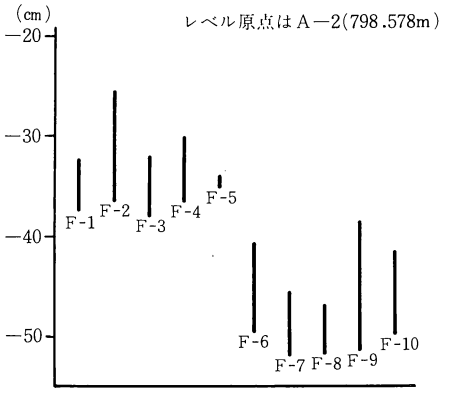
とする。直刀（F－8・10）・鉄剣（F－9）のグループは、北側に鉄鏃一括集合体が並列している。直刀と剣の並び方は、直刀（F－8）が真北を指し、他の2本はN44°Wなどを指しているが、3本が重なり合う部分があるので同時副葬品とみてまちがいない。このグループを7号棺とした。

これらの操作は、出土遺物グループを見事に囲むことになった。その結果、7基の木棺があること。そのうち北を指すのは2号～7号棺の計6棺、東を指すのは1号棺であった。7基の木棺を想定すると、それぞれの出土遺物は副葬品という事になる。

つぎに槨について考えてみたい。表土から副葬品まで、つまり棺底までが浅く、ローム層までが深いこともあり、棺も槨も確認できなかった。したがってここでは発堀の結果より得た二つの情報から、復元を試みたい。

一つは棺を収容した槨の残存である。並行する2号棺と3号棺の二つの棺の存在を想定すると、東側に残存した土壙壁の一辺が、有力な竪穴式土壙の槨とみられるようになる。この槨の全体については、土層確認が不可能であったので、確認された槨の一辺の寸法から、槨を推定した。中南信地方で発堀調査された竪穴式系古墳の槨のなかで、新井原12号墳をモデルに用いた。新井原12号墳は、槨が竪穴式礫槨であり、副葬品も多く、大きさは230×190cmである。一時坂古墳の2号と3号棺を収容した槨は、230×190cm程度と推定できる竪穴式土壙形式の槨と考えたい。

つぎに指摘できる点は、副葬品のうちで鉄剣と直刀の出土状態である。鉄剣と直刀の出土については、その位置が棺底に副葬されたか、または時間が経過後棺底近くに位置したとみてよい。刀剣の出土レベルをみると、1号棺と7号棺では差があり、埋葬の時間差とみられる。このようにみてくると、もっとも接近して棺の切合いがあったとした、5号と6号棺の直刀も、レベル差を認めることができ、別々の棺と副葬品とみてよいだろう。



第15表 一時坂古墳鉄剣・直刀出土レベル比較表

4号棺から7号棺は集中しているが、棺自体の切り合いも想定される状況である。棺の切り合いとなれば、当然、槨も切り合っている事になる。今日の土葬が行われる集団墓地のあり方とよくにている。1号槨以外で棺を収容した槨の大きさについては、1号棺の様相からすると、棺を入れるに足りる程度の土壙を堀るパターンであると考えたい。中南信地方の竪穴式系古墳の槨の大きさを検討してみても、古式古墳ほど槨は狭長であるが、槨の幅はいずれも狭い築造をしており、本古墳の槨の大きさも共通するものと考えられる。

（註1）泉森皎1985「刀剣の出土状態の検討」『末永先生献呈論文集』

（註2）林幸夫氏から正式報告前に御教示いただいた。

6．周溝墓と出現期古墳

諏訪地方の初現古墳は、昭和36年に発見されたフネ古墳によって今日まで定まっている。フネ古墳の発見は従来の諏訪地方古墳研究史上、大きな画期となった。つまり７世紀代以前には古墳が築造されなかったという定説を破るものであることと、諏訪湖盆南部の小丘陵上に築造されており、この地が古社、諏訪神社上社本宮境内にあること、というような考古学上・古代史上の問題を提起した。

フネ古墳は、諏訪地方の従来発見された横穴式石室古墳とは異る古墳であることから、同じ諏訪湖南部の、大熊片山古墳に注目して調査を行なったのは昭和44年である。試掘的な発掘調査であったが、フネ古墳と同じ系列上の古墳であることが判明した。同系列上の古墳の探索で、茅野市高部狐塚古墳も推定されてきた。昭和49年に中央自動車道建設に伴う湖南真志野本城遺跡の発掘調査において、諏訪地方で初めて確実な古墳時代前期の周溝墓２基と、５世紀代の円墳が発見された。

本城遺跡の周溝墓と古墳のあり方は、フネ古墳発見以来、横穴式石室古墳出現以前の発生期古墳として、一つの整理の基準となった。横穴式石室古墳以前の、諏訪地方出現期古墳として整理された事項は、つぎのようであり、この特質に合う古墳については、いまフネ古墳型古墳(註１)と呼称している。

１、山上に築造される。

２、主体部は竪穴式で、粘土槨形式か木棺直葬形式である。

３、周溝を造り、葺石を有する事もある。

４、副葬品は鉄剣・内弯直刀・尖根鉄鏃と玉類が共通する。

５、周溝内を主にして、高坏を主体にした墓前祭祭式がある。

フネ古墳型古墳と想定されていた茅野市高部狐塚古墳の発掘調査が、昭和56年に実施され、二つの古墳が確認された（註２)。２号古墳では和泉II式土器と須恵器による周溝内祭式がみられた。

つづいて、フネ古墳型古墳とタイプづけした古式古墳が、昭和57年に行なわれた一時坂遺跡の調査で発見された。一時坂古墳の発見された丘陵上の遺跡には、古墳に先行する１号前方後方形周溝墓と、これに続くとみられる２号円型周溝墓と３号円型周溝墓、さらに古墳と同時期ともみられる、墓前祭を伴う大型土壙墓と、小型石棺墓（石室状遺構）が発見された。この墳墓群のうちもっとも古いとみられる１号前方後方型周溝墓は別稿に詳細に述べられているが、主体部は不明、周溝は立派で全体形も大きい。時期を確認できる資料は、僅か北と南の溝中出土の、古式とみられる土師器（註３）だけであった。昭和61年に調査された佐久市滝峯２号墳を見学し、また報告書の所見によると立地・プランが類似している。また豊丘村田村原１号・２号周溝墓につい

ても、プランの類似がうかがえる。長野市聖川３号周溝墓も、プランは前方後方形周溝墓ともいわれていた。

田村原２号周溝墓・滝峯２号墳は、外来系土器が在地系土器と混在する現象を指摘され、古墳出現期の様相を示すものであろう。一時坂１号周溝墓も、時期確認は明解に出来なかったが、一時坂古墳に先行するものと考えられる。

一時坂遺跡の墳墓群については次のように想定されよう。前方後方形周溝墓――円形周溝墓――古墳・墓前祭土壙墓――石棺墓という時間経緯をもって、墓域を形成していたことになる。それらの墓には墓域を区画する形式と、櫛だけの墓があるが、前方後方形周溝墓と３号円形周溝墓がわずかに周溝を切る程度で、それぞれ墓域を犯すことなく築造されているとみてよい。

周溝墓と出現期古墳が一地域に集中する遺跡としては、諏訪市本城遺跡がある。南信地区をみると、飯田市山本石子原古墳が注目されてくる。

本城遺跡をみると、沖積地に突出した台地上にあり、弥生時代中期末の住居址４軒が検出され、用地外などを考えると弥生後期まで続く集落も考えられる。古墳時代の住居址は５軒発見され、うち４軒が五領期である。このうち31号住居址は弥生終末期の様相を残しながら、東海系土器の

第16表　本城遺跡周溝墓および古墳一覧表

遺構名	時期	プラン	規模	主体部	出土品
方形周溝墓	五領期	方形	13m方	楕円形出壙	土師台付甕
円形周溝墓	五領期	円形	13m	隅丸長方形土壙	S字状口縁台付甕刀子
1号墳	和泉Ⅱ(5c末)	円形	20m	木棺直葬、直刀、鉄鏃	周溝中土師器配列
2号墳	須恵第Ⅰ(5c末)	円形	23cm		須恵器聽土師

第17表　石子原遺跡周溝墓および古墳一覧表

遺構名	時期	プラン	規模	主体部	出土品
1号方形周溝墓	弥生後期	隅丸方形	14×12m	隅丸長方形土壙2	ガラス玉
2号方形周溝墓	弥生後期	隅丸方形	10× 9.8	隅丸長方形土壙	木棺焼く
3号方形周溝墓	弥生後期	隅丸方形	16.8×？	隅丸長方形土壙2	
古墳	6c初	円墳	19.0	1.長方形石室	
				2.長方形土壙	須恵器、土師器、刀子
				3.割竹形木管式	直刀、鉄鏃、朱
				4.土壙	朱

流入が指摘され、中南信地域の古墳出現前夜の様相をうかがわせている。弥生時代と古墳時代初期の集落のみられる丘陵上に、墓域を溝で画する周溝墓が築造されている。方形周溝墓は、天竜川流域の弥生時代後期の方形周溝墓の系列上にあるものと考えられ、円形周溝墓もこれにつづく墓とみてよいだろう。

周溝墓の築造からやや時間をおいて、円墳2基が築造されている。1号古墳は直径20mで周囲に湟を堀り、湟底に土師器高坏9個の上に供膳形土器を乗せ配列している。主体部は黒土層中で未検出であるが、木棺直葬と考えられ、直刀・刀子・鉄鏃・玉がまとまって出土した。2号古墳も23mの円形で湟を巡らし、湟中出土の当地方初現とみられる大形碗から5世紀末の時期が想定されている。

本城1・2号墳とも周湟を有する円墳であるが、周溝墓と比較すると平面形規模が大きくなる。1号墳に例をみるように、周溝墓よりも副葬品が主体部内に厚く埋葬され、周湟底においては高坏を用いて供膳形態土器を配列して墓前祭式を行っている。古墳は形態からみて周溝墓の系譜上にあると考えられるが、円形周溝墓から1号墳に直につながるとは考えられない。筆者は本城1・2号墳を円形周溝墓の範疇に置いて論じた事（註4）があるが、すでに『茅野市史上巻』中の「古墳時代」において、古墳として理解している。

いま予測としては、本城円形周溝墓と同時期頃、フネ古墳が築造されたものとみられる。フネ古墳の墳形、周湟の有無、墓前祭式の存在など不明な部分があるが、主体部構造が竪穴式系で割竹形木棺の粘土槨形式であるということは、フネ古墳型古墳の原形タイプとしている。

この時期の様相は上伊那地方ではあまり判っていない。ことに伊那市以北はさらにである。飯田市石子原遺跡例をみると、丘陵上に石子原古墳があり、周囲に方形周溝墓が集合しているが、犯し合うことなく造られているという。

石子原古墳は直径19mの方形ともみえる円墳で、墳丘頂上に竪穴式の4基の主体部が順次造られた。主体部から出土の副葬品はやや貧弱であるが、3の主体部は狭長な割竹形木棺と考えられる土壙をもち、副葬品には内弯する直刀・鉄鏃・朱塊があった。この古墳は6世紀初頭とされているが、その構造（墳形・埋葬方法）は一時坂古墳と類似しているとみられる。周囲にある方形周溝墓3基は、主体部に土壙を有しているが、いずれも弥生時代後期の築造であり、用地外の周溝墓の存在も想定され、古墳とのつながりが強いと、報告者は指摘している。

飯田市妙前大塚古墳は、墳丘上部に竪穴式礫槨ともみられる主体部があり、これに直交するとみられる木棺直葬形式の主体部が考えられている。出土品も直刀・鉄鏃が多く、時期も5世紀前半とみられる。

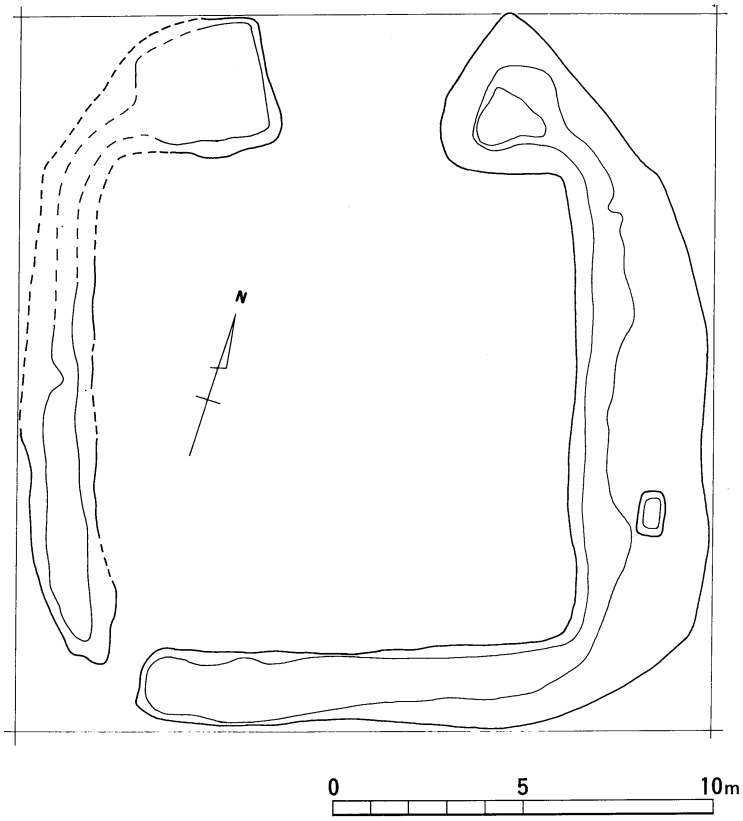
松本地区では盆地の東北部丘陵上に出現期古墳がみられる。弘法山古墳をはじめ、浅間桜ケ丘古墳、妙義山古墳、中山36号墳などが注目される。また周溝墓は田川水系と東側山麓に発見されてきたが、筆者は発見される可能性を指摘してきた事もある（註5）。

中南信地域の出現期古墳をみてきたが、一時坂古墳をはじめ、天竜川水系にみられる様相は、

定形化した前方後円墳（下伊那兼清塚古墳）・横穴式石室古墳（諏訪地区）成立以前の古墳の様相として、小形円墳のなかに、出現期古墳の存在する事に注意し、地域の古墳時代の解明に重視すべきことが感じられた。

佐久市滝峯2号墳は、報告書によると周溝をみるかぎり、一時坂1号周溝墓と類似している。一時坂1号周溝墓は周溝プランにより、すでに発見されている田村原2号周溝墓、おるいは群馬県の諸例から、前方後方形周溝墓とここでは呼んでおく。

一時坂一号周溝墓と滝峯2号墳を比較してみると目につくのは、滝峯2号墳では墳丘が盛土されている、主体部土壙が堀りこまれている、主体部内に歯が残されていることなどである。一時坂1号周溝墓は、地表面が浅かったため、墳丘盛土、主体部土壙の確認ができなかった。以上の事を考慮すると、出現期古墳期の両者が、古墳とすべきか周溝墓とすべきか論議のあるところである。両者の遺構で共通する点は、丘陵の突端部に築造されていることであり、諏訪では出現期古墳を山上墓と呼んできた。古墳出現期の多様な墓制については論議の多いところであるが、一



第131図1号周溝墓平面プラン想定図（1/200）

つの問題提起となるであろう。

一時坂古墳の発掘において注意をひいたのは、鉄剣と直刀の鋒の方位であった。北を指すグループと、東を指すグループがあるため、周溝墓と出現期古墳における被葬者の頭位の問題について検討してみた。

周溝墓はいずれも弥生時代後期以降に属すもので、主に弥生後期の中島式土器文化圏と、中島式文化圏周辺として諏訪と松本地区を対象とした。主体部は確実に頭部が判るという人首資料はない。したがって主体部長軸の方位から想定した。

用いた資料のうち83%が北西の方位内に集中している。これらの周溝墓の詳細な時期の分析は困難であり、周溝墓の編年と方位についての法則性は読みとり難い。しかし資料が不足という点を念頭におきながらもみてみると、北に方位を取る周溝墓主体部としては、古墳時代前期に属する本城遺跡の周溝墓が注目される。また茎の短い古式の鉄剣を副葬した滝沢井尻例は西によっている。地域的な傾向でうかがうと、北西位に入るのはほとんど伊那谷の周溝墓である。松本地区では北東位に入るが、比較的東に片寄る傾向があり、弘法山古墳の主体部頭位の示す、N42°Eとの関係が注目される。諏訪地区では弥生時代後期の周溝墓が未発見であって検討できないが、古墳時代前期の周溝墓の少ない例では、本城遺跡の方形周溝墓と円形周溝墓は北に近づいている。この周溝墓に近い年代と考えられる、出現期古墳であるフネ古墳・片山古墳の主体部方位は同じような方位を示し、一時坂古墳では真北を指す主体部が多くなっている。

出現期古墳の主体部方位の集成からみると、周溝墓の主軸方位よりも北に集中しており、古式古墳のほとんどは北から東と西45°の内に入っている。

諏訪地方の横穴式石室古墳になると、大略主体部は北を指すようになるが、一時坂古墳の主体部が北を指すのは、地方の出現期古墳といえども、後期古墳への傾斜の一面として社会的な要因の働いていることが考察される。

(註1)宮坂光昭　1986「古墳時代」『茅野市史上巻』

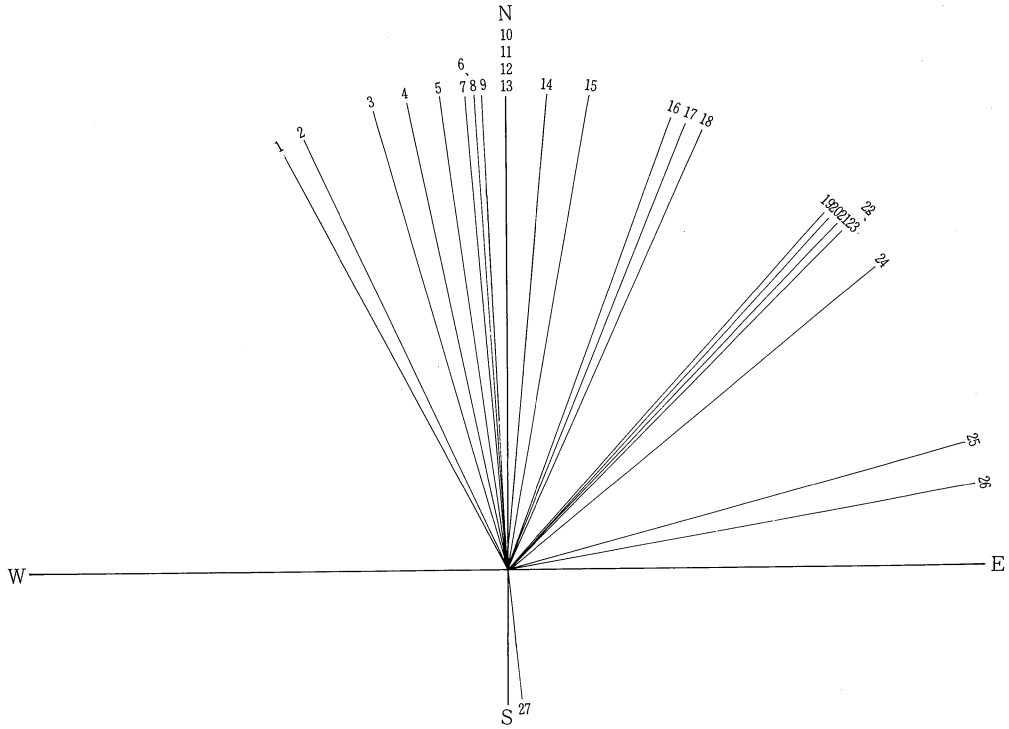
(註2)(註1)文献

(註3)橋原遺跡第IV期、62号住居跡出土土器に比定。岡谷市教育委員会1981『橋原遺跡』

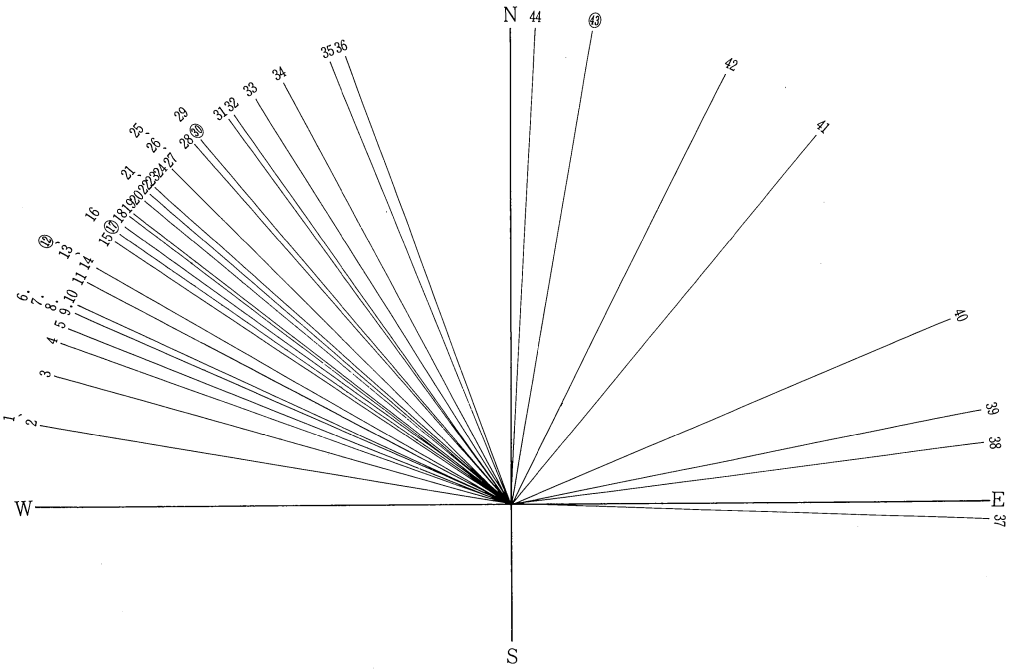
(註4)宮坂光昭　1978「方形周溝墓の研究と現状」『中部高地の考古学Ⅰ』

(註5)　〃　　『松本盆地の古墳』日本歴史民俗資料館レジュメ

(註6)　〃　　1981『関東をめぐる古墳出現期の問題』日本考古学協会シンポジウム



第132図　竪穴式系古墳主体部方位（中南信・佐久）



第133図　方形・円形周溝墓主体部方位（中南信・佐久、○は円形周溝墓）

第18表　竪穴式系古墳主体部方位一覧表（中南信・佐久）

No.	遺跡名	主体部方位	No.	遺跡名	主体部方位
1	瀧峰古墳	N28′W	15	一時坂古墳　3号槨	N10′E
2	片山古墳　東槨	N25′W	16	妙義山　2号墳	N20′E
3	安坂　2号墳	N16′W	17	フネ古墳　東槨	N22′E
4	片山古墳　西槨	N12′W	18	フネ古墳　西槨	N24′E
5	一時坂古墳　2号槨	N 8′W	19	弘法山古墳	N42′E
6	本城　1号槨	N 5′W	20	桜ヶ丘古墳	N43′E
7	中山　36号墳	N 5′W	21	妙前大塚　A	N44′E
8	一時坂古墳　6号槨	N 4′W	22	石子原古墳　槨 1	N45′E
9	安坂　1号墳－2	N 3′W	23	石子原古墳　槨 3	N45′E
10	一時坂古墳　5号槨	N 0′	24	新井原　12号	N51′E
11	一時坂古墳　7号槨	N 0′	25	一時坂古墳　1号槨	N75′E
12	宮田三ツ塚西塚	N 0′	26	石子原古墳　槨 4	N80′E
13	安坂　1号墳－1	N 0′	27	一時坂古墳　4号槨	S 5°E
14	石子原古墳　槨 2	N 5′E			

第19表　方形・円形周溝墓主体部方位一覧表（中南信・佐久、○は円形周溝墓）

No.	遺跡名	主体部方位	No.	遺跡名	主体部方位
1	石子原　2	N80′W	23	帰牛原南原　2	N49′W
2	宮の先　3	N80′W	24	帰牛原南原　5	N48′W
3	宮の先　2	N74′W	25	角田原　2	N45′W
4	帰牛原　1	N70′W	26	石子原　3－2	N45′W
5	滝沢井尻	N68′W	27	さつみ　2	N45′W
6	的場　2	N66′W	28	権現堂前	N41′W
7	帰牛原南原　3	N66′W	29	田村原　1	N40′W
8	帰牛原南原　4	N66′W	㉚	伊久間原　1	N40′W
9	白神場	N66′W	31	さつみ　1	N36′W
10	出原西部　2	N65′W	32	清水　9－2	N35′W
11	出原西部　1	N62′W	33	清水　9－1	N32′W
⑫	帰牛原　5	N60′W	34	さつみ　3	N28′W
13	石子原　1－1	N60′W	35	本城　1	N22′W
14	石子原　1－2	N60′W	36	酒屋前　20	N20′W
15	石子原　3－1	N56′W	37	中択　2	N92′E
16	樋口五反田　2	N55′W	38	丘中学校	N83′E
⑰	帰牛原　2	N55′W	39	向陽台　1	N79′E
18	宮の先　1	N54′W	40	中択　1	N68′E
19	天伯　A	N53′W	41	焼町	N40′E
20	清水　3	N52′W	42	中択　3	N27′E
21	帰牛原南原　1	N50′W	㊸	本城　2	N10′E
22	高松原　1	N50′W	44	伊久間原下原　1	N 3′E

7．一時坂古墳と周溝墓に伴う土壙について

一時坂古墳には、主体部として7基の木棺直葬の推定がなされた。それと対応するように、舌状台地先端を墓域として区画するための大きい湟が堀られており、その湟底を中心に5箇所以上の土器集中が発見されている。

湟底の調査時に注意を引いたのは、湟内の東側斜面に発見された方形土壙であった。古墳の東側を画する湟は北から南側に掘られ、北側で西にカーブしている。東側（山側）斜面は墳丘側より強い傾斜で深くなっている。

東側斜面の中位よりやや下に2つの方形をなす土壙の発見があった。墳丘と対比してみると、墳丘に貼られた葺石の上端部くらいの位置である。南側の土壙は130×60cm、主軸はN14°Wである。北側の土壙は180×70cm、主軸はN 0 °である。いずれもローム層中に築造されているが、西向き斜面にあるため、片側が欠損している。出土品は見られなかった。

一号周溝墓は、前方後方形周溝墓と呼ばれている形態の範疇と考えられる。比較的大型のこの周溝墓は、一時坂古墳の北方、舌状台地の付け根に築造されている。周溝の内側には大型弥生住居跡4号住、縄文中期住居跡14号住の他、土壙が多くつくられていた。周溝墓の主体部となる土壙などは全く確認できなかったが、封土中の存在が想定された。

この周溝墓の東側の周溝中の調査で、溝の東側壁に方形土壙が確認されている。規模は120×70cmで、長軸はN29°Wである。出土品は見られなかった。

3号円形周溝墓は、古墳と前方後方形周溝墓の中間に位置し、前方後方形周溝墓の西溝を一部切っている。また、西側の溝は確認できない。周溝の内側には土壙などが重複してあり、また、傾斜が強いため表土層の移動が大きいと見られ、周溝墓主体部と考えられる土壙は不明である。

東側の周溝の主体部側の斜面に、2基の方形土壙が発見されている。南側は60×70cmで、主軸方位はN 8 °W。北側は60×70cmで主軸方位はN25°Wである。いずれも土壙中からの出土品はみられない。

この様な例を中・南信に見ると、下伊那神稲田村原2号方形周溝墓の例がある。方形周溝墓の北東側溝の底に、220×40cm規模の長楕円形土壙が検出されており、主軸方位は東南方向である。出土品は土壙西端から、東海系（元屋敷式）の壷形完形土器がある。

一時坂古墳における、古墳・周溝墓の溝に築造された方形土壙は、いかなる意味を持つものであろうか。

類例が少ない現在、十分な検討は不可能であるが、一時坂遺跡における5例に共通することは、主軸方位がいずれも北から北西であることと、周溝墓と古墳の墓域を画す溝内に築造されているという点である。

この方形土壙については主体部の被葬者に関係する人物、あるいは被葬者に対する供儀物の埋葬、という二つの考え方がある。

土壙内出土品の皆無なことなどからみても、後説の被葬者に対する、ある種の動物などの供儀をしたとする考えをここではとっておきたい。

第20表　一時坂遺跡周溝(湟)内検出土壙一覧表

遺構名	土壙番号	土壙寸法	方位
一時坂古墳	1	130×60	N14°W
一時坂古墳	2	180×70	N0°
1号周溝墓		120×70	N29°W
3号周溝墓	1	60×70	N8°W
3号周溝墓	2	60×70	N25°W
土壙墓		260×120	N30°W
石室状遺構		190×130	N16°W

8．鉄製武器について（第21表）

諏訪地方出現期古墳の発見例は、フネ古墳・片山古墳・狐塚古墳・本城１・２号墳・一時坂古墳・岡谷小坂糖塚古墳（未確定）と、例が多いとはいえない。このうち発掘調査の行われた古墳について副葬品を見ると、いずれも鉄剣と直刀、鉄鏃がある。

鉄剣については、刃対茎長の比を見ると、弥生後期の鉄剣例（註１）においては茎が短いという傾向があり、古墳に副葬される鉄剣も茎の短い形態の鉄剣は古式を伝えていると考えられる。一時坂出土の鉄剣は、（Ｆ－２）の刃対茎比が３：１で、（Ｆ－９）例は４：１を示し、前者の方が整った形でない(註２)。これが当地方で直に古式の鉄剣となるかは研究を要するが、鉄剣の副葬という行為が、横穴式石室古墳においてみられなくなることは確率が高いことがわかっている。

フネ古墳型古墳とした出現期古墳から発見された直刀の数は、形態の判明する例が18ある。そのほかに狐塚古墳では、調査時において鉄剣破片等の採集があったが、調査以前の耕作中に刀剣数本の出土があったと伝えられている。

直刀の18例から観察されることは、いずれも内彎すること、平棟平造形式・脹切先刀であることである。それ以外の部分での変化の傾向を見ると、フネ古墳出土直刀の全長平均は77㎝、片山古墳出土直刀平均値81㎝、一時坂古墳出土直刀平均値92㎝であって、フネ古墳、片山古墳、一時坂古墳と、直刀は長大化する傾向にある。

関では、フネ直刀群は片関斜角式で斜角が直立に近い傾向がみえる。一時坂直刀群では片関撫角式、あるいは斜角でもゆるい斜角傾向をみせ、茎元に抉などの加工が目立っている。茎部では、茎胴が、フネ直刀群は直であるが、一時坂直刀群では中細り、あるいは絞り気味である。茎尻は、一文字切尻（註３）が全体に見られるが、フネ直刀群には隅尻切が、一時坂直刀群では隅抉尻が出てくる。

以上直刀の形態上にみられる変化を取り上げ考察したが、この変化が時間的変遷となるかどうかは今後検討してみたい。

鉄鏃では、Ⅰ類ａとした柳葉形（剣身形）は５世紀中葉の土口将軍塚古墳（註４）に好例がある。Ⅰ類ｂとした腸抉柳葉式鉄鏃は、片山古墳出土の腸抉柳葉式両丸造と類似するが、細部で異なるところが見られる。県内例では妙前大塚古墳例が見られるが、北信では例を知らない。

Ⅱ類ａは刃部が腸抉柳葉式であるが、長頸に属する鉄鏃で、Ⅰ類ｂの系列上と考えられる。Ⅱ類ｂは長頸の腸抉片刃鏃で、妙前大塚古墳に例が見られる。この型式の鉄鏃は、諏訪地方第Ⅱ期古墳（註５）以降も、継続していくものとみられる。

一時坂古墳出土鉄鏃を総体的にみるならば、中期古墳に伴う鉄鏃と、後期古墳まで系譜を引く鉄鏃が共伴していると考えてよいだろう。

鉄鏃の出土状態については別項にも記述があるが、一括集合出土の状態は、矢柄のまま一括しておいたものである。そのあり方は、矢柄を胡禄（ころく）とか、靫（ゆき）にいれたまま副葬

第21表　各古墳出土直刀属性一覧表

古墳	図番	資料	全長	茎長	造	関	茎	茎尻	鋒
フネ古墳	1	素環刀鉄刀	91.0	22.0	造	片関斜角式	直	素環	鉾切先
	2	直刀（内彎）	85.0		造	片関斜角式	直	隅切尻	脹切先
	3	直刀（内彎）	76.0		造	片関斜角式	直	隅切尻	脹切先
	4	直刀（内彎）	81.0		造	片関斜角式	直	一文字切	鉾切先
	5	直刀（内彎）	65.0		造	片関撫角式	直	一文字切	脹切先
	6	直刀（内彎）	62.0		造	片関直角式	直	隅切尻	脹切先
片山古墳	1	直刀（内彎）	92.0		造	片関斜角	内反絞	一文字切	脹切先
	2	直刀（内彎）	76.0	14.0	造	片関斜角	直	栗尻？	脹切先
	3	直刀（内彎）	75.0		造	片関斜角	直	一文字切	脹切先
本城一号	1	直刀（内彎）	85.0	13.5	造	片関直角	直	隅抉尻	脹切先
一時坂古墳	1	直刀（内彎）	83.5	16.5	造	片関斜角	中細	一字字切	脹切先
	3	直刀（内彎）	90.0	14.5	造	片関撫角	直	不明	脹切先
	4	直刀（内彎）	99.0	19.0		片関撫角	直	隅切尻	脹切先
	5	直刀（内彎）	99.0	12.4		片関斜角	中細絞	一文字切	脹切先
	6	直刀（内彎）	97.6	18.7		片関撫角茎元抉	直？	一文字切	脹切先
	7	直刀（内彎）	79.0	10.4		片関直立斜角	中細	不明	脹切先
	8	直刀（内彎）	110.0	19.5		片関直角茎元抉	直	隅抉尻	脹切先
	10	直刀（内彎）	75.3	15.3		片関直角	中細絞	一文字切	脹切先

したとみたい。消極的な見方でも、革袋とか布袋にいれて副葬したものであろう。

出現期古墳のフネ古墳以降、フネ古墳型古墳には、武器の多さが特徴的である。フネ古墳には素環鉄刀と蛇行剣など豊富に武器の副葬がみられると同時に農工具類の副葬が目立っている。

フネ古墳以降のⅠ期古墳の今日までの一応の編年は、片山古墳・狐塚古墳・本城1号墳・一時坂古墳のうち片山古墳がやや先行すると考えられている。これらのⅠ期古墳には、いずれも鉄剣・直刀の副葬がみられる。5世紀前半から6世紀末にかけ、諏訪地方の古墳に武器を副葬された、いいかえれば武人的性格を持った人物が存在したことは、中央政権との関係上、政治的な問題として注視しなければならないだろう。

諏訪地方のⅠ期古墳の副葬品は、すでにみてきたように武器類が多いが、基本は鏡・玉・剣（直刀）である。Ⅱ期以降の横穴式石室古墳には、出現時から馬具類と土師器・須恵器が石室内に副葬されている。今日の資料ではⅠ期とⅡ期の大きな違いであり、社会的・政治的な問題を含んでいるといえよう。

（註1）日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－飯田市地内（その2）』

（註2）後藤守一 1940 「古墳時代前期の剣」 考古学雑誌30-3

（註3）臼杵勲 「古墳時代の鉄刀について」

（註4）長野市・更埴市教育委員会 1987 『土口将軍塚古墳』

（註5）宮坂光昭 1986 「古墳時代の茅野」『茅野市史上巻』

9．古墳出現期の地域相

諏訪地方古墳の今日までの調査と研究からみると、諏訪地方第１期古墳の出現は、巨視的にみて諏訪湖の南東部に集中している。詳細にいえば、守屋山麓（西茅野から岡谷橋原）と、湖盆東部（四賀・上諏訪）である。この地域に第１期古墳の出現があるが、湖北盆地周辺部には成立しなかったと考察しており（註１）、この地域の初現古墳は、スクモ塚古墳（横穴式石室古墳）と考えてきた(註２)。諏訪地方第１期古墳は立地、墳形からして、発見されるのが計画的というより偶然の機会が多いことから、今日の考察に変更を加えることもあるが、かなりの確信をもつ考えである。

湖南東地区と湖北における、古墳出現期の外来文化の受容はどのようであっただろうか。まだ不十分な研究段階である。しかし資料は学史的な資料、下蟹河原土師器の外に近年発見の資料も多くなりつつある。

下蟹河原遺跡の発見後、長い間、古墳時代初期の遺跡の発見はみられない。戦後になって稲荷平遺跡、秋葉山遺跡、和田遺跡東10号住。一本椹遺跡、新井南遺跡、橋原遺跡、一時坂遺跡、湯の上遺跡（未報）の順に、資料がでてきている。良好な資料を多く出した橋原遺跡では、弥生時代終末期の遺跡であり、土器編年を４期にわけた。III・IV期は弥生後期土器が、力強さが消え無文化する過程の段階とした（註３)。当時橋原III･IV期に続くと予想したのが新井南２号住資料と下蟹河原資料を考えた。この時期の研究の低調もあって、それ以上の分析はなされなかった。

古墳時代初期集落遺跡の存在が、一応諏訪全域に考えられる状況の下、出現期古墳の発見が湖北に見られないという現象を、筆者は出現期古墳の受容の政治的な在り方と考えてきた。また古墳出現期の墓制も、フネ古墳型古墳の成立と、一方は周溝墓とて継続するものと立論してきた(註４)。諏訪においては、天竜川の東岸と西岸は、政治的な受入が異質であったとみたい。これら諸遺跡で古墳時代初期の外来系の土器様相の考察から、「古墳出現期１期には、湖北地区に東海西部・北陸系の外来土器の搬入がみられる。II期には湖北に外来系土器が影をひそめ、湖南部にＳ字甕の定着と東海東部系土師器の搬入がみられる」とし、古墳出現期における外来文化受容の時間差と地域差の指摘がある（註５)。古墳そのものからの出現の在り方を考えている筆者にとって、天竜川を境に、東岸と西岸、峠道などから湖北と湖南の古墳出現の在り方を見ると、興味ある考察であり、今後の検討を要するものと思われる。

(註１)岡谷市教育委員会 1976　『唐櫃石・姥ケ懐古墳』

(註２)宮坂光昭 1968　「湖北古墳群発展の一試案」　信濃20-4

(註３)岡谷市教育委員会 1981　『橋原遺跡』

(註４)宮坂光昭 1978　「方形周溝墓の研究と現状」『中部高地の考古学Ｉ』長野県考古学会

(註５)青木一男 1988　「諏訪における古墳出現器の土器様相」　郡史研究紀要11　諏訪教育会

VI　結語

一時坂古墳の発掘調査、報告書作成における研究、そして考察を試みてきた。諏訪地方にとって古墳出現期にかかわる重要遺跡であったが、県下においても、前方後方形周溝墓の解釈は問題を提起するものと見られる。

研究、考察、試論も不十分な面が多かった。問題となる諸点を上げてみよう。

(1)前方後方形周溝墓は、出土した古式土師器からして、橋原遺跡編年のIV期、県内土師器Ⅰ期に比定できよう。この古墳時代初期には、県内においては、弘法山古墳、ついで森将軍塚古墳の出現期とみられる。諏訪地方においては、古墳の出現はみられず、一時坂遺跡に大型の前方後方形周溝墓がつくられた。周溝プランでは滝峯2号墳と類似するが、両者の検討をようするものである。

(2)一時坂遺跡が丘陵上であり、前方後方形周溝墓、円形周溝墓、墓前祭を伴う大型土壙墓、石棺墓(石室状遺構)、そして主体部を複数埋葬した墳丘をもつ古墳と、諏訪地方の古墳出現期の墓域として認識されてきたが、この墓域、墳墓を形成した背後の、集落遺跡の解明と、初期古墳であるフネ古墳被葬者との系譜、政治的関係の解明が今後の問題である。

(3)フネ古墳型古墳として類型化した、諏訪地方Ⅰ期古墳に属する一時坂古墳は、墳丘形式に規格性をもたない、つまり墳丘そのものをあまり意識しない古墳といえる。このことはフネ古墳、片山古墳の墳形にもいえることであり、諏訪地方Ⅰ期古墳の特徴である。

(4)古墳主体部方位、つまり被葬者頭位について、一時坂古墳には統一性がみられた。本城遺跡周溝墓においても、北を指す例からして、北頭位という葬送の統一性が確立した時期であろう。

(5)諏訪地方の古墳出現期の墓制の様相は、弥生後期の一墓制である周溝墓が継続する一方、墳形では周溝墓の系譜を引く、フネ古墳型古墳が築造されるという地域相をもっている。

(6)諏訪地方の出現期古墳である、フネ古墳型古墳の副葬品をみると武器類が勝る。武人的性格を有する被葬者の、社会的政治的性格を今後考究すべきである。

(7)副葬品に、馬具類がまったくみられないが、II期古墳にみられる馬具類の副葬と対比して、政治的な背景を検討すべきであろう。

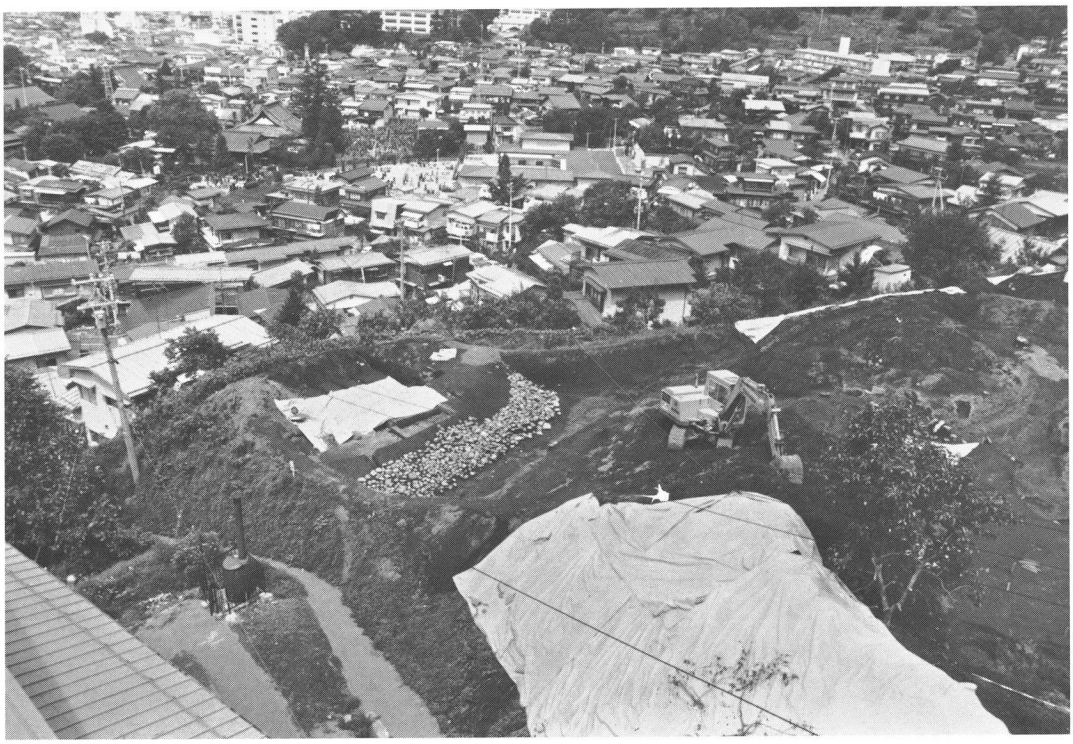
(8)出現期古墳にみられる二様相、つまり、湖南東部と湖北の在り方について、古墳出現の要因とみられる、搬入土器の問題と、のちに確然とみられる諏訪神社上社、下社の勢力圏の関係についても、今後の研究課題である。

以上の諸点を取り上げ、一時坂遺跡と古墳が有する成果と、今後に提起された問題点とし、多くの方々の参考と研究資料になることを期待したい。

主要参考文献

森本六爾　1929　『川柳将軍塚古墳の研究』
後藤守一　1939　『上古時代鉄鏃の年代研究』　人類学雑誌、54-4
藤森栄一・宮坂光昭　1965　「諏訪上社フネ古墳発掘調査報告書」　考古学集刊３－１
本郷村教育委員会　1966　『信濃浅間古墳』
近藤義郎　1966　「古墳とは何か」『日本の考古学』Ⅳ
藤森栄一・宮坂光昭　1968　「諏訪市大熊片山古墳」　長野県考古学会誌７号
末永雅雄　1969　『日本鉄鏃型式分類図』　古代学16－２～４
原嘉藤・小松虔　1972　「松本市中山36号墳調査報告」　信濃24－４
飯田市教育委員会　1972　『妙前大塚古墳調査報告諸』
大和久震平　1972　『桑57号墳』　小山市教育委員会
更埴市教育委員会　1973　『長野県森将軍塚古墳』
石野博信・関川尚功　1976　『纒向』　橿原考古学研究所
田中新史　1977　「市原氏神門四号墳の出現とその系譜」　古代63号
斉藤忠他　1978　『弘法山古墳』　松本市教育委員会
高崎市教育委員会　1978　『鈴ノ宮遺跡』
高崎市教育委員会　1979　『元島名遺跡』
石野博信　1979　「奈良県纒向石塚古墳と纒向式土器の評価」　考古学雑誌　64－
大塚初重　1979　「古墳時代論」『日本考古学を学ぶ』３
高崎市教育委員会　1981　『元島名将具塚古墳』
更埴市教育委員会　1982～1984　『森将軍塚古墳－保存整備事業年次発掘調査概報』
八王子郷土資料館　1983　『三～四世紀の東国』
近藤義郎　1983　『弥生墳丘墓と前方後円墳』　文化財を守るために、23号
小林康男　1983　『長野県内における方形・円形周溝墓』『丘中学校遺跡』塩尻市教育委員会
宮坂光昭　1983　「諏訪市一時坂古墳」　日本考古学協会第49回発表要旨
高見俊樹　1983　「一時坂遺跡」　長野県埋蔵文化財ニュース２・３
宮坂光昭・高見俊樹・小林深志　1983　「一時坂古墳」『長野県史』考古資料編全一巻㈢主要遺跡（南信）
小林正春　1983　「新井原12号墳」『長野県史』考古資料編全一巻㈢主要遺跡（南信）
小久保徹・田中正夫・瀧瀬芳之他　1983　「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ－鉄鏃について－」　研究紀要1983　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
岩崎卓也　1984　「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学』
田中新史　1984　「上総神門５号墳の調査」　考古学ジャーナル233
古墳文化研究会　1984　『日本古代文化研究』　創刊号
石野博信　1984　「長野県弘法山古墳の検討」　信濃37－４
第５回三県シンポジューム　1984『古墳出現期の地域性』
小林正春　1985　「蒜田遺跡」　長野県埋蔵文化財ニュース14
古墳文化研究会　1985　『日本古代文化研究』　２号
岡安光彦　1986　「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」　考古学雑誌71－４
白井久美子1986　「東国古墳分析の一視点」　研究紀要10　千葉県文化財センター
飯塚武司　1987　「後期古墳出土の鉄鏃について」　研究論集Ⅴ　東京都埋蔵文化財センター
㈳長野県建築士会諏訪支部・㈳長野県建築設計事務所協会諏訪支部　1987　『諏訪地方地盤図』
長野県史刊行会　1988　『長野県史』考古資料編全一巻㈣遺構・遺物
佐久市教育委員会1988　『瀧の峯古墳群』

写 真 図 版



1　一時坂遺跡全景（A地区）

2　一時坂遺跡全景（B地区）

3　A地区発掘状況

4　B地区発掘状況